家庭教師ヒットマンREBORN!　無の守護者、来る!

骸っち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！　無の守護者、来る！

【Ｎコード】
Ｎ５３５４Ｗ

【作者名】
骸っち

【あらすじ】
六道骸の双子の妹、六道浅葱（ろくどうあさぎ）は骸とともにエストラーネオファミリーの研究所を壊したあと、骸たちと中小マフィアを潰してまわっていた。そんなある日骸と浅葱は今までで一番の兄妹喧嘩をする。それが原因で浅葱と骸、犬、千種は別行動をとることになる。そして浅葱は道に迷いながらもある中小マフィアを潰していた。そこに黒服金髪と同じく黒服の赤ん坊があらわれて・・・。

オリキャラ設定1～原作以前編～（前書き）

前書き　警告！

・原作破壊します。

・駄文です。

・下手な挿絵がオリキャラ設定で二個だけです。

そんなのもいい、という心が広い方は見ていただけるとうれしいです。

オリキャラ設定1～原作以前編～

：名前：
六道浅葱（ろくどうあさぎ）

：身長：
６才→７５センチ
７才→８０センチ
８才→９０センチ

：体重：
６才→４キロ
７才→５キロ
８才→８キロ

：見た目：
骸と同じ髪型。ただし後ろ髪の長さは肩下１０センチぐらい。
顔は骸と瓜二つで世間でいうめっちゃかわいい女の子。
ただしめっちゃやせてる。

：能力：
六道輪廻の力。ただし地獄道以外は多少しか使えない。
エストラーネオにいれられた形状記憶カメレオンのＤＮＡの改造体の力。それで漆黒の翼をもち、藍色の毛並みをもつ九尾の狐の姿になれる。大きさは大人一人乗れるぐらい。詳しくは本編と原作以降のオリキャラ設定で。打つのが面倒とかじゃないよっ！
浅葱の幻覚能力は有幻覚で火柱とかばんばん使えば１０秒程度継続できるぐらい。武器だけ有幻覚でつくるなら１０分ぐらいはできる。
有幻覚じゃない普通の幻覚ならいくらでもできる。

精神世界にいける。
骸と離れていても感情を感じ取ることができ、会話もできる。（精神世界じゃない現実で）。

‥戦闘能力‥
ベル（幼少）と同じぐらい。
けど骸（幼少）とは幻覚と身体能力で勝っているため単純な戦闘能力では上だがいつも作戦勝ちされる。
１０メートルぐらいなら余裕で跳躍できる。

‥武器‥
・骸の三叉槍の先っちょに三叉の槍のかわりに三叉の長い爪のようなものがついてる大鎌。有幻覚でつくるのでもちあるく必要がない。
・短剣二本。詳しい設定は本編とオリキャラ設定原作以降編でお願いします。

この下に挿絵があります。
嫌なかたはとばしてくださいです。

＞i30599—3925＜
→は浅葱が妖孤になったときの姿です。
口元も白いもやっぽいのは霧です。
画像悪いのはかんべんしてください。
もとはめっちゃよかったんですけど投稿するときにこの大きさの容量じゃ投稿が無理だって書いてあって・・・。
すんません。
ちょっとはなれてみたら少しはましになります。

＞i30608—3925＜
→は浅葱が使う短剣二本です。
柄のぎざぎざっぽいのはそこに指をかけて、もちやすいよ♪ってやつです。
なので柄は拳大の大きさです。
中心側のやつがそれぞれの鞘です。
左と右の短剣で対になっています。
それで左下と右下のは、それぞれの柄の先っちょの平面（柄尻っていうんだっけ？）のところです。

オリキャラ設定1～原作以前編～（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。
次回はプロローグなので次回から本編ということになります。

標的０　プロローグ（前書き）

二つ連続投稿です。
読んでいただければうれしいです。
今回は浅葱の本当幼いときなのでひらがなばっかです。
読みずらいです。

標的０　プロローグ

わたしにはきおくがある。

それはたぶんぜんせのきおくなのだろうとおもう。

だっていまのじぶんはちっちゃくて、いるばしょはまっくらで、そしてとなりにひとりいる。

それになんかみずにつかってる。

ぷかぷかしてる。

これははおやのおなかのなかなのだろう。

こんなじょうきょうでじがなんてあるはずない。

ましてやきおくも。

けれどわたしととなりのことは、てをつないでかおをみあわせればどちらからともなくほほえみあう。

となりのこにもじがあるのだろう。

きおくもあるのだろうか。

わたしと、おなじ。

それは、いやだなとおもう。

だって、あんなものきえさってほしいきおくなのだから。

わたしのきおくはなぜか6こある。

そのすべてはくるしみ、ぜつぼう、かなしみ、うらみ、などというまいなすのかんじょうでいろどられて

いる。

そのなかでも1つだけ、ほんとうにけしさりたいきおくがある。

そのきおくのなかでもわたしのとなりにはもうひとりいた。

ずっといっしょにいた。

そのことわたしはいっしょにおやからぼうこうをうけていた。

よーじぎゃくたいというものだ。

しょくじもじゅうぶんにあたえられず。

いちにちこっぷいっぱいのみず。

いっしゅうかんにいっかいのしょくぱんいちまい。

それでもなぜかいきていけていた。

まっくらでせまいくうかんにわたしととなりのこ。

おふろにもいかせてもらえず。

いふくもじゅうぶんにあたえられない。

がっこーというものにもいかせてもらえない。

まいにちまいにちおやがなんかいかくる。

やっとだしてくれるときぼうをもつのはもうむだだとしる。

なんかいかくるりゅーはみずなどをもってくるものもあるがすとれすはっさんというものがほとんどだ。

そのたびにしないていどにわたしととなりのこはいためつけられる。

あるひおやじゃないひとがきた。

そのひとはわたしたちのおやはしんだとつげた。

ころされたとつげた。

わたしととなりのこはよろこんだ。

するとおやはまわりにはひょーばんはよかったようできさまらがころしたのかといわれ、しょけいというものをされることになった。

なんで。

なんでなんで。

わたしたちはなにもしてないのに。

わたしととなりのこはまわりのおとなをなんとかころしてにげた。

そのときはねんれいというものがじゅっさいぐらいにはなっていたのでなんとかころせた。

けれどすぐにつかまった。

そこでもいためつけられて。

わたしととなりのこは。

ころされた。

こうしてこのきおくはおわる。

ほかのきおくもここまでひどくなくてもにたようなものだ。

それまでいちどもとなりのことはなしたことはない。

なぜって？

それはことばをはっせばまわりのひとたちにくびをしめられたから。

そしていうんだ。

まわりのおとなは。

「汚らわしい化け物めっ！空気が穢れる。声をだすな！次だしたら一週間水ぬきだ」

と。

なんで？

こえをだすことさえもゆるされないの？

なんできもちわるがるの？

うまれたそのしゅんかんからくびがすわっていたのがいけないの？

うまれたそのしゅんかんからめのしょうてんがあっていたのがいけないの？

それともうまれたことそれじたいがいけないの？

それでもわたしたちはいきてきた。

いきてこれたのはいつでもとなりにとなりのこがいてくれたから。

きおくにすこしだけあるまともなちしきをつかえばおそらくとなりのこはふたごのきょーだいというものなのだろう。

わたしはとなりのこととことばをかわしてみたい。

めをみるだけでだいたいはわかるけれど、それでもことばをかわすのはちがう。

ああ。

このあらたなせかいではことばがかわせるといいな。

でもこのあらたにはじまるせかいではいままでのきおくとはちがいなにかすきるというものがあるようだ。

それがあればとなりのこと、ことばをかわせるかなあ。

それがあればこんどこそ、きたないひとのせかいをみずにすむかなあ。

そしてとうとうわたしたちははおやのなかからうまれた。

わたしはあとからうまれたのでいもうと、になるのかな?

するとまわりのおとなたちがぎゃーぎゃーとうるさいことにきづいた。

「ば、化け物だっ」

なにが、ばけものなのだろう？

「こいつらはうまれたばかりの双子のはずでしょう！なぜ焦点があっているのだ！？やはりエストラーネオのやつらのいうとおり化け物なのでは！？」

「そんなもの私に聞くなっ！やはりこいつらは化け物なのだ。エストラーネオファミリーに引き渡すぞ。高値で売れるはずだ。それに引き渡せばもう私のファミリーには手を出さないといっていた。いいな？」

「ええ。こんな化け物は私達の子供ではありませんわ」

いまのは、ははおやらしきひとかな？

ああ。

またひとのきたないぶぶんをみることになってしまった。

「いいのですか？ボス？」

ぼす？

ちちおやらしきひとはえらいひとなのかな?

「ああ、さっさとエストラーネオに連絡を入れ「その必要はありません」!!」

ん?

だれかちがうひとがはいってきた。

はくい?

おいしゃしゃん、とかいうひとなのかな?

「貴様は、エストラーネオの科学者か」

かがくしゃ?

「ひひひひ。ええ。そうでございます。こうなると思い待機していたのですよ。金額はこちらでよろしいですか?」

「ああ。それでいい。ちゃっちゃとこれらをもっていって私のファ

ミリーにはもう手をださないでくれ」

ふぁみりい？

かぞく？

わたしたちは、かぞくじゃないの？

どこかにわたしたちはうられてしまうの？

なんで。

なんでなんで。

まいかいこうなるの。

そうだ。

となりのこは。

となりのこもこちらをみていた。

そしてどちらからともなくてをのばし、にぎりあった。

そしてねむけがおそってきて、ふたごはねむった。

それをみていた周りの者達は。

「ひっ。生まれたばかりで自我があるのか!?はやくつれていってくれ。エストラーネオ」

「ひひひ。わかっております。」

そうしてうまれたばかりのふたごはエストラーネオファミリーの実験施設へと連れて行かれた。

その道中。

「ひひひひ。まったく我が子が普通じゃない、化け物ですよ、と騙しただけで化け物呼ばわりのうえ、躊躇
躇いなく売るとは、ひどいですねえ」

「それを私達がいいます?これからこの双子を実験動物にするというのに。それに化け物なのは嘘じゃないでしょう?ふふふふ。」

「まあたしかになあ。うちのボスが強い怨みを感じるというからき

てみれば設けもんだったなあ。初めは
こんな餓鬼だと驚いたが、確かに怨みの感情がにじみ出ているなあ。
実験が楽しみだよ。やはりボスはす
ごいな。ボスは実験も戦闘も何でもできるからな。ひひひ」

「そうですねえ。すごい人ですよ。」

などという途中からはボスの自慢大会となったエストラーネオのマ
フィアの会話であった。

標的０　プロローグ（後書き）

作者は心がもろいですが、誤字脱字などあれば教えてください。
もちろん感想もまってます。

標的１　双子の願い、来る！（前書き）

うってたのが消えたーーー！
私の千何百文字が・・・。
こまめに保存しなきゃだめということを知りました。

標的１　双子の願い、来る！

わたしのむっつのきおくのなかのせかいのときからのたったふたつのねがい。

そのひとつめはかなわなかったけれど。

もうひとつのねがいはかなうといいな。

そうして双子の片割れは目を覚ました。

めをあけてとびこんできたのははいいろ。

くらい。

でもせまくはない。

ふつうのおおきさのへやだ。

でもこどもがたくさんいた。

わたしからはなぜかずいぶんとはなれているけれど。

なんかふるえてる。

ああ、こわがられているのか。

でもなぜ?

う〜む。

わからん。

あ、となりのこは？

そうおもいさがしてみるとすぐにみつけた。

ふつうによこにいた。

よかった。

あんしんするとまたねむけがおそってきた。

ああ、となりのことはなしたいなあ。

ゆめのなかででもあえないかなあ。

そう思いながら片割れは眠った。

「おきてください。ねえってば。」

こえがきこえたのでまぶたをあけてみる。

するとあおぞらだった。

そしてまわりはそうげんだった。

げんじつじゃないようだ。

でもここにはみおぼえがある。

そうだ。

きおくのなかでのせかいでこんなところがあったいいのに、とおもいうかべたばしょだ。

そしてめのまえにはしょうねんがいた。

ぼろぼろのぬのをはおっている。

む。

これにもみおぼえがある。

そうだ。どのきおくでもいっしょにいるとなりのこだ。

けれどそのすがたはきおくのなかのすこしせいちょうしたすがただった。

なぜ?

「ああ、このすがたですか。あかごのままだとしゃべりずらいでしょう。あとここはせいしんせかいで

す。それにしょうりょうですがげんかくがつかえるのでこのすがたにみせているのですよ。ふつうにしゃ

べれるようになるまではげんかくではなしましょう?ぼくのとなり

のこ？」

なるほど。

って、こころよまれたっ！

「かおにでてましたよ」

んにゃあっ！

もーいい。

むひょうじょうつらぬいてやる。

そうけっしんし、きおくのなかのすがたをげんかくでつくる。

そのすがたはめのまえのしょうねんとうりふたつだった。

「あー。あー。あー。えーと、はなすのは、はじめて、だよね？」

「ええ、ずっとはなしたかったのですが。じょうきょうがじょうきょうでしたし。まったく。あのおとな

たちはどこからぼくたちのこえをかぎつけてきたのでしょうか」

「あはは。そーだねえ。ま、いまははなせるしいいじゃん。やっぱこのせいしんせかいにこれるのもすき

るのおかげかなあ」

「そうでしょうね。おそらくは」

「ならかんしゃだね。わたしはきみとはなすこととときたないせかいをみないことだけがきおくのなかのせかいのときからのねがいだったんだ」

「おや、きぐうですねえ。ぼくもですよ。しかしふたつめのねがいはうまれたしゅんかんにくずれおちましたがね」

「まーいいじゃん。ひとつでもかなっただけで。それだけでわたしはうれしいよ♪」

「クフフ　そうですねえ。ぼくもうれしいですよ」

「あ、そいえばなまえつくろうよ！」

「なまえ？」

「うん。みょうじはいっしょにかんがえてなまえはたがいのをつくろう？」

「いいでしょう。それではみょうじはなににしますか？」

「む～。あ！じゃあじゃあ」

「「ろくどう、なんていいんじゃない（どうですか）？」」

ふたごはみごとにはもった。

「「クフフ　じゃあそれに決定だ（です）」」

「きみのなまえはねえ・・・。じゃあむくろ！」

「わかりました。それではあなたのなまえはあさぎなんてどうです？」

「うん！ありがとう♪むくろ♪」

「そろそろげんじつにもどりましょうか。でないとしらないあいだにぼくたちのからだがじんたいじっけんされているかもしれません」

「あー。やばい。それはひじょうにまずいじゃないか。むくにい。せいしんせかいからかえったらにくたいがしんでいたなんてわたしはいやだぞ」

「それではもどりましょう。ぼくももちろんいやです。まああかごをじんたいじっけんするかはわかりま

せんが。すくなくてもたてるぐらいになるまではないとおもいたいですが、ゆだんはきんもつですね。と

いうかむくにいってなんですか？」

「ん？むくにいはむくにいだよ。いちおうむくにいがおにいちゃんだろ？だからむくろにいちゃん。りゃくしてむくにい。だよ？いやだった？」

「いえ。まあいいです。それではそろそろほんとうにもどりましょうか」

「うん」

そうして精神世界から双子は去った。

まだ人体実験はされていなかった。

そうして双子は安心する。

これの繰り返しが何千、何万と繰り返される。

そしてとうとう双子にとって運命の日がおとずれる。

標的1　双子の願い、来る！（後書き）

感想いつでもまってます。

標的2　運命の日、来る！（前書き）

今日も二話投稿です。

標的２　運命の日、来る！

はじめてムク兄と精神世界で話してから六年がたったある日のこと。

灰色が広がる部屋に一人入ってきた。

「実験だ。１２０６こい」

１２０６。

１２０６？

なんか聞き覚えが・・・。

ああ、私だ。

「聞こえているのか？１２０６こいといっている」

ああ、うるさ。

いかないと今日の夕飯がやばそうだなあ。

これ以上へらされたらいい加減死んでしまう。

まあ。

餓鬼道よりはましだろうけど。

「んじゃあいってくるね。ムク兄」

「おや。浅葱が先ですか。いってらっしゃい。浅葱」

「ん」

一文字で答え、私は大人とともに部屋を去る。

つれてこられたところは実験室だった。

そして実験台の上に寝かされる。

そこからは恐怖だった。

生まれる前からある記憶にもあるかわからないほどの恐怖。

麻酔もかけられずに左目にメスをいれられる。

そして新しい瞳をいれられる。

痛いどころではない。

狂うほどの痛み。

それでも狂わない私はすごいと思う。

いや、もとから狂ってたのかな？

叫ぶのはとうの昔にやめた。

ずっと叫んでいたらそれこそのどまでつぶれてしまう。

瞳をいれられて、縫われるのが終わり、やっと終わりかと思った。

あんなことを聞くまでは。

「おお、成功だ。やはりこんな瞳と共鳴するだけあったな」

「ああ、第一段階成功だ。それでは次の段階へ進むぞ。こちらにだけ共鳴している例のＤＮＡをこいつに移

植する」

第一、段階？

それってまだこれを続けるということ？

く、ふふふ。

ふふふ。

ははははは。

もう、全てが馬鹿馬鹿しくなってくる。

そこからはまた地獄が始まった。

「それでは第二段階、つまり最終段階を始める。麻痺毒を注入しろ」

麻痺毒。

麻酔じゃ、ないんだね。

麻痺毒といっても麻痺させるのは動きだけという不思議なものだった。

つまり痛みは少しも軽くならない。

なんなのだろうか。

ここの人達はそんなに人を痛めつけるのが好きなのだろうか。

そうこう考えているうちに実験は終わったらしい。

なにやらここのお偉いさんの長ったらしい説明がはじまっている。

「貴様に移植した六道輪廻の瞳の能力の予想は以上だ。そしておそらくその瞳は貴様ら双子にしか適合しないのだろう。他のに試したときは全てが死んだ。次にその瞳を基盤にして移植した形状記憶カメレオンのＤＮＡの改造体についてだ。このＤＮＡの改造体については貴様にしか適合しないだろう。理由は不明だが。他のに試したときはこちらもすぐに死んだ。天使の翼のようだが、漆黒の色の翼をもち、藍色の毛並みをもつ九尾の妖孤の姿になることができる。そして翼は一枚一枚が鋼鉄より硬く薄い。ようするに切れやすい。大きさは人一人余裕でのせられるぐらい。一部変化はできない。妖孤の力としてＤＮＡにプログラムされた能力は羽を飛ばして攻撃＆操れる、吐く息は霧、幻覚

を作れる、あともう1

つあるがそれは正体不明の力だ。力が圧縮してあり炎のような形状
ということしかわかっていないが、そ

れを体内で生成できるというものだ。プログラムはもう書き換えは
できない。以上だ。これからは我がエ

ストラーネオのためにせいぜい働け」

そうしてお偉いさんは去っていった。

その瞬間に私は気力がつきて寝た。

起きて目に入った色はまたも灰色だった。

しかしちがうのはとなりにムク兄がいない。

どこに行ったのだろう。

ああ。

ムク兄もあの地獄の実験を受けているのかな？

って、こんなに落ち着いてる場合じゃないのか。

ムク兄なら大丈夫だろうが一応助けなければ。

そんなとき大人の悲鳴が聞こえた。

あ、ムク兄が大人たち殺しまくってるのかな？

気配がどんどん消えてる。

くふふ。

ちょうどいいね。

もともとここ潰すつもりだったんだし。

んじゃ、ここのやつら殺してきまーす。

そんな軽いノリで浅葱は一面灰色の部屋のドアを蹴りでぶち破り歩いていった。

蹴りでぶちやぶったドアの先にいたのは十数人の大人達だった。

む。

なぜ？

・・・。

この先にあるのは実験室のドア。

ああ、ムク兄のいる部屋に突入する機会をまっているのか。

うん。

納得。

そいじゃあこいつら殺しましょうか。

「おい、貴様１２０６だな。１２０５の暴走を止めろ！」

暴走？

何言ってるの、この人たちは。

私達は離れてても言葉を交わすことができるけど。

ムク兄の意識は全然乱れてないよ。

なのに、暴走？

ああ、ムク兄が逆らって自分達が殺られるだけ、という状況をそのままいうのが嫌だったのか。

馬鹿な人達。

その理論でいうなら私もこれから暴走ということになるよ？

「くふふ。なら私もこれからあなたがたのいう暴走、してあげますよ。」

「なっ、貴様も逆らうつもりか！ならば、突入部隊全員１２０６に照準をあわせろ！」

ガチャ。

浅葱に照準があわせられる。

浅葱の瞳の文字が六から一に変化する。

浅葱はあせったようすもなく、幻覚で何かを形作っていく。

浅葱の手に霧が集まっていく。

そこにあらわれたのは長い棒の先端あたりに棒と垂直に等しい角度

で三叉の長い爪のようなものがついて
いるものだった。
有幻覚でつくられた三叉の大鎌だ。

「くふふ。あなたがたにもらった六道輪廻の地獄道と、形状記憶カメレオンのＤＮＡ改造体とやらの能力で
あなたがたを殺してさしあげますよ」

「っ！撃て！」

ズダダダダダダダ
そんな効果音がまさにぴったりなマシンガンの連射。
その全てが浅葱にぴったり照準があっている。

しかし浅葱は全ての弾を三叉の大鎌を使いはじいていく。

ズダダ、ダダ。

突然音が止む。

弾が尽きたようだ。

「くふふふ、もう終わりですか？」

「な・・。全てはじかれるだと！」

「こんな化け物にしたのはどこのどいつですか？」

そういった途端浅葱は一歩で距離をつめ、一瞬で皆殺しにしていく。

数分後。

そこには大人十数人の屍と一人の少女しかいなかった。

「くふふふ、ふふ、ははははは♪殺しってたーのしっ♪さて、ムク兄は大丈夫かな？」

そういって実験室のドアを開けるとムク兄のほうも終わったところらしい。

実験室の中にいるほうが人数が多い。

つまりムク兄のほうがたくさんの敵を殺したわけで・・・。

「むう。ずるい」

「おや、浅葱じゃないですか。どうしてここにいるんです？」

そういったムク兄の右目は浅葱の左目と同じになっていた。

そして浅葱の呟きは聞こえなかったようだ。

「む」

一文字で答えて廊下のほうを指差す。

「ああ、なるほど。それではこんなところちゃっちゃと出て行きましょう。そしてぼくと一緒にマフィア

の殲滅をしませんか？」

「当たり前じゃん♪」

「くふふ。では行きましょう。あ、そこに隠れている二人も一緒にきますか？」

ムク兄が話しかけた方向には二人の子供がいた。

二人の子供はコクリ、とうなずいた。

「それではついてきてください。とりあえず町へでます」

そうして四人はエストラーネオの研究所から去っていった。

標的2　運命の日、来る！（後書き）

感想まってます。

標的3　兄妹喧嘩、来る！（前書き）

今日からは一日一話投稿になると思われます。

標的3　兄妹喧嘩、来る！

「なあ、ムク兄」

「なんですか、浅葱」

「おなかすいた」

「・・・」

沈黙が場を支配する。

「あなたはよくこんな状況でそんなのんきなことがいえますねえ」

そう。

今はかなり危機的状況だったりする。

今はエストラーネオが嫌われていたので研究所がつぶれた、と聞いて生き残っているエストラーネオの関

係者を皆殺しだー、と付近のマフィアが騒いでいるのだ。

そのせいで浅葱たちはマフィアに追われている。

今は町の路地裏に隠れている。

通常の体力状態なら皆殺しもできたかもしれないが、なんたって今は通常の体力状態なんてものではな

い。

むしろぎりぎりの状態といっていいだろう。

だって骸は実験された直後だったから実験でけずられた体力はそのまま回復してない。

浅葱は実験を二個受けて、そのせいで骸の二倍体力がけずられている。気絶してそのまま寝たおかげ

で少しは回復しているが消耗した体力の半分も回復していないと思う。

犬と千種というらしい二人は私達とはちがいちびちびと何回も実験を受けていたらしく、体力などほぼ

削られているといっていい。

だから浅葱だけでなく皆疲れているし、おなかも減っている。

しかしみんな堪えてきたのだ。

それをぶち破る発言ができたのは浅葱だからだろう。

そう。

浅葱はかなりマイペースなのだ。

「だっておなかすいてたら動きも鈍くなるからすぐ捕まっちゃうよ？」

「まあ、それもそうですね。では食料を確保してきますか」

「うん。私はここで寝て、じゃなくて犬と千種を守ってるからムク兄食料どっかで盗んできて？」

「今寝てるといいかけましたよね。まあいいです。ここから動かないでくださいよ」

「うん。いってらっしゃーい」

そして浅葱は骸が行ってから三秒もしないうちに寝たのであった。

このあとは帰ってきた骸が浅葱に文句をいいながらも骸がもってきた林檎を全員で食べて、少しの睡眠をとってから追っ手を皆殺しにして、町から逃げたのだった。

あの運命の日から一年がたつ。

浅葱たちは様々な町を転々としていた。

そしてある町の果物屋から今回は全員で盗みを働いて、人にみつからなそうな廃墟についたとき事件が起

こった。

「ねえねえ。ムク兄～。久しぶりに殺しあいしよ～よ」

「そのせりふを兄弟に言う場合、普通は殺しあいではなく手合わせだと思いますが・・・。まあいいでしょう。浅葱に常識などありませんもんね」

ぷつ。

何かの切れる音がする気がする。

「む。なんだそれは。私を馬鹿にしているのか？ナッポーめ」

ぶち。

何かがぶち切れる音がする。

「クフフフ。今忌まわしき果実の名が聞こえた気がするのですが？」

「気がするじゃないし。てゆーか何？ムク兄もしかしてそんな髪型なのにナッポー嫌いとか？あはははは。うけるー♪」

ぶっつん。

「浅葱、死ぬ覚悟はできていますね？それに第一浅葱だってナッポーでしょう？そのうえにチビなのでチビナッポーですか？」

ぶちい。

「チビじゃないし！ムク兄たちが大きいだけだ！あとたとえチビだとしてもそれは栄養が足りなかったからだ！多分！いや、そのはず！それに私はナッポーじゃないよ？ムク兄の眼はかざりかな？だって私は後

ろの髪背中あたりまであるし？ナッポーはそんなに細長くないじゃん。だからナッポーはムク兄だけだぜ

い♪」

「そんなに死にたいのですか？浅葱」

「本当のことといっただけだよ♪」

「あなたはここで息の根をとめて差し上げます」

「やれるもんならやってみやがれっ！」

「ま、まってくださいびょん！何本気で殺しあおうとしてるびょん！？」

「めんどい・・・。」

「「とめないでよ（ください）。もうムク兄（浅葱）をぼこぼこにしないと（一度痛めつけないと）気が

すまない（すみません）！！」」

そういうと同時に骸の右目の文字が四となり、互いの三叉槍と三叉鎌がぶつかりあう。

浅葱の左目の文字は一になっている。

浅葱は地獄道以外は多少しか使えないので地獄道以外はほぼ使わない。そのかわり地獄道を使えば幻覚能

力は強化されるので大体戦闘時は地獄道で幻覚能力を強化して有幻覚により三叉鎌をつくりだし、幻覚を

おりまぜて戦うのだ。

ガンッ

ギンッ

キイィンッ

金属のぶつかりあうような音が鳴り響く。

キンッ

スパッ

浅葱の鎌の先端が骸の腕をかする。

ドカッ

骸がよろめいたところに回し蹴りをくらわす。

骸はさっきの攻撃で力尽きたのか動かない。

浅葱がとどめをさそうと鎌をふりあげると浅葱の心臓めがけて槍の先端が飛んできた。

「っっ」

とっさのことによけきれず右腕に槍が貫通した。

「ちっ。動けないのは演技だったの？」

「クフフ。きづかない浅葱が悪いのですよ」

浅葱は槍を抜きながら不満そうな顔をする。

そして言ってはいけない一言をもらす。

「ナッポーの分際で、だましとか使いやがって。そもそもナッポーなら武器としてパイナッポー使えよ」

「ナッポーナッポーいい加減にしなさい。浅葱」

「けっ。何えらそうにいってるんだよ、ナッポー」

「本当に殺されたいのですか？チビナッポー」

「ナッポーく～ん。君こそ殺されたいの？」

「それはこちらのせりふですよ」

そういった二人から膨大な殺気が放たれる。

犬と千種はもうすでに壁際へと避難していた。

それから数時間、浅葱と骸は戦い続けた。

廃墟はもともとぼろぼろだったのが、6才とは思えない戦いをする骸と浅葱のせいでさらにぼろぼろにな

っている。

最終的に骸の作戦勝ちとなり、今浅葱は首元に三叉槍の先端をつけられている。

「やはりチビナッポーは馬鹿なのですね。単純な戦闘能力ならチビナッポーのほうが上なのになんであな

たが負けるかわかりますか？用は頭の使いようなんですよ」

「馬鹿馬鹿いいやがって。ナッポーの分際で。もう決めた！私は一人でマフィアをつぶしてやる！だからもうムク兄たちとわかれてやるからな！精神世界でもムク兄なんかとあってやらないからなっ！」

そういって浅葱は起き上がって、犬と千種にむかって一言。

「犬、千種、そーゆーわけだから。じゃあな。」

最後に骸に向かって、

「いまさら止めても無駄だからな。せいぜい死ぬなよ。じゃあなナッポー」

そういって止める間もなく走り去っていった。

あとには堪忍袋の尾がまた切れかかっている骸とそれを必死で止める犬と千種が残った。

標的3　兄妹喧嘩、来る！（後書き）

感想何回でもまってます♪

標的４　黒服の集団、来る！

浅葱は骸たちと別れてから手当たりしだいに見つけたマフィアを潰してまわっていた。

「ふあーあ。さっきのマフィアも手ごたえなかったなー。次は手ごたえあるのがいいなー」

ちなみに浅葱の今の服装は黒のタンクトップに黒のショートパンツ、それにぼろぼろの茶色の薄地の袖の

長いロングコートをきている。それにこれまたぼろぼろのサイズのあっていないロングブーツをはいてい

る。

「んー。ナッポーはマフィアの殲滅とか本気で考えてるみたいだけど、実際問題そんなんめんどいよな

ー。つーかマフィア消えたら戦いとか殺しの相手いなくなんじゃん。一般人はつまんないし・・・。殲滅

はおもしろいからいいとして・・・。目的は何にしようかなあ・・・。あ、そいえばエストラーネオ壊し

た気になってたけどあそこってただの研究所じゃん。あのお偉いさんもいなかったし。んじゃエストラー

ネオを潰すのを目的にしよう♪エストラーネオをみつけるまではマフィアを潰してまわるとして。って、

やばい一人になるとめっちゃ独り言増えた。これからへらさなければ・・・」

んー。

マフィアのアジトはどこにあるかな。

ここらへんにはもうないのかなあ。

むー。

と考えながら浅葱は森の中の枝から枝を飛び移って移動していた。

それから1時間ほどたったころ、1つのでかい建物が見えてきた。

何かの旗がはためいている。

それに警備のものもいる。

ってことは、マフィアみっけー♪

よし、今日はあそこ潰したらあの建物の食料あさって眠ろう。

さっき戦った疲れもあるし体力も半分もないけど、まあ大丈夫だろ。

本気で戦えるような強いやついたらいいなー♪

そんな軽い気持ちで向かった浅葱は知らなかった。

というか知るはずもなかった。

ここがボンゴレ独立暗殺部隊ＶＡＲＩＡのアジトだということを。

同時刻
ＶＡＲＩＡアジト内

「報告！こちらに知らない人影が近づいています！あと少しでつくかと！」

「う〝お〝お〝おい。誰だそいつはぁ〝」

「わかりま「報告！見張りが殺られました！今こちらにむかっているもようです！」」

最初に報告にきた隊員の声をさえぎって他のものが報告をする。

「ししっ。何それ。なんかおもしろそ。王子いちばんのりー」

そういった金髪で王冠（？）をつけている少年がたってナイフを投げた瞬間にＶＡＲＩＡの幹部が三人集

まっている部屋のドアが蹴破られた。

「うおわっ」

キンッ。

浅葱は入った途端に飛んできたナイフを大鎌で飛んできた方向にはじき返す。

浅葱の眼の文字は一となっている。

パシッ。

金髪の少年はそれをあっさりとキャッチする。

「あっぶなー、いきなり何？もしかしてもしかしなくとも私がここにくるのわかってた？」

「ししっ。当たり前。気配でわかるし」

「おおー！やったぜい。ここ今までで一番潰しがいあるとこじゃね♪」

そういって浅葱は金髪の少年に向かって大鎌をふりおろす。

サッ。

金髪の少年はなんなくかわす。

ズドッ。

大鎌が地面にささる。

浅葱はそれを抜く。

しかしそんな一瞬の隙をついてナイフが大量に飛んでくる。

でもそれは軽く身を捻るだけでなんなくかわせる。

「ししっ。かかった」

「？　何いってんの？」

そういって動き出そうとしたとき浅葱の右手首から肩にかけてが一気に切れた。

「!?」

「だからいったじゃん」

そういった金髪の少年がナイフを浅葱の頭上に円を描くように展開する。

「曲芸じゃん」

「ちがうし。ししっ。針千本のサボテンのできあがり♪」

「にはならないよ」

そういった浅葱は大鎌の柄尻を地面に叩きつけて地面を割る。

そうするとわれたところから有幻覚の炎が立ち上り炎は蛇の形となってナイフを全て飲み込んでナイフが

全て溶けると消えた。

「くふふ。そんなので私を殺せると思ったら大間違いだよ」

「ししっ。あんたのほうがよっぽど曲芸じゃねえの？」

「違うよ。そこの赤ん坊はきづいてるかな？」

「ムム。僕は幻覚で見えなくしていたのに。それを見破るとはね。君は幻覚使いかい？」

「くふふ。まああってるよ♪」

そういうと今度は大鎌を地面と水平に構えて。

「私の幻覚世界にレッツ御招待♪」

瞬間、部屋がぐにゃぐにゃとまがりはじめた。

そしてあちこちにひびが入り、そこから火柱が立ち上った。

すると突然火柱が全て凍った。

「僕をなめてもらっちゃ困るよ」

赤ん坊がいった。

「ふーん。けっこーやるじゃん」

浅葱はにやりと笑うと。

「でもやっぱもう無理」

そういってぱたん、と倒れた。

「「「は？」」」

その場にいた白髪ロンゲ、金髪の少年、赤ん坊の声が見事にはもった。

標的４　黒服の集団、来る！（後書き）

感想まってます♪

標的5　最悪の寝起き、来る！（前書き）

章をつけてみました。

あといつのまにかお気に入りが増えていたっ！

ありがとうございます♪

標的5　最悪の寝起き、来る！

・・・。

・・・・。

しばらくの沈黙のあと。

「う〝お〝お〝お〝いっ！　いきなり倒れたぞお。どういうことだあ！」

「知らねーし」

「ムム。これは栄養失調じゃない？どーする？殺すかい？」

「どーすんの？スクアーロ」

「ちっ。とりあえず医務室へ運んでおけぇ」

「了解しました！」

今だにこの部屋に残っていた隊員がいい、医務室へ運んでいく。

「何で助けんの？」

「とりあえず何でここに攻撃してきたのかきかないといけないからだ。ベル、マーモンあいつが起きるまで見張っておけ。」

「ん。りょーかい」

「了解だよ」

そういってベル、マーモンは医務室へと歩いていった。

残されたスクアーロはというと。

「ちっ。ＸＡＮＸＵＳにに報告してくるかあ」

といってＸＡＮＸＵＳの部屋へと歩いていった。

「なあマーモン。ところであの炎の蛇ってなんだったんだ？」

「ああ、あれはおそらく幻覚にボスの憤怒の炎に似た力をこめ実態にしたものだね。僕の推測だけど」

「ふーん。ボスの炎に似た力って。ししっ。やっぱおもしろいことおこったし♪」

そう話しているうちに医務室の前についた。

そして入る。

そこには浅葱しか寝ていない。

「ししししっ。穏やかな顔して眠ってやんの」

そういってベルが浅葱に手をのばそうとしたとき。

ガチャ。

と扉が開いてルッスーリアとレヴィが入ってきた。

「あらあ。可愛い子じゃない」

「うむ（ポッ）」

「うわっ。何頬赤くしてんだよ、ムッツリスケベ。こいつは俺んだし」

「なんだとっ！そんなものいつ決めたのだ！」

「ししっ。今だし。だってこいつ見た目いいし戦いもできるんだぜ？王子にぴったりだし」

「む。戦いもできるのか？」

「あり？知らなかった？」

「知ってるわよう。この子がきたときのことはスクアーロから聞いてるわ。でもきっとレヴィはこんな可愛い子が強いなんて信じられなかったのね。それに私たちはスクアーロにいわれてきたのよ？」

「うむ」

「ふーん。何で？」

「さあ？わからないわ」

ドゴオ。

そんな効果音がつきそうな勢いで開かれた扉。

「もう起きてるかあ　ゞ！？」

「む。まだ起きておらぬぞ！」

レヴィはスクアーロの声に対抗するように大声で答える。

「相変わらずうるさ「うるさい」！？」

ベルがしゃべろうとすると浅葱が起きたようだ。

むくり、と浅葱が起きて、ベッドの横に降りる。

瞳の文字は一になっている。

そして手のひらを天井に向けて右手を上に上げる。

「人が久しぶりにベッドで寝れたというのに、それを邪魔した気持

ち悪い声の主は誰ですか？」

浅葱の声がいつもより3割り増しで低い。

「こいつだし。気持ち悪いかどーかは知らねえけど」

ベルはスクアーロを指差す。

「う〝お〝お〝おい。俺は気持ち悪くなんかねえぞお〝！！」

「うむ。起きたらさらに可愛い（ポッ）」

レヴィが小声で呟く。

ぶち。

何かが切れた。

「くふふふ。あなたは存在自体が公害だと思いますよ？」

そういって浅葱はにっこり笑う。

けれど眼が笑ってない！

「一度死んでください」

そういって有幻覚でナイフを宙に何千本と出す。

それを一気にスクアーロとレヴィに飛ばす。

「う〝お〝お〝おい！危ねえぞお！」

「なぜ俺にもっ！？」

「気持ち悪いからですよ」

そういいながらスクアーロとレヴィはどんどんはじきかえいていく。

しかし何本かははじき返しきれず刺さっていく。

やはりスクアーロのほうが実力が上なのかレヴィより多くのナイフをはじき返していく。

けどなぜかレヴィのほうがナイフの向かっている本数がかなり多い気がするのは気のせいだろうか。

そして１０秒ほど立つと、一瞬で全てのナイフが消えた。

フラッ。

起き上がっているのも無理になったのか浅葱が倒れる。

「おっと」

とベルが浅葱を支える。

「ん？誰？　あ、さっき殺そうとした人だ」

と浅葱がベルに支えられながら空気をぶち壊す発言をした。

標的5　最悪の寝起き、来る！（後書き）

そいでは相変わらず感想お待ちしています。

標的６　黒服のボス、来る！

・・・。

またしても沈黙がおとずれる。

「あれ？間違ってた？」

こんな空気で言葉を発する浅葱。

「いや、まちがってはいないよ」

それに答えるマーモン。

「ふーん。んじゃあ何で自分たちを殺そうとした私は殺されてないの？」

「それはお前の正体を知るためだあ〜」

血だらけでルッスーリアに包帯をまかれながらもスクアーロが答える。

ちなみにレヴィはスクアーロより重傷なのにあとまわしにされて、今は自分で包帯を巻こう

としてるが不器用なのか全然できていない。

「あり？なんで血だらけ？つーかなんでこの部屋刺し傷みたいなのいっぱいあんの？」

「う〝お〝お〝おいっ！！！てめえがやったんだろお〝があ〝！！」

「うわっ。うるさ。え、てかマジで？」

ベルが答える。

「マジマジ。すごかったぜ。宙にナイフが何千本といきなりあらわれてそれが全部

スクアーロとムッツリスケベに飛んでくの」

「ああ～。じゃあやっぱさっきの夢じゃなく現実か。てゆーかまたやっちゃった系かあ」

「？どゆこと？」

「うん。私がマフィアのアジトの高級そうなベッドで勝手に寝てたら持ち主が帰ってきて

いきなり撃たれたときがあったんだけど、その持ち主の顔が想像以上にきもくて、そのと

きも起きたらまわりが破壊されてて、死体がごろごろと。それを見たナッポーたちは顔が

引きつってた。あとから聞いた話から考えるに、私は嫌なやつに起こされたりよっぽど機

嫌が悪い状態で起きたりするとそいつを無意識に殺そうとするみたいだね♪」

「機嫌が悪い状態？」

「悪夢を見たり、今みたいに寝起きに気持ち悪いやつを見たりすることだね」

「あ、じゃあもしかして、今殺そうとしたのってムッツリスケベのせい？」

「うん。大声で起こされる程度なら別に殺そうとなんてしないよ♪」

「お〝お〝い！じゃあ何で俺にまでナイフが飛んできたんだあ！」

「なんとなく？」

「う〝お〝お〝お〝い！！！なんとなくですむかあ〝！」

「あー、器が狭いなあ」

ぶちい。

「う〝お〝お〝い！今すぐ三枚におろしてやる「うるせえ。カスが」！」

ガスッ。

新たな声が聞こえた瞬間スクアーロの頭が蹴り飛ばされた。

「いきなり何しやがるう〝。ＸＡＮＸＵＳ！」

「てめえは何者だ」

スクアーロをきれいに無視してＸＡＮＸＵＳは問いかける。

浅葱はベルに支えられながらもＸＡＮＸＵＳを正面から見据える。

「何者？六道浅葱（ろくどうあさぎ）だよ」

「あ　゛？」

「あれ？聞こえなかった？だから六道浅葱」

「そういうことを聞いてるんじゃねえ。とっとと答えろ」

そういったＸＡＮＸＵＳは浅葱に銃口を向ける。

「おりょ？もしかしなくても君短気？だめだよ～。短気だと友達いなくなるよ～」

（（（（（（あんなに殺気をだしてるボスにあんな口が聞けるだとっ！？））））））

その時ヴァリアーの幹部の心の声がはもった。

「カスが。いいから答えろ」

ぶち。

「あれ。今私に向かってカスっていった？カスってちびって意味なのかな？」

浅葱の声がいつもより低い。

「だったらどうした」

「殺す」

一瞬で浅葱から膨大な殺気が放たれる。

ＸＡＮＸＵＳと浅葱の殺気が衝突して空気がびりびりとする。

そして浅葱は右手に霧を集めて有幻覚の大鎌をつくりだそうとする。

しかし、途中で霧散する。

「？」

その場にいたＸＡＮＸＵＳ以外の頭に？が浮かぶ。

「あー。やっぱやめた。つーか無理だな。今の私はあなたには多分敵わない。たとえ体調が万全で体力も全快してたとしても。そんなのと戦っても無駄だしね。さあ煮るなり焼くなりもう好きにすればいいさ。質問にもできる限り答えてあげるよ」

「ブワーッハッハッハッ。こいつぁおもしれえ。肝が据わってやがる。カス鮫、こいつに入隊書を書かせろ」

そういってＸＡＮＸＵＳはスクアーロに入隊書を渡して部屋から出て行った。

「ちっ。これに必要事項を書けえ」

標的7　模擬戦闘、来る！

「入隊書？」

「そうだあ。てめえに書いてもらってそれをボスに見せて了承されたらここにはいるんだあ」

「え～、何でマフィアなんかに入んなきゃなんないのさー。第一了承されなかったら

どーなんの？」

「死だ」

「うわ、ま、いいけど。そうなったら意地でも逃げるし。でもここって何てゆーとこ？」

「ここはボンゴレ独立暗殺部隊ＶＡＲＩＡだよ」

赤ん坊が答える。

ついでにいうとムッツリとオカマはムッツリの怪我が想像以上に酷いとかで別の部屋で

オカマに治療されてるらしい。

「ボンゴレ？ってそれめっちゃでかいマフィアじゃん！」

「知ってるのかい？」

「うん♪知ってるよ。ナッポーはいつかそれを利用してマフィアの殲滅とかしようと

してて、それを聞かされた私はそんなでっかいとこと戦ってみたいなあ、と思って

いたわけです♪」

「マフィアの殲滅？ナッポー？まあいいよ。今度聞かせてもらうからね」

「ん。それでここの仕事って暗殺だけ？」

「暗殺のほかにもボンゴレに敵対したマフィアの殲滅とか警護とかもあるけど、大体は

依頼を受けて、暗殺とかだな♪きょーみでた？」

「殲滅♪ここにいたら殺しもあるし、強いやつともたたかえるのか？」

「そうだぜ♪」

「おお～♪はいりたい！ただふらふらしてるだけじゃ全然強いのと会えないんだ。それに

時々復讐者（ヴィンディチェ）来るし・・・」

「復讐者？じゃあ何で君は捕まってないんだい？」

「あー。それは復讐者を知ってから、あ、私やばいじゃないか、と思って、復讐者が

探してる脱獄囚とかの情報を集めといて、それを渡して、見逃してもらってたから」

まわりにいたものが驚く。

「ん?どったの?」

「いや。何でもねえ。とりあえずこれを書けえ」

「ん。わかった」

その後は入隊書に必要事項を書いていく。

「あ、その前に君たちの名前って何?私はいったけど君たちのは聞いてないよ」

「ししししっ。俺はベルフェゴール。ベルって呼べよ」

「俺はスクアーロだあ゛」

「僕はマーモンだよ。さっきでていったオカマがルッスーリアで、ムッツリが

レヴィ・ア・タン。そして僕たちのボスはＸＡＮＸＵＳだよ」

「へえ。これからよろしくだね♪」

「おう。よろしくな♪」

「合格できたらな」

「ムム。よろしく」

「えーと、まずは7ヵ国以上話せるか。そして話せる言語を答えよ。

話せる、っと。んで話せるのは、

イタリア語、日本語、フランス語、ギリシャ語、中国語、英語、ロシア語、スペイン語、

の八個っと。うん。何とか大丈夫だね」

という感じで浅葱は黙々と、独り言は呟くが、進めていった。

数十分後。

「終わったーー♪っってもそんなに多くなかったけど」

「ＸＡＮＸＵＳに届けてくる」

といってスクアーロが部屋からでていった。

「お疲れー♪合格できるといいな」

「うん♪」

１０分後。

がちゃ

「う〝お〝お〝おい。これから模擬戦闘をするぞお！もう入隊は決定だがそれで

入隊後の地位を決める！」

「ふーん。わかった。どこでやんの？」

「ついてこい。ベルとマーモンもだ」

そして浅葱はスクアーロについていく。

後ろにはマーモンとベルもついてきていた。

しばらく歩くと訓練場っぽいところについた。

ここでやるようだ。

もう真夜中なのであたりが暗い。

まあ夜目は効くので問題ないが。

そこにはもうＸＡＮＸＵＳとルッスーリア、ムッツリがいた。

「これから俺と模擬戦闘をする」

「殺しはあり？」

「お前が弱かったら殺されるぞお゛」

「んでスクアーロは殺していーの？」

「殺す気でこお〝い！」

とスクアーロがいう。

「結局どっちなんだよ?ま、いーけど。ところでさっきの怪我はいーのか?」

「そんなこと気にするなあ〝」

「ふーん。んじゃいくよっ」

浅葱の左眼の文字が一になる。

そして浅葱の右手に霧が集まり、三叉の大鎌ができあがる。

そして浅葱は走り出して、スクアーロに大鎌をふりおろす。

キィンッ。

スクアーロが剣で防御する。

そしてまた浅葱が大鎌をふる。

そしてスクアーロが防御、そして攻撃、という攻防がしばらく続いた。

「あはは♪こんなに強いやつ初めてかなあ♪めっちゃ楽しっ♪」

そういった浅葱はスクアーロから距離をとって大鎌をくるくるまわ

して、柄尻を

地面にとん、と置く。

すると置かれたところから地面が割れていく。

そして割れた地面が次々と浮かんでいく。

浅葱はその中心の瓦礫の上に立っている。

「幻覚かあ。だがこんなもんで俺を止められると思うなあっ！！！」

そういったスクアーロは瓦礫の上をひょいひょいと飛んでこちらに近づいてくる。

「え～。幻覚平気なの～？ま、いいけど」

というと今度は浅葱は大鎌をふりかぶる。

「何をしようと無駄だあっ」

「くふふふ。それはどうでしょう？」

といって浅葱は大鎌を何もない空中で地面に平行にふる。

するとふった軌道上にかまいたちのようなものが発生しスクアーロに飛んでいく。

「っ！？」

とっさにスクアーロはよける。

しかしよけきれずに袖がスパッと切れている。

「何をしたあ」

「何、ただの幻覚の強いものですよ。幻覚にある力をこめると有幻覚、つまり実体の

ある幻覚がつくれるんです♪まあすぐ疲れますが。少し前倒れたのも有幻覚を使って

疲れたからです。この大鎌も有幻覚ですよ♪」

「ある力？」

「ま、とりあえず決着つけましょうよ♪」

「そうだなあ〜」

「んじゃちょっとしか持たないけど本気いきまーす」

そういって大鎌を地面と平行に構える。

「現実の幻覚世界へ御招待♪」

そういうと浮いていた瓦礫の影がどんどん広がっていきＶＡＲＩＡの幹部と浅葱を包む。

その中に無数の火柱が立ち上る。

暗闇をてらすほどの火柱は見ただけで高温だとわかる。

「さて、その火柱に触れると、一瞬で黒こげですよ♪」

そういってどんどん火柱を増やしていく。

底も見えない、縦も横もわからない暗闇から火柱が方向様々に伸びる。

「ちいっ」

そういってスクアーロは当たっているがぎりぎりで致命傷をさけながら

浅葱に近づいていく。

もう少しで近づくというところでいきなり現実にもどる。

「あれ全部致命傷さけるとか。化け物かよ」

そう呟いた浅葱は息切れしながらもスクアーロに大鎌をふりおろす。

スクアーロはいきなり現実に戻ったことに動揺しながらもそれを剣で受け止め、

反撃しようとする。

浅葱はそれを大鎌でずらそうとする。

しかし大鎌が少しずつ霧散していく。

「ぐっ」

スクアーロがその隙を見逃すはずもなく、一瞬で浅葱の首に剣をそえる。

そえられた浅葱はというと。

「あー、負けちった。ま、楽しかったからいいけど♪」

といいながら両手を上にあげいた。

そして、

「こうさんこうさーん」

という気合の抜ける浅葱の声で模擬戦闘は幕を閉じた。

標的８　衝撃の事実、来る！（前書き）

テスト終わったあああー！
よっし、これでパソコンやりまくれるぜ♪

そいでは本編どぞ。
今回は少し浅葱の弱い部分がでます。

標的８　衝撃の事実、来る！

模擬戦闘が終わったあと、スクアーロは治療を受けてから、ＸＡＮＸＵＳと話込んでいた。

そして今は浅葱は医務室でオカマ、もといルッスから治療を受けている。

さっきルースーリア、と呼んだら「ルッス姐って呼んで？」といわれたが丁重に

お断りしたはずだがひつこかったので何とかルッスと呼ぶ、ということで落ち着いたのだ。

「すごいわね。浅ちゃん。あのスクアーロと戦ってかすり傷しかないなんて。

スクアーロは結構火傷があったのよ」

「へー。そーなんですかー（棒読み）」

「本当にすごいのよ？」

「だって実戦だったら最後に剣を突きつけられたときに死んでたし・・・」

「ま、いーじゃねえか。浅葱、王子ぐらい強いんじゃね？」

ベルがいってくる。

てゆーか王子？

私が頭上に？を浮かべているとマーモンが教えてくれた。

「ベルは本物の王族の血をひいてるんだよ」

ううえっ！？

マジで？

「マジだし。ししししっ♪」

心読まれたっ！？

「だって浅葱顔にでてるぜ？」

うわっ！

何か前にもこんなことあった気がする。

今後はまた気をつけねば。

と、浅葱は決心する。

「にしてもスク遅いわねぇ」

む。

確かに。

もう３０分はたっている。

新入隊員の地位を決めるぐらいでなぜそんなに遅いのだろう。

とか思っていたらスクアーロとＸＡＮＸＵＳが医務室にやってきた。

「決まったぞお゛。浅葱は俺たちと同じ幹部だあ゛！」

「なぜにいきなり幹部！？」

私は驚き聞いてみる。

「強さが現幹部のベルと同じぐらいだからだあ゛」

「理由それだけ？それに私まだ6才だよ。あと半年ぐらいで7才だけど・・・。」

そう、今は一月中旬ぐらいなので誕生日まであと六ヶ月弱なのだ。

まあ誕生日だから浅葱はどうかするというわけではないが。

骸がいたときはケーキを盗んで食べたりはしていたが。

浅葱はムク兄がいないしいっか、みたいに思っている。

なんだかんだで骸は浅葱にとって大事な人物なのだ。

「ベルだって今7才だあ゛」

「え、マジ？」

「ししししっ。マジだし」

「うわー。ここのボスって7才の幹部いるし、赤ちゃんの幹部もいるし、6才の私も幹部に

しようとするし、ロリコン？」

瞬間、空気が凍る。

「消されてえか、ドカスが」

ＸＡＮＸＵＳから尋常でない量の殺気がでる。

浅葱はやはりこの人には勝てないなあ、と思い。

「すいやせんでしたー。反省してます。前言撤回します！」

ビシッ、となぜか敬礼する。

はたからみれば全然反省しているようには見えない。

「次いったらカッ消す」

「ハイィ！わかっておりやす。たいちょー！」

また浅葱は敬礼。

いや、だからそれ全然わかってるように見えないから。

とこの場の全員が思ったとか。

「ゴホン！まあいい。本題に戻るぞお゛！浅葱は書類仕事できるかあ゛？」

「覚えたらできるんじゃない？」

「なら決定だあ゛。浅葱は明日から正式に幹部として働いてもらうぞお゛！今日は自由にしてろお゛」

「うぃーす。了解しました♪」

そう答えたときにはもう朝日が昇り始めていた。

あの後、浅葱はスクアーロに自分の部屋を教えてもらってスクアーロが部屋から

でたとたんにふかふかベッドに入って寝た。

そのときの浅葱の感想は、

「わ～。ふかふか～♪どんだけここもうかってんだろ。」

だった。

それから数時間後。

もう完全に太陽は真上に来ていた。

むくり。

やっと浅葱は起きたようだ。

「ふわああ〜。うわー、めっちゃ寝過ごした。ま、いいけど。むー。これから何をしようか」

といいつつとりあえず部屋からでる。

「てかここどこ?」

いきなり迷っていた。

「むー。とりあえず適当に歩いてこう♪」

と浅葱が歩いていると少し大きな扉が目に入った。

「おお。あそこなら誰かいるかな♪」

と扉を開けて入っていく。

そこは昨日浅葱がぶち破った部屋の構造と似ていた。

そいえば扉も似てたような・・・。

すると中には人がいたようでこちらに気づき話しかけてくる。

「お、浅葱じゃん。どしたの?道迷ったとか?ししっ♪」

ベルだった。

ソファーの上で寝転がっていたようだ。

今は上半身だけ起こしてこちらを見ている。

「むう。仕方ないじゃん。部屋も何も自分の部屋しか教えられてなかったし。

それよりここって、昨日ドアぶち破った部屋に似てるんだけど・・・」

「当たり前じゃん。だってここその部屋だぜ?」

「!?　昨日あんなぼろぼろになったじゃん。まさか昨日の今日でもう直ってるとか?」

「そのまさかだし」

「うえぇ。どんだけ金もってんの?ここ」

「んー。結構もってると思うぜ?」

「ふーん。んでここはどこ？」

そういいながら浅葱はベルの向かいのソファに座る。

「ここはロビーだぜ♪」

「へー。これから何しよ・・・」

「んじゃ王子が案内してやるよ♪」

「むお！ありがと♪」

浅葱は嘘偽りなくにっこりと笑う。

こんな笑いをみせるのは骸や犬、千種以外では初めてだろう。

「／／／　ししっ。気にすんなって。とりあえずルッスに服作ってもらうか？」

「服なんて作ってもらえるの？」

「ああ、それまではシャワーあびて俺の服貸してやるからそれ着てまってようぜ♪」

「シャワー？」

「あれ、もしかして知らない？」

「うん。今までは石鹸は盗んで、有幻覚で熱湯だしまくって森とか人気少ない川の近くとかで洗ってたし・・・」

浅葱は思い出す。

エストラーネオのときのことを。

あのときは週に一度ぐらい水の張った広い桶のなかに全員放り込まれていた。

けれど中に入ってるのは冷水でとても寒かった。

それで風邪を引いても毛布も何も与えられない。

でもみんな実験でついた血を落としたいし、あの灰色の部屋はカビなどもはえているのでそのまま

でいたらそれこそ病気になるのでみんな嫌が応でも洗うしかない。
それでも短時間で

でようと必死で洗ってさっさとでる。

あのときのことを思い出して、浅葱は少し震えた。

いくら余裕ぶっていても、その状況を壊したのが浅葱たちであっても浅葱の記憶には

しっかりとトラウマとして残っているのだ。

そんな浅葱の頭をわしゃわしゃとベルはなでる。

「？」

「大丈夫だし。姫はもう俺たちの仲間だろ？だからいつか話してもいいって思えるように

なったら話してくれよな♪ししししっ♪」

「ありが、とう」

そういった浅葱の顔には笑顔が浮かんでいた。

「ところで姫って？」

「ん？だって姫、強いし可愛いし何より王子と一緒にいるんだから姫♪」

「むー。ベルの思考回路は意味不明ということにしておこう。ま、いいけど」

「ん。じゃあ早速行こうぜ。姫にはそんなぼろぼろの服似合わねぇって♪先にとりあえず着替えちゃおうぜ♪」

「クスッ。ありがとう」

浅葱は聞こえないような声でもう一度お礼を言った。

「ん？何か言った？」

「んーん。さ、行こう。シャワーってやつも早く見てみたい！昨日はすぐ寝ちゃったから

早く洗いたいし♪」

といって浅葱とベルはロビーから出て行った。

標的９　ルッスの必要性、来る！（前書き）

章を追加させてもらいました。
補足：標的９ってつけるの忘れてたのでつけさしてもらいました。
それ以外は変わってません。すんません。
補足２：昔骸交換したものだった。→昔骸と交換したものだった。
に直しました。他は直してません。すんません。

標的9　ルッスの必要性、来る！

浅葱は今ベルの部屋にいる。

今ベルが浅葱に着れそうな服を探してくれているのだ。

「ん。これもぶかぶかかもしんねえけど長袖Tシャツとズボン」

そういってベルが渡してきたのはしましまな模様のベルが今も着ているTシャツと

同じ柄のものと黒いズボン。

どちらも明らかに浅葱と比べればぶかぶかだ。

「むう～。私はチビじゃないもん。皆がおっきいだけだもん・・・」

浅葱は小さくそう呟いた。

「じゃあ大浴場行ってこいよ。一応部屋にもそれぞれシャワーはついてるけど大浴場は

広いしきっと清掃員ぐらいいるだろうからそいつにシャワーの使い方教わってこいよ♪

その間にルッスになんか服頼んどくし。なんか注文ある？」

「んーん。ないよ。あ、でもTシャツだけ私が注文していい？」

「ん。どんなの？」

「こんなの」

といって浅葱は有幻覚で長袖Tシャツの絵がかいてあるA4の紙を創りだす。

そこに書いてあった柄は薄水色っぽい色に霧のような模様がついたものだった。

「この程度の有幻覚なら30分はもつから、これをルッスに見せてきて。そいえば

サイズってどーすんの？」

「サイズのことなら心配ないぜ。ルッスは変態だから見ただけでわかるらしいし・・・」

「うわ、マジで変態じゃん・・・。ま、いーや。あと、その隊服のコートっぽいやつと
長袖Tシャツはちょっとぶかぶかめにしといて、っていっといてくれる？」

「ん。オッケー。じゃあいこうぜ。場所はさっき教えたとこだから」

「ありがと♪」

そういって浅葱はベルに貸してもらった服をもち、部屋をでていった。

ちなみに浅葱のもちものは今着ているものと三叉槍の先っちょだけだった。

昔骸と交換したものだった。

骸の三叉槍は強力な幻覚でできている。

これは有幻覚ではない。

だってこれをさして意思を伝えたり記憶を見せたりもできるし、何よりこれは契約をするためのものでもある。

契約とは体をのっとる契約だ。

天界道のマインドコントロールの強化版といったところだろうか。

少なくとも浅葱はそう認識している。

まだ完全にのっとることは契約してもできないが、エストラーネオにあった憑依弾とか

いうものを使えば完全に使えるようになるだろうと思う。

研究所と一緒に壊してしまったが・・・。

浅葱はこの三叉槍の先っちょの部分のようにただの強力やただの幻覚ならほぼ無制限に

できるが、しかし骸は浅葱みたく無制限ではなく、有幻覚をつくることはできない。

そのとき浅葱は骸に狐の姿のときの羽を一枚あげた。

２０センチぐらいだがとても薄く硬く切れ味ばつぐんだ。

それぞれがあげたものには当時の力のほとんどをこめて、互いの命がシンクロ

するような機能をつけた。

互いが死なない限り瀕死の傷を負っても生命力をわけられ、死なないという機能だ。

だが傷が深すぎればわける側が追いつけずその傷が分ける側に移って傷が半々になる、というリスクがあるのだが。

これはもとから魂レベルで繋がっている骸と浅葱だからこそできたものだがそれ以前に

これは真に信頼していないとできないものだ。

信頼できないやつとしたら、自分が戦っているときをみはからって、相手がわざと

そのときに重症を負って間接的に簡単に殺すこともできるからだ。

ちなみに媒介にする三叉槍の先端と羽は体内にしまうこともできる。

今までぶかぶかコートの無駄にでかい内ポケットに浅葱は昔骸と交換した三叉槍の

先っちょを入れてあったが、これからは体内にしまうことにしたので腕に躊躇なく

三叉槍を突き刺すと、三叉槍が霧散してさした傷口から入って、傷口がふさがった。

話は戻り、浅葱は大浴場にきて、とりあえず風呂に入ってみた。

すると清掃員であろうおばさんがいた。

浅葱はそのおばさんにシャワーというのがどれでどう使うのか聞くことにした。

それから1時間ほど、浅葱はおばさんに教えてもらったシャワーでおばさんと一緒に

かけあってみたり（一方的に浅葱がかけておばさんは逃げていた）広いお風呂を

泳いだりしていた。

そしてやっと浅葱は風呂から上がりベルから貸してもらった服をきて、ベルがいるで

あろうロビーへと向かっていた。

ぶかぶかだと思われていた服は実際ぶかぶかだったがベルについでに、と渡されていた

ブーツにすそを少しいれたので、引きずらなくてすむ。

Tシャツの袖は、そのままで手が隠れている。

すそがワンピース並みになっているが仕方ないだろう。

浅葱は以上にちっちゃい。

そして以上に細いのだ。

まあ栄養不足なども原因なのだろうが・・・。

ちなみに今まできていたぼろぼろコートなどは清掃員のおばさんが捨てといてくれると

いうので渡して捨ててもらうことにした。

そしてロビーに入ると予想通りベルがいた。

「お。おそかったじゃん♪どーだった?」

「うん。楽しかったよ♪」

「よかったじゃん♪ルッスにいったら明日にはできるってさ。それよりやっぱ姫は

何着ても似合うな♪」

「本当？ただぶかぶかなだけだよ？」

「当たり前だし。それにそれ王子の服だから姫なら似合うんだよ♪」

「そっか♪とりあえずありがと♪にしても今日たのんで明日できるとか・・・。

ルッスってただのおかまだと思ってた・・・」

「まあ、おかまだけどルッスいなかったら今頃ＶＡＲＩＡ大変なことになってた

かもな・・・。この隊服デザインとかつくったりしたのルッスだし。ご飯もルッスが

作ってるんだぜ♪」

「え、マジ？ルッスって結構必要性あったんだね」

「確かに、でもうるさいけどな。ししし♪」

「うん。スクアーロとは違うけどあのおねえ言葉がうざい」

「ししし♪だよなあ」

などと夕飯にルッスに呼ばれるまで雑談は続いたのであった。

ちなみに夕飯では、

「あらあ、浅ちゃんその服似合ってるわよ。やっぱり浅ちゃんはどんな服でも

似合いそうねえ。ふふふ」

「うっ。なんかきもさ倍増してる・・・ヘルプ～、ベルー・・・」

「ししっ。ゴメン♪無理だし♪」

「裏切り者～」

ということがあったのであった。

標的１０　初任務、来る！

ルッスに服を頼んだ翌日。

「浅ちゃ～ん。洋服できたわよう」

浅葱の部屋にルッスが正午あたりにたずねてきていた。

そして浅葱はといえば、まだ寝ていた。

「んに?ルッス?ふあーあ」

ガチャ。

浅葱はあくびをしながらドアを開ける。

そこには予想通り洋服が入っているであろう大袋をもったルッスがいた。

「おはよぉう。浅ちゃん」

「ん。おはよー。ルッス。服もうできたの？」

「できたわよぅ。早速着て見せてね。じゃあ昼ごはんを作って待ってるから食堂に来てねえ」

「んー。わかった」

そういって浅葱はルッスから大袋をもらってドアを閉めた。

ちなみにＶＡＲＩＡのアジトの構造については昨日ベルに教えてもらった。

「んー。まだ眠い。でもお腹減ったなー。早く着替えて食堂行こう」

といって浅葱は着替えて食堂に向かった。

食堂に着くともうスクアーロとレヴィ、ベル、マーモンは食べ始めていた。

ルッスは厨房にいるようだ。

ん、ＸＡＮＸＵＳがいない。

まあ、あのボスは自分の好きなときに食べるのだろう。

そこまで歩きながら考えてようやくベルたちのところについた。

「おはよー♪」

「おはよ、姫♪」

「ム、おはよう」

「おはようだ」

「う〝お〝お〝おい〝！おせえ〝ぞお〝！」

「うるさい、遅くて文句あんのかよ」

「新入隊員は普通一番に起きて挨拶するだろうがあ〝」

「新入隊員は新入隊員でもスクアーロたちが私は幹部っていったんだよ？幹部は

寝坊が普通のはずだっ！」

「ムム、それは違うと思うよ、浅葱。幹部が寝坊ばかりだと組織が成り立たないじゃないか」

「あ、そっか。まあ、明日からはちゃんと起きれるようにするよ。今日みたいに真昼に起きることはなくする。どうせなら夕方まで寝ることにするよ。これでいい？」

「う〝お〝お〝おい！全然いくねえぞお〝！！！」

スクアーロの顔に青筋が浮かび始めている。

ああ、この人も短気なのか、からかいがいがある♪

と浅葱は思っていた。

「ま、いーじゃん。ルッスー、ご飯ちょうだーい」

「わかったわよぅ」

といった１０分後あたりにルッスはご飯をもってやってきた。

「あら、浅ちゃん。その服も似合ってるわよぅ」

とルッスはいってくれた。

今の浅葱の格好はルッスに作ってもらった服だ。

黒のショートパンツに太ももまである黒のニーソックス、それにベルたちと同じブーツ。

上は薄水色の霧みたいな模様のはいった長袖Ｔシャツ。

襟のぶかぶか具合からみるに袖も手はすっぽりかくれているだろう。

ちなみにすそはショートパンツが半分かくれる程度だ。

そしてその上から前を開けたＶＡＲＩＡ隊服のコートを着ている。

これも袖がすっぽりと手を隠している。

すそは膝辺りだ。

「本当？ありがとう♪」

「ししっ。似合ってんぜ♪」

「ありがとう♪あ、ベル昨日借りた服返すからあとでもってくるね」

「いーよ。やるし♪」

「おお。ありがと♪じゃあベルにはこれをあげるよ」

といって取り出したのは漆黒の１０センチぐらいの羽１０本だった。

「ありがと♪ところでこの羽何の羽？」

「私の羽」

と答えると皆「は?」みたいな顔をしていた。

唯一冷静さを取り戻したマーモンが聞く。

「どういうことだい?」

「こういうこと」

といって浅葱は漆黒の翼をもつ九尾の狐の姿になる。

九本の尾がゆらゆらとゆれている。

「化け物、って思った？」

そういった浅葱の声は少し小さかった。

今までこの姿を見て化け物、といわなかった人は骸と犬、千種以外いないのだ。

こんなふうにしたエストラーネオの研究所のものたちはこの姿をみせる以前から

もうすでに化け物、といっていた。

「ししっ。そんなこと思うかよ」

!?

浅葱は動揺する。

こんなふうに返されるとは思わなかった。

「こんなことで何で化け物っていわないといけないんだい？」

マーモンにもいわれ、浅葱は涙がでそうになる。

しかしそれを必死でこらえ、狐の姿から人型に戻る。

「くふふ」

浅葱は小さく笑う。

「どっちみち、いつかは話さないといけなかったんだろうし、今話すよ。私の

今までと、力のことを」

浅葱はそういって話し始めた。

もちろん昼ごはんを食べながらだが。

浅葱は昼ごはんを食べながら、自分のことを話した。

まあ骸や犬、千種の能力までは言っていないが。

兄妹喧嘩をして別れてきたことや６つの記憶などは話した。

「と、いう訳なのです。だからエストラーネオをつぶすのがとりあえずの目標なのですよ」

それを聞いたＶＡＲＩＡ幹部はしばらく呆然としていたが。

「すごいじゃねえかあ〜。テメエは予想以上に使えるようだあ〜」

「ししっ。狐姿と戦ったらレヴィなんてぼろぼろじゃね？」

「そうだね。戦闘もできるなんて邪道だけど浅葱は認めるしかなさそうだね。それに

幻術では僕は負けないよ」

「くふふ。そうだね。ありがとう♪あとベル、レヴィと戦ったらぼろぼろじゃないよ♪

肉片たりとも残らないさ♪」

「ぬお！なんだとっ！」

「ししっ。浅葱の言うとおりだし。ムッツリなんか消えちまえ」

「・・・」

無言でレヴィは部屋の端でいじけ始めた。

「う〝お〝お〝おい！話が終わったところで早速任務だあ！浅葱はベルと組んで

ボンゴレの要人を殺そうとしているという中小ファミリーをつぶしてこお〝い！」

「りょうかーい」

「りょーおかい」

「それと浅葱、さっきの話をＸＡＮＸＵＳにも話すがいいか？」

「うん。いいよー」

浅葱は軽く答えた。

「それではいってこお〜い！」

といわれたので早速任務にベルといった。

そして浅葱とベルは標的の中小ファミリーを潰しに行った。

中小ファミリーはなんでこんな小さいのにボンゴレに手だそうとしたのかわからない

ほど小さかった。

だって構成人数は１０人にも満たなかった。

アジトは小さな小屋だった。。

しかもめっちゃ弱かった。

殲滅は一分とかからずに終わった。

浅葱は敵の首を大鎌で飛ばしていき、ベルはナイフを心臓に飛ばしていった。

終わってから2人はつまんないー、となげいていたとかいないとか。

標的１１　運命の邂逅、来る！

初めて浅葱が任務に行ってから２週間ほどたった。

今は２月に入ったばかりだ。

そして初任務から帰って浅葱の力を聞いたＸＡＮＸＵＳを浅葱がからかいに向かって、

どう思った？と聞いてみると、

「は。そんなことで有能な部下を手放すと思ったか？」

といわれた。

多分ボスにしては優しいほうの言葉だったと思ったので浅葱は微笑んでありがとう♪

といった。

浅葱は表面上は普段通りだったが実際はからかいに来たというのも

忘れるぐらい

うれしかった。

そして今日も浅葱はある任務に行くことになっている。

ちなみに浅葱は書類仕事は結構得意だった。

平均の１０倍くらいのスピードでできた。

だが浅葱は書類仕事が嫌なのでスクアーロに抗議して実戦を増やしてもらった。

今日の任務はボンゴレを潰すために禁弾を開発しようとしているとかいうマフィアの

殲滅だった。

それを聞いたときの浅葱の心境は複雑だった。

禁弾といえばエストラーネオを思い出す。

エストラーネオは憑依弾というものを作ろうとしていた。

そのために何人犠牲になったかわからない。

だがそれがあればおそらく私と骸の力のマインドコントロールを昇華させられる

だろうからどうせなら手に入れてやろうと思っていたけど、怒りが勝って全て

壊してしまった。

今となっては苦い思い出だなあ、と思う。

エストラーネオの作った力を使うのは癪だが、自分たちで作った力で自分たちがほろぶ

など笑える、と私は思う。

まあその憑依弾はエストラーネオ以外には禁弾とされているようだが。

そんなことは私には関係ない。

でも1つだけ疑問がある。

なぜ禁弾と勝手に言って禁止するのか、だ。

マフィアとは力で相手を屈服させるものなのだろう？

なのになぜ強い力をもつものを禁止するのか。

それがわからない。

つくるのに人がたくさん犠牲になるから？

どうせマフィアなどそれ以外にもたくさん命を犠牲にしているだろう？

マフィアというものはやっぱり訳がわからない。

まあそういう自分もつい2週間ほど前にマフィアとなってしまったわけだが。

ここらで話は戻り、潰す相手は禁弾を作ろうとはしているがまだ未完成で、構成人数も

２０人ほどだそうなので簡単な任務だろうと思った。

スクアーロから任務の内容を聞かされてから2時間ほどたったころ。

浅葱とベルは敵の研究所兼アジトへと向かっていた。

「ねー、ベルー」

ふいに浅葱がベルに話しかける。

「ん？どしたの？姫」

「禁弾ってなんで禁弾って呼ばれるの？ていうかなんで禁止するの？」

「んー。スクアーロとかの話によれば、作成に多大な犠牲を出すし、力が凶悪だから

とかいう理由らしいぜ」

「ふーん。でもマフィアだって禁弾じゃなくても命たくさん奪ってるじゃん。殺しとか

は好きだけど」

「まー、そーだけどな。あ、でもこういうのも聞いたことあるぜ。禁弾は人の力を
超えたものだから人の世が狂ってしまうのだ、とか」

「ふーん。それで勝手に禁弾とかいうのか」

「ん？なんかいったか？姫」

「んーん。さっ♪早く殲滅しちゃおう♪」

話している間にもう敵の研究所兼アジトについたようだ。

いかにも研究所だぜ、ってな感じの窓1つない灰色の建物だった。

エストラーネオの研究所に大きさは劣るが形が似ていた。

「ひーめっ？どしたの？」

しばらく凝視してしまっていたようだがベルに呼ばれて現実に戻る。

「なんでもないよ。さあ、さっさと潰してしまおう♪」

そうだ。あの研究所のものは皆殺しにしたはずだから私を知るものはいないはず。

あの偉そうな人以外はいないはずだ。

それにこんな見つかりやすいところにエストラーネオのアジトがあるわけない。

私たちがいた研究所はもっとわかりずらくて、それにこれの何倍も大きさがあった。

そこまで考えて、浅葱はしまっていた自分の羽を8枚取り出す。

大きさは３０センチぐらいでそれを片手４枚で扇型のようにもつ。

けど袖で手は隠れているので袖から羽がでているように見える。

大鎌は長期戦には向かないというのとＶＡＲＩＡは暗殺部隊なのであんな大きい武器は

目立ってしまうのでよほど強い敵以外には羽を使うことにした。

狐姿のときの翼は羽を飛ばして攻撃できることからもわかるように
飛ばした瞬間に

生えてくるので、取り放題♪なのだ。

まあはやすのにも体力は削られるのだが。

そして研究所の壁をスパッと切り裂く。

ズウウウウン。

轟音が鳴るが煙も舞っているのでこの隙に研究所に入っていく。

ちなみに外に逃げることができないように幻覚をかけてあるので二人で中に入る。

でてくる敵を一瞬でたおしていくと敵が一人もでてこなくなった。

一応一つ一つの部屋をみていく。

そして最後に無駄に硬そうな、エストラーネオのアジトの実験室の扉ととても似て

いる扉にたどり着いた。

「ししっ。じゃあ行くぜ♪」

その声とともに今度はベルが扉を切り裂く。

煙が晴れると一つの人影があった。

するとこちらに気づいたようで、「１２０６？」と声を発した。

それを聞いた瞬間に浅葱の表情が凍る。

標的１２　トラウマの相手、来る！

「姫？大丈夫か？」

浅葱はベルの声も耳に入っていないようだった。

「なんで、生きてる、の？お前は、私の、目を弄くり回した、やつ。あの時！

ちゃんと殺したはずだ！お前は突入部隊にいて、私はお前を見つけた！それで、

一番最初に鎌の先端で左目を潰したあとに、心臓を刺したはずだっ

！」

「ひひひ。わしは自分の体で実験をしてな、心臓を１０個もっているのじゃよ、ひひひ」

「ちっ。これからは殺しのときは首を狩ることにするよ。まあ左目は潰せているみたい

だしいいとするけど、何でエストラーネオの研究員がこんなとこにいんだよ？」

といいながら浅葱は大鎌を創りだす。

これも袖で手が隠れているので袖が折れて掴んでいるように見える。

そして浅葱は男に一瞬で近づいて大鎌の刃を首に当てる。

「答えないと首を狩るよ♪」

「どうせ答えても殺すのじゃろう？」

「いいから答えろ」

浅葱に声が低くなる、と同時に刃を1センチ横にずらす。

そして幻覚で男の体が燃やされていくように思わせる。

「ひ、ひひ。まってくれ。わかった。話す」

と男がいうと大鎌の刃ははずさないが幻覚は解いてやる。

「わしはあの研究所の唯一の生き残りじゃった。わしはとにかく実験がしたかった。

しかしあのときボスに報告すれば責任を取らされもう実験ができなくなるかも

しれないと考えて、逃げてこのファミリーにたどりついたのじゃ。

ここは禁弾の

開発を行っていた。だが全然進んでいなくてな。わしが知識を提供するといえば

丁重にもてなしてくれてな。ひひっ」

「エストラーネオのボスは、どこにいる？」

「ボスを殺しに行く気か？ひひっ。無駄じゃ。ボスは強いのじゃ。研究者のくせに

強い。頭の回転も速い。いくらわしらが作った化け物の１２０６でもかなわん

じゃろうよ」

「１２０６と呼ぶなっ！私には六道浅葱という名前があるんだっ！いいから

場所を言えっ！」

と浅葱はいうとさらに1センチ大鎌の刃を首に刺した。

「ぐっ。ゴボッ。ボスの正確な居場所は知らん。報告だって電話で行うのだ。

ただエストラーネオの本部だ。相当大きい研究所であることは間違いないだろう。

これでわしの知っていることは全てだ」

「使えないやつ」

と浅葱は呟いて一気に大鎌を横に動かした。

「さ、ベル。ここ燃やしてちゃっちゃと帰ろう？」

浅葱は笑っていた。

けれどどこか無理をしているような、そんな笑顔だとベルは思った。

その後は浅葱が有幻覚の炎で研究所を燃やしてＶＡＲＩＡのアジトに帰った。

その間は一言も話さなかった。

「ただいま♪」

「ただいまだし♪」

浅葱はアジトに戻るころにはもうすでにもとに戻っていた。

けれどそれが逆にベルの不安を煽った。

「ムム。今日は少し遅かったね。何かあったのかい？」

マーモンが痛いところをついてきた。

「んーん。ちょっと昔の知り合いにあっただけだよ」

そういった浅葱の顔には影が差していた。

（ムム。何かあったようだね。あとでベルに聞くとするかな）

「それじゃあ私はもう寝るね。今日は夕飯いらないってルッスにいっといて」

といって浅葱は部屋に戻っていった。

浅葱は部屋に戻ってからコートとブーツを脱いですぐにベッドにダイブした。

「あーあ。どーしよ。ベル皆に話しちゃうかなあ。あんなに取り乱

したの見られ

ちゃった・・・。まあそれはいいとしても。エストラーネオのボスがいるとこ結局

わからなかったし・・・。あーーー。ま、いっか。明日考えよう」

と独り言を呟いて3秒後にはもう寝ていた。

浅葱が部屋に戻ったあとのロビーにはマーモンとベルが残っていた。

「ベル。本当は何があったんだい？」

「昔浅葱に人体実験したっていうエストラーネオファミリーの研究員の生き残りが

いたんだよ」

「ムム。詳しく話してくれるかい？」

「ああ」

といってベルはあったことをマーモンに全部話した。

ベルが全てを語り終えた。

「ムム。そんなことが。これは報告書にも書いておいたほうがいいだろうね。

今日の浅葱はかけないだろうから、ベル書いといてあげなよ」

「わかってるし♪」

といってベルは自分の部屋に戻って報告書を書いてスクアーロに提出したのであった。

標的１３　憎悪の標的、来る！

翌日の夕方。

「おっはー♪」

夕方にもかかわらずおはよう、といいながら浅葱がロビーに顔を見せた。

ロビーにはＸＡＮＸＵＳ以外の幹部が集まっていた。

「もうおはようの時間じゃないと思うよ」

「まあいいじゃん。私は今さっき起きたんだし♪」

といって浅葱はいつものように笑う。

いつものように言葉を発する。

いつものようにソファに座る。

ただ、最近は寝坊しなくなったのに今日は寝坊してきた。

違いは、それだけ。

でもそんなにも違う。

「姫、大丈夫か？」

「くふふ。何をいってるの？大丈夫に決まってるじゃん♪」

「本当のことをいったらどうだい？」

そういうと浅葱は俯いた。

そして少したってから言葉を発した。

「みんなには、エストラーネオのことも話したからエストラーネオファミリーは
知ってるよね。それで、エストラーネオの本部の場所とかボスのことを
知ってる人、いない？」

「知ってどうするんだい？」

それに対して浅葱は7才とは思えない微笑を見せる。

「ぶっ壊す」

一言だけ囁く。

そのときの浅葱の眼には闇しかなかった。

その瞳を見てしまった他の幹部たちは本能的な恐怖で身を竦める。

「くふふ。知らないならまあいいよ。私のこの怒りはいつまでたっても消えは
しない。たとえ何年かかっても必ずあいつらは潰すんだから♪」

そう浅葱が言った途端にロビーに笑い声が響いた。

「ぶわーっはっはっはっは。ますます気に入ったぜ」

「それはどうも♪けど私にはそんなことよりエストラーネオのことが知りた「知ってるぜ」！？」

ＸＡＮＸＵＳが浅葱のセリフをさえぎって言葉を発する。

「俺は知ってる。エストラーネオの本部のありかも、ボスの正体もな」

「教えてよ、ボス」

浅葱が殺気を放ちながら言う。

そんなのにも動じずＸＡＮＸＵＳは言い放つ。

「エストラーネオのボスはもとは非人道的なことのしすぎとして復讐者に最下層の牢獄にとらわれていた。だがそこを抜け出し、今も復讐者の追跡を逃れ、人体実験をしているというやつだ。そんなやつの居場所を知ってどうする？今のテメエじゃ勝ち目

なんてねえだろう？」

「それでも、私は！ムク兄を傷つけた、犬や千種を苦しめた、マフィアが！

エストラーネオが！許せないんだっ！」

「ふははっ。だうやらテメエの覚悟は本当のようだ。それにそいつを殺すことが

できたらＶＡＲＩＡの地位も上がるだろうしな。本部の研究所はアルプス山脈を

くりぬいて作ったらしいからアルプス山脈のどっかに入り口があるんだろうな。

だが強力な幻術やら結界やらで守られてるらしい。だから正式な入り口以外で

入るのはほぼ無理らしい。今行くのはテメエじゃ自殺行為だということを

覚えておけ」

それだけ言ってＸＡＮＸＵＳはロビーから出て行った。

「私に、どうしろってんだよ・・・」

そういった浅葱の頬には一筋の涙がこぼれていた。

それを見た皆は浅葱には話しかけられなかった。

そして浅葱は部屋に戻っていった。

翌日の夕方。

「おはよう♪」

今日も盛大な寝坊をした浅葱がロビーにやってきた。

今日はロビーにＸＡＮＸＵＳも幹部も全員集まっていた。

「今日は昨日の話の結論を聞いてもらおうと思ってね。私はまだエストラーネオの

本部を潰そうとはしないことにする。ここにいれば任務でマフィアを潰していけるし、

それに今行って、ボスの言うとおり負けるのも嫌だ。だからどうせなら圧倒的に

潰してやりたいからもっと強くなったら潰すことにする♪心配かけたみたいで、

ごめんなさい・・・。だからこれからもよろしくね♪」

「当たり前だしっ♪そん時は手伝ってやるよ♪」

「ムム。そうだね。そのときは通常の半額でいいよ」

「ありがと♪お金は取るのかって質問はしないでおくよ♪」

「おい。なら早速任務だ。テメエ昨日今日さぼってただろ」

ＸＡＮＸＵＳが威圧感ある声でいう。

「あー。そうだった。寝坊もしてたしねー。んじゃあベル、任務早速行こうぜい♪」

「ししししっ♪ああ」

そしてここ2週間で日常となった非日常な日常が戻ってくる。

しかし今までと違う点が1つ。

浅葱は殺しのとき必ず首を狩って殺すようになった。

そしてついた通り名は首狩り姫（プリンセス・ザ・アッシア）。

標的１４　揺りかご、来る！

ＶＡＲＩＡに浅葱が入ってから２ヶ月半ほどたった。

「ふあーあ。やっぱちゃんと朝に起きるのは眠いなー。これぱっかりは何日
たっても慣れない・・・。まあ今日は会議あるっぽいから２度寝できないん
だよな。遅れたらスクアーロうるさいし・・・」

ぶつぶつと文句をいいながらも浅葱は会議室へと行く。

「では全員揃ったなあ゛！これから重要な任務の話をするからよく聞いておけえ゛！」

という無駄にでかいスクアーロの声で会議が始まる。

「ん？そいえばオッタビオはいーの？」

浅葱が同じ幹部のオッタビオがいないことに気づく。

「今回の作戦にはオッタビオのやろうは反対的だったからなあ〜。あいつはいいんだあ〜」

「ふーん。ざまあ、オッタビオ、仲間外れ〜」

といって浅葱は笑う。

浅葱はオッタビオが大嫌いなのだ。

初対面のときから浅葱はまだ子供なのだからうんたらかんたらとうるさかった。

だからもう浅葱はオッタビオには話しかけられても総無視しているのだ。

「じゃあ話を進めるぞお゛。俺たちはある作戦を実行する。それは九代目暗殺だあ゛」

沈黙が支配する。

「文句あるやつはいるかあ」

「なぜに？」

浅葱は質問する。

「んなもんＸＡＮＸＵＳに聞けえ」

そういわれて浅葱はボスのほうを見るがボスは目をつぶって、話す気はさらさらないようだ。

「まあいいや。私はボスについていくしかないしね」

「ししっ♪俺もだ」

「僕もだよ」

「私もよぅ」

「無論俺もだ」

「よし、なら決まりだ。実行は明日。詳しい作戦は今からいう。しっかり聞いておけえ゛」

その後は作戦をスクアーロが発表していった。

まとめると、スクアーロとボスで九代目暗殺。

レヴィは中庭の敵を排除。

ルッスとベルは廊下の敵を排除。

マーモンは司令室を落とす。

そして私は狐姿になって霧を振りまいたあとに、自分の周りに集まってきたやつを

一通り殺したあとにボスとスクアーロの加勢。

という感じだ。

この後は各々明日までしっかり休んでおくようにということで任務は無かった。

書類仕事はたくさん与えられたが・・・。

翌日、ボンゴレ本部。

きぃぃぅぅぅぅぅぅぅぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉんんん

というとても高い不思議で綺麗な音の狐姿の浅葱の鳴き声がこだまする。

不思議な声を聞いたものが何だ何だと外にでてくる。

浅葱は大きく息を吸って、一気に吐き出す。

すると高濃度の霧があたりに充満する。

３０センチ先も見えないほどだ。

きぃぃぅぅぅぅぅぅぅおおおおおおおおおおおんんん

また浅葱は鳴く。

わざと敵に自分の居場所をわからせるために。

その思惑に乗って敵がぞろぞろと浅葱の周りにやってくる。

その隙に他のＶＡＲＩＡ幹部は行動をしているのだ。

浅葱は九本の尻尾の先に長さ５０センチほどの羽をそれぞれもつ。

それで周りのものの首を次々狩っていく。

「うわあああー！無闇に近づくな！首を狩られるぞ！」

「首を狩られる！？首狩り姫（プリンセス・ザ・アッシア）か！？」

「なんだと！ならなぜ我々に攻撃するのだ、うわー！」

声が響いていたが突然静まり返る。

浅葱が集まっていた周りの全てのものの首を狩ったからだ。

「むー。皆雑魚ばっかだったなー。数は多かったけど。１００人ぐらいかな?でも

普通本部ならもっと数でてくると思ったんだけどなあ。まるでこんなところには

人数を裂けないような。というかこいつら皆首に鉄の防具的なのつけて斬られ

ないようにしてた。まあ鉄だろうが普通に切れるけど。むー。ま、いっか。さて、

ボスとスクアーロのところへ行きますか♪」

といい浅葱は走っていった。

そのころスクアーロは衝撃の事実を聞いて、驚愕していると今度はＸＡＮＸＵＳが氷づけに

されてどうすればいいのかわからなくなっていた。

ガシャアアン。

その時派手な音とともに天井を突き破って狐姿の浅葱がやってきた。

スタッ。

あんなに派手に降りてきたにもかかわらず着地は完璧だった。

「ボスが、凍ってる・・・？」

浅葱の第一声はそれだった。

「君は、新しく入ったＶＡＲＩＡの幹部の六道浅葱さんかな？」

九代目は浅葱が狐姿でも浅葱だと超直感できづいたようだ。

「そうです。ボスに何したのか教えてくれませんか？」

九代目なんて浅葱にとっちゃあどうでもいいようなやつなので敬語で殺気も

全開にして話す。

「ＸＡＮＸＵＳは眠りについたのだ」

「そんなことは聞いていません。何をしたのかを聞いているんです」

「それを聞いても無駄だよ。この氷はもう溶けない」

「くふふ。溶けない？それはどの口がいっているのですか？」

というと浅葱の左眼の文字が一になる。

そして尾の一本の先にもっている羽に有幻覚の炎をまとわせ、氷に向かって投げる。

すると炎をまとった羽が通ったところがあっさり溶ける。

「!?君は、一体。だけどその程度ではこの氷を溶かすことは叶わないよ。

どうやらその力を使うと相当疲れるようだね。だけど氷はこんなに大きいんだ」

九代目の言うとおりだった。

浅葱は今の小さな有幻覚に相当力をこめたのであっさり溶けたがあれだけ力を

こめると体力の消費も尋常じゃないのだ。今までの戦いの分もあわせてもう

立っているのもやっとというところだろう。

「ち、っ」

ぐらり、と浅葱の体が傾く。

地面に倒れる直前で人型に戻る。

「ちっ」

スクアーロがそこで勢いよく飛び出し、浅葱を抱えて走り去っていく。

その途中で通信機で他のものに連絡する。

「う〝お〝お〝おい！聞こえてるかあ〝。作戦は失敗だ。今すぐアジトに戻るぞお〝」

といって通信を切った。

それから数十分たってアジトに幹部が全員揃った。

浅葱もスクアーロに抱えられて帰っているときに目を覚まして、狐姿で走ったほうが

早いからと、狐姿でスクアーロを乗せて帰ってきた。

「ボスはどうしたんだい？」

マーモンが聞く。

「氷づけにされたんだあ゛」

「それはどういうことかしらぁ？」

ルッスーリアが今度は質問する。

「それは今から説明するぞお゛（ＸＡＮＸＵＳが九代目の実子じゃねえというの以外は

話すかあ゛。それについてはまだ調べてえこともあるしなあ゛）」

スクアーロは自分が知ったＸＡＮＸＵＳの秘密の片鱗以外についてはあったことを全て話した。

そこで本部のやつらがやってきた。

「独立暗殺部隊ＶＡＲＩＡの幹部の皆様方。今回のボンゴレ本部襲撃事件の容疑者

として来てもらいます」

そして浅葱たちは本部に拘束されて事情聴取を1週間にわたり受けて、ＶＡＲＩＡ

アジトに戻ってきてまた1週間ほどたって聞かされた報告は彼らの怒りを生み出す

ものであった。

『ボンゴレ独立暗殺部隊ＶＡＲＩＡはこれから無期限活動停止処分とする。ただし

副隊長オッタビオのみはボンゴレ本部にて高地位でボンゴレに貢献してもらうこと

とする』

幹部でオッタビオだけ作戦に反対し参加しなかったこと。

オッタビオだけ昇進して活動停止じゃなかったこと。

それにスクアーロによれば襲撃が知らされていたかのように作戦当日はいつもより

ボスの警護が多かったらしい。

他にもおかしい点はいくつかあった。

これらからオッタビオにこの作戦が漏らされていたということを推測する

ことは容易にできた。

標的１５　揺りかご後、来る！

結局なんでクーデターを起こしたのかはスクアーロとＸＡＮＸＵＳ、九代目しか知らない

こととなった事件。

そして今日は無期限活動停止処分といいわたされてから1日たち、幹部で会議が

開かれていた。

「とりあえずこれからどうするかだあ゛」

そして浅葱は昨日から考えていたことをいう。

「スクアーロ、私はエストラーネオを潰すことにする。ボスの氷は
私の有幻覚
なら溶かせるようだけど全然力が足りないだろ?だから他の方法が
見つかるか、
私の力で溶かせるようになるかまではボスは復活できないんだから
自由に
動かせてもらうよ♪」

「う〝お〝お〝おい！だからＶＡＲＩＡは活動停止だっつってんだろうがあ〟」

「じゃあスクアーロは言われたとおり何もせずに待ってるの？それに私はＶＡＲＩＡ

として行くんじゃない。個人として潰しに行く。それにエストラーネオは有名じゃない

けど一部の人にとっては有名でね、皆から嫌われてる。潰せたら少しは信用回復するん

じゃないかな？あとエストラーネオは復讐者のリストにも入っているからたくさんいる

構成員をどれだけ殺そうが、大丈夫だよ」

「ししっ♪俺は姫についてくぜ♪どうせなら何かやってたほうがいいしな♪何より姫を

守るのは王子の仕事だし♪」

「じゃあ僕もエストラーネオつぶし協力するよ。浅葱に死ぬ気の炎を体内で生成する

力があることからそれを研究しているだろうからね。呪いを解くヒントが見つかる

かもしれない」

ああ、そういえば幻覚を実体にできるほどの高エネルギーの正体は死ぬ気の炎というらしい。

有幻覚の高エネルギーだけをだす、ということを挑戦してみてとマーモンにいわれ

やってみると藍色と黒色の混ざったような色の炎のようなものが大鎌の先に灯って、

マーモンにいわれたのだ。

「黒色はよくわからないけどこれは死ぬ気の炎だね」

と。

うまくはまだ使えないが死ぬ気の炎というものはそれ単体でも強力らしいので今それを

使えるようになるための特訓もしている。

「俺はボスがどうなっているのかを調べ、そしてボスが戻ってきたときお役に立てる

ようさらに強くなることにしよう」

「じゃあ私は隊員たちをここで鍛えてるわねぃ。ここにいるからいつでも戻ってきてもいいのよぅ」

「じゃあ。俺は調べ物がある。それに俺ももっと強くなるよう修行することにするぞお〜」

そして幹部たちのこれからが決まった。

今言ったこと意外のことをするときはちゃんと報告すること。

あと定期的にスクアーロに報告もすること。

そして拠点は相変わらずＶＡＲＩＡのアジトで防御はルッスーリアにまかせる、

ということになった。

今は会議が終わり、ロビーにてマーモンとベルと、まずはどうするかを話している。

「まずはやっぱエストラーネオの本部があるっていうアルプス山脈行ってみようよ？

それでマーモンの能力で探ればアジトも見つかるよね、多分♪」

「別料金をもらうよ」

「今回はマーモンもアルコバレーノの呪いだかいうのを解くヒント見つけに私たちと行くことにしたんでしょ？なら自主的、ということで無料でいいじゃん♪」

「ムム。今回だけだよ」

「ベルもこれでいい？」

「いいぜ♪」

「ん。じゃあアルプスは寒そうだから防寒具もって、一時間後にここ集合ね♪」

「わかったし♪」

「わかったよ」

そういってとりあえず浅葱たちは別れた。

一時間後、ロビー。

浅葱たちは各々防寒具、といってもマフラーをもってきてる、とかだけだが、

の準備を済ませロビーに集合していた。

浅葱はいつもの隊服の格好に藍色の地面にまで着くんじゃないか、というほどの

長さのマフラーがプラスされている。

帽子は浅葱の隊服にかぶれば顔がすっぽりと隠れるぐらいの大きさ

のものが

ついているので必要ない。

ベルは赤色のマフラーがプラスされているだけだ。

マーモンは、何も変わっているようには見えなかった。

あとベルと浅葱は黒いトランクを持っている。

マーモンの荷物はベルと浅葱に分担していれている。

「浅葱、スクアーロに出発するって言ってきたかい？」

スクアーロは現在調べ物とやらをしていて、資料室などにこもっているのだ。

「うん。報告してきたよ。最低でも一日一回携帯で報告しろってさ」

「ししししっ。じゃあ早速行こうぜ♪」

「うん♪アルプス山脈へレッツゴー♪」

その後浅葱たちは電車などを乗り継いでアルプス山脈にたどりついた。

今はアルプス山脈の人気のないところを進んで山の中腹あたりだ。

先頭は浅葱が歩いている。

昔エストラーネオにいたのだから、アジトの場所の検討がつくかもしれない、

という理由でだ。

「んじゃあ早速粘写頼むよ、マーモン」

「わかったよ」

ブーーーーーッ。

といつ見ても汚いが役に立つ能力をマーモンは使う。

「ムム。早速あたりだね。浅葱はアジトの正確な場所は知っていたのかい？」

「知らないよ」

「じゃあこれはすごいね。そこの大木を殴ってごらん」

「とうっ」

浅葱がいわれた大木を思いっきり殴る。

すると地面がぱっくりと割れて、地下への階段がでてくる。

「すっげー。さっすが姫♪」

「おおおー。すご・・・」

浅葱はびっくりして声もでないようだ。

「とりあえずスクアーロにいったん報告してから内部に入ろう」

そういったマーモンの声に2人はうなずいて、もう一度大木を殴って階段を

しまわせて、そこから離れていった。

標的１６　エストラーネオ本部、来る！

エストラーネオのアジトへの入り口を見つけた浅葱たちはとりあえずその場から

離れて、近くにあった洞穴にいき、スクアーロにこれからエストラーネオ本部

へと乗り込むことを告げた。

「じゃあ一応の作戦を発表します♪とりあえず今から行くエストラーネオの研究所の

中にいる白衣とかスーツとかちゃんとした服着たやつら全部皆殺しでいいから」

「要するに実験体は殺すな、ってーこと？姫が皆殺しにしないなんて珍しいじゃん♪」

「うん。頼んでも、いい？」

そういった浅葱はとても儚く、今にも消えてしまいそうに笑った。

それを見たマーモンとベルは何もいえなくなる。

「姫の頼みきくのは王子の役割だしな♪」

「わかったよ。でも救出はしなくてもいいんだね？」

「うん。研究所ぐらい自分で脱出できなかったらこれから生きていけないよ」

「そうかい。じゃあ実験体以外は全て殺すよ」

「うん。マーモンは呪いを解く手がかりを探しにきたんだよね？じゃあ別行動？」

「うん。研究所に入ったらそうさせてもらうよ」

「わかった。じゃあベル、さっき見栄はって作戦発表します、とかいったけど実際はないんだ。だから行き当たりばったりでいい？」

「ししっ♪姫らしいな♪姫がいいならいいぜ」

「ん。じゃあ早速行こう。我らエストラーネオ研究所襲撃隊出撃！命令は

ただ1つ！死ぬな！みたいな♪」

そんな浅葱の悪ふざけとともに浅葱たちは洞穴をでて研究所の入り口へと向かった。

今浅葱は研究所内の禁弾保存庫にいた。

目的は浅葱が憑依弾を絶対に持ち帰ってやる！と思っていたので探しているのだ。

そんなの最後にやれ、と思うだろうがそうはいってられないのだ。

先ほど浅葱とベルは偶然この研究所内の全体地図を拾った。

その大きさが絶望的だったのだ。

なので実験体の牢の鍵だけははずしてやって外に出、研究所を全て爆破してしまう

ことにしたのだ。

マーモンもきっと浅葱とベルがそんな小細工をしている間に用はすむだろうと思う

し、マーモンにもそれはもう通信機で伝えて了承を得ているので爆破することに

したのだ。

そして研究所内にあった爆弾を設置させるためにベルと浅葱は別行動で効率よく

動いているはずなのだが。

爆破してしまったら憑依弾が手に入らなくなるので今浅葱は探しているのだ。

ちなみに憑依弾は禁弾というだけあり、ばれたらやばい、と浅葱は

学んだので誰にも
言っていないので即見つけなければいけないため、猛スピードで探
している。

「あったっ！」

そういった浅葱の手には銃弾が２つ握られていた。

「あとはこれをしまって、爆弾しかけて、終わりっと♪」

浅葱は禁弾保存庫にも爆弾をしかけて次のしかける場所に向かい走っていった。

１０分ほどたったころ、入り口には浅葱、ベル、マーモンが集まっていた。

「んじゃあ爆破3秒前2、1、」

ポチッ。

浅葱が何かのリモコンのようなものを押す。

ズドオオオンン。

と低い音が鳴り響く。

奇跡的というかエストラーネオのアジトは全崩壊したらしいがアルプス山脈は無事だった。

ちなみに実験体たちは鍵は開けてきてあげたので、生に執着のあるやつは生きるだろう。

「あ、そいえばマーモン。手がかりはあったの？」

浅葱はふと疑問に思ったことを聞く。

「いや。死ぬ気の炎とかについては結構研究していたみたいだけど、アルコバレーノの呪いについては全くといっていいほど無かったよ。それよりもその浅葱の首に巻きついてるフェレットみたいな生き物は何なんだい？」

浅葱の首にはこの研究所に来る前はいなかったはずの藍色の毛並みのフェレットがいた。

「ああ、この子も実験体だったんだけど、鍵を開けてあげたらこの子だけは
ついてきちゃってね。この子の能力も使えそうだから、まあいいかなあと
思って連れてきた♪」

「能力？」

「うん。この子は耳がとってもいいんだ。1キロ圏内なら針が落ちる音も
見分けられるし、わずかな声のちがいも、鼓動さえも聞き分けられる。そして
声帯もすごくてね。通信機が出す波長を声でだすことができるし、感じ取ったりも
できる。要するに生きた通信機でね。できることはこれだけで戦闘はできないけど
役にたつでしょ♪」
「へえ。それはすごいね。でもいくら聞き分けられたりしたとしてもそれを

どうやって人に伝えるんだい？」

「それについては大丈夫♪私が言葉を理解できるから。それはなぜか、といわれれば

この子の精神が私と共鳴できるからさ。この子は精神世界に私やムク兄がいる

奥底にはこれないけど浅いところにならこれるんだ。だからだよ」

「すごいじゃん♪やっぱ姫もそのフェレットも♪名前はねえの？」

「あー。名前・・・。浅葱のフェレット・・・。アサット♪」

（（まんまじゃん！））

このときベルとマーモンの考えたことが一致した。

「さて、早速だけどアサット。周りに生きているものはいるかい？」

「きゅう」

と鳴いてアサットは耳をぴく、と動かす。

［やまをおりていくのがひゃくてーど。それにこのちかくにひとりいる］

「!?ベル、マーモン周りに気配って」

といった瞬間に三人の心臓めがけて何かが飛んできた。

標的17　待ち焦がれた標的、来る！

とっさに三人は飛んできたものをよける。

「ムム。木の枝、かい？」

そう。

マーモンが言うとおり飛んできたものはただの木の枝だった。

「どーゆーつもり？ちゃっちゃと答えろよ♪」

ベルが言う。

しかし相手は姿を見せずに、ベルの質問にも答えなかった。

「やあ。久しぶりだね、１２０６。覚えているかな？君に君の能力の説明をしたものだよ」

といって相手は姿を現す。

いかにもえらそうな服装にたたずまい。

そしてそんないかにも建前な笑顔を顔にはりつけていなければ結構いいほうであろう顔。

それは浅葱にとって見覚えのある姿だった。

「あ、あの時のえらそうなやつ」

・・・。

あたりを沈黙が襲う。

シリアス雰囲気をよくもまあこんなに綺麗に潰せるものだ、とこの場にいた浅葱以外は

思っていた。

「まあ覚えているだけよしとしようか。とりあえず僕の自己紹介だね。僕は

エストラーネオファミリーボス、エス・トラーネというものだ」

「１２０６、君につ「私は１２０６じゃない！六道浅葱だ！」」

浅葱は相手のせりふをさえぎって言う。

「六道浅葱？ああ、あの片割れとでも一緒に考えたのか。まあそんなことはいい。１２０６」

そう呼ばれ浅葱は顔を歪める。

もう諦めたようだ。

それに浅葱は考えたら自分の大事な片割れにもらった大事な名前をこんなやつに

呼ばれたくない、と思ったのかもしれない。

「何ですか？」

浅葱は敬語で答える。

「君にはあのとき僕じきじきに説明に行った。そしてその力の開発もほぼ僕が

設計したようなものなんだよ。つまり今の君は僕が作った。なのにこんなことを、

エストラーネのただの研究所だけでなく本部もこんな目にしてただで済むと

思ってるのかい？」

その瞬間に相手の顔から作り物の笑顔が消える。

ゾクッ。

浅葱の闇しかない瞳を見たときには及ばないが本能的な恐怖。

浅葱もそれに闇しかない瞳で返す。

「思ってないですよ?だって私はエストラーネオのボスを殺してエストラーネオを
潰すことが目的で来たのだから」

「へえ。標的相手によくそんなこと堂々といえるね。よほど神経が図太いのかな?」

「今から死ぬものに教えて何が悪いんです？それにエストラーネオは本部も
もう潰したんです。あとは貴方を殺したらそれで終わりですよ」

そういいながら浅葱は大鎌を有幻覚で創りだす。

それに対してエストラーネオのボスは二本の短刀を抜く。

紅と黒の二色で統一された刀で刃にも柄が入っている。

「アサット、君はベルのところに行って」

浅葱は小声で告げる。

それでもアサットには十分聞こえたので浅葱の肩を降りて、ベルの肩に乗る。

「ししっ♪いーの？こいつ戦闘できなくても足手まといにはならねーだろ？」

「うん。こいつだけは私がこの手で殺しつくしてやらないと気がすまないからさ♪

アサット預かっててくれる？」

「姫がそういうならいいぜ♪」

「ありがと♪」

浅葱はベルに向けて満面の笑みを見せる。

「／／　ししっ♪そんなんどってことねーし♪いってこい。絶対勝てよ」

「そうだね。まだ前にツケにしたコーヒー牛乳代もらってないんだ。勝ちなよ」

「うん♪ありがとう。いってくる」

その言葉と同時に浅葱は大鎌を振りかぶって跳び出す。

そして振り下ろす、が、短刀で防がれる。

「こんなもので僕を殺せると思うの？１２０６は失敗作だったかなあ。

僕が作ったのに失敗するなんて・・・。いやあ、ビックリ」

ブチッ。

「私は貴方なんかに作られたんじゃない！それに失敗作でもない！」

といって浅葱は大鎌の力を一端抜き、相手がよろめいたところに回し蹴りを放つ。

ドカッ。

「ぐっ」

「くふふ。失敗はお前だ。人間としても、戦闘にしても。その短刀はめっちゃ
切れるようだけど、貴方はそれに頼りきっている。エストラーネオの他のものは
ボスは戦闘もできる、とかいってたけどそれは貴方の持ち前の頭のよさで
騙していただけなんだろう?要するにただ頭がいいだけで他が全くできないやつ
なんだろう?」
「う、ぐっ。それがどうした!この世は頭だ!それに僕は戦闘だってできる!

そのためのものを僕はたくさん作ったんだ！」

といったエストラーネオのボスは何かのボタンをポチッ、押した。

標的１８　殺戮機械、来る！

エストラーネオのボスがポチッ、と何かのボタンを押すとズゴゴゴゴ、と低い

地鳴りのような音が響いた。

そして次にドドドンッ、と銃声が鳴る。

浅葱はとっさに横にはねる。

次の瞬間、浅葱がいたところに数発の銃弾が打ち込まれる。

「ちっ。はずしたか。まあいい。こいつを出したことでもう僕の勝ちは決まって
いるのだから！」

というと、浅葱の数メートル前に人型、といえなくもない鉄の塊が降り立った。

「何ですか、これは？」

「これは僕が作った中でも一番強い殺戮機械、そうだな、モスカ、とでも名づけようか」

「一番強い殺戮機械、ですか。ならこれを壊せば、あなたはもう打つ手がなく
なる、ということですね」

「壊せるはずないだろう？この僕の一大傑作が！」

「それは、どうでしょうねえ」

といって浅葱は妖しく嗤う。

モスカが猛スピードで飛んでくるのに対して浅葱は大鎌を構えもせずにただ、

一歩前に動いた。

ガシャアアアン。

次の瞬間、轟音が響きわたった。

エストラーネオのボスの驚愕の声が響く。

「な、馬鹿な。一瞬で、真っ二つ、だと？」

そこには縦に真っ二つに切られたモスカと、大鎌を振りぬいた状態の浅葱がいた。

その大鎌の刃には、わずかに藍色と黒色の炎が宿っていた。

「くふふふ。あとはあなただけ、ですよ？」

「う、わあああ。殺さないでくれ！頼む、命だけは！」

エストラーネオのボスは無様に浅葱に土下座する。

「どの口がそんなことをいうのですか？実験体がやめてくれ、と命が尽きるまで

叫ぶのも全て無視してきたくせに」

といって浅葱は躊躇なく男の首を狩った。

そして浅葱はエストラーネオのボスが使っていた短刀二本を拾う。

「うわー。かっけー。よし。これは私が使ってやる♪」

といって浅葱は短剣二本をコートのポケットにしまった。

そして浅葱は何事も無かったかのようにベルとマーモンに言った。

「さあ、帰ろう♪」

浅葱はそういって晴れやかな笑みを見せた。

浅葱たちはエストラーネオを潰してアジトに帰っている途中だった。

浅葱はそのときどうやって憑依弾を骸に渡すかを考えていた。

離れていてもお互いの気配はいつでもわかるので気配をたどっていこうか、

と浅葱は考えていた。

でも実際は骸に頭の中で話しかけて待ち合わせすればいい話なのだが浅葱にも意地があるのでそれはしない。

浅葱や骸はいつまでナッポーとかチビといわれたことを怒るのだろうか。

「む～。ムク兄が謝ってくれればすぐに許すのに・・・」

浅葱は呟いた。

マーモンやベルには聞こえていないようだった。

（よし、決めた。ムク兄が謝ってくるまでもう絶対精神世界でもあってやらない。

あと、憑依弾はまあ、行き当たりばったりにしよう♪）

と、浅葱は考えながらもアジトにベルとマーモン、浅葱はついたのだった。

標的１９　意地っぱりの２人、来る！

揺りかごから3年たち、浅葱が１０才になったある日のこと。

浅葱は今日はふらふらとヨーロッパのとある町を一人で旅行していた。

「うー。何しようかなー」

と呟きながら歩いていると、ふと見覚えのある人影が２つ路地裏へと入っていった。

「犬と、千種？」

浅葱は2人が入っていった路地裏へと向かった。

路地裏にいたのはやはり犬と千種だった。

「犬♪千種♪」

犬と千種とわかった途端に抱きつく浅葱。

「うおっ。浅葱さん！？」

「・・・浅葱、様？」

「うん。そーだよー♪久しぶりだねっ♪」

そういいながら浅葱は2人から離れる。

「お久しぶりだびょん」

「・・・お久しぶりです」

「うん。ところでムク兄は？」

それに答えたのは千種だった。

「・・・今はあるマフィアに潜入しています。なので今あうことはできません。

そして浅葱様にあったらこれを渡すように、といわれました・・・」

そういって千種が差し出してきたのは三叉の槍の先端。

「骸様は、浅葱様とのつながりを持っていると、いつか頼りきりになりそうで
怖いので一度つながりはあっても感じられないようにしないか、といっていました」

「ああ、なるほど。ムク兄は今マフィアを潰す目処がたったのかな？だから、
人に頼らないようにこんなことを言い出すのか」

「そうです。あとこうも言ってました。つながりは次現実であったときに
元に戻そう。それまでは精神世界でも会わない。そしてそのときまでに
どちらがよりたくさんのマフィアを潰しているか勝負しよう、と」
それを聞いて浅葱は三叉の槍を腕に突き刺す。
「ムク兄は本気のようだからね。叶えてあげるさ。これでつながりを感じ取ることが

あまりできなくなった。あくまでもあまり、だけどね」

そういった浅葱の顔は少し寂しそうだった。

すると三叉の槍は砕け散った。

「じゃあ、次ムク兄に会うときまでにたくさん潰しておかないとね。
あと、

これをムク兄に渡しといてくれる？」

そういって浅葱は憑依弾を１つ取り出す。

「わかったびょん」

「・・・わかりました」

「うん♪じゃあよろしくね♪」

といって浅葱は犬と千種から離れて郊外の森へと歩いていく。

人気が全くといっていいほどない深い森の中。

そこには声をかみ殺しているが殺しきれていない泣き声が響いていた。

「うっ。ひっく。ぐす。今更、泣いたって、仕方ない、よね・・・。
ムク兄

から謝るまで仲直りしない、って決めたのは自分だし。それも多分
ムク兄に

伝わってるよな・・・。てゆーかつながりを感じられなく、っていっても

場所とか相手の気配はわかんないとしても感情とかかすかに伝わってくる

じゃないか・・・。ぐす」

そして浅葱は残った憑依弾を取り出す。

「そいえば、まだこれ使ってなかったな」

といって浅葱は憑依弾を有幻覚の銃にセットして自分のこめかみにあてる。

そして躊躇なく引き金を引く。

ズガンッ。

森に銃声が響き渡った。

ドサッ。

浅葱はその場に倒れる。

その数秒後、むくり、と起き上がる。

「うー。契約の媒介は、大鎌でいっか。これで相手に憑依できる、と。んじゃま

契約はいつか誰かとするとして、犬と千種とかは、今度あったときでいっか」

そういって浅葱は立ち上がり、歩き始める。

「さーてと、とりあえずアジトに戻ろっと♪」

そう呟き浅葱はアジトへ向かって枝から枝へと跳んでいった。

枝から枝へ飛んでいると1人の男が現れた。

鉄の帽子をかぶっていた。

浅葱は男の一歩手前の枝でとまる。

すると男が話しかけてきた。

手のひらの漆黒のおしゃぶりを見せながら。

「突然ですがあなたにはアルコバレーノになってもらいます。六道浅葱さん」

「は？」

間抜けな声が浅葱からでるがそんなこと無視して男の手の上のおしゃぶりが光った。

光が収まると浅葱の姿が少し変わっていた。

耳が少し尖り、犬歯が鋭く伸び、手の爪が鋭く5センチほどに伸びていた。

浅葱はそれに気づいてまず爪を切ってみたが即座に生えて元通りになった。

「驚いているようですね」

「当たり前だ。これは幻覚じゃない。何をした?」

浅葱は男に聞く。

「初めに言ったでしょう？あなたにアルコバレーノになってもらう、と。

そのために虹の呪いを受けてもらったのです。普通なら赤ん坊の姿になるのですが、あなたの場合、その身に宿っている瞳と狐の姿と反応してその

ような微妙な姿変化と、おそらくそれ以上成長しない、という呪いになったようですね」

「成長しない！？これ以上身長が伸びないということか！？」

「ええ」

ブチ。

「呪いを解け！」

「駄目です。もうあなたはアルコバレーノとなった。おしゃぶりを守るために
おしゃぶりと同化したのです」

それを聞いて浅葱は黙る。

「それではアルコバレーノの説明と行きましょうか。ほとんどは知識として
入っているはずですが、一応ね。まず大空の九属性、というものがあります。

大空、嵐、雨、雷、晴、雲、霧、無、創の九つです。無と創は天候ではない

ですが全てのものは初めは無でありそして全ては創造される、ということで

九属性に入っています」

「私は、無の属性か？」

「よくおわかりですね。まあ当たり前ですか？あなたが無に選ばれた理由、

それもわかっているのでしょう?」

浅葱は沈黙で答える。

「まあ話しておきましょう。理由は簡単、あなたは無に相応しいからです。

あなたは無でできている。どんなに大事なものが目の前で死んでも、目の前で

何が起きても、あなたは「ま、いっか」で済ませられる。要するにあなたには

何も無いのでしょう?」

それを聞いて浅葱は顔を歪める。

「違う！私は、ムク兄はベルが目の前で死んだら「ま、いっか」なんて
済ませられない！」

「死んだら、でしょう？とにかくあなたはどこまでいっても無、なんですよ」

といって男は漆黒のおしゃぶりを浅葱に投げ渡す。

「とにかくあなたはもうアルコバレーノだ。それは私に目をつけられた時点で

決まったことだ。アルコバレーノの使命、きちんと果たせ。おしゃぶりを守るのだ」

浅葱は男が去った後ぼー、っとしていた。

そしてしばらくたつと「ま、済んだこと考えても仕方ないか♪」といって立ち直り、

おしゃぶりにちょうど持っていた藍色の紐を通し、首から提げた。

そしてまたアジトに向かって枝から枝へと跳んでいく。

「さて、と。アジトに戻ったら皆に言わないとなあ。特にマーモンはアルコバレーノだし」

標的２０　封印の鎖、来る！（前書き）

すいません。
ＸＡＮＸＵＳ氷漬けのはずなのにでてきてました。
それを直しました。
本当すんませんでした。

標的２０　封印の鎖、来る！

浅葱はアジトに戻ると誰にも変わった姿を見られないように幻覚で姿を消して

自分の部屋まで行った。

部屋に入ると出かけるときおいていったアサットが瞬間に飛びついてきた。

「きゅう♪」

「おいていってごめんよ」

といって浅葱はアサットの頭をなでる。

そして幹部とボスを緊急といって自分の部屋に集めた。

集まったマーモンの鎖で巻かれたおしゃぶりは他のアルコバレーノに近づいたときには

輝くはずだが今も同様に微弱だが輝いていた。

「う〝お〝お〝おい！自分から呼んどいて何で本人がいねーんだあ〝！！！」

相変わらずうるさいスクアーロの声が響く。

「あー。相変わらずうるさいなー」

そう言って浅葱は幻覚を解いて姿を現す。

姿を現した浅葱の胸にはマーモンのおしゃぶりより輝く漆黒のおしゃぶりが

あった。

「「「「「「「!?」」」」」」」

その姿を見てマーモンまでもが驚いた。

「その姿と漆黒のおしゃぶりはどういうことだい？僕の頭に無のアルコバレーノが

新しくできた、という情報は入ってきたけど何があったのか話してもらえるかい？」

マーモンが一番に聞いてきた。

「くふふ。それを今から話すのさ」

といって浅葱は今まであったことを全て話した。

ただし憑依弾や犬、千種のことは一切話さずに。

浅葱が話し終えると皆驚きで声がでないようだった。

同じアルコバレーノのマーモンでさえ驚いている。

「じゃあ浅葱も呪いは解きたいということでいいのかい？」

「当たり前だろ？だってこれ以上身長が伸びなかったら次にあったときムク兄に

何ていわれるか・・・」

「ムク兄・・・？浅葱の話によく出てくるね。誰なんだい？」

「ん？ああ、話してなかったね。ムク兄とは私の双子の兄にしてナッポー星から来た

王子だよ」

（（（（（（なら浅葱はナッポー星から来た姫じゃないか・・・？））））））

その時ＶＡＲＩＡの幹部の心の声が一致したが皆口にしたら後が怖そうなので出さなかった。

「・・・。そうかい。まあいいさ」

「皆は私がアルコバレーノになったからって遠ざけたりする？」

浅葱は一応聞いてみる。

「んな訳ねーし」

「そうよぉ」

「当たり前だあ」

などと答えが返ってくる。

浅葱はこの答えはなんとなく予想していたとはいえ、うれしかった。

「ありがとう♪これで話は終わりだよ。集まってくれてありがと♪」

と浅葱が言うと、皆各自の部屋へと戻っていった。

けどマーモンは最後まで残った。

「どうかした？」

「これをあげとこうと思ってね」

と言ってマーモンが渡してきたのはマーモンのおしゃぶりに巻かれているのと

同じ鎖だった。

「これは？」

「おしゃぶりの力を封印するための鎖だよ。まだ完全じゃないから全ては封印できないし

アルコバレーノ同士が近づいたときに光ることもまだ完全に防げないけどね」

「ありがとう♪」

といって浅葱は早速巻きつけてみる。

すると浅葱の体に起こっていたわずかな変化が全てもとに戻った。

「おお♪すごいね、これ。呪いの本質のこれ以上成長しないっていうのは

直りそうもないけど・・・。ま、これからはその研究私も手伝っていい？」

「もちろんだよ。こちらからも頼むよ」

といってマーモンは部屋から出て行った。

オリキャラ設定2～原作以降編～（前書き）

設定です。
読まなくても大丈夫、だと思います。
身長・体重のところ少し補足しました。補足しただけで他は変わってないです。
すんません。

オリキャラ設定2～原作以降編～

：名前：
六道浅葱（ろくどうあさぎ）

：性別：
女

：血縁関係：
骸と双子の妹

：年齢：
骸と同じ15才（6月9日になるまでは14才）

：誕生日：
骸と同じ6月9日

：過去：
エストラーネオファミリーにて人体実験を受ける。それで骸の右目のあの六ってかいてある瞳を左目に移植される。骸より少し前に。その左目の力を基盤にして形状記憶カメレオンのDNAを改造した力をいれられる。
その後骸とともにエストラーネオファミリーを壊す。
10才のとき鉄の帽子の男に無のアルコバレーノにされる。

：見た目：
骸と同じ髪型と眼。しかし六とかかれた眼は左で青い眼は右で骸と反対。あと髪の長さは腰ぐらいで少し癖があるがサラサラ。
世間でいう美少女で骸と瓜二つ。

：身長：
１５６ｃｍ（普通に成長していた場合であって今はアルコバレーノの呪いで成長しなくなってるので１３０センチ）

：体重：
３６ｋｇ（普通に成長していた場合であって今はアルコバレーノの呪いで成長しなくなってるので１９キロ）

：戦闘能力：
・骸と同じあの六道輪廻の力。ただし浅葱はそれを基盤に形状記憶カメレオンのＤＮＡを無理やりいれられているのでほぼ骸より弱い。ただし地獄道の幻覚能力は同等。
・形状記憶カメレオンのＤＮＡを改造した力。まとめれば天使の翼のようだが、漆黒の羽の翼をもち、藍色の毛並みをもつ妖孤の姿になることができるというのになれる。ただし翼は一枚一枚が鋼鉄より硬く薄い。ようするに切れやすい。大きさは獄寺の匣兵器の瓜が大きくなったやつより少し大きくて人一人のせられるぐらい。一部変化はできない。妖孤の力としてＤＮＡにプログラムされた能力は羽を飛ばす、吐く息は霧、幻覚を作れる、死ぬ気の炎を体内で生成できる（属性は霧と無）というもの。プログラムはもう書き換えはできない。
・アルコバレーノの力。

：戦闘能力まとめ：
六道輪廻↓地獄道以外は多少しか使えない。地獄道のみ骸と同等。
身体能力↓形状記憶カメレオンのＤＮＡ改造体をうめこめれたため骸より高い。
１０メートルぐらいなら跳躍できる。

幻覚能力→地獄道と妖孤の力とあわさって骸より上。有幻覚は大鎌なら1時間ぐらい、火柱とかばんばん使ったら1分もつぐらい。
知能→骸のほうが上。
妖孤状態→身体能力とか上がる。

：その他能力：
・精神世界にいける。
・憑依弾を自分にうったのでその力を使える。

：性格：
ほぼ骸と同じ。ただしＤＮＡを埋めこめられたときに破壊衝動もついてきたので少し骸より残忍なところもある。

：一人称：
私

：口調：
骸みたいにいつも敬語ではなく信用できないやつの前だけ敬語。信用できるやつの前では適当な感じ。

：武器：
・三叉鎌（骸の武器の棒の先っちょに棒と直角に三叉の長い爪みたいなのがついてる。三叉の爪のさきっちょは少し持ち手側に曲がってる。）
有幻覚でつくってるのでいつもはもっていない。
・緊急用に自分の有幻覚で作ったのではない短剣を二本を持ち歩いている。というか大体二本の短剣を使う。三叉鎌なんてほぼ使わない。ちなみにその短剣はエストラーネオのボスが持っていたものを盗ってきた。めっちゃ切れ味がいい。見た目は一本は漆黒の柄に真紅の刀身で、柄には真紅で刀身には漆黒で波のような模様がはいっ

ている。もう一本は色が真紅と漆黒が反対になったようなもの。鍔はない。そしてこの短剣はヘルリングと同じくいわくつきで死神が作ったといわれ、ヘルリングと共鳴する。浅葱はこの短剣を「かっこいいから」という理由で気に入っている。

この短剣二本と浅葱の狐姿の挿絵はオリキャラ設定原作以前編を見てください。

標的２１　並盛、来る！

エストラーネオを潰し、浅葱がアルコバレーノになってから４年たったある日のこと。

「あうー。ベル～。暇～。これ以上マフィア潰して復讐者が来てももう

渡す情報が無いしさー。呪いの研究も一区切りついちゃったし」

そういった浅葱の姿は４年前と何も変わっていなかった。

しかし首には4年前より改良されて、アルコバレーノに近づいても光らなくなる

ようになった鎖がおしゃぶりに巻き付いている。

「俺だって暇だし～」

VARIAのアジトのロビーのソファーで2人はだらけていた。

「だってさー。修行とかもあるけど実戦ないしさあー。マジで暇～」

「俺にいうなっつの。俺だって暇なんだし」

まさにぐでー、という効果音が似合う今の2人。

そこに浅葱がいきなり声を上げる。

「あ♪そいえばさ日本にもボス候補いるつってたじゃん？九代目のクソジジー

とか門外顧問のオッサンが支持してるっつー。まさにいらないやつ」

「あー。ボスが戻ってきたら殺すやつな。今は氷は姫が溶かせるけど閉じ込められ
てるとこがどこかもわからないしなー。それがどうかした？」

「そいつに会いに行こうよ♪」

浅葱は心底楽しそうな表情で言う。

「は？」

それに対してベルは訳がわからないという表情をする。

「だってさー。暇つぶしにもなるし、一応候補なんだから強いかもしれないよ？」

「ししし♪まーな。でもスクアーロ許してくれると思うか？」

「フッ。そこはうまく騙せばいいのさ♪」

「ししっ♪じゃあ行くか」

「うん♪私がスクアーロには旅行くっていいくるめとくからベルは荷物とか準備して

部屋で待ってて。私も準備終わったら呼びに行くから♪」

スクアーロの部屋の扉をノックも無しに浅葱は開ける。

「スクアーロー。私とベルこれから日本に遊びに行ってくるねー♪」

スクアーロはいきなり来て突然言われたので数秒停止したが。

「う〝お〝お〝おい！てめえのことだあ〝！何かたくらんでんじゃねえだろうなあ〝！！！」

「相変わらずうるさいね。何をいってるんだい？私は何にも1つもひとかけらも

たくらんでなどいないさ♪」

そういって浅葱は妖しく嗤う。

「う〝お〝い〝！絶対何かたくらんでんだろーがあ〝」

「何もたくらんでなどいないといってるじゃん。ただの遊びだよ。
ひつこいと
嫌われるよー♪」

「チッ。何かあったら連絡入れろお〝」

「オッケー♪じゃーね♪」

といって浅葱はスクアーロの部屋を出て行った。

それから浅葱は部屋に戻って準備をして、ベルを呼んで空港に向かった。

服装はいつもの隊服だとＶＡＲＩＡとばれてしまうので隊服はトラ

ンクに一着入れている

だけで着ずに私服を着ている。

といっても大して変わらない。

浅葱はいつもの隊服からコートを取って、上からフードつきのだぼだぼ藍色パーカーを前

開けて着ているだけだ。

おしゃぶりが見えないように薄地の藍色の長いマフラーをしている。

そしてパーカーで見えない位置にルッスに作ってもらった短刀を装着できる

ベルトをつけて、そこに短刀二本を装着している。

あと六と書かれている瞳を見て怪しまれて行動しずらくなるのも嫌なので

左目に赤色のカラコンをつけてごまかそうとしたのだが六の文字は透けて

見えてしまったので藍色の眼帯をしている。

ベルはいつもの隊服からコートを取って、ズボンも普通のそこまで高そうじゃない

黒ズボンになっただけだ。

荷物はどちらもそこまで大きくないトランクが１つずつだけだ。

そして今は日本行きの飛行機の中。

「ベルー。そいえば家とかの手続き全くしてなかったさ♪」

それにベルは飲んでいたジュースを吹き出しそうになる。

「げほっ。マジか」

「うん♪まあついたら何とかなるっしょ。戸籍は一応金払って作ってもらってるし。

その他の転入手続きとかもま、何とかなるっしょ♪」

「転入？」

「うん♪沢田綱吉というもう1人のボス候補が通ってる中学校だよ。ついでに

そいつは今2年生になったばっか。今は5月だからね。それで私たちは戸籍で

実際より2才若くしてもらってるから。だから転入したら私が中2、ベルが

中3だから。それで一応兄妹設定だから」

「ふーん。わかったぜ♪」

「ん。じゃあ私は寝るけど日本についたら起こしてね」

といって浅葱は寝た。

1時間後。

ぱち、と浅葱が目を覚ますとすでに飛行機は着陸態勢だった。

「わーお。寝たらイタリアから日本なんて一瞬だね♪」

「お、起きたか、姫♪おはよ♪」

「うん♪おはよう♪」

浅葱とベルは飛行機から降りるとまずバスとか色々使って沢田綱吉がいるという

並盛町にやってきた。

ちなみに来る途中で通った黒曜センターでは、浅葱が「ここ住めそ

うだよ♪ここ

住もうよ♪」、といったのだがベルに猛反対されたので渋々浅葱は諦めた、

ということがあったのだった。

そして今は並盛町のとある公園にいる。

「ベルー。私は入学手続きとかしてくるからベルはこの町を探検してきてよ。

どこに何あるかとか知ってたほうが便利じゃん♪」

「わかったぜ。ところで変装とかすんのか？」

「うーん。髪だけ幻覚で色変えとくか」

というと浅葱とベルの髪色が藍色から茶色になっていった。

そして浅葱はベルに5センチほどの羽を渡した。

「ほい。これを媒介にベルの髪色は幻覚かけるから常に持っててね。
離れても
幻覚は持続するけど私が疲れるから」

「わかったぜ♪」

「さ、行こうか。ついでに住むとこも一応私が探しとくね」

「ん。じゃあ午後5時にここ集合な」

今は午前10時ぐらいだ。

「ん。わかった♪」

といって浅葱とベルは違う方向へ歩いていった。

標的２２　風紀委員長、来る！

浅葱はベルと別れてから沢田綱吉が通っていて、自分たちもこれから通う

並中に向かっていた。

そして今は並中の校門前に居る。

ならちゃっちゃと入れよ、と思うだろう。

だがそうはいかないのだ。

なぜならトンファーを構えている黒髪学ランの少年が目の前に立ちふさがっているのだ。

「ねえ、何黙ってるの？君は何でここにいるのか、って僕は聞いてるんだけど」

いつもなら浅葱はこんなやつがいたら戦っているだろう。

だって相手は武器構えてるし。

だが今日はそうもいかないのだ。

「だって、並森きてそうそう問題起こせないしな」

「は？何いってるの？」

「うーん。どうしよ？」

「いや、僕に聞かれても困る。ていうかいい加減にしなよ」

といって少年は襲い掛かってきた。

「咬み殺す」

といって。

それを見た浅葱は、

「あーもう、いいや。問題が何だこのヤロー♪」

考えを放棄していた。

ギンッ。

金属同士がぶつかる音がする。

浅葱は両手にエストラーネオのボスのものだった、今は浅葱のものの短刀2本を

それぞれ逆手にもってトンファーの攻撃を防御した。

そしてすかさず浅葱は回し蹴りを放つ。

それを少年は無駄のない動きで避け、トンファーの息をつかせぬ連

撃を繰り出す。

ギンッ。

ガンッ。

キンッ。

音が数分響き渡ると、いきなり音が止んだ。

少年の首すれすれには浅葱が順手に持ち替えてある短刀が、浅葱のあご下すれすれ

にはトンファーが、それぞれ停止していた。

「へー♪結構やるじゃないか♪楽しかったよ♪」

といって浅葱は短刀を両方鞘に戻す。

それを見て少年もトンファーをしまう。

「で、君の用事って何？」

「へ？」

「だから、並中に用事、あったんでしょ？」

少年は呆れた様子で聞いてくる。

「あ、忘れてた」

それを聞いて、ますます呆れた顔をする少年。

「早く言って」

「じゃあ言うね。私ともう1人を並中に入れてほしいんだ。もう1人は3年の

どっか。そして私を沢田綱吉と同じクラスに入れてほしい。もう1人は男子だよ」

「ふーん。まあいいよ。手続きしといてあげる。明日8時に職員室に行きなよ」

「おお！ありがとう♪じゃあね♪」

そういって浅葱は笑って、その場から去っていった。

並中の転入を少年に頼んだあと、浅葱はふらふら並森をさまよっていた。

「あ、そいえば名前言ってない。てかあの人の名前も知らないや。ま、いっか」

それで済ます浅葱だった。

「それより家どーしよっかなー」

そう呟きながら歩いていると浅葱は一軒の大きな屋敷を見つけた。

いかにも日本、という感じの屋敷だ。

「おー。ここならベルも喜びそうだなー。住人殺して、ま、悪くても居候でいっか♪」

といって浅葱はベルとの待ち合わせ場所に歩いていった。

午後5時、浅葱とベルの待ち合わせの場所。

浅葱はベンチで寝ていた。

「おーい。姫ー。起きろー♪」

ベルは浅葱の頬を引っ張って起こそうとしていた。

マーモンに及ばないながらもむにーっと伸びていた。

その時、浅葱の眼帯で覆われていない右目が開かれた。

「んにゃ？おふぁひょふ？ふぇる」

「おはよ♪姫♪」

そういってベルは浅葱の頬から手を離す。

「探検して何かわかった？」

「ししししっ。この町はよっぽど平和な部類だってことがわかったぜ♪」

「へー。私は転入手続きはもちろんのこと家も見つけたぜ♪」

「お、さっすが姫。早速行こうぜ♪」

「うん。住人殺して住もう♪悪くても居候で。でも先に何か食べてから行こうよ」

「ししっ。じゃそうすっか♪」

そういって2人はレストランへと歩いていった。

２人は存分に腹を満たしたあとに、浅葱が見つけた屋敷へと歩いていた。

食事で雑談したりして時間を食ったのでもう１１時くらいだろうか。

完全に真っ暗だ。

「じゃーん♪ここだよ♪」

「おー、すげーじゃん♪アジトには及ばねえけど」

「そりゃあね。アジトよりでかい屋敷は一般人は持ってないと思うよ。さて、と」

浅葱はすー、と息を吸う。

そして屋敷の門についている玄関を蹴り破る。

「おっじゃましまーす♪家をもらいに来ましたー♪」

と、大声で言い放った。

警察を呼ばれたらどうするのだろう。

しかしその声に対してでてきたのは1人の少年だった。

「誰？」

和服を着てトンファーを構えている。

いかにも不機嫌で、今にも襲い掛かってきそうだ。

「あ、昼間戦った人だ」

またしても浅葱のシリアス雰囲気ぶち壊しスキルが発動した。

標的２３　居候、来る！

浅葱のシリアス雰囲気ぶち壊しスキルによりあたりは沈黙に包まれる。

それを破ったのは浅葱だった。

「ねえ、君は１人でここに住んでるの？」

「そうだけど？」

「ふーん。ならさ、私たちの合わせ技を受けても立っていられたらあなたの
勝ちで私たちは別の家を探す。でも受けて膝をついたりとにかく立って
いられなかったら私たちの勝ちで居候させてよ」

「ちょっ、姫?なんで居候?家明け渡してもらえばいいじゃん」

ベルが聞いてくる。

「ふっ、よく考えたまえよベル君。私たちは家事ができないじゃないか。私が

鶏のから揚げと卵焼き作れるだけで。けどそれが毎日じゃあベルは飽きるっしょ？

けれど1人暮らしをしているその人なら家事ができるはず！だから居候と称して

家事をやってもらえばいいのさ♪」

「おお♪流石姫♪」

それを聞いていた少年はと言うと、もう切れていた。

「わかったよ。僕が負けたら居候も許してあげる。家事も一応やってあげるよ。

けどそっちのいいだしっぺの南国果実は風紀委員で働いてもらうよ」

ブチ。

「今忌まわしき果実の名が聞こえた気がするんですけど？」

「聞こえなかったの？南国果実の君には風紀委員で働いてもらうといったのさ。

もう片方は明らかに書類仕事できなさそうだからね」

「王子は書類仕事もできるし」

「でも嫌いだろう？」

「ぐっ（なぜわかるし・・・）」

その隣で浅葱はぶつぶつと何か呟いていた。

「私はナッポーじゃないもん。だって後ろ髪は長いし。第一ナッポ

ーっていうのはムク兄の固有名詞だ。そうだよ。だから私はナッポーじゃない。ナッポーじゃない。ナッポーじゃない。ナッポーじゃない。Ｎｏｎ　ａｎａｎａｓ．Ｎｏｔ　ｐｉｎｅａｐｐｌｅ．不菠？。不菠蘿。Ｎｏ　ｌａ　ｐｉ？ａ．Δεν　αναν？．Ｈｅ　ａｎａｎａｃａ．ナッポーじゃない。Ｎｏｎ　ａｎａｎａｓ．Ｎｏｔ　ｐｉｎｅａｐｐｌｅ．不菠？。不菠蘿。Ｎｏ　ｌａ　ｐｉ？ａ．Δεν　αναν？．Ｈｅ　ａｎａｎａｃａ．よし！私はナッポーじゃない！」

途中異国語が何個も飛び出していたが気にしていたら負けなのだ。

「さあ！ベル！私も風紀委員だとか訳わかんないのは気にしないどくから

さっさと私を南国果実よばわりしたこいつを這い蹲らせよう♪」

「いや、そこは気にしたほうがいいと思うぜ・・・」

「いいんだよ、こいつに勝てれば♪」

「ま、姫がいーならいーけど♪」

その言葉を皮切りに三人は戦闘体勢に入る。

少年はトンファーを構え、ベルはナイフを手に持ち、浅葱は大鎌を創り出し、手に持つ。

そして少年が飛び出してくる。

そして浅葱が大鎌の柄尻を地面に叩きつける。

それを合図にベルがナイフを宙に放る。

「Ouverture e la Sinfonia della caccia alle teste Ripper 首狩りと

切り裂きの交響曲序曲」

浅葱が言い、

「「”Ｇｌｏｂｅ－ｔｒｏｔｔｅｒ　ｃａｃｃｉａｔｏｒｉ　ｄｉ　ｔｅｓｔｅ　ｃｏｌｔｅｌｌｏ”　世界を駆け巡る首狩りナイフ」」

次に２人が同時に言うと同時にそこら中にベルのナイフが浮かび、少年は動きを止めた。

そして少年の首めがけて不規則に大量のナイフが襲い掛かる。

それを避けるために少年は膝をついて頭を下げる。

するとその頭すれすれにナイフが通る。

パン。

そこで手を打ち付けた音が鳴る。

「はい、私たちの勝ち～。こっちの勝利条件は相手をたった状態じゃなくさせる

ことだったからね♪」

「姫、いいのか?怒ってたのに・・・?」

「今回の目的はあくまでも住むとこを手に入れることだからね。本質を見失っちゃ

駄目、って昔ムク兄に言われてたしね♪」

「ふーん」

といってベルはナイフを回収する。

回収し終えたところで浅葱の大鎌は霧散する。

「さ、てと。じゃあ君の家に居候させてもらうからね」

「わかったよ」

そして浅葱とベルは住む場所を手に入れたのだった。

この後は浅葱とベルそれぞれに客間へ案内してもらい、合鍵をもらって、

自己紹介や転入手続きとかをやっちゃおう、ということで居間に行った。

浅黄は隣に座るベルにしか聞こえない声で連絡する。

「私たちは13、14才設定で兄妹設定だから。ベルの偽名は白石(しらいし)鈴(すず)、

私の偽名は白石浅黄(しらいしあさぎ)だから。私の場合は漢字変えただけだけど多分大丈夫」

「とりあえず自己紹介しようか」

と浅葱は言う。

「私の名前は白石浅黄（しらいしあさぎ）、こっちが白石鈴（しらいしすず）って名前で私の一個上の兄だよ♪よろしくに」

「よろしく♪」

「さ、私たちは自己紹介したよ。君の名前は？」

「雲雀恭弥」

「ふーん。雲雀ね。ししっ」

「よし、じゃあ自己紹介は終了、ということで転入手続きありがとう♪

そんでもってもう寝ていい？」

浅葱はあくびしながら問う。

「いいよ。これが合鍵だから」

といって雲雀は鍵を2つ差し出す。

「ん、ありがと。恭弥♪そしておやすみ♪2人とも♪」

「ん、おやすみ♪姫」

ベルは妹設定でも姫と呼ぶらしい。

そして三人は各自の部屋へと戻っていった。

標的２４　転入、来る！

翌朝、浅葱は相変わらず寝坊まっしぐらに、というかこの時間なら熟睡は普通である。

そう、今は午前５時である。

その熟睡している浅葱に１つの影が落ちる。

「起きなよ」

1つの声が落ちるがそんなもので起きる浅葱ではない。

ちなみに寝ているときであろうと幻覚で髪の色は変えてある。

「起きなってば」

「ＺＺＺ」

それでも熟睡する浅葱。

「僕が起きなっていってるのに起きないとはね。咬み殺す」

といって影こと雲雀はトンファーを浅葱に振り下ろす。

ガバッ。

浅葱は殺気を察知して反射で避ける。

「むー？もう朝？」

浅葱はまだ眠いのか目をこすっている。

眼帯は寝ているときもはずしていない。

おしゃぶりも肌身離さずだが見えないようにポッケに入れている。

そして浅葱は時計を見る。

そこに示されていた時刻は5時。

「あれ？時計壊れた？」

「あってるよ」

「じゃあ何で起こしたんでございましょうか？」

「はあ、忘れたの？昨日の賭けで君たちが勝ったらここに居候も許すけど君に

風紀委員になってもらうって」

「風紀委員ってのと5時に何の関係があるのさ？」

「風紀委員は並中と並盛の風紀を守るのが仕事だよ。だから風紀委員は5時登校なのさ」

「へー、なるほど。ま、いーや」

「納得したならちゃっちゃと制服着て。風紀委員の学ランとどっちがいい？」

そういって差し出してきたのは風紀委員用長学ランと黒いズボン。

浅黄がこんな長さのズボンをはいたらぶかぶか間違いなしである。

「制服」

「なら最低でも腕章と学ランの上だけは着て」

と言って雲雀は制服一式を差し出してくる。

「ん」

浅葱がそれを受け取ると雲雀は部屋から出て行く。

今の浅葱の格好は並中の普通の女子の制服の上から学ランの上着を前を開けて

着て、左袖に風紀委員の腕章をつけている。

短剣は学ランの影になるように装備して、おしゃぶりは制服の下になるように

首にかけている。

そして雲雀も気にしていないし誰も覚えていないかもしれないが浅葱は

アルコバレーノの呪いのせいで１０才で成長が止まっている。

より詳しく言うと今現在浅葱の身長は１３０センチなのだ。

つまり学ランはもちろんのこと制服すらだぼだぼだ。

学ランなんて床についている。

「むー。学ランの上着は短剣を隠すのにはちょうどいいけど、だぼだぼ過ぎで動きずらい」

と言って浅葱は部屋の外でまっているであろう雲雀の元へ向かう。

「恭弥ー。学ランだぼだぼすぎー」

「ああ、仕方ないね」

と言って雲雀は学ラン、制服保管庫へと歩いていく。

（本当この人は絶対一般人じゃないけど何者なんだろ？）

「これが一番短いよ」

と言って差し出してきたのは雲雀が来ているものと同じ大きさのもの。

他のものに比べては裾は短いが袖が長い。

「ん。袖が長いのはいーや。じゃあこれで」

「じゃあ並中に行こうか」

雲雀は外にでるとバイクにまたがっていた。

「あれ？日本って１８才以下はバイク駄目なんじゃなかったっけ？」

「早く乗りなよ。鈴には朝食と書置きと制服もちゃんと残しておいたから」

「おお。それはありがと♪あれ？でも私の朝食は？」

「君が寝坊するのが駄目なんだよ。明日からは４時に起きなよ」

「ええー」

「だったら朝食抜きだよ」

「わかった。でも今日の昼食はあるよね・・・？」

浅葱は不機嫌丸出しの顔だが頷いた。

「さあね」

「じゃないと書類仕事とか嘘の情報書くぞ♪」

「浅黄って居候してるって自覚あるの？」

「んー。あるけど賭けに勝って得たものだし？家事もしてくれるって言ってたじゃん♪」

「仕方ないね」

そうこうしているうちに並中についた浅葱は恭弥に風紀委員の仕事を説明され、

早速書類仕事を8時までやらされた。

ちなみにその時風紀副委員長とかいう地位の草壁という人に「すごいです！

書類がどんどん減っていく！」とキラキラした目で見られた。

あんな厳つい顔した人が目キラキラとかレヴィには及ばないけどキモかった、

と浅葱は思う。

その証拠にそれを見たとき反射で一発殴ってしまった。

そして現在は沢田綱吉がいるという２Ａの前廊下で待っている。

担任に呼ばれたら入っていき自己紹介をするらしい。

職員や通りかかる生徒は私を見るとぱっ、と表情が明るくなって「可愛い。

風紀委員ごっこかな?怖いものしらずなんだな」とかぼそっ、と呟くけど

なぜごっこなのだ?そんなに私はちっちゃいか!

と考えていると浅葱は段々イライラしてきた。

「あ、口調は敬語でいいよね?それにもう浅葱じゃなくて浅黄なんだ。うん」

と浅黄が呟くと担任に呼ばれた。

ちなみにこの担任には最初「今日来るっていう白石浅黄さん知らないかな？」と

子供を相手にするように話しかけられたので一発殴ってやった。

すると一度退学だーとか騒がれもしたけど、本物の風紀委員だと知られると

それもすぐに解決した。

そんなに怖いのか、風紀委員が・・・？

「白石ちゃ、じゃなくて白石さん、入って来い」

ガララ。

とドアを開けて浅黄が入っていくとクラスの方々が固まった。

風紀委員という恐怖でなのか、あまりの小ささにか。

そして浅黄は黒板のチョークを置くところに一跳びで乗り、黒板に

［白石浅黄（しらいしあさぎ）］と書いて床に降りる。

「白石浅黄と言います。イタリア人と日本人のハーフで今までイタリアに
いたのですが日本に来ました。訳は家庭の事情というやつです。これから
よろしくお願いします。３Ａの転入生白石鈴は私の兄です。あ、あと私はチビじゃ
ありません。周りの方が大きいだけです。私が１４才で鈴は１５才です。
そして私は風紀委員です。」

と、浅黄は嘘だらけの挨拶をした。

それを聞いたクラスの皆と言えば、

「「「「「ええーーーー！」」」」」

と驚愕に染まっていた。

標的25　お弁当、来る！

浅黄の挨拶が終わったあと、浅黄は沢田綱吉の隣の席だと言われたのでそこに座った。

そして一時間目が終わり、休み時間に入ると、この時期に珍しいとしてたくさんの

人が浅黄の周りに集まった。

「私笹川京子っていうの、よろしくね？」

「私は黒川花よ」

「笹川京子に黒川花ですね。よろしくお願いします」

と言って浅黄は１００％営業スマイルを浮かべる。

「わっ、ワタクシは佐川馬羅（さかわから）と申すものですの。よ、よろしく

お願いいたし、ます？」

と言って茶髪に染めたのであろうことがわかる、ところどころに黒髪が

残っていて、カールがかかってくるくるの髪を鎖骨あたりまで伸ばして

いる女子が来た。

身長は１６０センチぐらいだろう。

「はい、よろしくお願いします。佐川馬羅」

それに浅黄は２００％営業スマイルを浮かべる。

そのときの浅黄の本心は、

（うわー、優柔不断来たー。つーかカールに染めた髪に優柔不断って似合わ

ないだろ。しかも何か顔がウザそうだし。どっか言ってくんないかなー。

私は沢田綱吉に会いにきたんだけど。ってか何で髪染めてるのに恭弥に

咬み殺されてないの？）

だった。

そして浅黄は隣の席の沢田綱吉に顔を向ける。

沢田綱吉の周りには天然そうなやつといかにも不良なやつがいた。

「これからよろしくお願いします」

と話しかけてみると沢田綱吉はこちらを向いた。

「あっ、こちらこそよろしくお願いします。俺の名前は沢田綱吉で

す。こっちが

友達の山本武と獄寺隼人、です」

「よろしくなっ」

「ケッ」

「よろしくお願いします」

と言ってまた浅黄は営業スマイル１００％を浮かべる。

（沢田綱吉、案外普通みたいだね。まあ、これから観察していけばいいかな）

とか思っていると予鈴が鳴ったので皆席についた。

そして四時間目が終わりとうとう昼休みとなった。

浅黄と言えば、転入初日にもかかわらず熟睡していた。

そして昼休みの鐘が鳴ると、沢田綱吉に起こされたのだった。

「白石さん、起きた?」

「ふわーあ。はい。起きました。起こしていただきありがとうございます」

「え、と。これから俺たち昼食に食べるんだけど一緒に食べる？」

浅黄が顔を上げると沢田綱吉と山本武、獄寺隼人がいた。

「それでは御一緒させてもらいます。あなたたちはお弁当ですか？」

「いや、俺は弁当だけど山本と獄寺君は購買だよ。白石さんは？」

「私はお弁当です。今から取りに行きます」

「取りに行く？鞄の中じゃないの？」

「鞄の中なんて何も入ってませんよ。形だけ持ってきているだけです。一緒に

来ますか？」

「じゃあ購買で買ってから一緒に行こっか」

「わかりました」

購買で山本武と獄寺隼人がパンを買ったあと。

「じゃあ白石さんの弁当を取りに行こうか。どこに取りに行くの？」

「ついてきたらわかりますよ」

といって浅黄は歩き始めた。

応接室へと向かって。

そして今は応接室の扉の前。

「あ、あれ？ここって応接室？ああ、白石さんは風紀委員だったもんね・・・？」

そして浅黄は躊躇なく扉を開ける。

ガララララッ。

「ちーす。みかわやでーす。お弁当徴収に来ましたー♪」

（えええええー!?サ○エさん!?しかもお弁当徴収!?応接室にいるのは、雲雀さん!?）

「なんだい。そうぞうしいね。しかも群れてるし。咬み殺されたいの？」

「えー。ツッコミなし？つまんないー。恭弥のバーカ。もうアヒルって呼んでやる。アヒルのバーカ、バーカ。サ○エさんも知らないのかよー」

見事な棒読みで浅黄は言う。

（てゅーか白石さん口調変わってるー！？）

「そんなに咬み殺されたいの？」

ガタッ。

雲雀は書類仕事をやっていた手を止め、席を立ってトンファーを構える。

「違う違う。まあ戦いは大歓迎だけど今はお腹減ってるんだよ。誰かさんの

せいで・・・。つーわけでお弁当ちょーだい♪」

笑顔の浅黄。

けど目が笑ってない。

「はあ。わかったよ。だからもう群れないでよ」

そう言って雲雀は浅黄に弁当を投げる。

「おっと、サンキュー♪じゃーに」

と言って浅黄は応接室をでて、扉を閉める。

その手に弁当を持って。

「さあ、昼食にしましょう?沢田綱吉」

浅黄の口調は元に戻っていた。

「あ、うん。じゃあ屋上に行こうか」

ツナは何とか回復して話す。

「さあ、待ちに待った昼食です」

と言って浅黄は弁当の包みを開けていく。

そして開けて、食べる。

その弁当はいたって平均的なものだった。

まずくもなく、中の上くらいであろう味と見た目。

「ん。結構おいしいです」

もぐもぐ、と浅黄は黙々と食べ進める。

そこに獄寺が口を挟む。

「それってまさか雲雀が作ったとかじゃねえだろうな・・・？」

「そうですけど？」

「んなーーーー！あの雲雀さんが！？何がどーなってんのー！」

「うるさいですよ。食事中は静かにしなさい」

と言って浅黄は箸をツナに向ける。

「ははっ、注意されてんのな、ツナ」

「でも本当なんですかね？あの雲雀ですよ」

と獄寺はツナに耳打ちする。

「うん、あの雲雀さんが、本当に「信じられねーぞ」リボーン！」

ツナの言葉をさえぎって現れた赤ん坊の胸には黄色のおしゃぶりがついていた。

（彼も、私やマーモンと同じアルコバレーノ、リボーン・・・）

「テメエ等は怪しいことだらけだぞ？それに雲雀は1人暮らしだから料理は
できるとしてもそれを人にあげるなんて信じられねーぞ」

「テメエ等？」

ツナは疑問に思ったことを聞く。

「よっ、姫♪」

屋上の入り口から現れたのは茶髪の王冠をつけている３Ａの転入生、白石鈴

ことベルだった。

標的２６　ちょっとした危機、来る！

「ん、鈴ひゃないか。昨日ぶりだね♪一応おっはー♪」

浅黄は食べながら話す。

「ん、おはよ♪」

もう正午も過ぎているにもかかわらずおはよう、と言う。

「えと。あなたは誰なんですか？」

「俺はそこの白石浅黄の兄の白石鈴だぜ♪」

「えー！白石さんのお兄さん！？」

「なぜそこまで驚く？」

浅黄は聞く。

「だって白石さんのお兄さんだから風紀委員かと思ったけど普通の制服だから

違うんだろうし、それに身長差が「ああ？私がチビだと？」な、何でも

ありません！」

浅黄の口調がまた崩れる。

「あーあ、また口調が崩れたじゃないですか。ま、もういいんですけど」

そう言った浅黄はいつの間にか弁当を食べ終えて、片付け終えていた。

「さて、と。とりあえずなぜ赤ん坊がこんなところにいるのか教えていただいても？あと自己紹介も折角だからしてもらおうか？」

浅葱は何とか敬語に戻し言う。

「俺のこと知ってるだろ？最初俺のことを見たとき驚いていた。それに

おしゃぶりを見て、さらに驚いていただろ？隠そうとしても無駄だぞ」

それを聞いて浅葱はにっこり笑う。

「それが何だっていうんです？中学に赤ん坊がいたから驚いた、黄色っていう

珍しい色のおしゃぶりだから驚いた、そうはならないんですか？」

「言い訳にしか聞こえねーな、それに」

そこでリボーンは言葉を切る。

そして跳躍して浅葱の目の前に来、浅黄が隠していた鎖の巻かれた漆黒の

おしゃぶりを引っ張りだした。

「げ」

浅黄は焦った顔をする。

そして鈴に助けて、という視線を向けるが、鈴もいい案がないのか視線をそらしている。

「じゃあこれはどういうことだ？」

浅黄のおしゃぶりを指差して言うリボーン。

「・・・。これは、あれですよ、あれ」

「あれってなんだ」

「あれは、え、と。・・・。・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・。」

「あー、はい。もうわかりましたよ。言えばいいんでしょう?言えば。私は

アルコバレーノですよ。それが何か？」

（開き直ったーーーー！？）

ツナは本日何度目かわからない浅黄へのツッコミを心の中でしていた。

「てめえが新しく入ったっていうやつだったのか・・・。この鎖は何だ？それに

そんなにちっちゃいのは呪いのせいか？」

プツ。

「次チビっていったら首狩るから♪あと呪いのことは君の推測どおりさ。少し
変わってしまったんだ。そして鎖については、呪いを解く努力もしてない
やつには教えたくもない。それにそんなやつと関わりも持ちたくないね」

「そうか」

「リボーン？呪いって何のこと？」

それに対してリボーンは帽子の鍔を下げる。

「何でもねーぞ。じゃあ俺は帰るぞ」

（まだ聞きたいことはたくさんあったが答えてくれそうにもねーな・・・）

そしてリボーンは去っていった。

「全く、こんなに早くばれるとは思ってもみませんでした」

と言って浅黄はおしゃぶりを見えないようにしまう。

と、そこで予鈴が鳴る。

「さあ、早く教室に戻りましょう。でないと先生の長ったらしい説教を
聞くはめになるかもです。どうせ寝ますけど」

（（（（それも十分説教受ける行為だよ！？））））

このとき４人の心が一致した。

この後は教室に戻り、浅黄は結局全ての授業で寝て、教師には風紀委員なので

怖がられ注意もされずにいたのだった。

標的27　マフィアランド、来る！

今浅葱とベルは並盛に来て一週間ほど経っていた。

そして今日は金曜日で学校から帰り、ベルの部屋で雑談をしているのだった。

「ふぁーあ。疲れたー。学校って案外疲れるもんなんだねー」

「ああ、姫って学校行ったことないんだっけ？」

「うん♪そうだよ♪だからそれなりに楽しいよ。沢田綱吉はよくわかんないけど」

「確かにな。でもあいつよりボスのほうが１０代目には相応しいのは確かだろ。

ししししっ♪」

「そこは同意♪あ、そいえばマフィアランドのチケットゲットしたんだけどさ、

スクアーロにも旅行という名目で来ているわけだし、折角だし行かない？」

「いいぜ♪」

「よし♪んじゃ明日朝一だから。あと正体ばれて騒がれてリボーンの耳にでも

入ったらやだから髪はこのままで行くからね♪」

「オッケー♪」

「んじゃまた明日ね♪おやすみ♪」

「ん。おやすみ♪」

翌朝。

「さあ、行こうベル♪恭弥には許可もう取ってきたよ♪」

「おう♪」

そう言って2人は港へと進んでいった。

2人の服装は私服、つまりイタリアから日本へ来たときと同じものだった。

今はマフィアランド行きの船の中。

「ベル～。ご飯食べに行こ♪」

「ししし♪ＶＡＲＩＡのとどっちがうまいかな♪」

「ルッスに料理で勝てる人なんていると思う？」

「んー。思わねえ」

「だよね。私も思わない。っと、そうこう言っているうちに食堂ついたね♪白石です」

「白石様ですね。あちらになります」

「ん。ありがと♪」

席につくと色とりどりのたくさんの料理が並んでいた。

「おー♪おいしそ♪いただきます♪」

「ししっ。いただきます♪」

「ごちそうさまでした♪あー、おいしかったね♪やっぱルッスの料理には及ばなかったけど」

「ごちそーさん♪だな♪あいつオカマのくせに家事うまいんだよな♪ししししっ♪」

という会話をしながら浅葱とベルは食堂を出て行き、部屋に戻る。

それから1時間ほど経ったころ、マフィアランドに到着した。

そして浅葱とベルは入島手続きも無事済ませ、遊びに来ていた。

「ベル！かんらんしゃ、っての乗ってみたい♪」

浅葱は無駄にキラキラした瞳でベルに言う。

「じゃあ行くか♪」

「うん♪」

と言って浅葱とベルは観覧車に乗った。

「おおおおー♪すごい。かんらんしゃってこんなんだったんだぁ♪」

浅葱はその１０才の見た目と合わさって子供にしか見えない。

「よかったな、姫♪」

「うん♪楽しい♪あ！」

「どした？」

「あれ、沢田綱吉じゃない？」

と言って浅葱が指差す方向には確かにツナとリボーン、それに青色のおしゃぶりを

持つ赤ん坊がいた。

「お、ほんとだ。どーする?行ってみる?」

「んー。あの赤ん坊はアルコバレーノ、コロネロ、かな。沢田綱吉は会っておこうか。

信用とか関わり持っといたらなんかわかるかもだし」

「そだな」

浅葱とベルは観覧車が地面まで着いて下りると一直線にツナたちが

いる

裏マフィアランドへと進んだ。

沢田綱吉がいたところに近づくと悲鳴やら怒鳴り声が聞こえてきた。

この悲鳴はおそらく沢田綱吉のものだろう。

「とりあえず話しかけてみよっか」

と浅黄が言うと鈴も無言で頷く。

浅黄が沢田綱吉たちのところへ近寄る。

すると観覧車の上で見たときより1人いかにもうるさそうなのが増えていた。

会話から推測するにロンシャンという名前で彼の彼女がカルカッサファミリーと

いうののスパイで騙されたらしい。

どうでもいいことだが。

そして浅黄は話しかける。

「何をやってるんです？」

その声に一番に反応したのはやはりリボーンだった。

「お、白石じゃねえか」

「誰だ、コラ！」

「白石さん？」

浅黄はコロネロの質問に答えるべく口を開く。

「沢田綱吉のクラスメイトの白石浅黄といいます。あちらは私の兄、白石鈴です」

「おい、重要なこと言ってねえだろ」

「はて、何のことでしょう？」

「知らないフリするな。こいつも俺たちと同じアルコバレーノだぞ」

「何だと！じゃあ何で赤ん坊の姿じゃない？何よりおしゃぶりが光らねえぞ！」

「姿に関しては頭に情報が４年前ぐらいに入ってきたはずだぞ。そんなことも
忘れたのか？」

「忘れてねえぞ。ちょっとド忘れしただけだぜ！コラ！じゃあおしゃぶりが
光らないことについてはどう説明するつもりだ！アルコバレーノ同士が
近づくと光るはずだぜ！」
そこに浅黄が口を挟む。

「それはこの鎖のおかげですよ」

と言って浅黄は鎖の巻きついた漆黒のおしゃぶりを見せる。

「何だ？コラ！」

「くふふ。呪いを解く努力もしてない人に教える義理なんてありませんよ」

「む、どこかバイパーに似てるぜ！コラ！」

「ああ、そうだな」

「くふふ。それで今は沢田綱吉に何をしていたのですか？（バイパー、っていうと

マーモンのことか）」

「ツナを鍛えてたんだぞ」

ドオンッ！

リボーンが答えたところで爆音が響く。

標的２８　アルコバレーノ４人、来る！

「カルカッサファミリーにマフィアランドの居場所を察知されたな」

リボーンがそういうと島内放送がかかった。

『敵襲！敵襲！』

『みなさん避難所へ避難してください！』

『業務連絡ー。迎撃体制にシフトー。』

うるさいサイレンもともに鳴り響く。

「ええーーーー！」

そこでツナが大声を上げる。

サイレンに負けず劣らずうるさかった。

「なんでマフィアがマフィアランドにせめてくるんだよ！マフィアが金を出し
合って作ったんだろ！？」

「全部のマフィアじゃねーんだ。ここを作ったのは麻薬に手を出さない
いいもんのマフィアだ。それを面白く思ってないマフィアもたくさんいる
んだ。カルカッサファミリーもその１つだぞ」

「マフィアにいいも悪いもねーだろ！」

確かに、と浅黄は思う。

だって浅黄は今もマフィアなんて全て壊れてしまえばいい、って思っているのだから。

ボンゴレも壊れてしまえばいいと思っている。

ＶＡＲＩＡだって壊れてしまえばいいと思っていた。

最初はここじゃないとこでマフィアつぶししても強いやつと戦えないし、

復讐者も来る、って自分に言い聞かせて入っていた。

でも、いつの間にかＶＡＲＩＡの幹部の皆（レヴィ除く）が大事な存在になっていた。

骸にはやっぱり届かなくても、犬や千種と同じぐらいには。

（くふふふ。まあＶＡＲＩＡの幹部にはエストラーネオの恩もあるし、

何より一緒にいたら楽しいんだよね♪うーむ。大事なものが増えすぎるってのは困りものだけど、まあいっか♪）

「ってことはここで抗争がおっぱじまんのかよ！」

「ってより戦争だな」

「見ろ。おしゃぶりが光ってる。知り合いだぜ」

確かにコロネロとリボーンのおしゃぶりが光っていた。

浅黄のおしゃぶりは鎖で封じているので光っていない。

「ああ。こんなくだらねーことすんのは、スカルしかいねーな」

そう話している間にも爆発の音が響く。

「これは戦争だぞ。オレ達島にいるマフィアとカルカッサファミリーとのな」

「あんらー！やばいよ聞いてないよ戦争なんて！」

あー、やっぱ見た目からしてうざそうだったやつは実際うるさく、うざかった。

「うそだろ～！？」

「しかもまずいぜ、コラ！今日島の警備をするはずのファミリーがボスの

命日で本土に帰ってる・・・。この島に戦える兵隊はほとんどいない」

「あれー！それやばいよね！負けちゃうよね！」

「どーすんだよー！」

「もちろんオレがいるかぎり奴らの好きにはさせん！だが、お昼寝の時間だぜ、

コラ・・・。ＺＺＺ」

「うおい！」

「コロネロはほっとけ。ママン達が心配だ。地下鉄でマフィアランドに
戻るぞ・・・よ」

「ぞよ？」

「ＺＺＺ」

「お前もかー！」

「あーもーリボーンのやつーっ！こんな大変なときに寝やがって！起こしたら殺されるから起こせねーし。ってまさかアルコバレーノの白石さんも！？」

「私をあんなやつらと一緒にしないでくれます？」

一緒にされかけたことで不機嫌な浅黄だった。

あの後取りあえずマフィアランドに行こう、ということで地下鉄を４人で抜け、

マフィア城につくと誰が大将をやるかでもめていた。

「ねーベルー。暇だからさ、もう私たちで敵全員殺しちゃわない？敵はなんか

大群で集まってきてるから合わせ技の第1番使えば一発だよ♪」

「でも正体ばれちゃわねえ?」

「ああ、そっか。じゃあいいや。沢田綱吉がどうするか見てようぜい♪」

「ししししっ♪そうしよーぜ♪」

と言って浅黄と鈴は見晴らしのいいところで見ていることにした。

あの後はツナが大将になったけど結局何も解決せず、実質リボーンとコロネロが

解決したのだった。

帰りの船の中。

「ねー、ベル。沢田綱吉ってほんとに１０代目候補？全然そんなのに見えないんだけど」

「そーらしいぜ。とにかくもうちょい見てることにしよーぜ」

「そだね♪」

ということで浅葱とベルのツナ観察はまだ続くことになったのだった。

標的２９　武器改悪改造者、来る！（前書き）

今回はすごい長いです。
それでも読んでいただけたらうれしいです♪

標的２９　武器改悪改造者、来る！

「ふあーあ、めんどくさい・・・」

浅黄は欠伸をしながら愚痴をこぼす。

今は五時間目と六時間目の間の時間である。

「どーしたんだよ、姫。今日は風紀委員の仕事も昼休みで終わったんだろ？」

「うん♪昨日夜の8時までたくさんやったからね♪で、今日は早く帰って
精神世界で久しぶりにアサットと遊びたかったのにさ。学校で宿題でやがって、沢田綱吉の家に行って宿題するんだよ・・・。沢田綱吉のことがわかるかもしれない、ってのはいいけど、宿題・・・めんどい・・・」

「ああ、アサットはアジトに置いてきたんだもんな。いつもの姫ならま、いっかで

済ましてんのにどしたの？」

「内容が問題なんだよ。小学校のときの夢、だってさ。小学校はおろか

学校というものを行ったのも並中が初めてだし。６つの記憶でも行った

ことなんてないし。小学校のころの年齢の夢ならマフィアを全部潰したい、

とか世界なんか壊してしまいたい、とかだもん・・・」

「・・・。あ、ムク兄っての関係ではないのか?」

「世界を壊したいのはムク兄にこれ以上酷い目にあってほしくなかった

から、マフィアを全部潰したいってのも同じ。ああ、ムク兄とずっと

一緒に楽しくいれればいい、っていうのはあるかなあ・・・？」

「そのムク兄ってよっぽど大事なんだな♪」

「うん♪大事だよ♪この世界で初めてちゃんと言葉を交わせたときは本当に

うれしかったんだ♪」

そう言って浅葱は満面の笑みを見せる。

「／／／　じゃあそれが小学校のときの夢、でいいんじゃねえの？」

「あ、確かに。うん、そうする♪ありがと、ベル♪」

「どーいたしまして♪」

「んじゃ沢田綱吉の家そのまま行くから六時間目終わったら先帰っててね♪」

「わかったぜ♪」

「じゃーに♪」

「ん。じゃーな♪」

挨拶を交わして浅黄と鈴は屋上から各自の教室へと戻る。

六時間目が終わり、下校時間。

「さあ、ちゃっちゃと行って宿題を終わらせましょう。沢田綱吉」

浅黄がツナに言う。

「う、うん。（どーしよー！京子ちゃんも同じ班になったのはうれしいけど

白石さんまで一緒になっちゃった・・・。アルコバレーノだっていうし、

どうしよう。どんな態度で接すればいいかわかんないー！）」

とツナは考えつつも家へ向かって歩く。

今浅黄はツナと京子とともに下校している。

浅黄はツナと京子の3歩ほど後ろを歩き観察していた。

（沢田綱吉は笹川京子が好きなのか・・・。いたって平凡な普通の中学生じゃん）

と浅黄が考えているうちにツナと京子の家の分かれ道に来たようで京子が

ツナと浅黄と別の道に進んだ。

そこで、浅黄は直球に聞いてみることにした。

「沢田綱吉は笹川京子が好きなのですか？」

「ブッ！ど、どどどどうしてそれを！？」

「見てればわかります。まあ誰にも言うかもしれませんが気にしないでください」

「そこは誰にも言わないじゃないの！？」

「まあ、気にしないでいきましょう。さあ、さっさと沢田綱吉の家に行って
宿題を終わらせてしまいましょう」
「う、うん」
とツナが言ったところでＵＦＯがツナにふってきた。

「ひぎゃあああああ！いでで、何なの！？誰なの！？」

「初めまして１０代目。私ボンゴレファミリー御用達、武器チューナーの

ジャンニーニと申します」

「うわっ、変なのでたーーー！」

（１０代目はボスのほうがあってそうなのに何で皆こんなのを１０代目に
したがるのか・・・？てかこいつきもい。マジ顔きもい。レヴィほど
じゃなくてもきもすぎる！）

そこまで考えたところで浅黄は自然とジャンニーニの乗っていたＵＦＯを

蹴り飛ばしていた。

「ヨヨヨヨヨヨヨョョ～！？」

とか言いながらジャンニーニは吹っ飛んでいく。

しかし途中で誰かにつかまれ止まる。

「ったく、何会ったとたんに蹴り飛ばしてんだ?白石」

リボーンだった。

リボーンはＵＦＯをつかんだままこちらにやってきて、着くとＵＦＯを離した。

「きもかったからですよ?」

浅黄は微笑みながら言う。

「んなーーー！？きもいってだけで！？」

「何か？」

「な、なんでもないです」

「私は先に行ってます。沢田綱吉の住所なら知ってるので」

と、浅黄が歩き出そうとしたらリボーンにとめられた。

「待て、なぜてめえがツナの住所を知ってんだ?」

「くふふ。恭弥が教えてくれたんですよ♪」

そう答えて浅黄はすたすたと行く。

「ったく、めんどくさいやつだなあ、リボーン」

そしてツナの家につく。

ピンポーン。

インターホンを押すとツナの母が出てくる。

「あら？ツッ君のお友達？ごめんなさいねえ。まだツッ君帰ってないのよ」

「待たせてもらってもいいですか？沢田綱吉とは宿題をやるので」

「いいわよ。さ、あがってあがって」

「ありがとうございます♪」

そう言って浅黄は笑う。

台所へと通された浅葱はとりあえず食卓テーブルについてあるいすに座った。

（沢田綱吉の母はいたって普通の人だな。てか普通に一般人じゃん。じゃあどうでもいっか）

「ツッ君が帰ってくるまでこれでも食べてまってくれる？」

と言ってだされたのは手作り手作りチョコクッキー。

「チョコクッキー・・・♪」

思わず呟いてしまうほど浅黄はチョコが大好きなのだ。

あと鶏のから揚げとコーヒー牛乳も好きだが。

（どうせルッスには及ばないだろうけど食べても、いいよね・・・）

「いただきます♪」

浅黄は一枚とって口に入れる。

そして噛むとサクッ、と音が鳴る。

それにほどよくチョコの味がする。

「うまい♪やばいこれ、ルッスのよりうまい！」

「ルッス？まあ喜んでくれたのならよかったわぁ」

「はい♪すごいおいしいです♪」

浅黄は満面の笑みで言う。

「あらあら、そんなに？うれしいわ♪なんならおみやげもいるかしら？」

「いいんですか！いります♪じゃなくてください！」

軽くというかかなりキャラ崩壊しかけてる浅黄だった。

そして今はおみやげのチョコクッキーを作ってもらっている。

当の浅黄といえば残っているクッキーを全部出してもらい、幸せそうにさくさく食べている。

そんなときツナは帰ってきた。

「ただいまー！」

「む、ひゃわだひゅなひょしがかえってひたようですね」

食べながら話す浅黄。

「ツッ君おかえりー」

「ただいま母さん、って白石さん!?」

台所へと行ったツナが見たものは見事にツナの家になじんでチョコクッキーを

おいしそうにほおばる浅黄だった。

「む、沢田綱吉。あなたの母と会い、少し見直しましたよ。ミドリムシから

ミジンコに格上げして差し上げましょう。こんなにおいしいチョコクッキーを

製造できるものの息子なのですから」

（んなーーー！白石さんってオレのことそんな風に思ってたのーーー！）

「うふふー。ありがと、ツー君とこれからも仲良くしてあげてね」

「はい。また来てもいいですか？」

「いいわよ♪次来たとき何かつくってほしいものってある？」

「チョコ関係で辛くないものがいいです」

「わかったわ♪じゃあトリュフ作るわね」

「ありがとうございます♪」

浅黄はまた満面の笑みを見せる。

（可愛い。白石さんってこんなに可愛かったんだ・・・）

ツナは心の中で呟く。

「あ、沢田綱吉。宿題の作文を取ってこなくてもいいんですか？」

「あっ、忘れてた。ありがとう、白石さん！」

「いえ」

するとツナは2階に上がっていって、何か叫びをあげていたが、関係ないだろう。

しばらくすると京子がやってきたが浅黄は関係なくさくさく食べて

いた。

さらにしばらくするとちっちゃい獄寺がやってきたが変わらず浅黄はさくさく食べていた。

そして浅黄は食べ終わり、もう帰ろうかとしたとき他の人には見えていない

だろう、多分光学迷彩を使って、ツナを殺そうとしているものを発見した。

（むー。沢田綱吉が死ぬのはうれしいけど、すると沢田奈々が悲しむ。

するとトリュフが、食べれない・・・？）

「沢田奈々手作りトリュフが食べれない、だと」

浅黄は呟く。

「そんなことさせないよ♪」

と言って浅黄はツナの真上に来ていたものを回し蹴りで吹っ飛ばす。

吹っ飛ばす方向の首が通るあたりに腕を設置し、思い切りぶつけさせて気絶させる。

そしてもう1人のほうには額あたりを殴りつけ気絶させる。

（流石に沢田奈々の家で殺すと後片付けをするであろう沢田奈々さんが大変そうだね♪）

それを見ていた獄寺が感嘆の声を上げる。

「おお！よくやった。１０代目をお守りしてくれたな」

「いえ、トリュフが食べられなくなるのが嫌なだけです」

「え？と、とりあえずありがとう」

「浅黄ちゃーん。おみやげのチョコクッキーよ♪」

「おお♪ありがとうございます♪」

浅黄はそれをもらってツナの家から帰ろうとする。

「あ、沢田綱吉、宿題についてですが私はさぼった、ということでいいです。

私は早くこのおみやげを食べたいので帰ります。ａｒｒｉｖｅｄｅｒｃｉ」

そういい残し、浅黄は去っていく。

後にはａｒｒｉｖｅｄｅｒｃｉの意味がわからないツナや山本が残された。

「え、ありべでるち？それにこの人たち何ーーー！」

「さよならって意味だぞ」

リボーンはそれに一応答えておく。

標的２９　武器改悪改造者、来る！（後書き）

感想も相変わらずまってます♪

標的３０　プール開き、来る！（前書き）

またしても長いです・・・。

標的３０　プール開き、来る！

ある金曜日、２Ａの男子メンバーは、プール掃除をしていた。

そしてその途中で先生が中2にもなって１５メートル泳げないやつは女子に

混じってバタ足だぞー、と言ったのであった。

放課後、皆が帰り支度をしているとき。

「はあ、どうせ練習したって１５メートルなんて泳げっこないよ・・・」

浅黄の隣ではツナが嘆いていた。

「沢田綱吉は泳げないんですか？」

それを言うとビクッとツナは肩を揺らす。

「うっ。な、なんで？」

「さっき『はあ、どうせ練習したって１５メートルなんて泳げっこないよ・・・』

と呟いていたので」

「白石さんは、泳げるの？」

「一応は泳げますけど、ぷーる、というものは嫌いです・・・。昔を、

思い出すので・・・」

そう。

プールを見れば浅葱は思い出す。

プールがとてもエストラーネオのころ風呂、という名の冷水溜めに似ていたから。

あの四角い形に、足がぎりぎりつくという高さ、それに何より、あの冷たさが。

浅黄はそれを思い出し、瞳に影が差す。

「白石、さん？」

その声で浅黄は現実に戻る。

「ああ、すみません。今のは忘れてください♪」

と言って浅黄は笑みを浮かべる。

「う、うん。こっちこそゴメンね・・・。（白石さん、昔何があっ

たん

だろう・・・？）」

「チャオッス♪白石」

その時リボーンが学校内だというのに現れた。

「ｃｉａｏ。リボーン、何のようですか？それにここは校内ですけど？見つかったら

どうするんです？」

「心配ねーぞ。もう教室内にはてめえらと獄寺しかいないしな」

「くふふふ。誰も心配なんてしてませんよ。ただ見つかって説教を食らうのが
嫌なだけです」

そこで獄寺が駆け寄ってくる。

「あ、リボーンさんじゃないですか。どーかしたんすか？」

「そーだな。獄寺も来るか？今週末のツナの水泳特訓」

「行きます！」

「白石も来いよ」

「ちょっ！リボーン、そんな勝手に」

ツナは先ほどの浅黄の様子を見て心配しているようだ。

「（沢田綱吉に心配されるとは・・・。なんかイラっとくるね）いいですよ。

行ってあげますよ」

「え、白石さん、大丈夫なの？」

「心配はご無用ですよ。それでは次の日曜日に」

と言って浅黄は教室から出て行く。

日曜日。

「ベルー、今から沢田綱吉たちとプール行ってくるから」

「プール？大丈夫なのか？」

ベルもエストラーネオのころのトラウマについて心配してくれているようだ。

「まあ啖呵ってほどでもないけどリボーンに言っちゃったしね。まあ何とかなるさ」

「そっか。無理せず辛くなったら帰って来いよ」

「うん♪ありがと♪いってきます。あと、恭弥には今日町の見回りしろ、って

言われてるけど言い訳お願いするね♪」

「いってらっしゃい、って面倒ごと王子に押し付けていったし・・・。

ししっ。王子も逃げよ」

と言ってベルが逃げようとすると恭弥が現れた。

「何で逃げるの？というよりも浅黄は？またサボり？」

「げ」

ベルの退路は断たれたのだった。

プールに着いて水着に着替え、プールに行くともう沢田たちは泳いでいた。

浅黄の水着は藍色で下はショートパンツ型、上はひじまで隠れ、お腹も

1センチもでていない、首に布がだぼだぼとたまっているものだった。

まるで上半身を隠すかのように。

見知らぬ女も、ウザそう、じゃなくてウザイ女こと佐川馬羅も居た。

「誰？」

するとツナたちがこちらに気づいたようでプールから上がってくる。

「白石さん、きてくれたんだ」

「うん。まあ来るって言っちゃったんでね」

「はひ？この人は誰ですか？」

「あ、ハルは知らなかったね。白石さんはオレたちのクラスメイトだよ」

「白石浅黄といいます」

「私は三浦ハルっていいます。ハルって呼んでください」

「わかりました。ハル、ですね」

「はい！」

そこに存在いらないんじゃね、こと佐川馬羅がやってくる。

「ツ、ツナ君。も、もうそろそろ、練習再開、い、いたしません？」

「あ、うん。お願いします」

と言ってウザい女とツナはプールへと戻っていった。

「じ、じゃあまずは、ここまで泳いで、く、くださる？」

そう言ったウザイ女は１０メートルの地点に立つ。

「う、うん（１０メートルなんて泳げないよ～）」

ツナは返事をするが途中でぶくぶくいっている。

（佐川馬羅はウザイだけじゃなく馬鹿なのか?泳げないのにまずここまで
来てくださる、ってマジで馬鹿か?あー、首狩りたいな♪）

そんなのが３０分続く。

すると山本が声を発した。

「佐川ー、時間だぜ。次は白石の番だな」

「ん？どういうことですか？」

「今３０分ずつ交代で教えて誰が一番教えるのうまいか競争してんだ」

「あー、なるほど」

（じゃあどうせなら完璧に泳げるようにしてあの女との格の違いを見せて

やろうかな。あの女は1センチすらも泳げる距離増やせてなかったし）

「さて、と泳ぎ方ってクロールでいいんですか？」

「いいぜ」

山本武が答える。

「あと、教えるときは何をしてもいいんですか？」

「いいぞ」

それには山本武ではなくリボーンが答える。

「ん？いつからいたんです？リボーン」

「今だぞ。お前が何をするのか見ておきたいしな」

「へえ。いいですよ。２５メートル泳げるようにしてあげますよ」

「んなーーー！無理だよ！５メートルしか泳げないのに！」

「やる前からそれでどうするんです？さ、やりますよ」

といって浅黄はプールの中にいるツナのところへ近づいていく。

「さて、と。まずは水に浮く感覚を覚えたほうがいいですよね。というわけで、

私が幻覚で浮く感覚を教えるので覚えてください」

「げ、幻覚？」

「人の五感を支配するものです。ではいきますよ。3、2、1」

パチンッ、と浅黄が指パッチンをして幻覚をかける。

浅葱はいつも幻覚や有幻覚を使うときよく大鎌を地面に叩きつけたりするが

あれは、開始の合図をわかりやすくして使いやすくしたり、柄尻で地面を割ると

いう動作を幻覚につなげることでかけやすくする効果があるだけなのだ。

なので指パッチンでも開始の合図はできるので使いやすくはなる。

指パッチンがなくても使えるのだし。

幻覚にかかったツナは今までが信じられないくらいに見事なクロールで泳いでいく。

２５メートルまで到達したら指パッチンで幻覚を解く。

「さあ、初めてまともに泳げた感想はどうですか？」

「すごい！すごいよ浅黄！泳ぐのってすごい気持ちいいんだね！」

いきなり名前で呼ばれたことに驚く浅黄。

「！？」

「あっ、すいません・・・」

「別にいいですよ。浅黄って呼んでも♪（信頼関係をきずいといても損はないよな、

多分。それにあんな笑顔で言われたら、断れないだろ・・・）」

「え、とじゃあ浅黄、オレのこともツナって呼んでよ」

「んじゃオレらのことも武とか隼人って呼べよな♪」

「はい。ツナに武に隼人ですね♪」

「ワ、ワタクシのことも馬羅って、よ、呼んでも、よくてよ」

「あなたは遠慮します」

（んなーーー！浅黄って佐川さんのことめっちゃ嫌ってるーーー！？）

（こんなウザ女たとえツナにとっての重要人物で機密とか握ってたとしても、

仮にだとしても仲良くはなりたくない！）

「んじゃあツナ、そろそろ練習を再開しましょうか」

「あ、うん。改めてよろしくお願いします」

「それでは次は幻覚を少し弱くします。それで25メートル泳いでください。

弱くなったところは自分の五感でもって補ってください。先ほどの感覚を

思い出せばできるはずです。そしてその次はまた幻覚を弱くします。

わかりましたか？」

「う、うん」

「それではいきます。3、2、1」

パチンッ。

浅黄の指パッチンが響く。

（あう、指パッチンはまっちゃった。しばらくこれでいこうかな♪）

そしてそれが何回か繰り返されたとき。

「ぷはあ、な、何とか２５メートル泳げた・・・」

パチパチパチ。

すると拍手を浅黄がする。

「おめでとうございます♪これでツナはクロールで２５メートル泳げるように
なりましたよ♪」

「えっ？どういうこと？」

「その通りの意味ですよ。今のは指パッチンしただけで幻覚は使ってません。

正真正銘ツナが自分の力で泳いだんです。自信を持っていれば泳げますよ。

背泳ぎやバタフライ、平泳ぎでも自信とクロールのときの浮く感覚を大事にしてください。そうすればできるはずですよ」

「あ、ありがとう！浅黄！」

「いえ。リボーン、私の力はどうでしたか？」

「（白石の力はバイパーと同じ幻覚か・・・。しかし白石にはまだ得体の
知れない力がある気がするな。警戒は怠らないでおくか）ああ、すげえな。

３０分でツナをあそこまで泳げるようにできるとは」

「くふふ。格の違いってやつですよ。家庭教師が教えていないってことは

リボーンでもできなかったってことですか？」

浅黄は嘲笑を浮かべる。

「ちげーぞ。全部オレが教えても生徒の成長にはならねーからな」

「負け犬の遠吠えにしか聞こえませんよ♪」

「オレなら１０分でできた」

「私は本気を出せば5分です」

「オレだって本気を出せば1分だぞ」

「なら３０秒」

「オレだって１０秒だぞ」

「馬鹿ですか？１０秒で２５メートル泳げるのはよっぽどの人だけですよ？」

「なら白石は泳げねーんだな」

「そんなことは言ってませんよ♪」

2人の後ろにはゴゴゴゴゴ、と文字が見えるようだ。

「ちょっ！2人とも喧嘩しないでよ！」

「チッ。今回は見逃してやるぞ」

「くふふふふ。それはこちらのせりふですよ。それでは私はもう帰

りますね♪

ａｒｒｉｖｅｄｅｒｃｉ」

そう言って浅黄はプールから去って行った。

この後どうなったかといえば、プールの授業ではツナが練習したクロールではなく

平泳ぎだったという悲劇があったという。

しかしツナは浅黄の助言を覚えていて、何とか１５メートル泳ぎきったそうだ。

標的３１　夏祭り、来る！

今日は並盛が普段より一層にぎやかになる夏祭り兼花火大会の日だ。

そして浅葱といえば。

「おおー♪やっぱルッスはすごいなー、オカマなのに」

ルッスに浴衣を作ってもらって、送ってもらい、着ていた。

サイズは１０才から微動だにしていないので大丈夫だ。

「姫はやっぱ何着ても可愛いな♪ししっ♪」

「くふふ♪ありがと、ベル♪」

浅葱の浴衣は、これまた藍色を基調に、薄ピンクの蓮の花柄で、袖はこれまた

ぶかぶか、丈は膝ぐらいで、足には二本足の下駄をはいている。

少しでも背を高く見せたいのだろう。

帯は逆の薄ピンクを基調にして、背中に大きなリボンとなっている。

そして眼帯は変わらず、しかし首には季節でもないのにマフラーを巻き、素肌が

見えないようにしていた。

「さて、と。ベル、私は夏祭り行ってくるね。風紀委員としてだけど」

浅葱の左腕には風紀の腕章が確かについていた。

「ししっ♪楽しんでこいよ♪」

「ゴメンね。ベルにスクアーロからの報告、絶対長そうなのに、任せちゃって」

「いーんだよ。祭りいったことないんだろ？ししっ♪」

「ありがと♪んじゃあおみやげ一杯持ってくるよ♪」

「ああ。楽しみにしてるぜ♪」

「うん♪いってきます♪」

「いってらー♪ししっ♪」

その言葉を背後に浅葱は雲雀とともに夏祭り会場へと行った。

「恭弥、恭弥！あれは何なの？」

「浅黄って仕事で来てるってことわかってる？」

「だから5万だってちゃんと回収してるじゃん！で、射的って何？」

「はあ、仕方ないね。あの銃で景品を倒すんだよ。倒したやつはもらえるんだよ」

「おお♪よし、これもベルのお土産にする！ちょっとまってて♪」

と言った浅黄の両手にはたくさんのたこ焼きやら何やらが持たれている。

さらには頭にまでバランスよく乗っけている。

「おじさん。一回やらせてください」

「あいよ」

と言っておじさんは笑って銃の弾を差し出してくる。

「さて、と」

浅黄は片手に銃を持って狙いを定める。

「とう♪」

の掛け声で弾が発射される。

すると一気に半数近くが倒れた。

おじさんはあんぐり口を開けていた。

「さ、早くつめてください」

「お、おう」

おじさんは目が虚ろになっていたが浅黄には関係ないだろう。

浅黄は差し出された袋を持って雲雀のもとへと戻る。

「じゃーん♪」

「ワォ。すごいね、じゃあ次行くよ」

「うん♪次は、あのチョコバナナ屋かな？」

「5万」

雲雀が屋台をやっているものに言う。

「雲雀さんー！？てか浅黄何その荷物ー！？」

「うん?鈴へのお土産ですよ」

「どんだけ・・・」

「ところで早く5万出してください。じゃないとああなりますよ♪」

そう言って浅黄が指差した方向には風紀委員が屋台を壊している光景があった。

「本当に壊してるー！じゃ、じゃあはい。５万、です」

「ん、よし。次行こう、恭弥♪」

「わかってるよ」

そのやり取りを交わしたあと、浅黄と雲雀は去って行った。

「ふわーあ。やっと集金大体終わったー♪ん？あの神社にたくさんいるの

風紀乱してんじゃん♪」

「そうだね」

そう言うとともに雲雀と浅黄は走りだす。

もちろん浅黄は荷物を全てバランスよく持っている。

神社の階段を上り終えると同時に雲雀は近くにいた不良をトンファーで殴り飛ばす。

「うれしくて身震いするよ、うまそうな群れを見つけたと思ったら、追跡中の

引ったくり犯を大量捕獲」

「ヒバリさん！！！」

「私もいますよ♪」

その声とともに現れたのは両手に大量の荷物を持ち、頭にもたくさんの荷物を

乗せた浅黄だった。

「浅黄！？」

「んだっ、こいつら」

「並中の風紀委員長と風紀委員だ！」

「あっちの女もか！？」

「見ろ、腕章してやがる」

（まさかヒバリさん、オレを助けに・・・？）

「集金の手間が省けるよ、君達がひったくってくれた金は風紀が全部いただく」

「ああっ！？」

（またあの人、自分のことばかりーっ！！）

「むかつくアホがもう2人、ちょうどいい、中坊1人しとめるために柄の
悪い後輩を呼び過ぎちまってな、やつら力もてあましてんだわ」

「何人いるのー!?」

「加減はいらねえ!!そのいかれたガキどももしめてやれ!!」

「ヒバリさんと白石さんでもこの数はやばいんじゃ、てか白石さんあんなに

荷物もって戦えるの・・・？」

「だったらお前も、戦え」

そう言ったリボーンはツナに死ぬ気弾を打つ。

「復活（リ・ボーン）、死ぬ気で喧嘩ー！！オラア！きやがれ！」

「余計だな」

「たかが中坊3人だ！一気に仕掛けろ！！」

その時爆発が起こる。

「１０代目！！」

「助っ人とーじょー」

山本と獄寺だった。

「気に食わねーガキどもが、ぞろぞろと」

「ヒバリと白石と初の共同戦線だな」

「冗談じゃない、ひったくった金は僕がもらう」

「そうです、一軒一軒集金も大変なんですよ」

「なぁ？」

「やらん！」

「当然っス」

ツナは蹴りやパンチで、獄寺は爆弾などで、山本はバットで、雲雀はトンファーを使いどんどん敵を倒していく。

浅黄は荷物などないかのように華麗に舞って、足技でどんどん倒していく。

浴衣と合わさって本当に何か踊りを舞っているようにも見える。

そしてツナたちが勝利を治めた。

浅黄たちはといえば、雲雀は浅黄に付き合わされて花火を神社の屋根の上で見ていた。

「普通に集金するよりたくさん金手に入ったんじゃない？」

「まあね」

「そりゃあよかったね♪はなび、ってのも綺麗だね」

「・・・」

「無言は肯定だね♪」

という感じで花火を見ていたのだった。

標的３２　肝だめし、来る！

ここは雲雀の家の中の浅葱の部屋。

今はベルと浅葱がいた。

「ベル、スクアーロの報告ってなんだったの？」

「ボスが隠されてる場所が見つかったってさ」

「！？」

「そのボス救出の作戦ができたから、明日の朝一番の飛行機で帰ってこいってさ♪」

「わかったよ♪んじゃあ今日は私は折角だし並盛めぐりをしてくるよ」

「今からか？」

もう真夜中である。

「うん♪んじゃ行ってきます」

浅葱はショートパンツに長袖Tシャツ、夏祭りのときの下駄という格好で出かけた。

何気に下駄を気に入っていた浅葱だった。

浅葱は今並盛商店街を歩いていた。

カランコロンと浅葱の下駄の音だけが響きわたる。

「むー、でももう真夜中だからどこもおもしろいのないなあ。あ、墓地いったら

誰か肝だめしとかやってないかな。よし、行こう♪」

と言って浅黄は意気揚々と墓地へと走って行った。

浅黄が墓地について最初に見たのは、変な形をした門、それに変な男にその門に

つれさられようとしているツナだった。

「あ、変な男が増えた。変な男Ｂの電気攻撃でＡが元気になってるし。てゆーか

あの門の向こうって死後の世界?餓鬼道、かな?」

浅黄は眼帯を取って、左目の文字を六から二の餓鬼道にする。

「うん、やっぱあの先は餓鬼道だね。ってかなんで餓鬼道からこっちに

これるんだよ。思い出すと腹たつ。あんなのとっとと閉まってくんない

かなー。てか今すぐに。こーなったらあの引っ張ってる変な男を脅

して

閉じさせるか。よし、そうしよう♪」

浅黄はそう言って変な男に近づいていき、とび蹴りを食らわす。

「ぐほあ！」

と言って変な男Ａは吹き飛ぶ。

「な、何をする！・・・！」

しかし男は浅黄の左目を見た途端に顔色を変える。

「あ、眼帯忘れてた」

「え、浅黄、その目は一体・・・？」

「そうか！お前が哀れな双子の片割れか！」

それを聞いた途端に浅黄の表情が変わる。

「その名で呼ぶな」

浅黄は幻覚で変な男Ａの周りに毒蛇を数十体と出す。

「ひ、ひい」

「私は、私達はもうあの世界にはいないんだ。あれはもう過去の、記憶の中でしかない。今はこの世界の住人なんだ。だから、お前はおとなしく餓鬼道へと帰れ」

そう告げると浅黄の幻覚の蛇が実体となり、変な男Ａを扉の中へと連れ去っていく。

男が門に完全に入ると門は消えた。

そして浅黄の左目の文字も六に戻る。

「てゅーか文字を二にする意味なかったな・・・」

そこでツナが浅黄に話しかける。

「あ、浅黄！その目って一体、何なの？眼帯も・・・。見えないんじゃなかったの？」

「（もう見られたし、イタリアにも帰るんだし、いっか♪）見えるよ。眼帯は
この目を見られて怪しまれるのが嫌だったからさ。まあもう必要ないけどね。
見られたし。私には、私達には六つの前世の記憶がある。そしてそれぞれの
世界でスキルを得たんだよ」
それを聞くとツナの頭には?が浮かぶ。

「私達?それって浅黄と鈴のこと?でも哀れな双子、って・・・?」

「くふふ。まあいいです、もう明日にはイタリアに戻りますし、教えて差し上げますよ」

「えっ!イタリアに帰っちゃうの?」

「ええ、呼ばれましてね。本題に戻りましょうか。その前に、リボーン

でてきたらどうです?そんな草むらに隠れずに」

それを聞き終えるとリボーンが草むらから出てくる。

「チッ。ばれてたのか、じゃあとっとと話せ、さっきの話を」

「うわー、命令口調だと友達いなくなりますよ?どうでもいいですけど。

ぶっちゃけると私と鈴は本当の兄妹なんかじゃないです。そして私には

別に本物の双子の兄がいます。さらにぶっちゃけると私は今１５才、

鈴は１６才です。でも年齢に関しては恭弥も意味不明なので問題は

ないでしょうけど」

「んなーーー！じゃ、じゃあ浅黄って先輩、なの？」

「ツッコムところがちげーぞ、ツナ。何で年齢、この調子で行くと

名前も

偽名か・・・？を偽装して並中に入ったんだ？」

「くふふ。そこまでは教えられませんよ。いずれわかるでしょうしね。

それでは、私はもう帰ります。ａｒｒｉｖｅｄｅｒｃｉ」

と言うと浅黄は去って行った。

（やっぱ白石は油断ならねえな。哀れな双子、ってのも何なのか

わからねえし。それに左目に浮かぶ文字。調べる価値は、あるか）

とリボーンは1人考えていた。

標的３３　久々のイタリア、来る！

「ふわあーあ、ベル、聞いてないよ。飛行機が7時とか、それで４時に起きるとか・・・」

浅葱はにっこり笑う。

「うっ、でもまあ、細かいことは気にすんな♪」

「うーん。ま、いっか♪それよりもうそろそろでないとやばいんじゃない？」

「ししっ♪んじゃ行くか」

「うん。恭弥は、置手紙残しとくよ内容は＞今までありがとうございました。

イタリアの実家に帰ります。もうあなたといるなんて堪えられないの！

みたいな♪ｂｙ居候組＜♪」

「ししっ♪それ次あったときの雲雀がすごいことんなってんじゃん♪」

「でも楽しそうっしょ♪」

「まーな♪んじゃあ今度こそ出発しようぜ」

「ん」

そして浅葱とベルは並盛に来たときの服装、浅葱は眼帯を取っているが、

で空港へと向かった。

数時間かかり、やっとイタリアに到着する。

そして今ベルと浅葱はアジトのある森の中を枝から枝へと飛び移って移動していた。

「あ、髪の色もう幻覚解くからね♪」

「ん」

一文字でベルが返すと浅葱は幻覚を解き、もとの髪色に戻る。

「やっぱもとの色のほうがしっくりくるね♪」

「まーな、この色で十数年と生きてるからなー、ししししっ♪ほら、もうそろそろ着くぜ♪」

それを聞くと浅葱はスピードを上げる。

そして門が見えると一際強く枝を蹴り、勢いをつけて門を蹴り破る。

「一番乗りー♪」

「王子二番♪」

すると久しぶりの怒声が響く。

「う〝お〝お〝おい！！！何門壊してんだあ〝！！！」

それに浅葱はてへっ、っていうポーズをとり、

「だってー、久しぶりだったんだもん♪」

「ふざけてんじゃねえぞお　ゞ！！！」

この言い争いはルッスがご飯に呼びに来るまで続いたとか・・・。

ルッスの作った夕飯を食べた後に幹部は会議室に集合していた。

「とりあえず、浅葱い　ゞ!旅行とか言って沢田綱吉と会ってやがったなあ　ゞ!!!」

「それが何か?みたいな♪」

「てめ「もう諦めたほうがいいわよぅ♪浅ちゃんがこんな性格なのはもう

わかりきったことでしょう?」ルッス・・・。チッ」

「んじゃあボスを助ける作戦、っての早く発表してよ、スクアーロ♪」

浅葱はそういうといつもより少しかは真面目な色の含んだ目になった。

標的33．5　Extra.　～Hibari　vs　Mukuro　黒曜編～

ここから3話ぐらい番外編で黒曜編です。
なぜ番外編というかは浅葱がでないからです。
名前はでますが。
浅葱がでないならいらないだろうとか思うかもですが、原作にない会話があるので乗せときます。

あと、お気に入りにポイント、本当ありがとうございます♪
閲覧数もいつの間にか増えていて・・・。
本当にありがとうです♪
感想もいつでもまっています♪

標的33.5 Extra. ～Hibari vs Mukuro 黒曜編～

数日前から並中の生徒は正体不明のものたちに襲撃されていた。

最初は風紀委員だけだったのだが今では無差別としか思えない被害となっていた。

しかし共通点もあり、襲われたものは皆歯を抜かれていた。

そして抜かれる数は一本ずつ減っていたのだ。

まるでカウントダウンするように。

そしてとうとう雲雀が敵のアジトを見つけ、雲雀はそこへ敵を殲滅するために向かった。

バキッ。

ドカッ。

ここは黒曜ヘルシーセンター。

新道が出来てほぼ使われなくなった旧道の脇に建つ廃墟の一部だ。

そしてそこには大量の不良が気絶して転がっていた。

そんなものには目もくれず不良を気絶させた少年、並盛中風紀委員長の

雲雀恭弥は奥へ奥へと進んで行く。

そしてついに最奥であろう部屋に着く。

しかしそこにいた人物を見た雲雀は驚愕した。

いた少年は浅黄と同じパイナップーヘアに、浅黄がよく着ていたのと同じ柄の

Tシャツ、それに浅黄と全くの瓜二つの顔だった。

違うところと言えばTシャツ以外の服装と髪の色と身長、あと目の色が反対と

いうぐらいだろう。

まあ浅葱は眼帯をしていたので浅葱のオッドアイについては雲雀は知らないが。

浅黄は絶対１０才以下にしか見えない容姿だけどそれでさえ瓜二つなのに

成長したらもっと瓜二つになるのだろう。

「浅黄？」

雲雀は思わず呟く。

すると少年は答える。

「おや？浅黄とは浅葱のことですか？」

「どういうこと？うちの風紀委員の白石浅黄は君と何か関係があるのかい？」

「クフフ。浅葱は今どこにいるのです？」

「浅黄ならちょっと前にイタリアに帰ったらしいよ」

「らしい、とは？」

「＞今までありがとうございました。イタリアの実家に帰ります。
もうあなたと

いるなんて堪えられないの！みたいな♪ｂｙ居候組＜って書置きだけ置いていきなり

消えたんだよ」

そう言った雲雀は明らかにイラついていた。

そしてそれを聞いた少年はというと、

「ク、フ、クハハハハハ！いかにも浅葱らしいですねえ」

「それで？浅黄は君の何なんだい？」

「まず言うと白石浅黄というのは偽名ですよ。本当の名前は六道浅葱です。

そして僕は六道骸です」

「ふーん。それじゃあ浅葱は君の何？何でそんなに似ているんだい？」

「双子の妹、ですよ」

「だからか」

「はい？」

「だから浅葱と君はそんなに口調が似ていて、僕を苛立たせるのも似ているんだね」

「ああ、敬語を使うときに浅葱は僕と似ていますね」

「似ているどころじゃなくまるっきり同じだよ」

「クフフ。そうですか。浅葱と僕は確かに同一ですね、クフフフ」

「ふーん、まあいいさ。君は僕に咬み殺されるんだからね」

と言って雲雀はトンファーを構える。

「クフフ。そんなに焦らないでください。並盛中風紀委員長雲雀恭弥」

「何で知ってるの？」

「何事にも調査は重要ということですよ。そしてそんな貴方に急いで用意したプレゼントがあるんですよ」

骸は何かのボタンをポチッと鳴らす。

するとあたりに幻想的な桜がたくさん現れる。

桜クラ病である雲雀は膝をつく。

ボコッ。

バキッ。

桜クラ病で動けない雲雀を骸は痛めつけていく。

それでも雲雀は骸をにらみつける。

「おや？もしかして桜さえなければ、と思っていますか？それは勘違い
ですよ。君レベルの男なら何人も見てきましたし、幾人も葬ってきた。

地獄のような、場所でね。さあ、続けましょう」

そう言った骸の右目は一の文字になっていた。

ボコッ。

バキャッ。

そしてまた骸は雲雀を殴っていった。

これで最強と思われていた風紀委員長は生涯忘れることはないであろう敗北を

骸からは現在進行形、浅葱からは初めて会ったときの余裕の態度にベルとの

合わせ技ｅｔｃと、六道双子それぞれから受けたことになるのだった。

標的33．5　Extra．　～Mukuro　e　Tsuna　incontro～

ツナは今九代目の指令で骸討伐に来ていた。

復讐者というマフィアの牢獄から脱獄した骸を捕獲せよ、というような指令だ。

もちろんツナはやる気ではなかったのだが。

ツナ、リボーン、山本、獄寺、ビアンキ、それになぜか佐川馬羅も一緒に来ている。

今現在役立たずだが・・・。

そして現在は主要メンバーの犬は山本が倒し、ＭＭもビアンキが倒し、バーズ

というおっさんもドクターシャマルとイーピン、ランボの協力により倒した。

千種は獄寺がすでに重傷を負わせているはずなので残りは六道骸だけだ。

ツナ達が六道骸だと思っている人物は実際は骸に操られているランチアという

人物なのだがそれを知るよしはなかった。

骸がいるであろう建物へ向かっているとずっと行方不明だったフゥ太が物陰から

現れたが、すぐに走り去って行ってしまい、ツナは追いかけていく。

追いかけていった先にいたのはフゥ太ではなく1人の黒曜生だった。

それが本当の六道骸なのだがそれをツナは知らない。

ツナが近づくと少年はツナのほうに振り向いた。

それはツナを驚愕させるものだった。

「浅黄！？」

「おや、また間違えられましたね」

「え！？また？あれ！？でも浅黄、でっかくなった・・・？」

「クフフ。僕は浅黄とやらではないですよ？」

「え、あ！すいません！じゃあ何であなたはここに？」

「ああ、僕は捕まっていたんです。それであなたを見つけて助けに来てくれたんだと、安心して・・・」

「あ、そうだったんですか・・・。でもそんな助けに来たっていってもも

赤ちゃんとか女の人もいるんですよ」

「へー、そうなんですか。その赤ちゃんは何か間接的にするんです

か？」

「いや、そ、それにしても捕まってたなんて大変ですね～」

「僕は質問してるんですよ？」

そう言った骸の右目には六の文字が浮かんでいた。

「なっ！浅黄と同じ・・・？（てか怖ー！骸に捕まると皆あんなふうに

なっちゃうのー！？）す、すいません！友達が待ってるので！後で助けます！」

と言い残し、ツナは山本達のもとへと走っていった。

残された骸はといえば、

「クフフ。あの赤ん坊はアルコバレーノで間違いないようですね。それに

しても浅葱は何でボンゴレの連中と知り合いなんでしょうねえ。まあ

次会ったときに全てわかりますか」

といい、黒曜ヘルシーセンターへと戻っていった。

標的33．5　Extra．　～Tsuna　vs　Mukuro　黒曜編？

ツナはとうとうリボーンと、傷1つない馬羅と一緒に黒曜ヘルシーランドの
最奥であろう部屋にたどり着く。

「ツナ、油断するなよ」

「う、うん」

リボーンの警告に返事をして扉を開ける。

そこで見たものはリボーンですら驚いた。

「あれ、さっきの！？」

「白石・・・？」

「クハハハハ！アルコバレーノでさえも間違えますか！？ああ、浅葱も

アルコバレーノでしたね」

それにリボーンは殺気をこめて言う。

「てめーが本物の六道骸、か。それよりもてめえは復讐者に捕まっていたはずだ。なぜそこまで知ってる?」

「クフフ。あなたなら何かしら調べたのではないですか?どこまで僕達の

ことを知っているんです？」

骸は殺気をこめて言い放つ。

「リ、リボーン君、話して、く、くださら、ない？」

馬羅は骸の殺気に直接当てられたわけではないのに震えて、立っているのもやっと、

という状況になっていた。

それを見たリボーンは舌打ちする。

「チッ。だからてめえはついてくるな、つったろ？」

「うぅ。ひっく。ご、ごめんなさいませ。ワ、ワタクシは、す、少しでも
役に立ちたくて。つ、次こそは役に、た、たって見せますわ。ですから、
今回は、も、もう、殺気が・・・」

馬羅は冷や汗が滴っていた。

「オレが調べてわかったのはほんの少しだぞ。あいつがどっかの戸籍作成屋に

頼んで日本の戸籍を偽造で作ったってぐらいだぞ。でも本名とかは

全然わからなかった」

「クフフ。その程度しかわからなかったんですか？アルコバレーノリボーン。

僕と浅葱が双子、ということもそれじゃあ知らないようですね。君たちがいう

白石浅黄は僕、六道骸の双子の妹ですよ」

「・・・！？」

「まあいいですよ、少しだけ教えて差し上げます。確かに僕は復讐者に

捕まっていたので何が起こったとかそういうのは全くといってもい

いほどに

世間知らず状態です。けれど、浅葱と僕は精神、魂レベルから繋がっています。

なので、僕は浅葱のことなら誰よりもわかるんですよ。浅葱も同様に僕のこと

なら誰よりもわかる」

「!?」

「けどまあ、数年前に繋がりをせき止める契約をしたので次現実で

会い、

契約が解かれるまでは感情ぐらいしかわからないんですけどね・・・。

アルコバレーノだとわかったのは浅葱がアルコバレーノとなったときに

その契約が少し揺らいだからです」

「じゃあやっぱ白石ってのは偽名だったんだな。本名は六道浅葱、か？」

「おや、わからなかったのでは？」

「無のアルコバレーノができたと知識が入ってきたときに名前も入ってきたんだぞ。

けどあいつは漆黒のおしゃぶりを持っていながら白石浅黄となのった。オレは鉄の

帽子の男も信じたくねえからな、だからあいつが名乗った名前で呼んでいたんだぞ」

「鉄の帽子の男、とやらはずいぶんと嫌われているようですね」

「？」

「浅葱もあの男が大嫌いのようでね。その男のことを考えているであろう時には

負の感情が大量にながれこんでくるのですよ」

「そうか・・・」

「え、リボーン？鉄の帽子の男って、一体？」

ツナがリボーンに問う。

「何でもねーぞ。それよりオレ達の目的は骸退治だったはずだぞ」

「あ！」

「何忘れてんだ。ちゃっちゃと倒してママンの料理を食べるぞ」

「うん！」

そして骸はツナに負ける。

骸と犬、千種は復讐者に再び捕まった。

結局馬羅は、柱の影でぶるぶる震えて隠れていたら、憑依されて、

ツナの邪魔になり、足手まといになるだけなのだった。

こうして黒曜生襲撃事件は幕を閉じたのだった。

標的３４　ＸＡＮＸＵＳ救出、来る！

時は戻り、浅葱とベルがイタリアへ戻って一週間ほどたったある日の深夜。

「浅葱、準備はいいかあ　ぢ？」

「オッケーでーす♪」

「じゃあ行くぞお　ぢ！」

「了解♪」

ボンゴレ独立暗殺部隊ＶＡＲＩＡ幹部はある作戦を実行していた。

【ＸＡＮＸＵＳを絶対救出しようぜ☆大作戦】である。

ちなみに名づけたのは浅葱。

とりあえず内容を要約して書いておく。

ＸＡＮＸＵＳが閉じ込められている氷は浅葱にしか解けないのでこの作戦では

浅葱が重要となる。

もう１つ重要なことが、ＸＡＮＸＵＳを救出できても施設のボンゴレの人間を

皆殺しにしてもまたＸＡＮＸＵＳは捕まって、ボスになれないので騒ぎを

起こさないで、ＸＡＮＸＵＳが救出されたことすら気づかれないように

救出すること。

なので囮などは一切使わずにただ姿を発見されないように最下層へと浅葱は
行く必要がある。
なので最下層へと行くメンバーは浅葱とスクアーロの２人だけだ。
スクアーロの理由は何かあっても冷静で賢明な判断をするため、というのと
８年ぶりに氷からでれてもすぐには動けないだろうからＸＡＮＸＵＳを

おんぶする要員としてだ。

ベル、ルッス、レヴィ、マーモンは施設の近くの人に見つからないところで

車に乗って待機だ。

これまたいつもなら枝から枝へ飛んでいくが車の中でもＸＡＮＸＵＳの治療を

するためである。

そして話は戻り、今浅葱とスクアーロは人気のない通路を闇に紛れ、気配と足音を消して最下層へと進んでいる。

１０分ほどかかってやっと最下層へとたどり着く。

中には浅葱の幻覚で見張りを寝かしつけてから入った。

中はとても寒かった。

「おおぅ、以外と寒い・・・？」

「なんで疑問なんだあ〝・・・」

スクアーロも寒さでかいつもより声は小さい。

「だって昔の冬はこれが普通だったし♪」

「・・・。そうか・・・」

昔、とはエストラーネオのときのことだろう。

「そんな気落とさなくていーよ。さあ、ちゃっちゃとボスを助けようじゃないか♪」

「ああ」

進んで行くとＸＡＮＸＵＳが閉じ込められている大きな氷があった。

「さて、と。やっと私の修行の成果、ってやつだね♪」

「さっさと溶かせえ〜」

「わかってるって♪んじゃあ溶かすよ♪」

そして浅葱は右手を掲げる。

指パッチンの形で。

「3」

その声で浅葱の周りを黒と藍色の二色の、でも純度がとても高く綺麗で

幻想的な炎が渦巻く。

「2」

その声で炎が四方八方に一度飛び、氷と床の設置面へと飛んでいく。

その炎が〇の中に星型が入ったような模様、いわゆる魔法陣の形になる。

「1」

その声で炎の魔法陣のようなものの純度がさらに増す。

「0」

その声とともにパチンッ、と指パッチンする。

指パッチンが鳴らされた刹那。

ゴオオオオッ！

と魔法陣のようなものから氷を余裕で飲み込む黒と藍色の混ざった火柱が立ち上る。

「う〝お〝お〝お〝い〝！あれじゃあＸＡＮＸＵＳも燃えてんじゃねえだろう

なあ　ゞ！！つーかあの魔法陣はなんだあ　ゞ！！」

「まっさかー♪私を誰だと思ってんの？私は何年もこの死ぬ気の炎というものを

操る修行をしたんだよ？もう死ぬ気の炎のエキスパートさ♪」

「そうなのか？」

「ゴメン、エキスパートなんて嘘。でも操れるようにはなったさ♪

あと、

魔法陣ってのは気分だから何も関係ないよ」

「う〝お〝お〝い〝！！！」

「あ、氷溶けたよ♪」

スクアーロの叫びは浅葱には届かない。

浅葱が言った通り氷は溶けていた。

それに伴い藍色と黒色の炎は消える。

ＸＡＮＸＵＳがずしゃっ、と倒れる。

「ＸＡＮＸＵＳ！」

スクアーロが駆け寄っていく。

どうやら息はあったらしい。

「あーあ、疲れた。まあボスも助かったしね。よしとしようか。ボスが

いたら楽しいからね♪」

浅葱は今にも倒れそうなほどだったが笑っていた。

愉しいことも楽しいことも大好きな浅葱は簡単にいえば愉快犯なのである。

その後は、スクアーロがＸＡＮＸＵＳをかついで施設を無事誰にも見つかることなく

出れて、アジトにも戻れたので【ＸＡＮＸＵＳを絶対救出しようぜ☆大作戦】は

成功したのだった。

そしてＸＡＮＸＵＳといえば、いつの間にか意識を戻して、８年前と同じ、いや

それ以上じゃないかという暴君ぶりを発揮していたのだった。

標的３５　オッタビオの最期、来る！

ＸＡＮＸＵＳを救出してから６日たった。

浅葱は今、スクアーロとマーモンとともにＸＡＮＸＵＳの部屋へと来ていた。

「ふわーあ。眠い・・・。ボスー、眠いので早く用件をお願いします！」

そして浅葱はなぜか敬礼をビシッと決める。

眠くてテンションが変になっているようだ。

「明日にオッタビオ暗殺兼モスカの設計図の入手を目的とした作戦を行う。

ただしモスカの設計図という真の目的はてめえらにしか話さねえ」

モスカという単語を聞いた瞬間、浅葱の目から眠気が消え去った。

「なんで、モスカの設計図がまだ出回ってんの？」

それにはマーモンが答える。

「エストラーネオの本部を壊滅させたときに運がよくその時本部にいなかった

モスカ研究員はモスカの資料をイタリア軍に売って、自身もイタリア軍で

研究させてもらえるようにしたらしいね」

そしてＸＡＮＸＵＳが口をはさむ。

「しかしそいつは今は他のイタリア軍のものたちと一緒に抜けたらしい。

そして今度はオッタビオにモスカの情報を売った。しかしそれは旧式の情報だ。

完全版の情報は自分達がピンチになったときのために残しておいた。

今がそのピンチのときだ。だがオッタビオは完全版を力ずくで手に入れようと

している。すると元イタリア軍のものたちはオッタビオの管理している

人工島マレ・ディアボラを襲撃するだろう。それをオレ達で解決して、

モスカの情報を得、オッタビオの野郎を殺す。それが今回の任務だ」

「わかったぜぇ！！ＸＡＮＸＵＳ！！！早速他のやつらに伝えてくるぜ！」

「相変わらずうるさいなあ、カス鮫君は♪」

「そうだね」

と言って浅葱とマーモンもＸＡＮＸＵＳの部屋を出て行く。

翌日。

浅葱は他の幹部メンバーとではなくＸＡＮＸＵＳと一緒にオッタビオの所に向かっていた。

「ねーボスー。一個聞いていい？」

「なんだ」

「何で私はベル達と一緒じゃなかったの？」

「あっちはあれで十分だったからだ」

「へー、じゃあボスはボス1人じゃあ足りなかったってことかな♪」

「消されてえか」

「すいやせん！んで、理由は？」

「てめえは作戦とかは全然だが、相手を言葉で絶望させたり錯乱させるの得意だろ」

「大好き♪」

「オッタビオの言質をとらせろ」

「それは、オッタビオが元イタリア軍と繋がっていたのと、揺りかごのとき

作戦をちくったこと、あとはボスに対する本心、それにモスカを出させて、

絶望させればいいのかな♪」

「ああ」

「くふふ♪それなら得意分野だよ♪戦いも殺しも好きだけど相手の混乱してる様を

見るのも愉しいからね♪」

そう言った浅葱は実に愉しそうに嗤う。

見た目１０才では不気味でしかない表情だった。

それから１０分ほどたち、オッタビオがいる部屋にたどり着く。

ガチャッ。

とノックも無しに浅葱はドアを開ける。

「おわっ」

するとオッタビオの他にもたくさんの部下がいた。

「浅葱に、そん、な・・・。ああ」

と独り言を呟くとオッタビオは浅葱の後ろのＸＡＮＸＵＳに対してひざをついた。

「お久しぶりです。１０代目」

その言葉で周りの部下がざわめく。

しかし口を開いたのはＸＡＮＸＵＳやオッタビオではなくこの場に似つかわしくない１０才の見た目を持つ者。

浅葱だった。

「オッタビオ、私のこと忘れてます？」

「いえ、忘れてなど。それにしても昔に比べ成長しましたねぇ」

ブチッ。

「嫌味かこの野郎ッ！つーか私の名前気軽くお前みたいな貧弱もやしが呼ぶな！」

いきなり口調が崩れている浅葱である。

「すみません。では貴方の通り名首狩り姫（プリンセス・ザ・アッシア）から取ってアッシア、ならいいですか？」

いかにも子供に対する態度のオッタビオに浅葱はイラつきが早くも頂点に達する。

「（これもオッタビオが嫌いな1つなんだよ。子供扱いしやがって・・・）まあいいです」

しかしイラつきを隠して浅葱は敬語に戻る。

「さて、と。状況を一応調べてきたですけど言ってもらえますか？

そしてこの件は

私達ＶＡＲＩＡが解決するのであなたは手を出さないでください♪」

「なっ。今は謎の武装集団が島にて懇親パーティを襲い、参加者およそ１５０名が

人質にとられている、程度しかわかっていませんが、これには私の責任があり」

だがオッタビオのセリフをさえぎり浅葱は言う。

「オッタビオ君。君は昔ＶＡＲＩＡ副隊長だったんだからって私達を頼んでも
いないのにかばってでしょう？」

「はい。それが役目でしたから」

「役目？作戦に反対した者の？それとも作戦をチクッたことに対して、ですか？」

浅葱はオッタビオに近づいてオッタビオにしか聞こえないような距離で、囁く。

それに対してオッタビオはビクッ、とわかりずらいが確かに肩を揺らす。

「くふふ♪じゃあこれはかばってくれたお礼、ということにしておきましょうか。

お礼なんですから手は出してはダメですよ？これで手を出したらあなたは人の

お礼も無碍にするただの偽善者、という肩書きにもなりますかね？くふふ♪」

浅葱の言っていることは筋の通ってないところもあるが、動揺していたオッタビオの

ここには手は出さない、ということだけが刻まれていく。

まさに浅葱の手の平の上状態である。

「わかり、ました。私は今回の件には手を出しません」

「ん、それでいいです。じゃあ1つ質問させてもらいましょう。敵の正体って何ですか？」

「!?なぜ、それだけを?」

「だって、この場にはオッタビオが集めたであろう部下の気配がたくさん
あります。それはどれも結構強い部類の気配だ。うまく気配をかくして
いますからね。そして全員が全員出撃要員なんでしょう?今のあなたの
様子からしてこれ以上集める様子もない。出撃要員を適切に集める、

ということは敵の正体、強さを知っているのでしょう？」

「ああ、やはりあなたに口で敵う者はいませんね。これでも結構勉強したんですよ？」

「で？敵の正体は何なんです？」

「敵の正体は元イタリア軍の者と思われます。軍事用に作られたあの島だからこそ

襲撃も成功したのでしょう」

「へえ、さすがだね。そこまでわかってるなんて。でもさあ」

そこで浅葱は言葉を切って、満面の笑みで嗤う。

「さっきは、今は謎の武装集団が島にて懇親パーティを襲い、参加者およそ１５０名が人質にとられている、程度しかわかっていませんが、

って言いましたよね?それから会話を私としている間、通信もしている様子も

無かった。ってことは今の情報は最初から知っていたってことですよね♪

何で言わなかったんです?」

その言葉にオッタビオの瞳がわずかに揺れる。

「ああ、もしかしてそれを隠しておきたかったのですか?隠さないと何か

不都合が生じる、とかですか？例えば、その犯人グループと自分が繋がって
いたり、その犯人グループに用があった、とかですか？それで多くの情報を
与えて私達が作戦を成功させたら困るから、とかですか？」

それを聞いてオッタビオの額には冷や汗が浮かんでいた。

「何を、言っているんですか？そんなのただの推測に、すぎな」

浅葱は言葉をさえぎって言う。

「ええ、ただの推測ですよ。けれど、そのただの私の推測に

なぜ貴方は動揺しているんです？」

それにオッタビオはハッ、とする。

「あ、はは。もう隠し事は通用しないようですね。しかし、それも

あなた方を

皆殺しにすれば万事解決です」

オッタビオはにたあ、と笑う。

するとどこかからＸＡＮＸＵＳに向けて光の光線、圧縮粒子砲が放たれる。

ドカアン。

と轟音が鳴り、煙が立ち込める。

浅葱は煙の外側にいる。

オッタビオは煙に向かって話しかける。

「でてきてください。貴方がこの程度でやられるはずないでしょう？」

煙が晴れた先には傷1つないＸＡＮＸＵＳが立っていた。

「それにしてもなぜそこまでわかったんですか?ほんの数日前まで閉じ込められていた貴方が」

「ボンゴレの血に伝わるものを知ってるだろう」

「なっ、そんなはずはない!なぜなら貴方は「オッタビオ!」」

ＸＡＮＸＵＳが声を荒げる。

「なぜてめえがそんなことを知ってる？やはりてめえはあの場にいやがったな。

作戦に反対していたのにあの場にいたってことは、やはりてめえが作戦を上層部にバラしたな」

「チッ。やれ！ヴェッキオ・モスカ！！！」

もうやけくそになったのかオッタビオは声を上げる。

するとまた圧縮粒子砲がＸＡＮＸＵＳに向かって放たれる。

「浅葱」

ＸＡＮＸＵＳは一言発する。

「りょーうかい♪」

浅葱は圧縮粒子砲とＸＡＮＸＵＳの間に立ち、短刀二本を構える。

そして短刀二本と圧縮粒子砲を微妙な角度でぶつけて、圧縮粒子砲を弾く。

ドオオンッ。

弾かれた圧縮粒子法は天井にぶつかり、天井に穴を開ける。

「なっ！圧縮粒子砲を弾くだと！」

「これはまだプロトタイプでしょう？そんなものの攻撃を弾き返すぐらい簡単ですよ♪」

浅葱は笑いながら言う。

「クッ。まだ本領はここからだあ！死ね、ＸＡＮＸＵＳ！」

それを聞くとＸＡＮＸＵＳはにやり、と笑う。

「今の言葉、聞いたぞ！オッタビオ、てめえを反逆罪で殺す！それにモスカを

見たものは放って置けねえ。てめえらも全員殺す！」

それを聞いたオッタビオの部下たちは一気に顔が青ざめる。

「やれ、浅葱」

「それを待ってたよ♪ボス♪」

そして反逆罪という名の虐殺が始まる。

標的３６　特異体質の少女、来る！

あの後は、虐殺、じゃなくて反逆罪として皆殺しが終わったあとにマーモンが

やってきて、モスカ設計図完全版を持ってきた。

それを手に入れたことで作戦は成功ということになった。

今は急ピッチでモスカを完成させようとしている。

完成するまでは幹部は待機、ということになった。

作戦翌日。

浅葱は自室のベッドに横になって目をつぶっていた。

一見すれば眠っているようだが違う。

精神世界で幻想散歩をしているのだ。

アサットはベルのところで遊びをしていた。

内容はベルが一方的にナイフを投げてアサットはそれを避ける、というもの。

動物虐待にも見えるがアサットもそれを楽しんでいるので問題はな

い。

精神世界。

おだやかな風が吹いてどこまでも続いているような草原。

そこで浅葱は1人歩いていた。

「あー♪やっぱ精神世界は何度来てもいいねえ。まあ誰もいないけど。

アサットはこんな深いところまでこれないし、ムク兄は、現実世界で一度憑依してるのでもいいから会わないと、こっちで会ったとしても認識できないし・・・。ま、いっか♪いつか会えるだろうし♪」

そう言って浅葱は歩き出す。

「さて、散歩しますか♪って、あれ？誰かいる？」

浅葱の視線の先には1人の少女がいた。

藍色の瞳に藍色の髪、パイナッポーヘアではない。

「こんな深いところにいるなんてね。話しかけてみますか♪」

そう呟くと浅葱は走って少女のもとへと近づく。

少女はつい先ほどまで生死の境をさまようくらいに重傷の患者だった。

けれど、骸と出会い契約を交わしてその危機から脱したのだった。

そして骸は先ほど少女の前から姿を消した。

「骸、様。・・・。また、会える、よね・・・」

「ムク兄を知ってるの？」

「！？」

後ろからひょこっ、と現れた自分よりも幼そうな外見の少女。

しかし、その姿は。

「骸、様？」

「くふふふ。私がムク兄、じゃなくて六道骸だと思う？」

「・・・。少し、違う・・・？」

「くふふふ。そんなに似てるかなあ、私とムク兄は」

「骸様の妹、なの？」

「そーだよ♪私は六道浅葱って名前で六道骸の双子の妹さ♪ところで、ムク兄と

君はどんな関係なのかな？」

すると浅葱は一歩で少女に近づく。

そして手を掴んで倒れないようにして、自分の額を背伸びしてこつん、

と少女の額と合わせる。

「え、と。何、してる、の？」

「んー。ここは精神世界だよ?精神でできている。そしてこんな深いところと

なれば記憶を読むことぐらい簡単なんだよ♪それに君は何か特殊なようだから

読みやすいし、ムク兄の力が宿っているでしょ?だから余計簡単だよ」

「記憶、を、読んでるの?」

「うん♪はい。読み終わった」

と言って浅葱は離れていく。

浅葱は少女のこれまでの記憶を全てではないが読んだ。

少女は猫を守って轢かれたこと。

それにより重傷を負い、移植が必要だったけど親に見捨てられたこと。

それでもう死ぬはずだったけれど、骸の宿主となるかわりに内臓を骸の

強力な幻覚で作ってもらい、生きていられること。

「君の名前は凪、じゃなくて今はクローム髑髏、か」

そう言った浅葱は淡く微笑んだ。

「そうだね。クローム、ムク兄が力を使えるようにしてあげているんだ、

私の力も少し貸してあげるよ」

「え！？」

「そのかわりに私とも契約してもらうけどね」

「それって、骸様と、同じ？」

「うん。ムク兄と同じ関係ってことだね♪」

「貴方も、どこかに囚われているの？」

「いいや、私は違うよ。理由は、んー、気まぐれ、ってやつだよ。
でも憑依先が

増えて不便なことはないからね♪クロームも使える力が増えて得はあるよ？」

「じゃあ、お願い、します・・・？」

「くふふ。じゃあちょっと動かないでね♪」

浅葱はそう言って有幻覚ではなく骸の使う三叉槍の先端と同じ種類の大鎌を創る。

そしてそれをクロームの胸に突き刺す。

「え？」

「大丈夫だよ」

と言うと大鎌は霧となって大鎌の刺し口に入っていく。

「私がクロームに与えたものは、一つ目にムク兄と同じく強力な内臓の幻覚だよ。

強力な幻覚ってのは幻覚にかかってるかぎりは有幻覚と同じ効力だしね。

あ、有幻覚ってのは実体のある幻覚のことね♪これなら例えば幻覚の火柱なら

騙されてなかったら効かないけど有幻覚のものなら実体があるのだから問答無用で

焼くことができる便利なものだよ♪」

「でも、それって、二重になって、るんじゃ・・・？」

「そこが重要なんだよ。ムク兄のは三叉槍が壊されたら内臓も壊れる。

でも私は直接クロームの体内に媒介を入れたからね。内臓が壊れることは

ないよ。いつもはムク兄のほうが使われているけどそれが無くなったら私のが

自動的に機能する。それ以外の時はその分の私の力が使える、ってことさ♪

逆に言えば私ので内臓を創ってるときは他に使える力が減るけどね」

「ありがと、うございます」

「どーいたしまして♪私の貸した力は幻覚を創る力だよ」

「骸様の地獄道と同じ幻覚の力・・・？」

「でも私の力分幻覚が強力になるさ♪」

「ありがとう、ございます。浅葱様」

「ん。私のことは呼び捨てでもいいんだよ」

「・・・浅葱様でも、いいですか・・・？」

「んー。まあ本人がいうならいっか。ところでさ♪」

「？」

「折角会ったんだ。一緒に遊ぼうぜ♪」

「！？・・・いい、の？私なんかで・・・」

「私なんか、とかって自分を堕としちゃダメだよ。クロームだからいいんだよ。

私は会ったばかりなのにクロームはお気に入りになっちゃったよ♪だから、

一緒に遊んでほしいな、凪♪」

「／／／・・・。じゃあ、何して、遊ぶ?」

そう言った凪は照れからか頬が赤く染まっていたが楽しそうな表情だった。

標的３７　ＸＡＮＸＵＳの策略、来る！

夕時、浅葱の部屋。

むくり、と浅葱は起き上がる。

ちなみに浅葱の今の格好は藍色の着流しである。

帯は黒色。

明らかに小さい男の子用着流しである。

雲雀の家に行ってから浅葱は着流しを知り、お気に入りとなったのだ。

浅葱は雲雀の小さいころの残っていた着流しを脅し、じゃなく話し合いにより

自分のものにしたのだ。

「んー。おもしろかったー♪クロームはいい子だね。あんな子は希少価値だね。

体質面からも精神面からも。また遊ぶことにしよー♪」

そう言うと浅葱はベッドから降りて、着流しのままロビーへと向かう。

「着流しはやっぱりいいね♪楽だし何より下駄ってのもいいよね♪背も高く見えるし

カランコロン鳴る音が綺麗だ♪あ、いっそ隊服のコートを羽織るだけにして、

その下これ着よっかな♪ま、気分しだいでいっか♪」

独り言をぶつぶつ呟いているとロビーにつく。

「おっはー♪」

扉を開けると同時に言う。

「おはよ♪姫♪」

「ム。おはよう」

「今はおはようじゃねえぞお゛！」

ロビーにはベルにマーモン、スクアーロがいた。

「今から会議だあ゛！会議室に来い」

「えー。寝起き早々、（精神世界にいたから寝てたわけじゃないけど）、会議とか」

「いいから行くぞお゛！！！」

「ん」

浅葱は一文字で答えてついていく。

会議室への道中。

「てか何で浅葱は隊服じゃねえんだあ　ぅ？」

「だって今日は休みなんでしょ？それに隊服もこれにしよっかなー♪とか？」

カランコロンと音を鳴らしながら浅葱は言う。

「てめえ〝！それじゃあ戦いにくいだろおがあ〝！」

「それは個人個人さ♪私は動きやすいよー、すごい♪」

「チッ。好きにしろ」

「似合ってるしいんじゃね？」

「うん。なぜか浅葱には和服というのが似合ってるよ」

ベルとマーモンが言う。

「くふふ♪ありがとう、うれしいよ♪」

そして会議室に浅葱達がつくともう全員揃っていた。

「遅えぞ、ドカスが」

「ボスー、許してよ。私は今まで寝てたんだよ♪」

「チッ」

ＸＡＮＸＵＳは舌打ちするがそれ以上何も言わないということは許したのだろう。

そして会議は始まり、そこで話された内容はＸＡＮＸＵＳがボスになるための筋書きだった。

要約すると、まず九代目を襲って、九代目の偽者とすりかえ、

本物はモスカの原動力にする。

そして九代目の持っているハーフボンゴレリングを自分達のものにする。

ただしここで無理に奪ったと思われないように、何が言われても
対応できるよう、九代目に死炎印を押させておく。

役割配置はこれもまた内密に行うもののために、九代目を襲うのは
一瞬で

九代目を抑えるために浅葱とＸＡＮＸＵＳ２人で行う。

マーモンは霧を発生させて、姿を隠すのと、敵の位置を念写で調べる。

ベル、レヴィ、ルッスはアジトで待機だ。

スクアーロはもう片方のハーフボンゴレリングを取りに行くので別行動だ。

そして作戦当日。

今はマーモンの作った深い霧があたりに立ち込めている。

浅葱はアサットを首に巻きつけ、普段通りの隊服だ。

隊服の中を着流しで行こうとしたらルッスに、「あらぁどうせなら私が
作った着流しをきてほしいわぁ」、と言われたのでルッスの作るものが
出来るまで普通のものを着ていくことにしたのだ。

もっとも、浅葱が着流しを中に着るのは、楽だしお気に入りという

理由も

あるが、起きて早々任務という日は起きたそのままにコートを着れば

いいだけなのでめんどうじゃないからめっちゃ便利♪という理由も

あるので、

どちらを着るかは結局浅葱の気分しだいなのだが。

浅葱は霧みたいな柄の長袖Tシャツも気に入っているので。

「さて、と。ボス、私はとりあえず強力な幻術で九代目のジジイを

騙して、

その隙にボスがジジイを気絶させるんだよね？」

「ああ。浅葱はその後にハーフボンゴレリングも手に入れておけ」

「ん、了解♪」

そう言って浅葱とＸＡＮＸＵＳと九代目の偽者は闇に霧に紛れ、九代目の部屋へと進んでいった。

九代目は今書類仕事に追われていた。

そんないつもと変わらぬ日常が続くと思っていたときだった。

背後にいきなり殺気を感じて九代目は振り向く。

そこにいたのはＶＡＲＩＡ幹部の浅葱だった。

「君は、浅葱じゃないか。どうして、ここに」

「油断しすぎ♪」

「！？」

浅葱の左眼が一の文字となる。

そして浅葱が指パッチンの音を鳴らす。

浅葱はそれを合図にして幻覚を全力で使う。

九代目の超直感で幻覚とわかったとしてもかかってしまうくらいに。

すると九代目はそれにまんまとはまり、あたりに蛇がうじゃうじゃといて、

自分に巻きついている光景を見ている。

その隙をついて浅葱はハーフボンゴレリングを奪い、ＸＡＮＸＵＳ

は九代目を気絶させる。

そして九代目をＸＡＮＸＵＳがかついで、九代目の偽者をここにおいていき、

この作戦はあっけなく完了した。

そして帰ったら九代目をモスカに入れ、モスカが完成したのだった。

「たっだいまー♪」

浅葱が上機嫌でベルたちがいるであろうロビーの扉を開ける。

「お帰り♪姫♪」

「お帰りぃ。あ、着流しもうできてるわよぅ」

「お♪ありがとー、ルッス♪いつも着るかはわかんないけど私服としては

多分絶対着るよ♪」

「着てくれるだけでもうれしいわぁ。服は部屋に運んでおいたからね」

「ん。ありがとう♪」

そう言って浅葱はにっこり笑う。

それを見たレヴィが「やはり可愛い」と呟いたのを浅葱は聞こえていたが、

聞こえないことにした。

「さて、と。リングを配るからって幹部はボスの部屋に来てだってさ」

「オッケー♪」

「わかったわぁ」

「了解だ」

ここでもやはりレヴィの声は浅葱は聞こえないことにしたのだった。

ボスの部屋につくとベルが嵐、ルッスが晴、レヴィが雷、すでにいたマーモンは

霧のハーフボンゴレリングを受け取った。

そして浅葱は創無のハーフボンゴレリングをもらった。

創無のハーフボンゴレリングは一代につき創か無かどちらか片方だけが守護者となる掟だが、

リングはどちらも存在する。

そして創無のリングを保管するときにはそれぞれをまずハーフボンゴレリング状

にして、創＋無、無＋創と別々に組み合わせて九代目と門外顧問がそれぞれ

保管することになっているのだ。

模様はどちらも無く、創が何も色を塗られず無が真っ黒に塗りつぶされているだけだ。

「ところでスクアーロはいつ戻ってくるんだろーね♪」

「もうそろそろじゃね？」

「そだね♪」

その一週間後、スクアーロは偽のハーフボンゴレリングを持ってきて、

それが発覚した約一週間後、再び日本へと向かうことになるのだった。

標的３８　再び並盛、来る！

あと一時間でＶＡＲＩＡが並盛に向かうという時。

浅葱は１人笑っていた。

「くふふふふ♪」

「何笑ってんの？姫」

「くふふふ♪並盛ということは！奈々さんの手作りお菓子を食べに行ける♪」

「あらぁ、その話は聞き捨てなら無いわよぅ。その奈々さんってのは私よりも作るの上手なのかしら？」

「ルッス、くふふ。奈々さんのチョコ菓子は世界一なのだよ♪」

「それはやけるわぁ」

「じゃあもっとおいしいチョコ菓子を作ってみれば♪」

「そうするわぁ！」

と言ってルッスは走り去って行った。

「くふふ。やった。これでルッスのチョコ菓子ももっとおいしくなる♪」

「姫、そんなにチョコ好きなのか？」

「うん♪大好き♪」

「そっか♪」

それから一時間後。

今は日本へ行くための飛行機の中だ。

浅葱の格好はいつもの隊服だ。

「浅ちゃ～ん。チョコクッキー作ったわよぅ♪」

「ん。ありがと♪」

そしてサクッ、と浅葱は食べてみる。

「どう？」

「（やばい。さすがルッス。めっちゃうまくなってる・・・。まあまだ奈々さんには
及ばないけどもう少しで追いつくんじゃね・・・。ここは嘘をついてもっとおいしい
ものを作ってもらおう）おいしい、けど奈々さんにはまだまだだね♪」

「そぅ。でも次は負けないわよぅ！」

「ガンバレ♪んじゃ私は並盛につくまで寝るから♪」

そして浅葱は寝る、のではなく本当は精神世界へと行った。

精神世界。

そこにはパイナップルヘアの少女が2人いた。

まあ片方は後ろ髪を腰あたりまで伸ばしているが。

「昨日ぶりだね♪クローム♪」

「うん・・・。・・・昨日ぶり、浅葱様」

「さて、と。今日は私が今乗ってる飛行機が日本につくまではこっちに
いられるけどクロームは？」

「・・・私はいつまででも大丈夫。浅葱様、日本に来るの？」

「うん。あ、でも恭弥に風紀委員の書類たくさん押し付けられそうだな。

でも顔出さなかったら次会ったとき、殺される。ゴメン、しばらく、

というか現実で初めて会えるのは争奪戦のときかな」

「・・・忙しいんだね。あれ、でもなんで争奪戦のこと・・・」

「くふふ。知ってるよ。クロームは沢田綱吉側の霧の守護者じゃん？」

「・・・うん。私は骸様の変わり。なんで浅葱様は、知ってるの？」

「私がＶＡＲＩＡ側の無の守護者だからだね♪」

その言葉を聞いてクロームは驚愕の表情を見せる。

「・・・え!?」

「あ、まだ言ってなかったもんね。ゴメンゴメン♪」

「・・・なのに、私と仲よくしていても、いいの?」

「いーんだよ♪私は楽しいんだから♪さて、と。こっちの霧は結構強いからねー。

クローム、修行つけてあげよっか？」

「・・・そんなことして、いいの？」

「いいのいいの。だってマーモンとも時々幻覚勝負してるし。何よりクロームは親友、ってやつじゃん♪」

「／／／・・・あり、がとう」

「ん。とりあえず私が有幻覚と幻覚を混ぜて何十個かのチョコ玉を創るから、

それを有幻覚と幻覚、つまりは実体のものか、幻覚かを分けてみてよ。チョコは

おいしいの創るから有幻覚は食べていいよ♪でもただの幻覚のほうは唐辛子味

だから♪制限時間はチョコが溶けるまで。オッケ？」

「はい！」

「んじゃ、3、2、1」

パチンッ、と毎度おなじみ指パッチンで浅葱とクロームの前に何十個ものチョコ玉が現れる。

それから10分ほどたってから。

「終わ、った」

疲れているクロームがいた。

「ん。お♪全部正解。すごいじゃん、クローム♪。ところでチョコ嫌だった?」

「ううん。どうせなら浅葱様と一緒に食べたくて・・・」

「！、ありがとう♪じゃあ一緒に食べよう♪ちなみに有幻覚と幻覚の違いを

説明しとくよ。有幻覚ってのは存在して、ハンマーを創ったのならそれで

破壊された痕跡は残るけどハンマー自体は術の終了で消える、つまり有幻覚で

及ぼした影響は残るんだ♪チョコがおいしいって痕跡は残る♪」

「？」

「つまりは、消えるとしても、思い出は残る、ってことさ♪」

「／／／・・・ありがとう、浅葱様」

そう言ってクロームは微笑んだ。

「くふふ。じゃあそんなクロームに１つアドバイスしてあげよう♪」

術師と

戦うときには周りを信じちゃダメだよ、自分の世界を、景色を、現実を、

自分の常識を、それだけを信じるのさ。たとえ自分の常識を超えてきても

それは全て偽りだ」

「はい」

「そうすれば相手の幻術にかからない。それでもかかった時は、相手の力量に

完敗した、ってことだね。ま、それが有幻覚なら終わりだけど、クロームには
私の力が宿ってるから有幻覚は確実に見分けつくだろうけどね♪」

「わかりました」

「まあクロームも並の術師レベルなら簡単に倒せるぐらいには強いよ♪」

「・・・ありがとう」

そしてクロームはまた笑った。

「くふふ。じゃあ食べようぜ♪そしてまた遊ぼう♪今日は、そうだな。

有幻覚で人生ゲームでも出してやる？」

「うん！」

そして浅葱とクロームはたくさん遊んだのだった。

標的３９　並盛到着、来る！

ぱち、と浅葱は目を覚ます。

浅葱はベルにおんぶされて、屋根の上を移動していた。

周りにはレヴィ以外が一緒に移動していた。

「あれ？ここどこ」

「お、姫起きた？もう並盛だぜ♪姫どう起こしても起きねーの」

「あー、（クロームと人生ゲームめっちゃ盛り上がったからね、そりゃ気づかないや）ゴメン」

「ししっ♪別に謝んなくてもいーし。姫背負ってても全然重くねーし」

「それって、チビだから軽い、ってことじゃないよね？」

浅葱から軽く殺気が発せられる。

「違う違う」

「ふーん。ならいいや。ところで今どこに向かってるの？」

「レヴィんとこ」

「うわ、もしかしなくてもムッツリ1人で全員殺そうとしてる、とか？」

「そ」

「殺していいかな、あのムッツリ♪」

「う〝お〝お〝おい！！！そろそろ着くぞお〝」

「あ、ベルー、眠いからおんぶされててもいい？（最近ずっと寝な

いで

精神世界でクロームと遊んでるから寝てないんだよ・・・）」

「いいぜ♪」

「ありがと♪あ、最初は私はフード被って正体隠しとこっかな」

「オレはいーや、ばれても。ししししっ」

「まあ髪色は違うけどすぐ気づくよね、多分。その反応も楽しそう♪」

と言って浅葱はベルの背中におぶさりながらフードを深く被ってベルにしがみつく。

ベルもそれがわかり、支えていた手を離す。

それでも普通に背中にしがみついていられる、恐るべし浅葱である。

そしてレヴィが1人、敵を襲っているところに着く。

そこでベルが口を開く。

「待ったレヴィ」

「1人で狩っちゃダメよぅ」

「獲物は仲よく、しししっ」

「事情が変わったよ。どうやら他のリングの守護者もそこに」

ここには、ツナに山本、獄寺、ランボ、フゥ太、イーピン、リボーン、馬羅がいた。

「鈴!?」

ツナがベルを見つけて声を上げる。

「ししっ♪それ偽名だし♪」

「んなー！鈴って、ロン毛の仲間だったのー！？」

それにリボーンが口をはさむ。

「てめえがＶＡＲＩＡだとすると、浅葱もＶＡＲＩＡなのか？」

「さーな♪」

「う〝お〝お〝お〝おい！よくも騙してくれたなあ〝！！！」

「うわああ、でたああ！」

ツナは悲鳴を上げる。

「うおお〝お〝い！雨のリングを持つのはどいつだあ！！！」

それに山本が答える。

「オレだ」

「三秒だ、三秒で三枚に下ろしてやるぞお゛！」

そこでもう1人現れる。

「のけ」

と言ってスクアーロをどかしてＸＡＮＸＵＳが現れた。

「でたな、まさかまた奴を見ることがあるとはな、ＸＡＮＸＵＳ」

リボーンが呟くとＸＡＮＸＵＳがツナをにらみつける。

「ひいいっ」

「きゃあ！」

にらまれたツナと、実際ににらまれた訳でもない馬羅が尻餅をつく。

「沢田綱吉」

そう一言言ってＸＡＮＸＵＳは憤怒の炎を使おうとする。

そこに工事で使うピッケルが飛んでくる。

それにいち早く気づいた浅葱がベルの肩を支えにして軽々とした動きで飛んできたものを

蹴り飛ばし、着地する。

すたっ。

蹴り飛ばされたピッケルは飛ばされた方へと飛んで行く。

ぱしっ、と飛ばした本人のボンゴレファミリー門外顧問沢田家光が掴む。

「ちっ、そのまま刺さればよかったのに」

浅葱はぼそっ、と呟く。

「ししっ、姫、聞こえてんぜ♪」

「んじゃ今のは聞かなかった、ってことで♪」

そしてピッケルを蹴り飛ばした浅葱はベルの背後にいたため気づかなかったのか

ツナがここで叫びを上げる。

「んなーーー！子供ーーー！？」

「子供じゃないんだけど♪」

浅葱はにっこり笑う。

まあフードを被っているので口元しかわからないのだが。

「ひい！すみません！って、あれ・・・？もしかして、浅黄？」

その言葉に浅葱の口端がまたあがる。

「だーから、浅黄じゃなくて本当は浅葱だって♪」

と言って浅葱はフードをはずす。

「白石さん!?」

すると馬羅が声を上げる。

「な、何で、し、白石さんが、そちらに、い、いますの？」

「黙ってれよ。いかにもウザい性格な馬鹿羅。ああ馬鹿羅だと馬鹿って言葉がかわいそうだね」

「そ、そんな「いいから佐川馬羅は黙っていてもらえませんかね？」！」

敬語で、殺気を混ぜて浅葱は言う。

「ふあーあ。てゆーか私寝ててもいい？マジ眠い」

そして浅葱はふらっ、と倒れる。

「おっと」

ベルがそれを支えて、今度はベルが支えておんぶする。

「ったく、こんなとこで寝んな、っつの」

「全くだね」

それを見たツナが声をあげる。

「ってか、浅黄、じゃなくて浅葱って敬語が外れるとあんなんだったんだ・・・」

その後には門外顧問がリング争奪戦の説明をして、チェルベッロがその審判をする、

という話があったのだった。

標的３９　並盛到着、来る！（後書き）

感想もいつでも待ってます♪
というか一行でもあればうれしいです♪

標的４０　並盛の殺し屋探し、来る！

翌日正午。

またしても浅葱はむくり、と起き上がる。

「んー。これでしばらくは寝なくてもオッケーだね♪」

そう言って下駄と着流しの上にＶＡＲＩＡのコートを羽織った格好になる。

着流しの柄は浅葱が着ていた霧みたいな柄のTシャツと同じだ。

「ふあーあ、今日は何をしようか・・・ん?」

浅葱がテーブルを見ると手紙が置いてあった。

『浅葱へ

今日はリング争奪戦の時刻までは自由時間だってさ。

マーモン』

「へー。でも争奪戦がレヴィとかだったら見たくもない・・・。しかも

ルッスだとしても多分きもいし・・・」

浅葱は沈黙する。

「うん。きっと創無戦は後の方かな。多分、いやいやきっとそうさ♪って訳で

恭弥からかってこよっかな♪クロームは居場所聞いたけど、ま、争奪戦で会えば

いっか。毎日クロームに次の日の争奪戦は誰かも教えてもらえばいいし。それに、

今クロームと会ってもムク兄は何かクロームのとこに今いないとか言ってたしな・・・」

「あ、ベルと一緒に遊びに行こう♪」

そうと決まったら浅葱は走ってベルの部屋に行った。

コンコン。

とノックするとベルの声が返ってくる。

「誰？」

「私、浅葱だよ♪」

するとベルが部屋から出てくる。

「おはよー、どっか遊び行こうぜ♪」

「おはよ♪いいけどどこ行く？」

「んー、ベル何かやりたいことないの？」

「あ、そーいやまだ並盛の殺し屋殺しやってなかったな」

「んじゃそれにしよう♪」

そう言ってベルと浅葱は並盛の町へと向かった。

ちなみにアサットは浅葱の首に巻きついて寝ている。

「さて、と。どこに殺し屋いると思う？ベル」

「わかんね。何か知らねーの？姫は」

「むー、あ、前並盛めぐりしてたときアサリ道場ってそれなりに大きい道場が

あったんだけど、綺麗なのに使われてなさそうな雰囲気だったんだよ。そこが

殺し屋の道場だったり、しないかな？」

「ししっ、一応行ってみっか♪」

「うん♪」

そして浅葱とベルはアサリ道場へとやってきた。

「おーい、誰かいるならでてこーい！」

浅葱が呼びかけてみる。

・・・。

しかし反応は無い。

「チッ、でて来ないならけり破るぞー、3、2、1、はい、0ー♪」

ドオンッ。

という効果音とともに浅葱は蹴り破る。

そこにいたのは山本だった。

道着で真剣を持って的の前で構えている。

集中していて周りが見えなくなっているようだ。

そして山本が一息吐き出し動いた途端、的が崩れ落ちる。

スパンッ。

「おおー、ここって武の道場だったんだねー」

その声でやっと山本は気づく。

「なっ、浅黄と、ＶＡＲＩＡの！？」

「今気づくとか戦場だったらすぐ死んでると思うよ。それに私の名前は
白石浅黄じゃなくて六道浅葱ね。あとなんでベルはＶＡＲＩＡの！？なの？

一応ベルもここに一ヶ月ぐらい前までいたのに。まあもうベルは

在籍してないけどね♪」

「あ、すまん。でも、何でＶＡＲＩＡがここにいるんだ？」

「暇つぶしに殺し屋探してたんだし♪」

「そしたら武を見つけた、って訳さ♪」

「へー、てか殺し屋なんてこの辺にいんのか？」

「さあ?並盛の殺し屋って、でもいたとしても恭弥に全員咬み殺されてそうだよね・・・」

「ありえるし・・・」

その言葉で浅葱とベルの表情が心なしか沈んだ。

「あ、じゃあ折角だし親父の寿司食べてけよ。きっと美味いぜ♪」

「すし？」

「スシ？」

浅葱とベルが呟く。

「じゃあ行ってみようぜ♪どうせやることなくなっちゃったし♪」

「姫が言うなら行くか♪ししししっ♪」

「んじゃあね、一応がんばれよー、武♪」

そして浅葱とベルは山本の父が経営する寿司屋へと歩いていく。

「ってか、敵に何でガンバレって言ってんの？」

「んー、気分？」

「ま、姫らしーな♪」

竹寿司。

「いらっしゃい！お二人さんかい？」

店に入った途端に大声がかかる。

「ん。２人です」

そして浅葱とベルはカウンター席の端に座る。

「んじゃとりあえずおすすめもらえます？ベルもそれでいい？」

「いーぜ♪」

「へい！じゃ、竹寿司セット２つでいいかい？」

「お願いします♪」

そして武の父親らしき人は着々と寿司を作っていく。

それを見て浅葱は隣のベルに話しかける。

「あの包丁さばきすごいねー」

「ししっ♪あれくらい王子にもできるし♪」

「何おう！私にもできるし！」

それが聞こえた武の父が声をかける。

「じゃあやってみるかい？」

「「おう！」」

浅葱とベルは声をそろえて答える。

そしてまずは簡単な魚が出されたのでまず武の父が魚を捌く。

魚を投げて包丁を振ると一気が魚が捌かれていた。

「んじゃ次王子の番」

そう言うとベルは自分のナイフを取り出す。

そしてベルも綺麗に捌く。

「おお、すげえじゃねえか。譲ちゃんもやるかい？」

「譲ちゃんじゃないんですけど？てかやるに決まってる」

そう言うと浅葱は短刀二本を逆手に持って魚を一気に二匹投げる。

「くふふ♪」

スパパパパッ。

綺麗に生け作りができあがった。

「どうだ♪」

「おお、これまたすげえな。じゃあ次はこいつでどうだ！」

そして武の父は新たな魚を取り出す。

そしてまたベルと浅葱が簡単に捌く。

それを見にいつのまにか人が集まっていた。

そして大方魚が無くなり、観客もいなくなったころ、ベルと浅葱はお土産として

寿司セットをもらって帰ることになった。

「って、時間やべーじゃん」

ベルと浅葱の2人は寿司を片手にアジトへの道を歩く。

「ベル、私はしばらく遊びに行ってるよ。皆にも言っといて♪」

「んじゃ姫は戦い見ねーの？てか姫の番きたらどーすんだよ」

「だってレヴィとかルッスのなんか見てもつまんないし。それに多分創無戦はまだだと思うよ」

「？」

「ま、勘だけどね♪」

「勘かよ」

「大丈夫だよ。それに私がいなくても皆勝つっしょ？」

「ししししっ♪ま、そーだな♪じゃあ伝えとく」

「ありがと♪がんばってね、ベル」

「当たり前♪」

そう言って二人は別々の方向へと歩いていく。

そして浅葱の勘は当たり、創無戦が行われるのはかなり後半なのだった。

標的４１　不機嫌委員長、来る！

浅葱はベルと別れた後、行くあてもなくふらふら歩いていた。

なぜか山道を歩いている。

「んー。どこに行こっかなー。なー、アサット？」

「きゅう」

［このちかくにかわがあるぞ。それにひともなんにんかいるぞ］

「んじゃとりあえずそこに行ってみようか♪」

と言うと浅葱は歩いていった。

歩いていると川が見える位置にやってきた。

そこには確かに人影があった。

「とうっ♪」

と浅葱は掛け声を言うとジャンプで一気に川のところに跳ぶ。

しゅたっ。

「着地成功♪」

浅葱はＶＡＲＩＡのコートと着流しの袖をたなびかせて着地する。

ちなみに羽織ってるだけのコートが落ちないのは帽子のところに紐を通して前で縛っているからだ。

着地すると同時にいきなり声がかかる。

「なっ！？その服はＶＡＲＩＡの」

「ん？」

浅葱が振り向くとそこにはキャバッローネファミリー１０代目ボス、ディーノと

その部下であるロマーリオがいた。

「え、と。誰？」

「は？」

ディーノはすごい警戒していたのに偶然ここに来たという反応をされてしまい

素っ頓狂な声を出す。

「だから、誰って聞いてるんだよ♪ＶＡＲＩＡのこと知ってるならマフィアってことでしょ」

「オレはキャバッローネファミリー１０代目ボス、ディーノだ」

「へー、私はＶＡＲＩＡ幹部でＶＡＲＩＡ無の守護者の六道浅葱だよ♪」

「何しに来たんだ?」

「ふらふら暇潰せるものはないかなー、と歩いてたんだよ♪」

「じゃあオレ達を襲う気はないんだな」

「うん♪まあ戦いなら大歓迎だけどね♪」

「じゃあいくつか質問に答えてくれるか？」

「ん、いーよ♪まあ答えるかは気分しだいだけど♪」

「哀れな双子、ってのは何なんだ？」

その言葉に浅葱がビクッ、とする。

「何で、知ってるの？」

「リボーンに聞いた」

「くふふふふ、ふふふ」

「？」

「あーあ、あの時リボーン殺しとけばよかったかなあ？」

浅葱の言葉には殺気がこめられていた。

ゾクッ。

ロマーリオとディーノの額には冷や汗が流れる。

「ま、いっか♪でも今は答える気はないな。ムク兄にも了承取ってないし？」

「ムク兄ってのは、六道骸だよな？」

「そーだよ♪あー、会いたいなー・・・」

そう言うと浅葱は寂しげな目をする。

「仲、良かったのか？」

「うん♪当たり前さ、六つの記憶の中からずっと一緒にいるんだ。
でもくだらない

意地を張って、ムク兄と離れてしまった・・・」

「後悔してんのか？」

「いんや、そのおかげでベル達とも会えたしね。まあレヴィは死ねばいいけど♪」

「そーか」

「うん♪」

そして浅葱は満面の笑みを見せる。

ガサッ。

後ろの草陰から物音がする。

すると後ろの草陰から殺気が放たれ、ほぼ同時に浅葱に何かが襲い

掛かる。

ガキイインッ！

「あり？恭弥じゃん♪お久ー♪」

それは雲雀だった。

雲雀のトンファーと浅葱の短刀が競り合っている。

「なっ、てめえら知り合いだったのか！？」

それに浅葱が答える。

「うん。居候してた♪」

「！」

「ねえ、僕のこと忘れてない？」

と言うと同時に雲雀の回し蹴りが放たれる。

それに浅葱も足で防御する。

「くふふ♪忘れてないって♪それで、何で恭弥はそんなに不機嫌なのかな？」

確かに雲雀は途轍もなく不機嫌であった。

それにディーノが口出しする。

「そうだぜ！さっきまではそんなに不機嫌じゃなかっただろ！」

「僕がイラついているのは浅黄、いや浅葱のせいさ」

「？何かしたっけ？」

「ふざけないでよ。あの置手紙は何？ふざけてるの？いきなり消えて。

しかも風紀の腕章も置いていって。並中の風紀委員は休日だろうがなんだろうが学ランで腕章をつける決まりだよ」

「えー、てかこれ隊服だから最低限コートは着なきゃなんだけど」

そう話す間にも浅葱と雲雀の攻防は続く。

「じゃあそのコートにつければいいでしょ」

「あ、なーる」

と浅葱が言うと雲雀が風紀の腕章を浅葱に投げる。

「着けて」

「はいはい、っと♪」

そして浅葱は左袖のコートに腕章をつける。

「あー、これ絶対スクアーロに大声でなんだこれはあ！とか言われるんだけど。

てか今までも休日絶対つけてるわけじゃなかったんだけど」

「知らないよそんなの」

そしてまた攻防が始まる。

しかし2人ともしゃべりながらなので本気ではないようだ。

「それにあの置手紙は一体何なの」

「置手紙は置手紙だよ♪」

「咬み殺してほしいの？」

「戦いなら大歓迎♪」

「いいよ、じゃあ咬み殺してあげる」

「くふふ♪」

そしてお互いに一度距離を取って構える。

雲雀はトンファーを。

浅葱は逆手に短刀二本を。

「ちょ、ちょっと待てお前等！」

そこにディーノが口を挟むが。

「「うるさい」」

一刀両断されたのだった。

そして2人の戦いが始まる。

標的４２　雲雀対浅葱、来る！

ガキイッ。

雲雀がトンファーで殴りつけるが浅葱に短刀で受け流される。

スカッ。

雲雀のトンファーの第二撃が浅葱に軽くかわされる。

「恭弥。まだまだこんなもんじゃないよね♪」

浅葱は雲雀を挑発する。

「当たり前だよ」

それに浅葱は妖しく嗤う。

「ならよかった♪」

と言うと浅葱の姿が消える。

「！」

「上♪」

浅葱は高く高く跳躍していた。

「今回は幻覚とか使わずに近接戦だけで戦うからさ、もっと楽しませてね♪」

と言うと浅葱が落下してくる。

ガンッ。

浅葱の下駄裏とトンファーが激しい音を立ててぶつかる。

「っ」

その衝撃が雲雀の腕に走る。

「くふふふふ♪いくよ♪

近接戦では現時点最強の私の技。

Ｓｏｍｍｉｔ？　ｄｅｌ　ｃａｐｏ－ｃａｃｃｉａ　ｓｔｒａｖａｇａｎｚａ．　首狩り狂想曲第一番

”Ｔｅｓｔａ－ｃａｃｃｉａ　Ｄａｎｃｅ”『首狩り乱舞』」

と言うと浅葱は短刀二本による猛攻を開始する。

雲雀は何とかそれの致命傷を避けるが小さな傷が次々とできていく。

浅葱は回転して跳んで蹴って切って斬って防御の暇なく短刀を、雲雀を斬るため、

首を狩るためにふるう。

その様は着流しの袖が裾が、コートの裾もついでに舞って、戦いではなく

踊っているようにも舞っているようにも見えた。

その姿にディーノとロマーリオは釘付けになっていた。

ギインッ！！！

そして一際強い音が鳴ったと思えば雲雀のトンファーが片方宙に飛

び、もう片方は

浅葱の短剣により押さえつけられていた。

そして浅葱の短剣が雲雀の首に突きつけられている。

「くふふふ♪私の勝ち、だね♪」

そう言った浅葱は息切れしていた。

「すごいな。本当に舞っているようでしたぜ、ボス」

「ああ。すごい綺麗だった、な」

「くふふふふ♪ならうれしいな♪でも、やっぱこれ恭弥レベルだと本気で使うから疲れる」

と言うと浅葱は倒れる。

ふらっ。

しかし地面にぶつかる前に止まる。

雲雀が止めたからだ。

「全く、武器を飛ばしたりするだけでその後にすぐに倒れたら勝ちとはいえないでしょ」

そして雲雀は近場に浅葱を優しく寝かせる。

それにディーノは絶句する。

あの雲雀が他人に優しくしたからだ。

「さて、さっきの続けようよ」

すると雲雀はさっき飛ばされたトンファーも拾ってディーノに向かって振り下ろす。

しかし浅葱につけられた傷のせいで少しふらふらしている。

「って、おい！いきなりかよ。ロマーリオ、そいつ見張っとけ！」

といいながらもディーノは雲雀に鞭で攻撃する。

「へい！ボス」

そしてディーノと雲雀の戦いは続く。

そして数日後。

浅葱も最初はディーノとロマーリオに警戒されていたが日が経つともう警戒は
とけていた。

そんなある日。

今日も浅葱と雲雀が戦ったりディーノと雲雀が戦ったりしながら移動していた。

その日の夕方である。

とうとう雲雀にリング争奪戦のこと、それが並中で行われていることを知られてしまった

のだ。

そして並中のことを知った途端、雲雀の周囲が極寒となった。

「浅葱はそれを知ってたの」

もう疑問系でもなく確信である。

「知ってたよ♪」

「なんで言わないの」

「だって言うのめんどいし」

「それは風紀委員としては粛清に値するよ」

と言うと雲雀はトンファーを構える。

浅葱のＶＡＲＩＡコートの左袖には風紀の腕章が巻かれている。

「くふふ♪私を咬み殺すより並中を荒らしてるやつを咬み殺したほうがいいんじゃないの？」

それを聞いた雲雀はトンファーをしまって後ろを向く。

「行くよ。浅葱も風紀委員なんだからついてきて」

「はいはい、っと。ディーノじゃーに♪」

と言うと浅葱と雲雀がすごい速さで並中へと走っていく。

「って、待て！俺も行くからな！ロマーリオ、行くぞ！」

「へい！」

と言葉を交わすとロマーリオとディーノも走っていった。

標的４３　嵐戦後、来る！

浅葱は今雲雀が並中の玄関でレヴィ雷撃隊を倒しているのを見ていた。

「ねー、恭弥、こいつら倒しちゃったら私が後で愚痴愚痴言われそうなんだけど。

まあレヴィの部下だからどうでもいいけど」

「知らないよそんなの。ていうか浅葱は僕とこの草食動物達どっちの見方なの」

「んー。どっち、ね・・・。そうだね。ベルやスクアーロ達は私にとって
大事な人だからね。まあレヴィは違うけどね♪」

「・・・」

雲雀は黙って浅葱の話を聞く。

「でも恭弥も私にとっては大事だからね♪今この場でいうならこいつらはレヴィの

部下だから恭弥の見方かな♪何より風紀委員だしね♪」

「そう。じゃあ邪魔しないでよ」

「それは嫌♪どうせなら私もレヴィ雷撃隊倒してやんぜ♪」

そう言って浅葱は走り出す。

浅葱の目の文字は四になる。

骸に比べたら全然力は強くないが少しは強くなるためだ。

今回浅葱は素手で戦うようである。

ちなみにアサットは浅葱達が森にいるときにどこかへ消えた。

アサットは昔エストラーネオの実験体だったため外の世界が珍しく

度々外を放浪するのだ。

「待ちなよ」

そう言って雲雀も走り出す。

「咬み殺すよ」

「くふふ♪やれるものならやってみなさい♪」

そう浅葱が挑発すると雲雀が浅葱にトンファーを振り下ろす。

けれど走りながら戦いながらでもレヴィ雷撃隊は2人の手によって次々倒されていく。

そしてついにツナ達がいる階につく。

「お、この階じゃね♪」

「何油断してるの」

ブオッ！

雲雀のトンファーがものすごい速さで振り下ろされる。

「あ、やべ」

と言うと浅葱はすばやく短刀を出し防御する。

「あーあ、素手で勝てるかな、と思ったのにー」

「むしろ負けさせてあげるよ」

「くふふ♪それは無理♪」

というと浅葱は回し蹴りを最高の力をこめて放つ。

ガンッ。

しかしそれはトンファーに防御され力が拮抗する。

「私にはこんなこともできるのだよ♪」

そう言うと浅葱は足に黒と藍の炎をまとわせてその推進力で一気に力をこめる。

「っ」

それに耐え切れず雲雀は吹っ飛ばされる。

ドガアンッ！

「なっ、え!?ヒバリさん!?」

ツナの声が聞こえる。

ツナがいるであろう方向に浅葱は歩いていく。

「くふふふ♪お久ー、ツナ♪あと生きてる?恭弥♪」

「咬み殺す」

雲雀が浅葱に飛びかかる。

ガンッ！

浅葱は短刀で防御する。

「おおう、ちょいストップ、恭弥」

「？」

「並中には何しに来たんだっけ？委員長♪」

「！」

それを聞いた雲雀はトンファーをとりあえず降ろしてツナやＶＡＲＩＡの方を向く。

「並中への不法侵入及び器物破損。連帯責任で、ここにいる全員咬

み殺すから」

「んなーーー！争奪戦のことで来たんじゃなかったーーー！この人、校舎壊されたことに

怒ってるだけだーーー！？」

「さて、と。私も一応並中風紀委員だ。だからムッツリとかムッツリとか

ムッツリの首狩るのは任せておけ♪恭弥♪」

「僕の獲物取らないでよ」

「他にもたくさんいるじゃん♪」

「う〝お〝お〝おいい〝！！！どういうつもりだ浅葱い〝！」

「どうもこうもない。私はただ遊んでたら恭弥達にあって、今は風紀委員
として来ただけだよ♪」

そう言うと浅葱は実に愉しそうに嗤う。

「てめえ〝はただ楽しんでるだけじゃねえかあ！！！」

「ま、いーじゃん」

「貴方方は、沢田氏側のリング保持者とＶＡＲＩＡ側のリング保持者ですか。

でしたら、このような行為をされては」

そこにチェルベッロが口をはさむ。

「よくも、オレの部下を」

そしてレヴィが言う。

「守護者同士の死闘は」

そこでチェルベッロがレヴィに吹っ飛ばされる。

「黙れチェルベッロ！こいつはただの侵入者だあ！」

と言うとレヴィは雲雀に向かって背中のサーベルを二本抜いて向かってくる。

「くふふ♪ムッツリの部下を倒したのは私もだよ♪」

と言って浅葱が雲雀の前に出て防御する。

ガキンッ！

「貴様！我等に反旗を翻す気か！」

「バーカ♪私がマジで殺そうとするのはムッツリだけさ♪死ね」

浅葱がレヴィにマジのマジで回し蹴りを放つ。

炎はまとっていない。

ドガアンッ！

ズザザザザー・・・。

レヴィが吹っ飛ばされて転がっていく。

「はっ、ざまあムッツリ♪」

「何校舎壊してるの」

「恭弥だって壊してたじゃん♪」

「僕はいいんだよ」

「友達いなくなるよ？」

「友達なんていないよ」

「へー、じゃあ私って何？」

「ただの居候で、いつか絶対咬み殺す」

「咬み殺されるようなことしたっけ？」

「したよ。六道骸と浅葱は絶対にいつか咬み殺す」

「え～、ムク兄と同レベル？てかムク兄知ってたの？」

「第一六道骸と君の関係も君からは何も聞いてないよ。風紀委員失格だね」

「失格、てことは書類仕事もうしなくていいのか♪」

ブチッ。

何かが切れる音がする。

「やっぱり浅葱はここで咬み殺す」

ガンッ。

雲雀のトンファーを浅葱はまたまた短刀で防御する。

「えー、また?どうせ負けるんだから諦めなよ」

「僕がいつ負けたっていうのさ」

ブチッ。

何かが切れる音がする。

「その負けず嫌い直したほうがいいよ？マジで。イラッとくるから」

と言うと浅葱はスクアーロのほうに目を向ける。

話進めといていいよ、という合図である。

「さて、第何ラウンドかもうわかんないけど、始めようか♪」

そう言うと浅葱と雲雀がまたしても戦い始める。

標的４４　山本の成長、来る！

雲雀と浅葱はツナ達が話している間も黙々と戦っていた。

ガキイッ。

ガンッ。

スカッ。

ガンッ。

それはあるものの声によって止められる。

「いい加減にしろって。もう話終わってるぜ？」

山本だった。

「邪魔だよ」

雲雀が言って山本にトンファーを振り下ろそうとする。

パシッ。

それを山本は流れるような動きで雲雀の背後に行き、トンファーを掴む。

「邪魔するものは、何人たりとも、咬み殺す」

すると雲雀が不機嫌オーラを丸出しでトンファーからは仕込み鉤が飛び出ている。

それをまたあるものが止める。

「いい加減にしやがれ」

リボーンが雲雀の前にいきなり立って止める。

浅葱はリボーンを初め殺気の含んだ目で見たがそれは一瞬で異常なほど冷たい目になった。

それにリボーンは気づくがまずは雲雀のことが先だと気づかぬふりをする。

「おい、ヒバリ。ここで暴れちまってもいいが、でっけえお楽しみがなくなるぞ」

「楽しみ？」

「今すぐって訳じゃねえが、ここで我慢して、争奪戦で戦えば遠く

ない未来、

また六道骸と戦えるかも知れねえぞ」

それを聞いた雲雀の目つきが変わる。

「ふうん。本当かな」

それに対してリボーンがフッ、と笑う。

「校舎の破損は完全に直るの？」

雲雀がチェルベッロに話しかける。

「はい。我々チェルベッロが責任を持って」

「そう。気が変わったよ。僕と戦る前に、あそこの彼に負けないでね」

雲雀が山本に言う。

「えっ」

「ヒバリさん」

「じゃあね。浅葱はちゃんと並中に来てよ。浅葱がいる間は他の委員の分も
やるおかげで風紀委員の書類の総量が増えたんだよ」

「へー、それで書類が溜まっている、と？」

「来なかったら君の好きなチョコ菓子屋さん取り壊すから」

「なっ、ざけんな！並森のチョコ菓子屋は奈々さん、ルッスに続いて三番目に
美味いんだよ！それを取り壊す、なんて人間のすることじゃないぞ！」

「知らないよそんなの」

「あー、もー、はいはい。行けばいいんでしょ」

浅葱は半ば自棄になって言う。

浅葱は書類仕事は嫌いなのだ。

その言葉を聞くと雲雀は去っていく。

「なんていうか・・・。てゆーか、あのヒバリさんが戦いを止めた」

「それだけヒバリにとって、骸から受けた屈辱はでかいんだ」

「つーか骸って、そんな約束して、大丈夫なのかよ!?」

「さーな」

「さーなってオイ・・・」

「う〝お〝お〝おい！刀小僧！さっきの動き気に入ったぞお〝！！！これで

貴様の勝つ可能性は０％から、やはり０％だあ〝！！！」」

「明日、スクアーロが勝てば、それで勝負が決まる」

「そして、貴様等の最後だ」

いつ復活したのかレヴィが言う。

そしてスクアーロが窓枠に乗って言う。

「首を洗って待つがいい」

それを言うとスクアーロは窓枠から外に向かって消える。

そしてスクアーロの高笑いが響く。

いつの間にかチェルベッロも消えていた。

標的４５　浅葱の過去、来る！

ＶＡＲＩＡ達がこの場を去っても浅葱は一緒に去らずにこの場に残っていた。

浅葱は隅で体育座りで何かぶつぶつ言っている。

「なんだよ恭弥。バーカバーカ。私が風紀委員で書類仕事したのは恭弥が押し付けたからだし。てか契約しちゃったからだし。しかも他の人の分やったのは早く帰って精神世界とか行きたかったし寝たかったからだし。それが何？私が他の人の分もやって早く帰ってたせいで風紀委員の書類の総量が増えた、だあ゛？それで私にその増えた分もやれ、と。くふふふふ。ざけんな。私は殺しとか戦いとか遊びとか睡眠とか適当に契約した人に憑依して一日ばれずに乗り切るぜ♪とかは好きだけど書類は嫌いなんだよ。マジで。あー、書類

なんか全部燃やしてやろっかな。てか何のためにここに来たんだっけ?あ、そうだ。風紀委員としてだ。だって風紀委員の契約書には一生うんたらかんたらって書いてたからね。契約は守らなきゃだよ。じゃなくて、それで、あ、そうだ。リボーンだ。リボーンなんか死ねばいいのに。哀れな双子って呼び名は自分で調べてわかんなかったらすぐ諦めると思ったのに。何口外してんだよ。これが広まったらどうしてくれんの。マジでさあ。この世界でもそう呼ばれる?また、またしても!?ずっと、ずっとどの世界でもそう呼ばれてた。哀れな双子?哀れ?勝手に哀れんで。そのくせ何もしない。私達は。ずっと苦しんだのに。天界道ですらも。その時の呼び名でまた呼ばれる?ふざけんな。この原因は何だ?聞かれた。口外された。リボーンだ。よし、殺してやる」

浅葱はこれを一呼吸もせずに言い終わるとすくっ、と立ち上がる。

そこにはさっきまでいなかったディーノとロマーリオがいた。

「どうやらＶＡＲＩＡと入れ違いになっちまったようだな」

「ここにいるよー♪ＶＡＲＩＡ♪」

そこに浅葱は口をはさむ。

「なー！浅葱帰ってなかったの？」

ツナが聞く。

「うん♪リボーンを殺すために」

最後のところで浅葱は本気の殺気をこめる。

その場にいたものは誰もが冷や汗を流して動けない。

応援に着ていた馬羅はもう気絶寸前である。

そしてリボーンが口を開く。

「なぜ、だ」

「哀れな双子」

浅葱はそれを忌々しそうに呟く。

「!?」

「私はそれが肝試しの時に聞かれた時、聞いた者は全て殺してしまいたかった」

「・・・」

「でもそれをやるとまた復讐者に捕まりそうになりそうだからね。止めた。

もう復讐者に渡せる情報もないしね。それを追求されるのも嫌だから動揺も隠した」

そこで一度浅葱は言葉を切る。

そして闇しか映さない瞳で言う。

「それを口外された」

そして浅葱の殺気がより一層強くなる。

「まあ私もそれを他人に言うな、とは言わなかった。けど、けどさ、私は・・・」

皆黙って浅葱の言葉を聞く。

「また、この世界でもその名で呼ばれたら、今更その名で呼ばれたら、

もう、嫌なんだよ。ムク兄の、隣の子のあんな辛そうな表情を見るのは、

もう嫌なんだ」

そこでリボーンは口を開く。

「よくわからねえぞ、オレ達には。何で嫌なんだ?それにこの世界でも、

とはどういう意味だ?隣の子ってのも誰のことだ?」

「くふふ、ふふ。隣の子、とは、ムク兄と私にまだ名前が無かったとき私は

ムク兄のことをそう呼んでいた。世界、とは前世の記憶のことだよ。
私と

ムク兄には六つ前の前世までの記憶がある。死後の世界のね。そこ
では私達は

いつも迫害され、差別され、生を否定された。いわゆる天国という
天界道で

すらも。その記憶の中での呼び名、ですよ。哀れな双子、とは。で
も哀れ

とか言ってもあいつらは私達を蹴落とした。迫害した。差別した。
否定した。

その名で呼ばれたらそれが嫌でも思い出してしまう」

「っ！」

ツナは言葉も出ない。

「くふふ♪少し話しすぎたね。今のは忘れてください。それでは」

と言って浅葱は消える。

その場には言葉も出ず、立ち尽くす者達が残った。

標的４６　浅葱の至福、来る！

浅葱は並中から出てから並盛をふらふら歩いていた。

「あーあ、めっちゃ取り乱しちゃったし・・・。明日はスクアーロと山本、か。

まあいいや。明日は書類仕事を終わらせたらそのまま寝ちゃおう。でもどこで寝るか」

浅葱はそこで一度止まり考える。

「あ、奈々さんのお菓子食べに行こう！んでついでに泊めてもらっちゃえ♪」

と言うと浅葱は走り出す。

ピーンポーン。

浅葱はツナの家のインターホンを押す。

するとすぐに出てくる。

「ツッ君？あら、浅葱ちゃんじゃない！どうしたの？」

「奈々さんのお菓子が食べたくて。ついでに今日泊めてもらえます？」

「あらあら、いいわよー。今お風呂用意するわね」

「ありがとうございます」

「その間にお菓子作っておくわね」

「ありがとうございます♪」

そう言って浅葱はツナの家に入っていく。

浅葱がお風呂から出てくるとお菓子がもう出来ていた。

「お風呂ありがとうございました。あ、今日はチョコマフィンですか♪」

浅葱は服は全てＶＡＲＩＡが泊まっているホテルにあるのでとりあえず寝る時用と

奈々に貸してもらったパジャマを着る。

これはおそらくツナの物だろう。

ツナの物でさえもぶかぶかである。

「さ、一緒に食べましょう」

奈々が浅葱用にコーヒー牛乳も作って食卓テーブルに座る。

「では、いただきます♪」

もふっ、と浅葱はチョコマフィンを食べる。

チョコマフィンの中にはチョコチップが散らばっていた。

「あうー、美味いー♪今この瞬間が至福だね♪」

「それはよかったわー」

と言って奈々も食べる。

そうして食べていると誰かが帰ってくる。

「ただいまー、ってあれ？誰の靴？」

ドタドタと誰かが向かってくる。

「おかえりー、ツッ君」

「あれ！母さん起きてたの！？」

「ええ、浅葱ちゃんが来てね」

「！浅葱！？」

今浅葱に気づいたようだ。

「むー、おふぁえりだね、ツナ。しふぁし気づくのがおふぉいんではないふぁな？」

浅葱は食べながら話す。

「あ、なんかデジャビュ。じゃなくて、何で来たの？てかそれオレのパジャマ・・・」

「んー？ごっくん。奈々さんのお菓子が食べたくなってね。それでついでに
泊まらせてもらおうと思って。んでツナのパジャマを着てるのは着替えを全て
ホテルにおいてきてしまっているからなのだよ」
「へー」
「本当にママンのお菓子を食いたかっただけか？」

「どういうことかな？リボーン」

「後で話があるぞ。食い終わったらツナの部屋に来い」

「え、リボーン？浅葱・・・？」

ツナは一瞬浅葱の名を呼ぶのを躊躇った。

その時の浅葱の目に浮かぶは完全な闇だけであった。

「ツナ、行くぞ」

と言ってリボーンはツナの部屋へ向かって歩いていく。

「ちょっ、待てよリボーン」

ツナもそれに続いて行く。

「浅葱ちゃん？」

「くふふ。何でもありませんよ。ご馳走様でした。今日もとってもおいしかったです。

それではもう眠いので寝させてもらいます」

浅葱はいつの間にか全てのチョコマフィンを完食していた。

そして席を立つと浅葱は寝るのではなくツナの部屋へと向かっていく。

ツナとリボーンは今ツナの部屋で話していた。

「てか何であんなこと浅葱に言ったんだよ！」

「じゃねーと多分浅葱は本当のことを表に出さねえだろうからな」

「・・・？つかリボーンって浅葱のこと名前で呼んでたっけ？」

「本当の名前は白石じゃねえからな。でも六道って呼んだら骸と被るだろ」

「あ、なるほど」

「こんなこともわからねえなんて、やっぱダメツナだな」

「んな！でも、あの時の浅葱の目は、闇しか本当に無かった・・・。

浅葱はまだ、何か隠してる？」

そこでここにいなかったはずの声が届く。

「くふふふふ。それが超直感、かな？ツナ」

「なっ！いつからそこに！？」

浅葱はツナの部屋のドアにもたれかかっていた。

「ついさっき、だよ。ドアが開いていたからね。ドアは閉めたほうがいいと
思うよー。機密話とかしてる時外にダダ漏れだし、寒いし」

浅葱の声はいつもどおりだったが、目は死んでいて、闇だけを映していた。

それにツナがやはり一番に気づいて声をかける。

「浅葱、大丈夫・・・？」

「だいじょーぶだいじょーぶだよ。ただ少し記憶を思い出しただけだからね」

浅葱は昔でもなく思い出でもなく記憶、と言った。

標的４７　記憶という名の鎖、来る！

「記憶？思い出じゃなくて・・・？」

ツナは聞く。

「まーね。普通なら思い出だろうけど、あれは記憶だからね。確かに私とムク兄に

ある六つの記憶は真実だよ。けど、あくまでもそれは記憶なんだよ」

その言葉にツナは?を浮かべる。

「もっとわかりやすくいいやがれ」

「要するに、私達はその世界では死んだからね」

「んなっ!六つってことは・・・」

「そう。私達には六回分死んだ記憶もある。衰弱死したり餓死したり毒死したり

殺されたり殺されたり、ね。」

「っ！」

ツナは言葉もでないようである。

「だからてめえらは世界を壊そうとか考えるのか？」

「まっさか♪私は違うよ。私はエストラーネオはもう壊したからね。
それでもう後は
楽しければいいんだよ。人生は愉しく生きなきゃ、っていうでしょ
？」
そう言うと浅葱はけらけらと狂ったように笑う。
それを無視してリボーンは問う。

「他には何を隠している？てめえは骸にも話していないことがあるんじゃないのか？」

するとぴくり、と本当に小さく浅葱が反応する。

「くふふふふ。そんなものがあったとして君達に話すと思ってんの？」

「だから変わりに骸の情報をやるぞ」

「ムク兄の情報？そんなの知ってるよ」

「黒曜の詳しい話も知ってんのか？」

今度は浅葱はわかりやすく反応する。

「知らなかったらなんだっていうの？」

「教えてやるからてめえの話も聞かせろ」

「断ったら？」

「もうママンのお菓子を浅葱が食べれねえようにするぞ」

「なんだと！どうやってやるのかは知らないけどリボーンはマジでやりそうなんだけど・・・」

するとリボーンは今度はツナのベッドの下からレオンが変化した籠

を取り出す。

「アサット！？」

中にいたのはアサットであった。

今アサットはリボーンに捕まえられて、アサットの命はリボーンに握られているも同然だ。

それにアサットは申し訳なさそうに鳴く。

「きゅう・・・」

「ごめん・・・。散歩してたらこいつに捕まえられた・・・。飴を餌にされて・・・」

「はあ、まーいいさ。飴は美味しいからね。許す。でも次からは気つけるんだよ」

「きゅう♪」

アサットは許されたのがうれしいのかうれしそうに鳴く。

「浅葱ってアサットの言葉がわかるの？」

ツナが場違いな質問をする。

「まーね。精神世界を通して繋がってるから感情ならわかる」

「へー、すごいね・・・」

「理解できてなくない？」

「そ、そんなことはないよ！？」

「疑問系になってるし。ま、いーよ。んで？先にそっちが話してよ。
一ヶ月ぐらい前に

ムク兄が何か行動を起こして大怪我負ったのは知ってる。でも何があったのかは知らない」

「何でそれだけ知ってんだ？」

「ムク兄とは今繋がりはできるだけ止めてるけど感情だけなら、本当にうれしい、

とか痛いとかいう感情ね、それは普通に流れてくるから。それが一ヶ月前には

いつもと違っていた。んで大怪我したってわかるのは私達は大怪我したら片方の

治癒力、ってか生命力?を供給して片方が死なないかぎりはほぼ死なない契約的

なのをしてるから。そして一ヶ月前にそれはたくさん行使されたから。これでいい?」

「わかったぞ。ならオレも一ヶ月前のことを話してやるぞ」

と言ってリボーンは約一ヶ月前の黒曜生襲撃事件の話だった。

数分後。

「なるほどね。ムク兄ならやりそうかもね。てかそれ私達がイタリアに帰ったすぐ後じゃん」

「そうだぞ」

「うわー、どんだけ運無いの？私は・・・」

浅葱はそう言うと体育座りで座った。

今まで立ったままだったのだ。

「じゃあ次はてめえの隠してること全部話してもらうぞ」

「あーあ、もういいよ。話せばいーんでしょ？もういいよ。めんどくさい」

浅葱は半ば自棄になっていた。

「私がムク兄に話してない話はあるけど、多分、てか絶対にムク兄は気づいていた話だよ。話したくない、ってのもあったけどもう気づかれてる

からいっか、というのと半々だね」

そう言って浅葱は薄く笑みを浮かべる。

「さて、少し記憶話をしようか。不本意だけどアサットを殺される訳にも
いかないし、話さないでツナの家立ち入り禁止とかになるのは困るしね。

奈々さんのお菓子が食べれなくなるのは嫌だ」

と言うと浅葱は一度目を閉じて深呼吸した。

次に目を開けた時に浅葱の目にはやはり光は宿っていなかった。

標的４８　報われない努力、来る！

昔、死後の世界である地獄道には１組の双子の兄妹がいました。

その双子は地獄道の最下層にいました。

そこでは暴力的な人がほとんどで、しかも幻覚に侵されているのでほぼ頭がいかれていました。

そこに子供なんていたら格好の標的です。

双子は毎日暗い狭い小屋に閉じ込められ、暴力を受けていました。

双子はお互いが傷つくのを見るのはもう嫌でした。

しかしたかが5才程度の子供には何もすることができませんでした。

しかし妹の方はもう我慢が出来ませんでした。

兄は妹以外の前では結構普通の、なんともない表情をしています。

けれど妹は知っていました。

兄は妹がいない時は辛い表情をするのです。

とっても、辛くて、痛くて、我慢して、それでも、耐え切れなくて。

それが兄は妹がいないところではあふれ出す。

でもそれを妹は見てしまった。

だからこそ、もう妹は耐え切れなくなったのです。

妹は考えました。

兄にあんな表情をさせない為にはどうすればいいか。

考えた末に1つの結論に至りました。

自己犠牲。

その名の通り、自分を犠牲にする。

それにたどり着いた日から妹は兄に自分の食べ物も半分渡すようになりました。

今までの量でも生きるのも限界だったのにそれが半分なんて限界も限界です。

そして妹はいつも受けていた暴行も自分が兄の分も受けれないか、と考えました。

そして妹は兄が寝ると、いつも自分達に酷いことを、暴行を加える者達のもとに閉じ込められている部屋から抜け出して行き、何かの文字が書かれている紙を見せました。

その頃はしゃべるだけでも死ぬ直前まで痛めつけられたので声を発さなかったのです。

紙にはこう書かれていました。

おねがいだから、となりのこをいじめないで。わたしならどんなことでもたえてみせるから。

となりのこ、とは兄のこと。

それに大人達は答えます。

ぎゃはは！そりゃあいい、兄の為に犠牲になるってか？んじゃあ存分にてめえを

ストレス解消に痛ぶってやんよ！

それに妹はこれから待ち受けることに泣きそうになります。

でも兄の為、と自分に言い聞かせて大人達をにらみつけます。

何にらんでるんだよ！？ああ？そうだ、まずは脱走した罰与えねえとなあ！

と言って大人達は妹を殴り、蹴り、と傷つけていきます。

そしてその数ヵ月後。

妹は限界まで衰弱していました。

兄もそこまでとはいかなくとも衰弱していました。

妹は自己犠牲で兄を庇おうと今まで以上に辛い思いをしました。

しかしそんな思いも大人は口約束だけで、兄にも今まで通りに暴行を続けたのです。

その数日後。

双子は五才という年齢で衰弱死しました。

こんなことが双子には輪廻転生した後も続きました。

そして七つ目の世界では、双子は今まで巡った世界で1つずつ手に入れた能力を

やっと使えるようになり、反抗する力を手に入れたのです。

標的48．5　Cooperazione．～La collaborazione～

難波壱さんの『家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！　自由な風、来る！』とのコラボ小説です！
時系列は黒曜編の前で、肝試しの前辺りです。
私の無の守護者には浅葱視点を載せて、難波壱さんの自由な風には南視点が載っています。
そいではどうぞ♪

標的48．5　Cooperazione．～La collaborazione～

浅葱は今ベルと雲雀の家の居間でお茶を飲んでいた。

「うげ、抹茶苦い・・・」

浅葱とベルは抹茶を作ってみて、飲んでいたのだ。

「だな・・・」

どうやら浅葱とベルの口には合わなかったらしい。

でも浅葱は一応飲み干す。

「あー、もうダメ・・・。でも暇だし・・・。ベルー、どっかで遊んでくる」

「んー、行ってらー」

「あ、抹茶まずくっても残しちゃダメだよー、この家の倉庫にあったの恭弥の
許可なく使ったんだし、どうせなら最後まで飲まないと恭弥が怖い」

それにベルは嫌そうな顔をする。

「うー、わかったし・・・」

「ん」

そう言って浅葱は雲雀の家を出て行く。

「さて、どこへ行こうかな♪」

そう呟きながら浅葱は歩く。

「よし、公園へ行こう♪」

そうと決まれば浅葱は少し駆け足で行く。

浅葱は公園につくとブランコに乗っていた。

そして一回転しよう、という遊びをしていた。

そしてついに浅葱がブランコで一回転する。

するとどこからか声がかかる。

「って、おい！」

しかし浅葱は華麗に着地する。

するとまた声がかかる。

「着地できたのかよ」

どうやら浅葱を心配して声をかけてくれたらしい。

「くふふ♪当たり前です♪それで貴方はなぜこんなところにいるんです？」

浅葱はその人物に敬語で言葉を返す。

「ん？まぁ、何となくかな。それにしても…骸…？いや、右目が普通だし、

左目は眼帯だし…それに女の子だろ？」

するとその人物も返事を返す。

その人物は恐らく女だろうが男と間違えそうな格好をしていた。

「ムク兄、知ってるの？」

浅葱は相手が骸の名を出したことに驚いて思わず敬語じゃなくなる。

「ムク兄…？…もしかして妹、とか？」

「おや？一発で当てるとはすごいですね。察しの通り私は六道骸の双子の妹ですよ」

浅葱は冷静さを取り戻して話す。

「双子！？」

相手の驚きように浅葱はある疑惑を抱く。

「チビ、とか思ってます？」

浅葱からものすごい殺気が放たれる。

「そんな殺気出すなっての♪骸の双子だろ？オレは風間南！骸の…

友達？仲間？

…ま、そんな感じの存在だ。オレは別にチビだなんて思ってねーよ。人間の

成長期ってのは個人差があるしな」

その言葉に浅葱は警戒を少し解く。

「ムク兄の仲間…？」

「あぁ。そんで骸の妹だから…六道、何？」

「…六道浅葱ですよ」

「んじゃあ浅葱って呼ばせてもらうぜ、浅葱も呼び捨てでいいからな。

あ、あと敬語じゃなくてもいいぜ？」

「くふふ♪ムク兄が仲間を作るとはね、でも、南ならいいかもね。楽しそうだ♪

あ、南になら変装解いてもいいかな♪」

浅葱は敬語を外して話す。

と言って浅葱は眼帯をはずして幻覚をかけていた髪も元に戻して藍色にする。

「うお、その色になったらもっと似てんな」

「まーね♪でも私が１０歳の見た目ってのは理由があるのだよ」

「理由？」

浅葱は鎖に巻かれた漆黒のおしゃぶりを取り出す。

「アルコバレーノ・・・・！」

南は驚く。

「そうさ。私は１０歳の時にアルコバレーノとなって呪いを受けた。
それは
赤ん坊になるはずだったんだけど私の中の力と反応して呪いが少し
変わったんだよ」

「そっか…。でもま、赤ん坊にならなくて良かったな」

「あー、そういう考え方もできるね。確かに赤ん坊なんかになってたら・・・」

「だろ？」

「うん♪ありがと、南♪」

浅葱が満面の笑みを見せる。

南も少し笑って言う。

「そーだ。浅葱、今から時間あるか？」

「？あるよ」

「商店街とか行って、遊ばね？」

「うん♪行こう♪」

浅葱と南は商店街を歩いてる。

「なんか見たいもんとかある？」

浅葱と南は並んで歩く。

「んー、ない。南は？」

「オレもないな。んじゃラ・ナミモリーヌ行くか！」

「お。ケーキがおいしい、って噂のお店だね♪」

「行ったことなかったのか？」

「うん。お菓子なら奈々さんの食べに行くか、おいしいチョコ菓子店が
あったからね。ケーキ屋はあまり行ってなかったんだよ」

「へー、じゃあウマイから楽しみにしとけよな！」

そしてラ・ナミモリーヌへ。

そしてラ・ナミモリーヌ店前。

「ここがラ・ナミモリーヌだぜ♪」

「どのくらい美味しいのか楽しみだね♪」

浅葱と南は嬉々として言う。

ラ・ナミモリーヌ店内。

「オレはモンブランとミルフィーユ…それと紅茶」

南がまず注文する。

「かしこまりました」

それに店員が答える。

「んじゃ私はチョコと名のつくケーキ全部♪」

浅葱のその言葉に店員は驚愕して答える。

「そ、それではチョコレートケーキ、チョコブラウニー、生チョコケーキ、
チョコロール・・・・・の13個となりますけどよろしいですか？」

「ん、オッケー♪それでお願い。飲み物はコーヒー牛乳で♪」

「かしこまりました」

店員は若干引き気味で帰っていく。

「浅葱チョコ好きなのか？つかそんなに食えんのか？」

南は引かずに聞く。

「うん♪大好きだよ。チョコがあれば生きていけるかもね♪それにチョコと

名のつくもので私が食べれない物も食べれない限界の量も存在しないのさ♪」

無駄にキリッ、として浅葱は言います。

少しの時間が経つ。

「お待たせいたしました。こちらが注文のモンブランとミルフィーユ、

それに紅茶でございます。そしてこちらがチョコレートケーキ、

チョコブラウニー、生チョコケーキ、チョコロール・・・・・

それにコーヒー牛乳でございます」

店員は台車に乗せて運んでくる。

「ん、ありがとな！」

「んじゃいただきまーす♪」

そして2人は次々と食べていく。

「むー。美味い。あのチョコ菓子屋はケーキおいてなかったからなー。」

浅葱が美味しそうに食べながら言う。

「だろー、ここのケーキはウマイんだ」

南も美味しそうに食べながら言う。

すると近くに座っていたギャル女子高生の声が聞こえる。

「そーいえばさぁ、ここにくる途中にやってたケンカどうなったんだろうねぇ」

「さぁ？あの郵便局の裏路地にある空き地のところでしょ？遠目にしか
見てないからあまり見えなかったしぃ？わかんなぁい」

それが聞こえた南と浅葱はぴく、と反応する。

「な、浅葱…聞いたか？今の」

「もっちろん♪なんか面白そうだね」

「んじゃ…行くか！」

「ん、いーよ♪でも食べ終わってからね♪」

そう言う浅葱のケーキは、もう半分くらい無くなってた。

郵便局の裏路地にある空き地。

ドガガッ！

「「うわぁぁ！」」

入り口の近くにいた二人が悲鳴を吹っ飛んだ。

「だ、誰だ！！」

「子供（ガキ）と…男？」

ビキッ。

何かがキレる音が二回した。

「誰がガキだ！私は立派１５歳なんだよ！」

「オレを男と言おうが構わないが、仲間をバカにする奴は許さねぇ」

浅葱と南が来たのだ。

「や…ヤベェぞ！コイツら！！」

「野郎共、一気にたたみかけるぞ！！」

ケンカをしていた者は皆、二人に襲いかかる。

それにも関わらず、二人は会話し始める。

「浅葱…」

「ん？なに？」

「合わせ技とか、考えね？」

南が言うと同時に、不良が二人に鉄パイプで殴りかかる。

だがそれを少し身体をずらすだけで、いとも簡単にかわす二人。

「合わせ技、いいねえ♪んじゃー南、私と契約してくんない？いいの思いついた

けど説明難しいからさ。契約したら情報送れるからね♪」

「契約？」

「憑依弾っていう特殊弾があってね。それを使えば契約した相手に憑依することが

できるのさ。それを私は使った。ムク兄も持ってるよ、もう使ってるかは不明だけど」

「へー、いいぜ♪」

「ありがと♪んじゃ簡単に説明しとくよ。私の契約方法は大鎌で傷つけること。

んで、ただ一方的に憑依したり話しかけるだけなら傷つけるだけでもいいけど、

それより繋がりを強固にするなら大鎌を刺す。刺したら大鎌で傷つける面積が

増えるから、強固になるんだよ。契約の傷は、相手が抵抗しなかったら肉体的損傷

にはならないからね。んで、繋がりが強固な契約すれば精神世界にも行けるように

なるし、互いにテレパシー、的な物を使える」

「へー、すげえな！」

と、話してる間も浅葱と南は敵の攻撃を軽々と避ける。

「ま、わざわざ敵に種明かしするのも嫌だしな。いいぜ♪」

「んじゃ契約するねー♪」

と言って浅葱は有幻覚の大鎌を出す。

「避けないでね？南」

っていって浅葱は南に大鎌を投げて心臓辺りに突き刺す。

「！？コイツら、仲間割れか！？」

「よし、今の内に！」

不良達は二人の行動に驚くも、今がチャンスだと言うように襲い掛かってくる。

ガシッ！

だが、不良の持っている鉄パイプを、一人が止める。

「あ？仲間割れ…？」

それは、南だった。

「！！？コイツ…今刺されて…！？傷一つ無い！！？」

南に刺されていた大鎌はいつの間にか霧散していた。

南に掴まれた鉄パイプを持っている者以外はゆっくりと後ろに下がっていく。

「んじゃ、浅葱…」

「うん♪」

「「首狩りと風の協奏曲第一番。
Concerto n. 1 nel vento e cacciatori di teste.
『知らぬ間に血潮舞う独壇場』
”Il sangue volante incontrastata involontariamente”」」

二人の声とほぼ同時に指パッチンが響く。

浅葱の目は一になっている。

「ゴー！南♪」

「おう！」

というと南は空中に駆け上がる。

まるで空中にも足場があるかのように。

「な、なんだ!?」

「なぜ空中に!?ってブゴア!」

セリフの途中で雑魚キャラはどこからか殴られる。

南は全然違うところにいるはずなのにどんどん違うところの敵が吹っ飛んでいく。

敵は知らぬ間に吹っ飛ばされて混乱している。

「くふふふふ♪ここが戦場なら技名通りになってますね♪」

「なっ！どういうことだ！説明しやがれ！」

「もう混乱する顔は存分に見れたし、知っていてもかわせないだろうから教えて

あげるよ。私はまず有幻覚で人が乗れるくらい丈夫なワイヤーを張り巡らす」

「オレはその上に乗って空中を駆けながら倒しまくる」

「な、なんだ、それだけ」

「じゃあその間浅葱は何をやっているでしょう?」

「何をやっているんだ・・・?」

「幻覚をかけているんだよ。南の姿が見えないように。違うところにいるように

見えるように。分身して見えるように。ほら君達の後ろにいるかもよ?」

浅葱がそう言うと敵は一斉に後ろを振り向く。

「バーカ、こっちだっつの」

実際は本当の南は浅葱の上空にずっと立っていた。

幻覚で見えないだけで。

そして南は敵の背後から次々殴って蹴って気絶させていく。

1分後にはすでに南が全部倒し終わる

地面には１００人近い男が倒れている。

「んー、楽しかった♪」

「だね♪相手が弱すぎるけど」

「そーなんだよなー。並盛って強い不良とかいないし…」

「だよねー、それが並盛の欠点かなー」

「確かになー」

「そんじゃ、また商店街で遊ぶか！」

「そーだね♪」

そして二人は暗くなるまで遊んだ。

浅葱は南と別れてから雲雀の家に帰ってきていた。

そして今はベルと2人、夕食を食べていた。

雲雀は今だに並中から帰ってきていない。

おそらく浅葱がさぼった分も溜まっているのだろう。

浅葱は書類整理はずるしないと百枚あたり同じく１０分弱という速さでできるし、

ある技を使えばその十分の一にできるのだが浅葱は書類仕事が嫌いである。

ちなみにある技とは有幻覚で宙に１０本腕を創って、それで書類をもって宙に固定。

それを浅葱の強力な視力でもって見て、さらに有幻覚で１０本のペンを創って

同時進行で書きこんでいくので１０倍のスピード、十分の一のスピード、

というわけである。

けどこれ以上増やすと一気に気力が減るので１０が今は限界なのだ。

書類仕事が嫌いである浅葱は溜めて溜めて、溜めた末に一気にやる、
という戦法を

最近は取っているのだ。

「つか姫今日何かいいことあった？」

「んー、何で？」

「何かいつもより上機嫌だし♪ししししっ♪」

「くふふ♪まーね。楽しい奴と出会ったんだよ♪」

「へー、姫がいうなら楽しかったんだな♪」

「うん♪その人は仲間、って言ってくれたからね。そうだね。私からしても

その人は仲間であり、親友、っていうのかな？」

そう言って浅葱は笑う。

「ま、とにかくよかったな、姫♪」

「ん。こんなに楽しかったのはいつぶりかな？昨日ぶり？一ヶ月ぶり？」

「それ全然違うぜ？」

「ま、いーじゃん♪」

と言って2人は笑いあう。

しばらく雲雀の家から笑い声は絶えなかったという。

標的４９　久々の書類仕事、来る！

浅葱は六つの記憶の一つ目を話して話を纏めた。

「と、いう訳だよ？今の話と私とムク兄との契約の話で２つだからね。

これでツナの家の立ち入り禁止は無効。アサットも離してよ」

それにリボーンは答える。

ツナはもう顔面蒼白、といってもいいぐらいであろう。

ツナにとっては考えられない過去だからであろう。

「わかったぞ。2つ、ってことはまだありそうだがもう脅す材料がねえしな。

もういいぞ。ありがとな」

と言ってリボーンはアサットを離す。

「きゅう！」

アサットは籠から出された途端、浅葱に飛びついて首に巻きつく。

「よしよし、もう大丈夫だよ？」

と言って浅葱はアサットを撫でる。

「きゅう～♪」

アサットは気持ちよさそうにする。

そこで今まで黙っていたツナが口を出す。

「浅、葱・・・。今の話、って、本当、だよね」

「うん？この状況で嘘を言ってどうするのさ？何も楽しくないよ」

「楽しい楽しくないじゃないよ！あんな、あんな、辛い「勝手に同情何てするなよ」！」

ツナの言葉を遮って浅葱は言う。

「勝手に同情して、それでも何もしない。そんな同情はもういらない。ただ、

哀れんで、でも本心では自分より下な、不幸な者がいることに安心して、

そんなのはもういらない。偽善なんて、もういらない」

「！浅葱・・・。ゴメ、ン」

「別にいいさ。ツナはダメツナだからね♪」

と言って浅葱は笑う。

「んなーーー！それと何の関係ーーー！？」

「うるせえぞ」

ドゴッ。

リボーンにツナは蹴られる。

「イテッ、何すんだよ！リボーン」

「あんな大声上げたら近所迷惑だぞ」

「うっ」

「んじゃ、私はもう寝るよ。おやすみー」

「あ、うん。おやすみ」

「おやすみだぞ」

3人は挨拶して、それぞれ寝た。

翌日。

「ふあーあ。んー、久しぶりに8時に起きたかも？」

浅葱はむくり、とベッドから体を起こす。

起きると浅葱は元から着ていた着流しに着替え、借りていた服をたたんでから持って、

台所へと行く。

「おはようです。奈々さん」

「おはよう、浅葱ちゃん。もうツッ君達は出かけちゃったわよ～？」

「そうですか、ま、いいんですけど。それよりも、借りていた服、ありがとうございました」

「いえいえ、また遊びに来てね？」

「はい♪それではそろそろ私も出かけることにします」

「そう、じゃあまたね」

「それではまた♪」

と言って浅葱は借りていた服をテーブルに置き、玄関へと向かう。

浅葱は下駄を履きながら考える。

「んー、まずはどこに行こうか・・・」

浅葱は少しの間沈黙する。

「ん、決まり。まずはホテル行って服着替えて、それから恭弥のところに行くか♪

書類仕事は嫌だけれども、まあ一応風紀委員だしね・・・」

そうと決まり、浅葱は走ってホテルへと向かう。

浅葱はホテルに着いて今日は藍色に薄いピンクで蓮の花が描かれている着流しに着替えた。

もちろん上には隊服のコートを羽織っている。

それに隊服の左袖には風紀委員の腕章もついている。

「創無戦はそいえば着流しと普通のどっち着よう・・・。んー、着流しは
楽だけれども・・・。戦いやすさでいえばどっちも同じだし・・・。
でも大鎌使うなら普通の方が使いやすい、かな・・・。よし、普通の方で
創無戦は戦おう♪」
と少々長い独り言を呟くと浅葱は並中に向かう。

ちなみにホテルでは自室のみに行ったので誰にも会わなかった。

「おっはー、恭弥♪」

応接室のドアを開けながら浅葱は言う。

それに恭弥は書類の山から一時だけ顔を上げ、返す。

「遅いよ。書類がたまりすぎてる。君も半分やりなよ」

「うげ、これを半分？」

「そう」

書類の山はテーブルからはみでて床にもたくさん積まれていた。

「あう、ま、いーや。んじゃ、始めるか」

書類仕事開始１２時間後。

もう夜の９時ぐらいだろう。

浅葱は大体７万枚ぐらいはやったのではないだろうか。

「なぜ、たかが風紀委員にこんなに書類がたまるんだ・・・」

と言うと浅葱は力尽きて熟睡する。

何だかんだで浅葱は自分の分に加え、雲雀の分も半分ぐらいやったのだ。

熟睡した浅葱に雲雀は浅葱が脱いでいたコートをかけてやる。

「全く。勝手に僕の分までやって勝手に力尽きるなんてね」

と言うと雲雀は浅葱をその場に残して去っていく。

書類仕事はもう済んだので見回りでも行くのかもしれない。

標的５０　寝坊癖が呼んだ禍、来る！

翌日午後１０時５０分。

辺りはもう真っ暗である。

そんな並中応接室。

ソファーの上で動く影が１つ。

「あれ？まだ真っ暗・・・。数時間しか寝てない、とか？」

浅葱である。

そして浅葱は辺りを見回してある物を見つける。

応接室に置かれている日付、時間が表示されるデジタル時計である。

そこに表示されていたものは。

「うええ!?１０時５０分?しかもこの日付、ってことは約２６時間寝た?

どんだけだよ！？」

浅葱は呆然と口を開ける。

「やばい。非常にやばい。あと残ってるの霧と雲と創無だけだし。霧はクローム

だから絶対見に行くし。雲は、まあ恭弥だろうからいいとして、でも創無だったら

マジやばいし！クロームにも精神世界に行ってた訳じゃないから今日が何戦か

聞いてないし！？」

そこまで考えが行き着くと浅葱は猛ダッシュで並中校内を走り回る。

「今日はどこ!?あ、体育館電気ついてる。ってことは体育館か！？」

とりあえず浅葱は全力ダッシュで体育館へと向かう。

体育館の扉は開いていたので浅葱は跳びこむ。

「って、あれ、クロームに、犬に、千種!?つかやばい。止まれない!」

浅葱は全力ダッシュの上に跳んだので勢いが殺せずに犬と千種を巻き込んで着地する。

「浅葱さん!?」

「浅葱様・・・?」

そして煙が晴れると浅葱はむくり、と起き上がる。

「痛い。着地失敗なんていつぶりだろ」

「・・・浅葱様？大丈夫・・・？」

浅葱に気づいたクロームが話しかける。

「ん？あ、おっはー♪クロームに犬に千種♪そして久しぶり犬、千種。それに

現実では初対面だね♪クローム♪」

「浅葱さん、おっはー、ってもうおはようじゃないですよ？」

「だって私はさっき起きたし？」

「いつから寝てたんですか・・・」

千種が半ば呆れながらも言う。

でもその声には敵意は全く無く、久しぶりに会えた、という喜びにも満ちていた。

「んー、昨日の夜9時ぐらいから？」

「浅葱さん昔と全然変わってないびょん」

「てゆーか悪化してます・・・」

犬と千種が言う。

「えー、それは悪化じゃないよー。たくさん寝れるようになった、って喜ぶとこだよ」

「浅葱さんは昔から一番寝てたびょん」

「んー、そだっけ？」

「そうだびょん。オレ達は追ってが怖くて寝れなかったのに、浅葱さんだけ普通に
寝てたびょん・・・」

「ま、いーじゃん♪ムク兄は犬に千種を信用してた、ってことで♪」

「・・・それよりも何で五年前と姿が変わってないんですか？」

千種が聞く。

「質問遅いよー、千種クン♪つかもう隠すのも説明もめんどいな。
もうおしゃぶり

隠すのやめちゃえ」

と言うと浅葱はおしゃぶりを隠さず服の上に出す。

「！アルコバレーノのおしゃぶりれすか！？」

「くふふふふ♪そうだよ。五年前犬達と会った後だね。姿が変わらないのはその影響」

「・・・あと、浅葱様はＶＡＲＩＡなんですか？」

千種が聞く。

「そうだびょん！何でそのコート羽織ってるんれすか？」

「んー？答えは簡単。私がＶＡＲＩＡ幹部だからだね。てか気づくの遅くない？

それにクロームに聞いてなかったの？」

「あんなブス女の話なんてきかないれす」

ブチッ。

何かが切れた。

「くふふ。クロームをブス女呼ばわりするなんて犬でも許せないよ。クロームは
私の親友なんだから」

親友という言葉に少しクロームの頬が赤くなる。

ドガンッ！

浅葱の華麗な回し蹴りが犬に決まる。

「キャギョーン！」

「千種もクロームのことちゃんと守ってね？」

浅葱はにっこり笑う。

「・・・はい」

「あ、そいえば今日って何戦？」

（（（（（（今更！？））））））

この場のほぼ全員の心が一致した瞬間だった。

標的５０　寝坊癖が呼んだ禍、来る！（後書き）

ついに５０話です・・・。
これも皆さんが呼んでくれたおかげです。
感想が来るたびに体力全回復し、評価やお気に入りが増えているのを見るたびに精神力やら何やらも全て全回復し・・・。
本当にありがとうです♪
そしてこれからもよろしくお願いします♪
そいでは感想もいつでも待ってます♪

標的５１　霧のリング争奪戦開始、来る！

「今日は霧戦だよ、浅葱様」

クロームが浅葱に言う。

「ん、クロームありがと♪ってことは今日はクロームとマーモンだね」

「はい」

クロームは答える。

若干緊張しているようだ。

「大丈夫だよ、クローム♪君は私の親友であり契約者であり弟子なんだ。自信を持ちなよ♪」

「はい♪」

クロームの声にはもう自信が宿っていた。

そこで違う声が響く。

「浅葱、君はどっちの見方だい？」

マーモンである。

「あ、マーモン♪お久ー、私はＶＡＲＩＡの見方だよ♪でもクローム は弟子だし？」

「全く、浅葱らしいね」

「お褒めに預かり光栄です♪」

と言って浅葱はわざとらしく言う。

「褒めてないけどね」

「ま、いーさ。ボス、今日、ってか争奪戦見るの初めてだけどもこっち側で
見ていい？久しぶりの犬と千種と話したいんだよ」

その言葉でＸＡＮＸＵＳと浅葱の視線が合う。

精神の弱いものならＸＡＮＸＵＳのその視線に当たるだけで気絶できるんじゃないだろうか。

しかし、浅葱は平然としている。

そして数秒後。

「好きにしやがれ」

「ありがと♪ボス♪」

と言って浅葱は笑う。

「と、いう訳でこっちで見させてもらうからよろしくに♪」

「なっ！テメエはＶＡＲＩＡだろうが！」

獄寺が言う。

それに浅葱は口をわざとらしく尖らせて言う。

「えー、隼人と私の仲じゃないかー♪」

浅葱は完全に反応を愉しんでいる。

そこでリボーンのおしゃぶりが光る。

「ん？やっぱ、アイツも気になったんだな」

するとコロネロが現れた。

しかし寝ている。

「師匠？もう京子と寝ている時間のはずでは？」

了平が言う。

「だからおねむだぜ。コラ」

コロネロの鼻ちょうちんが割れる。

「だが、カエル乗せたチビの正体がアルコバレーノかどうかを見極めねーと

なんねーからな」

「ふん。間抜け面下げた奴が増えたか。この戦いで、もっと間抜け面をさらすことに

なるだろうがな」

「そういえば、ディーノさん。今日は来てくれないのかな」

「アイツは、昨日の夜、急用が出来て旧友に会いに行った」

そしてチェルベッロが口をはさむ。

「そろそろバトルを開始します」

「各霧の守護者はバトルフィールドに」

「よーし！では円陣行くぞー！」

了平が張り切って言う。

「え、あ、そ、そうだね」

ツナも同意する。

「よっしゃ！」

山本も張り切る。

「いい。いらないよ、そんなの」

しかしクロームはばっさり切り捨てる。

「ノリ悪いなあ」

「なんだあアイツは」

「ふん」

それぞれがクロームを批判する。

しかし浅葱が言う。

「ねえ君達。クローム批判したら、どうなると思う？」

浅葱がにっこり笑って言う。

「あ、ゴ、ゴメン！クローム！それに浅葱！」

ツナがすぐ言う。

「ん。許す」

そしてクロームが小さい声で言う。

「いってきます」

「ん、いってらー。2人ともガンバれだね♪」

浅葱は軽いノリで言う。

その後は何か長い説明があったが浅葱は全て無視してぼー、っとしていた。

（説明長い・・・）

とか考えながら。

浅葱は基本自分が関わる作戦とかなら一応聞くが違う奴は大体ノリで大丈夫じゃね？

とか方式である。

そしてチェルベッロの声が響く。

「それでは霧の対戦。マーモンＶＳ（バーサス）クローム髑髏。バトル開始！」

標的５２　霧のリング争奪戦？～クローム対マーモン～、来る！

バトルが始まると同時に、クロームが幻覚を使う。

その中で平然としているものは一部だけである。

もちろんその平然としているものに浅葱も入っているが。

そして浅葱はまだまだこれが本気ではないとわかっているので欠伸しながら見る。

「犬ー、一個聞いていい？」

「なんれすか？」

「クロームってあの格好寒くないの？精神世界では白いワンピースだったけど」

あの格好とは、へそを出しているところやスカートが短いところである。

「オレに聞かれても困りますれす！」

「だよねー・・・。じゃあ千「わかりません」あ、うん。ゴメン」

そうこう話している間にマーモンが青い触覚のようなものでクロームを締め付けていた。

それにツナ側はあわてるが浅葱は平然とする。

「浅葱？何で笑ってるの？」

ツナは浅葱に聞く。

確かに浅葱は笑っていた。

「くふふふふ♪あー、術者じゃないとわからないよねー。これは」

「え？」

「誰に話してるの？こっち」

ツナが聞き返そうとした瞬間にクロームの声がマーモンの後ろから聞こえる。

そして今までクロームの姿だったものがバスケットボール入れの籠になる。

「んなー！どうなってんのーーー！？」

「幻覚だよ」

「幻覚って・・・」

浅葱が言った単語で何やらツナ達がごちゃごちゃ言うが浅葱は気にせずに無視する。

そしてマーモンがおしゃぶりから鎖を外しアルコバレーノの力を解放し、

またごちゃごちゃやってるが浅葱は気にしない。

「ねえ犬、千種」

浅葱は少し悲しそうな声で話しかける。

「何れすか？浅葱さん」

犬は気づかないが千種は浅葱の変化に気づく。

「ふと思うんだよ、私は。ずっと犬達に聞きたかったんだ・・・。

君達は、ムク兄と居て、何よりも最初私達についてきて、後悔はしてる?私達に

ついてこなかったら君達は戦いに関係なく生きれたかもしれない。
どこか遠くに

行ったりとかね「そんなことないれす!」!?犬?」

突然大きな声を出した犬に驚く浅葱。

「オレ達は、浅葱さん達が居ないと、あの時死んでた。浅葱さん達がオレ達を

救ってくれたんれす！だから後悔なんてしてないびょん。絶対れす。
もちろん柿ピーも」

千種は無言でうなずく。

「そう。なら、良かった」

浅葱はホッとしたような声で言う。

そして微笑む。

「ありがとう♪」

「／／／そっ、そんなお礼言われることじゃないれす」

「／／／・・・そうです」

「くふふ♪そっか、んじゃまた戦いを見ようぜ♪」

するとリボーンが丁度浅葱に話しかける。

「浅葱、お前のおしゃぶりに巻きついてる鎖はバイパーのと同じ物か？」

「そうだよ」

「それはおしゃぶりの力を封じる物なのか？コラ！」

今度はコロネロが聞く。

「まあそうだけども、でも完成してたら私達はこんな姿じゃないはずだよ？」

「未完成ってことか？」

「くふふ。さっきマーモンが言ったよね？呪いを解く努力もしてない奴には

教えたくも無いね」

「・・・」

その言葉にリボーンとコロネロは黙る。

「ちょっ、ちょっと待ってよ!さっきから呪い、って。それにこんな姿、ってどういうこと?」

ツナが聞く。

「何でもねーぞ」

リボーンが答える。

「何でも、って」

ツナがまだ何か言いたそうだったがリボーンのいつもとは違う表情に口をつぐむ。

「さあ、戦いを見なくてもいいのかな?ツナ。こうしてる間も戦いは進んでるよ?」

浅葱が言う。

「あ、そうだった!」

戦いはクロームの不利な状況だった。

「ハァ、ハァ、ハァ・・・」

「もう君の負けだよ。諦めたらどうだい？」

「絶対、負けない・・・！」

クロームは言うと三叉槍をくるくる回してから地面に勢いよく叩きつける。

「や！」

すると辺りに火柱が立ち上る。

その一本にマーモンが飲まれる。

「やった！」

ツナが声を上げる。

「まだだぞ」

しかしリボーンが言う。

するとマーモンが火柱からでてくる。

「ムム・・・？いきなり力が上がった？」

マーモンは服が少し焦げていた。

煙も少しでていたがすぐにおさまる。

「くふふ♪クロームやっと私の力も使ったかな？」

「え？浅葱の力？」

ツナが聞く。

「私とクロームはムク兄とクロームの関係とほぼ同じだよ。ま、私はどこにも囚われていないけどね♪」

「やぁ！」

クロームは力を全開にしてマーモンに幻覚を使う。

すると昔浅葱が使った火の蛇のように火柱がそれぞれなり、全てがマーモンに向かう。

「ムム！これは今までとは段違いだね」

と言ってマーモンは今度は顔の部分から吹雪を出す。

その吹雪に当たった所は次々と凍っていく。

数秒すると火の蛇が全て凍りつく。

ところどころ火が漏れていたがそれも全て凍る。

「あ・・・」

「やばいかも、クローム」

浅葱は呟く。

「え、どういうこと？浅葱」

クロームは呆然としている。

それはそうだ。

「だって、幻覚とは人の知覚を司る脳を操るものだ。だから術師の戦いで

幻覚を幻覚で返されるということは」

そこでマーモンと浅葱のセリフが重なる。

「「知覚のコントロール権を完全に奪われたことを示す」」

標的５３　霧のリング争奪戦？～久々の邂逅～、来る！

クロームの足元から氷ついていく。

「っ」

それでもクロームは幻覚を創ろうと念じる。

「もう何を念じても無駄だよ。君はすでに、僕の幻覚世界の住人なんだからね」

とマーモンが言うとクロームは飛ばされて、氷に叩きつけられ、地面に落ちる。

「うっ」

クロームは地面に落ちて三叉の槍が少し遠くにあるとわかったら必死で手を

伸ばして、持つ。

それを見たマーモンは言う。

「ム、どうやらその武器は相当大切な物のようだね」

マーモンはそう言い、槍を壊そうとする。

「ダ、ダメ・・・」

しかしマーモンはますます力をこめる。

「ダメーーー！」

クロームの悲鳴と壊れるのが同時だった。

「はっ」

犬と千種が動き出しそうになるのを浅葱は片手で止める。

「浅葱様・・・？」

「ダメだよ、犬、千種。そこには赤外線もあるし、何よりクロームは大丈夫だよ♪」

「ゲホッ、ゲホッ！」

それでもやはりクロームは咳き込んで血を吐いて、倒れる。

「え、え！？」

「どうしたんだ！？」

「顔色が急に」

「お、おい！アレを見ろ！」

クロームの腹が潰れていく。

「陥没していく・・・・！？」

「これも幻覚！？」

「ムム、これは現実だ。どうなっている！何だこの女」

マーモンが言う。

「浅葱!?クロームはどうなってるの!?お腹が潰れて・・・。あのままじゃ!」

ツナは浅葱に聞く。

「くふふふふ♪大丈夫、大丈夫。見ててごらん」

浅葱は言う。

「それにベルー？私の親友兼契約者権弟子を舐めてもらっちゃ困るな♪」

「姫？」

するとクロームの内臓が戻ったのか、お腹が元に戻っていく。

「っう！ゲホッ！」

クロームは何とか起き上がるけど立ち上がれはしないようだ。

「今度は腹が元に戻ったぞ！？」

「どうなってんだ！」

浅葱は少し真面目な顔になる。

「あ、でもやばいかも・・・」

「浅葱さん？どういうことれすか？」

「直前に私の分も全開で使ったからさ、クロームの内臓に力が自動で回るのが

少し遅れたんだ。そんな短時間だろうが人の肉体から内臓がすっぽり抜けるってのは、やばいんだよ」

「それって、結局やばいってことーーー！？」

「そうなる」

するとクロームの周りに霧が発生して、クロームが見えなくなる。

「あれ、って・・・」

浅葱は一転して、泣きそうな、嬉しそうな声で呟く。

すると明らかに少女の物ではない、少年の声が聞こえる。

「クフフフフ」

「ムム？男の声？」

すると霧が一際濃く集まっていたところから衝撃覇のような物がマ

ーモンに

向かっていき、マーモンに当たる。

「ぐぎゃ、むぎゃ！」

そんな悲鳴を上げ、マーモンは吹っ飛んでいく。

「随分粋がっているじゃありませんか、マフィア風情が」

霧が大方晴れ、姿が見える。

それは六道骸であった。

「誰だ？」

バジルと了平は不思議そうにする。

「んん？」

「娘が・・・」

ベルとレヴィが呟く。

「六道骸、間違いない」

「骸、無事だったんだ・・・」

「お久しぶりです、舞い戻ってきましたよ、輪廻の果てより」

骸は言う。

「奴が霧の守護者の正体なのか、コラ！」

それにリボーンはフッ、と笑う。

「んん？六道骸？浅葱と同じ名字？というか浅葱と瓜二つじゃないか」

「おや、また言われますね。まあ、その話はまた後で」

そう骸は言うと少し後ろを向く。

浅葱が居たところである。

なぜ過去形かといえば。

浅葱は観客スペースの隅っこで体育座りして、幻覚をかけて見えないようにしていた。

「やばい！何あの成長ぶり！？記憶の中では今みたいに自由も無かったから、今の方が栄養はとれるのはわかるよ？わかるとも。わかるよ、マジで！でも、何だよ！アレは！私は呪いで成長止まってるけど、止まって無くてもあんなに背高くなる自信ないんだけどね！これでも双子か！このヤロウ！もう私は悲しいよ？つか妹だけども生まれるのが数分、数秒早ければ私が姉なんだよ？なのに、なのに、これ何十センチ身長差あんの？５０センチはあるんじゃね？やばい・・・。プライドずたずた・・・。その上に気力もやばいかもしれない・・・。あ、でも戦いなら勝てるかも・・・？嫌、絶対勝てるし？そいえばムク兄と会ったら契約しようと思ってたけど昔の痛み分け的な契約でもう契約できてんじゃん。アレって、めっちゃ繋がり深いから憑依とかだけの契約なんてわざわざもう一回しなくても大丈夫なんだよね。って！そうじゃなくて！」

と浅葱はずっとぶつぶつ呟いていた。

あれから浅葱はずっと1人、呟いている。

周りが幻覚世界になってようがんなもん知るか、である。

しかも周りからは自分に幻覚をかけているので見えない為、ぶつぶつ呟きを誰にも

止めてもらえないのだ。

まあ見えていても止められるかは疑問だが。

「第一私とムク兄の身長差はどこから始まったんだ！ナッポーの分際で！

「誰がナッポーですか？」！？」

浅葱はいきなり聞こえた声に振り返る。

「ムク、兄・・・」

これが六つ前の前世からもずっと一緒にいたのに、８年会いも話しも

しなかった双子の再会であった。

標的５４　霧のリング争奪戦？～八年ぶりの再会～、来る！

浅葱は先ほどまでぶつぶつ骸に文句を言っていたのに、いざ骸を前にすると何もでてこない。

それどころか目が潤んでいく。

「あう。ムク兄・・・、骸・・・、隣の子・・・！ずっと、ずっと会いたかった！」

と言って浅葱は骸に飛びつく。

「ずっと、ずっと、会いたかった。寂しかった。悲しかった。ベル

達はいたけど、

ずっと隣にいた人がいなくなったんだ」

「ええ、僕もですよ」

いつもは取り乱しもしない浅葱が取り乱し、骸は今までみたことも聞いたことも無く、

想像もできないような優しい表情と声なので周りは声をかけることもできない。

まあＶＡＲＩＡはすでにいなくなっているが。

「でも、本当は私が悪いんだよね・・・。あの時、意地なんか張らないで戻ればよかった」

と言うと浅葱は顔を上げて骸と目を合わせる。

「ごめんね・・・」

「それは僕もです。ゴメン、なさい」

「おお！ムク兄が素直に謝れるようになった！？」

久々発動、浅葱のシリアス雰囲気ぶち壊しスキルである。

「やっぱり浅葱は浅葱ですね。ハア。というかそれを言うなら浅葱もでしょう？」

「何だと！それは私を馬鹿にしてるのか？このヤロウ！」

そして2人は一端離れて構える。

しかし、数瞬後、２人は笑いあう。

「くっ、ははははは♪こんなのも久しぶりだね♪」

「ク、ハハハ！そうですねえ」

「あ、そうだ、この八年、色々あったしね。記憶の共有しようぜ♪」

「ええ、いいですよ。もう五年前の契約は効果が切れましたからね。記憶の

共有ぐらい簡単にできますし」

そして2人は手を繋いで目を瞑る。

「あ、そいえばマフィア何個潰した？」

「中ぐらいは1つ。小さいのは十数個でしょうか」

「フッ。私の勝ちだね。大が一個に中は十数個。小は、数十個、かな♪」

「はあ、まあ仕方ないですね。今回は浅葱の勝ちにしておきますよ」

「何おう！ん、記憶の共有終わったね。つかそろそろムク兄こっちに留まるの
限界じゃない？」

「そうですね。それでは、今度は精神世界で会いましょう」

「うん。またね♪」

と言うと骸は倒れ、クロームの姿になる。

「お、っと」

それを浅葱はクロームの方が身長は大きいのに受け止める。

「って、軽っ！犬！千種！クロームに何食べさせてるんだ！」

「麦チョコれす」

「馬鹿か！せめてチョコクッキーも食べさせろ！」

そこで今まで話に参加できなかった面々も参加する。

「んな！それ大して変わんないじゃん！」

「ツナ、麦チョコとチョコクッキーの区別もつかないようなら死んじまえ」

「んなーーー！そんなにーーー！？」

「くふふふ♪ま、いーや。ところで明日の争奪戦って何戦？」

「また聞いてなかったのかよ！」

「だって～。ま、いいじゃん。教えてよ」

「・・・創無戦です。浅葱様」

「お、マジでか。そっちの創の守護者は誰？」

「ＶＡＲＩＡに教えると思ってんのかよ」

獄寺が言う。

「ワ、ワタクシ、で、ですわ」

今まで後ろの方で幻覚汚染の影響かふらふらしていた馬羅が言う。

それを聞いた浅葱の表情が変わる。

「へえ、佐川馬羅、ね。なら愉しみだね♪」

と言って浅葱は凶悪な笑みを浮かべる。

「さて、と。今日はそうだね。黒曜センターに行こうかな。さ、行くよ犬、千種」

「はいれす」

「・・・はい」

クロームは浅葱が背負って歩いていく。

「じゃーにー、ツナ」

「あ、うん」

と、いうような感じで霧のリング争奪戦は幕を下ろしたのだった。

標的５５　創無戦当日昼間～ｖｅｒ．ツナｓｉｄｅ～、来る！

「ねえ、リボーン。佐川さん本当に大丈夫なのかな・・・」

ツナは相変わらずバジル達と修行していたが、今は休憩中であった。

「わからねえぞ。オレ達の側には創無に相応しいのが誰もいなかったんだ。

だから創無だけは不戦敗にしようと思ってたんだ。まあ向こうにもいるとは

リングを配る時はまだ確定できてなかったがな」

「うん」

「だが、向こうには無の守護者として、浅葱がなった。それでもうこちらは

不戦敗にするか、ってなってた。だが、そんな時、佐川が創の守護者に私が

なる、と言ってきたんだぞ」

「それは知ってる・・・。けど、何で断らなかったのさ！」

「最初は断ったぞ。だけどあいつは引かなかった。それにあいつは一般人、

って訳でもないんだぞ。あいつはある中小マフィアのボスの娘なんだ」

「!?」

「そのマフィアはな、いわゆる少数精鋭なんだ。そして、少数精鋭と言っても、

戦闘がすごいんじゃない。情報操作や発明に特化してるんだ。だからこそ、

情報戦のみで比べるならボンゴレにも引けを取らないとも言われてる。

まあ、情報操作されてるからそのマフィア自体知ってる人は少ないがな」

「なっ！じゃあ、佐川さんも情報戦が得意なのかな・・・？」

「知らねーぞ」

「んなっ！」

「ただ、そのマフィアは発明にもすぐれている、っつったろ?だから、戦闘と
なれば非常に優れた武器で、機械で戦うといわれる。機械なら人の個人能力は
関係ないしな。だからこそ、個々人の戦闘能力が少なくても他のマフィアに
捕まって情報源とかにされてねーんだぞ」

「へー・・・。浅葱と佐川さん、どっちが勝つの、かな・・・」

「普通に考えたら、浅葱だな。けど、佐川は何してくるかわからねえから、

やっぱわからねえな」

「そっ、か」

「ツナはどっちに勝ってほしいんだ？」

「えっ？オレは・・・。この争奪戦で負けたら、皆がやばいし、でも、

浅葱にも傷ついて、ほしくないし・・・」

「やっぱツナは甘いな」

「でも、浅葱だって少しだったけど、クラスメイトだったし、今でも

クラスメイト、ではあるらしいし、それに、友達だし」

ツナは友達というところではっきりと言う。

それにリボーンはニッ、と笑う。

「それを忘れるなよ。ツナ、テメエは甘いがそれがいいところでもある。

そこがファミリーをひきつけてもいるんだ。甘い、ってのは言い換えれば

優し過ぎるって意味でもある、でも仲間思いなのは悪いことじゃねえからな」

「リボーン、うん！オレは、やっぱり友達には誰も傷ついてほしくないんだ。

だから、オレは戦う」

そう言ったツナの目には光が宿っていた。

それにまたリボーンはニッ、と笑って言う。

「ならさっそく修行始めるぞ！」

と、またツナの修行は始まるのだった。

標的５６　創無戦当日昼間～ｖｅｒ．浅葱ｓｉｄｅ～、来る

黒曜センター午前６時。

ここは黒曜センターで一番大きい部屋である。

その一番奥にある、以前は骸が座っていたソファーに浅葱は横になり寝ていた。

今の浅葱の姿は着流しではなく、普通の隊服。

黒のショートパンツに太ももまである黒のニーソックス、それにブーツ。

上は薄水色の霧みたいな模様のはいったぶかぶか長袖Tシャツ。

裾はショートパンツが半分かくれる程度だ。

そしてその上から前を開けたＶＡＲＩＡ隊服のコートを着ている。

袖がすっぽりと手を隠している。

裾は膝辺りだ。

昨日浅葱は一度ホテルに戻り、服を着替えてきたのだ。

そしてその浅葱が身じろぎをして、起き上がる。

「む？久しぶりにちゃんとした時間に起きれた、かも・・・」

そして浅葱は周りを見渡すと犬、千種が眠っているのを見つける。

そしてクロームは今起きた所のようで起き上がって、目をぱちくりさせながらこちらを見た。

「浅葱、様？あれ？いつの間に、ここに・・・」

それに浅葱はクロームの前に一っ跳びして降り立ち、答える。

「昨日はあの後、ムク兄がこっちに実体化してね、マーモンを倒したんだよ。

んで、明日の対戦は創無、つまりは私だね♪」

「！私・・・。骸様の役に立てなかった・・・」

そう言って顔を俯かせ、落ち込むクロームの頭を浅葱は身長が低いくせになでる。

「大丈夫だよ、クローム。クロームはムク兄の役に立てたよ。

凪はムク兄の役に立てたんだ」

それにクロームは顔を上げて、浅葱を真っ直ぐに見る。

「本、当・・・？」

「うん♪クロームはわかんなかったかもだけど、クロームと戦ったことで

マーモンは結構消耗してたんだよ?それにクロームの幻覚は本当に一級品だよ。

そんなレベルの術師はそうそういないんだよ♪」

「／／／あり、がとう。あ、今日って浅葱様が戦うんだよね・・・」

「ん、そーだよ♪でも心配は無用だぜだぜ?私を誰だと思っている！」

それにクロームはくすり、と笑う。

「浅葱様だよ。でも、気をつけてね・・・？」

「ん。わかってるよ♪どんな相手でもどんな秘策が待ってるかわかったもんじゃないからね♪」

と言って浅葱は笑う。

「あ、今日はクロームちゃんと寝てなよ？まだ疲労残ってるだろうからね」

「うん。ありがとう」

「んーん。んじゃ私は精神世界で久しぶりにムク兄と遊(たたかい)びでもしてくるかな♪」

「がんばってね」

「うん♪今度こそムク兄に勝ってやるさ♪あ、ご飯はちゃんと食べるんだよ？

そいじゃあ、起きたばっかだけど、またおやすみ、クローム」

「はい、おやすみ。浅葱様」

と言うと浅葱はソファーに戻り、精神世界に行き、骸と一日中遊んだ。

クロームはとりあえず、朝ごはん、麦チョコとチョコクッキーを食べ、

疲労を取る為にまた寝たのだった。

標的５７　創無のリング争奪戦？～戦いのルール説明～、来る！

並中深夜１０時４５分グラウンド。

この場にはツナ、獄寺、山本、笹川了平、リボーン、コロネロ、シャマル、

馬羅、それに何と雲雀も居た。

後は、ＸＡＮＸＵＳにベル、レヴィ、ゴーラモスカが居た。

後いないのは浅葱達だけである。

ちなみに馬羅は無駄に大きなキャリーバッグ的な物を持ってきていた。

大きさはちょうど馬羅と同じぐらいであろうか。

「ししし♪姫まだかな♪」

「うむ。最近全然話してない・・・」

「テメーは昔から話してないだろ」

と言う言葉にレヴィが切れ掛かりそうになったとき、新たな声が響く。

「とうっ！」

ゴスッ。

「ぐあっ！」

いきなり空中から浅葱が降って来て、着地の時にレヴィを蹴っ飛ばして、

レヴィの上に足で着地したのだ。

そして乗ったらすぐに降りる。

「お久ー、皆♪それにボス♪精神世界で遊んでてたら遅くなっちゃった。

てか引き分けだったし・・・」

レヴィとゴーラモスカは華麗にスルーをする浅葱である。

「お久ー、姫♪」

「おせえぞ」

「ゴメンゴメン、ボス」

「ってか浅葱なんでいきなり空中に！？」

ツナが聞く。

「ん？屋根を伝ってきたからその勢いでぴょーん、と♪」

（絶対ぴょーんで済む高さじゃなかったよ！）

とツナは心の中でツッコム。

「あ、やっと来たね、クローム、犬、千種♪」

「は、早いびょん。浅葱さん」

「ハァ、ハァ・・・、ハァ・・・」

クローム達は息切れしてついてきていた。

そして今まで口を開かなかった、というかいなかったチェルベッロがいきなり現れ、言う。

「それでは、創無の守護者が集まったので、今晩の対戦を開始します」

「まず、創無戦のフィールドはグラウンド内全てです。観客席は端に設けます。

そして、グラウンドとグラウンドの外の境目には金属製の糸で編んだネットを

張り巡らせており、さらにそこには電気を通しているため、出ることはできません」

「それでも無理に出ようとした場合は失格となります」

「要するに、出ようとしなければいいんでしょ？」

「そうなります」

「そして創無戦は霧戦と同じく、特別な仕掛けは何もありません」

「理由は創無の守護者の使命にあります。創の守護者の使命は

『その魂の暖かさで持ってファミリーを癒し、全てを創造する』、

無の守護者の使命は

『その魂の闇で持ってファミリーの敵を壊し、全てを無に帰す』

の為に仕掛けはいらないのです」

「創無のリング戦の勝利条件は今までと同じく、相手のリングを奪い取り、

創の守護者なら創のリングを、無の守護者なら無のリングを完成させることです」

「そして、今戦いにおいては、時間制限などは一切無く、決着がつくまで続くことになります」

「それでは、観客の皆さんは観客席に移動してください」

その声でぞろぞろ移動を開始する。

だが、浅葱に声をかけるものも数人いる。

「がんばれよ、姫♪」

「浅葱様、がんばって、ね」

「浅葱さん、がんばってくらさいびょん」

「・・・。犬と同じく」

「ありがとう♪でもクローム達はツナ側だろ?いいの?私応援して」

「浅葱様は、私達の仲間、だから」

クロームは言う。

「！ありがとう、クローム♪」

「はい♪」

「そいじゃ、行ってくるよ」

「行ってらっしゃい」

クロームが言うと浅葱はフィールドの真ん中へと歩き出す。

そして浅葱と馬羅が向かい合う。

馬羅はあの無駄に大きいバッグを持ってきている。

そしてチェルベッロが言う。

「それでは創無の対戦。六道浅葱ＶＳ（バーサス）佐川馬羅。バトル開始！」

標的５７　創無のリング争奪戦？～戦いのルール説明～、来る！（後書き）

いきなりですが１１月８日より１１月１２日まで私は音信不通となります。
なぜなら、その期間は修学旅行なのです。
しかも機械類はもちろんダメなので、元から私の携帯はモード無料じゃないので携帯ではインターネット使わないんですけども、帰ってくるまでインターネットが使えないということなのです。
ですのでもちろん小説家になろうにもログインできないし、閲覧できないので・・・。
しかし無の守護者は１２日まで予約投稿してありますので毎日一話更新されます。
その間は感想返信等できないですけど、帰ってきてみたら感想とかあったら嬉しいので一行でも書いてくれたら嬉しいです♪
そいではいつも読んでくれてありがとうです♪

標的５８　創無のリング争奪戦？～馬羅の兵器～、来る！

バトル開始の合図で浅葱は跳んで馬羅に殴りかかる。

ビュッ！

風斬音が響く。

そして馬羅は即座に後ろに跳んで避ける。

ドゴオンッ！

浅葱のパンチが地面に当たった所を中心に網目状に地面が割れる。

「な、何あの威力ーーー！」

ツナが叫んでいるが気にしない。

だって浅葱はツナだって死ぬ気になればできるんじゃないの？と思

っているからだ。

「あれれ？何で佐川馬羅なんかに避わされたのかな・・・？」

浅葱は不思議そうに問う。

「ワ、ワタクシをそこまで舐めてかからないほうが、い、いいです、わ、わよ？

ワタクシは、て、敵の動きを予測してくれるコンタクトを、つ、つけている、んですの」

「へーえ、それは君の自慢のファミリーに作ってもらったのかい？」

「そ、そうですわ、わよ？」

「へーえ。じゃあそれは君の力じゃなくそれを作った人の力だね」

「ち、違いますことよ！こ、これを、つ、使いこなすはワ、ワタクシ、ですの。

だから、ワタクシの、ち、力ですわ」

「ふーん。まーいいや。とりあえず佐川馬羅をボコボコにできれば。さ、その鞄は何なのかな？切り札とかはちゃっちゃと使った方がいーよ？」

「そうです、わ、わね」

と浅葱が言うと馬羅は鞄を開ける。

すると中から随分と人型に近いロボットが出てきた。

それはゴーラモスカが少し細身になったような物で体のいたるところから刀が生えていた。

「こ、これは、ワタクシのファミリー、インデビデュアレファミリーが、つ、造った

戦闘用ロボット、デュアレモスカＶＥＲ．３と、い、言いますの。

どこかから入手、

し、した設計図を基に改良を、く、繰り返して作った、んですわ」

「また、モスカかよ・・・」

そう言った浅葱の目には闇が渦巻いていた。

それを見た馬羅が一瞬ビクッ、とするがすぐにデュアレモスカに指示を出す。

「行きなさいデュアレモスカ！ワタクシの敵を、殲滅なさい！」

「へーえ、がんばればキョドらなくてもしゃべれるんじゃん？さて、と。

デュアレモスカだかはどんくらいの強いのか、な！」

その声と同時に浅葱は向かってきたデュアレモスカに回し蹴りを本気で放つ。

バコオッ！

しかしデュアレモスカは片手で受け止め、浅葱を吹き飛ばす。

「！」

浅葱は２０数メートルという高さまで飛ぶ。

普通ならこんな高さから落ちたらお陀仏である。

「くふふ♪以外と強いじゃないか・・・。馬羅の分際で」

というと浅葱は有幻覚の大鎌を右手に出して、持ち、さらに有幻覚の足場を出し、

それを空中で蹴って落ちる速度をさらにあげる。

そして落下の衝撃もあわせて、大鎌を遠心力で振り回し、デュアレモスカにぶつける。

キインッ！

「チッ。切れないし。なら！」

と言って浅葱は連続で斬りつける。

キンッ！

ギンッ！

キキンッ！

しかし全てが防がれ、デュアレモスカも切れない。

そんなある時だった。

今まで外野でデュアレモスカと浅葱の戦いを見ていた馬羅が剣を持ち、浅葱に切りかかったのは。

「！」

スパアッ！

浅葱はそれに気づくが、デュアレモスカも居る為、十分に避けることができず、

背中を後ろから縦一文字に切られる。

「・・・」

浅葱は無言でデュアレモスカと馬羅から離れる。

幸い傷口は深くないようだが服は一文字に切れていたようだ。

そして、広範囲に切れたために、上半身の服がずり落ちる。

「む！」

浅葱は慌てて掴んで、後ろが半分に切れている長袖Tシャツを取って、胸の辺りに

リボン縛りで縛り付ける。

しかし胸以外は上半身が丸見えである。

そこにあったのは、浅葱がずっと隠したかったもの。

骸には特に隠したかった忌まわしきもの。

禍々しい烙印が上半身全体に広がっていた。

標的５９　創無のリング争奪戦？～禍々しき烙印～、来る！

「きゃっ！な、何ですの、そ、それ、は、い、いったい、何ですの？」

馬羅は浅葱の烙印を見て悲鳴を上げる。

それを見たクロームも目を見開く。

どうやら骸もクロームの中から創無戦を見ているようだ。

「あーあ、佐川馬羅のせいでムク兄にばれちゃったじゃん。まー、ムク兄なら
昔から知ってたんだろうけど♪」

「それは何だ？」

リボーンが問う。

「えー、言わないとダメダメみたいな感じ？」

「浅葱さん・・・？」

犬が心配そうな、それでいて不思議そうな声を上げる。

「んー、ま、いっか。教えてあげるよ♪」

と浅葱は言う。

「ま、ツナとかリボーンやムク兄とかにしかわかんないとは思うけど、

わかんない人は後でツナにでも聞いといてね♪」

そして浅葱は話し出す。

「ま、ツナとリボーンに前話した続きからね」

「うん」

「あの他に、私達には五つの記憶がある。でも、私にはムク兄と違って、

もう1つだけあるんだ」

そこで浅葱は言葉を切り、息を吸う。

「私は六つの記憶の全てでずっとムク兄を守ろうと無駄な努力をしていた。

でもそれで同情するものなどいなくてね。むしろ嘲笑われたのさ。馬鹿な妹、

気づいているのにまだ続けるなんて、殴られすぎて頭が可笑しくなっちゃった?、

とか、ね。けれど私はやめなかった。その時は、続ければいつか努力は報われると

思ってたから。でも無駄だったよ。そんなものはね。この痣はその烙印。

私にはさっきも言った通り六つともう1つ、とても短いけれど記憶があるんだ。

そこには六道輪廻の神様的な奴等がいてね。私はそいつらにも嘲笑われた。

私とムク兄は六つをまわって、六道輪廻それぞれのスキルを手に入れた。

でも私にはもう1つある。でもそれはスキルとかいう物より、欠点と言った方が

正しいかもね。この烙印は私が永遠に記憶に囚われることの烙印。無駄な自己犠牲を

した結果。神はそんな私を見ておもしろがった、その烙印。嘲笑ってこれをつけた。

これが持つ効力は絶対記憶能力と苦痛。これは私が少しでも感情を揺れ動かしたり

したらこの烙印から痛みが広がる。ま、もう慣れたけどね。そして
絶対記憶能力は

すごい、とか思うかもしれないけど、逆に言えば、辛いことも全て
忘れられない。

この烙印を押されたのは多分この世界に来るすぐ前だ。けど、記憶
というのは

忘れたとしてもほんの片隅に残っているものでね。その全てが呼び
起こされ、

修復され、私は覚えている。本当に全てを、ね。痛かったこと。相
手に

嘲笑われたこと。その表情。殺されたこと。殺された時の痛み。餓
死寸前の苦痛。

毒を飲まされた時。殺された時の相手の表情も、全て、全てだよ。
そして最後に

六道輪廻の神は言った。『我等からの贈り物を忘れられぬようにしてやる。感謝しろ』、

とね。最後の最後まで私、私達は迫害され、蹴落とされ、差別され、否定された。

ムク兄は過去を忘れて前を向けるかもしれない。いや、世界への復讐ってのも前を

向いた証拠だよね。でも私には無理なんだ。過去に縛られ、前を向けない。それに、

私はもう諦めてしまったからね。でも後悔はしてない。私はムク兄が幸せになれば、

笑うことができるなら、それで幸せだからね♪」

そう言って浅葱は笑った。

「浅葱・・・」

クロームの体を借りた骸が言う。

「ムク兄はでも知ってたでしょ？このこと。それでも私がムク兄が私を止められないようにしていた。だから、ただの自業自得で、自己満足だったんだよ、私はね」

そして浅葱はクローム、骸の方をしっかり見て言う。

「だから、お願いだからムク兄が負い目を感じるとかやめてね」

とはっきり言うと、浅葱は馬羅の方を向く。

「さ、続きを始めようか♪」

標的６０　創無のリング争奪戦？～アルコバレーノの力～、来る！

「そいえば佐川馬羅はなぜ話してる時待ってたの？話してる時は隙めっちゃあったっしょ♪」

浅葱は純粋な疑問から聞く。

「ワ、ワタクシも、は、話を聞き、情報を、え、得る為ですわ」

「ふーん。ま、いーけど♪んじゃ今度こそ貴方を、壊してやんよ♪」

ゾクッ。

浅葱の殺意がこもった言葉に馬羅は震える。

「それはっ、無理です、こ、ことよ！行きなさい、デュアレモスカ！

今度こそワタクシの敵を殲滅なさい！」

そう馬羅が言うとデュアレモスカがキュイイイン、とスイッチが入ったかの

ように音が鳴り、あちこちから生えていた刃がぽろぽろ四分の三ほど落ちていく。

「？」

浅葱は不思議そうにそれを見る。

そして、デュアレモスカが消える。

「!?」

否、消えたのではなく、高速で、音速で移動し始めたのだ。

「刃を落としたのって軽量化するためか。元から余分に、異常に多く付いて
いるから、減らしても支障はない。どころか、それぞれは切れ味もだけど硬さを

半端無くする為に重過ぎる重量。だから、減らした分だけ速くなる、ってことかな♪」

「そ、そうですわよ。この速さにはさすがに人ではついていけない、は、はずですわ！」

馬羅は勝ち誇ったように笑う。

しかし浅葱は不適に嗤う。

「くふふ♪それはどうかな♪」

浅葱は首から提げている漆黒のおしゃぶりに巻かれている鎖を外す。

カァァア。

鎖を外すとリボーン、コロネロのおしゃぶりと共鳴して黒く光り輝く。

そして浅葱の体にも変化が訪れる。

耳が少し尖り、犬歯が鋭く伸び、手の爪が鋭く5センチほどに伸びていた。

「！な、何ですの、それは。ま、まるで、あ、悪魔のようですこと、よ」

馬羅のその言葉に浅葱は薄く嗤って言う。

「悪魔、ね。確かに、自分でもそう思うよ。まあ、おしゃぶりの封印を解いたし、

アルコバレーノの力を舐めない方がいいよ？」

と言うと浅葱は消える。

「ど、どこに」

「こっち」

その声に馬羅は上を素早く向く。

「上!?な、何で、あ、あんなに高く!人間技じゃ、あ、ありませんわ!」

馬羅の言ったとおり浅葱は人間で到底跳ぶごときでは届かない上空数百メートルに居た。

そして浅葱は何の武器も持たないで凄いスピードで落下してくる。

「し、しかし、武器も持たず、さっきも落下の衝撃を加えてもデュアレモスカは

壊れなかったのですわよ！それに音速で動いているものを、と、捉えることなど、

できるはず、あ、ありませんわ！」

「それは、さっきまでの話さ♪」

そう言って浅葱は右手を振りかぶる。

ドオオンッツ！！！！！

凄まじい轟音が浅葱の落下とともに鳴り響く。

土煙が辺りに立ち込めた。

標的６１　創無のリング争奪戦？～正常な思考～、来る！

「っ、デュアレモスカは・・・！」

土煙から現れたデュアレモスカは真っ二つになっていた。

「ど、どうやって！武器なんて持っていなかった、はず、で、ですのに。それに、

なぜ音速のデュアレモスカを、と、捉えれたの、ですわ」

「武器ならある」

土煙が完全に晴れると浅葱は無傷で立っていた。

そして自身の右手の爪を見せる。

5センチほどに鋭く尖った爪を。

「まさか、そ、それで、そんな、たかが爪でデュアレモスカを、き、斬ったと、

おっしゃるの！？」

「たかが爪じゃないさ♪私はこの爪を斬れる物は同じ硬さ、鋭さの私の爪しか

知らないよ。それに上空からならデュアレモスカの位置はすぐにわかる。

そこに空中に有幻覚で足場を作り、微調整しながら蹴って加速して、降りてきた

瞬間に、落下分の力をこめて爪を振れば簡単だよ♪」

浅葱は簡単そうに言うが実際は簡単などではない。

もちろん普通の人間では数百メートルから落下、という点で死亡となるし、

運動能力的にも不可能である。

しかし浅葱は狐の力もあり、アルコバレーノの力もあるので、一応は可能と

いえる、理論上では、だが。

しかし実際は不可能である。

正常な思考では。

なぜなら、落下の途中で人間なら、いや、飛べない生物なら、飛べない状態の

生物なら何であれ少しは恐怖を感じるはずなのである。

しかし浅葱は全く恐怖を感じない。

つまり、浅葱は正常な思考ではない、ということになる。

まあ、それは否とはいえないのだろう。

だって、浅葱は恐怖という感情をもう記憶でしか、ほとんど覚えていないし、

わからないのだから。

浅葱は記憶の中で、常に恐怖し、恐怖と狂気の中で生きてきた。

それで、恐怖に慣れ、恐怖という感情を欠落してしまったのだろう。

生物は恐怖という感情があるからこそ、生きていく。

全ての生き物の根底には死への恐怖があるのだろう。

しかし浅葱にはない。

だから正常な思考ではない、できない。

しかし浅葱は変われない。

過去に縛られ続ける限り。

しかし浅葱が過去から開放されることはない。

烙印を押されたその時から、浅葱はもう過去から開放されることはないのだ。

未来への希望を幾ら見出そうとしても、浅葱にはいつまでも過去が纏わりつくのだ。

記憶となって、苦痛となって。

標的６２　創無のリング争奪戦？～浅葱対馬羅～、来る！

「そ、そんなこと、簡単なはず、あ、ありませんわ！」

馬羅は浅葱が簡単と言ってデュアレモスカを壊したことに対して激昂する。

「簡単だから簡単なんだよ？私にとっては」

「・・・ば、化け物ですわ」

馬羅は忌々しい、忌避するような視線で浅葱を見る。

「全く、その視線は記憶の中とそっくりだね。ま、いーさ。化け物なのは自覚してるし♪」

「でも、わ、ワタクシは負けませんわ！」

と言うと馬羅は走って浅葱に近づく。

走る途中で馬羅は1メートルぐらいの機械の棒を出す。

甲高いノコギリのような音が鳴り響く。

「何それ？」

「こ、これは、棒の持ち手以外は全て、ぶ、分子レベルで振動している、のですわ」

「分子？あ、それってめっちゃ斬れるやつ？」

「そ、そうですわ」

「ふーん。でもさあ、それって、当たらなきゃ、意味ないよね？」

と言った瞬間に浅葱は数メートル離れていた距離を一歩で詰め、馬羅に回し蹴りを放つ。

ドガア！

しかし浅葱は蹴った瞬間に少し違和感を覚える。

まるで、鉄でも蹴っているような。

しかし、ま、いっかで浅葱は済ました。

そんな音が鳴って馬羅は直撃した左腕を庇いながら吹っ飛んでいく。

馬羅は立ち上がる。

「ワ、ワタクシは絶対、負けないんですわ。ワタクシのファミリーの為にも、

負けられないんですわ！絶対に、ボンゴレファミリーの守護者と、な、なって、

ワタクシのファミリーを一躍有名、巨大にしてみせますわ！」

それを馬羅は強い意志のこもった目をして言う。

しかしその逆に浅葱は闇を目に宿して言う。

「へーえー。じゃ、君はボンゴレの為でもツナの為でもなく、自分の為に
戦ってたんだー」

「それが、な、何ですの?結果論でボンゴレの為になりますわ!ワタクシの

ファミリーの情報操作、発明能力はそれほど凄いのですわよ！」

「もし、役に立つとしても、それは貴方じゃない。貴方の、佐川馬羅の
ファミリーが、でしょう？」

浅葱のその言葉に馬羅は表情を慌てさせたものにする。

「違いますわ！」

「違くない。佐川馬羅がワタクシのファミリーの情報操作、発明能力はそれほど
凄いのですわよ、って言ったんだよ?」

それに馬羅はハッ、とした顔になる。

「ま、いーや。もうこれ以上口で言い合っても無駄でしょ?決着早くつけようぜ♪」

「わ、わかりましたわ。もう、だ、出し惜しみはなし、にしますわ」

と馬羅は言い、懐から1つの銃を出し、先ほどまで持っていた棒を捨てる。

「銃？」

「こ、これで終わりですわ」

と言って馬羅は銃を両手で構え、浅葱は爪があるので武器は使わず、

素手のまま構える。

（あれ？さっき左手蹴ったの直撃だったのに持ってる・・・？ま、いーや。馬鹿羅だし）

そう思って、浅葱は気にしなかった。

しかし、後からこれを後悔することになるのだった。

標的６３　創無のリング争奪戦？～馬羅の絶対防御～、来る！

「んじゃ、今度こそ決着をつけようじゃないか♪」

と言って浅葱は走り出す。

「あ、甘いですわ！」

と言って馬羅が銃を撃つ。

ズガガンッ！

「甘いのはそっちだよ」

キキンッ！

と言って浅葱は撃たれた弾を全て爪ではじく。

それに馬羅は笑う。

「で、ですから、甘いのはそちらですわ」

「！」

ドドンッ！

浅葱に弾き飛ばしたはずの銃弾が当たったのだ。

そして浅葱は膝をつく。

「それはホーミング弾。そして、そ、それはただの銃弾では、あ、ありません。

アルコバレーノに有害と、さ、される物質を、ワタクシのファミリーで発見、し、

して、それを含んでいます。こ、降参するなら、い、今のうちですわよ」

それに浅葱はフッ、と嗤う。

「こんなので降参なんてするはずがないだろ?それにさ、この物質もまだ発見

したばっかりだろ?まだ、純粋じゃない。だから、そこまで有害でもないよ」

と言って浅葱はふらふらながらも立ち上がる。

そして傷口を爪で刺し、一つずつ体内の銃弾を抜いていく。

そして銃弾が抜かれたところは次々と傷口が塞がっていく。

「！な、なんで、こんな、早く、き、傷が」

それに浅葱は答える。

「ま、ネタバレすると簡単なことだよ。私はアルコバレーノとなったことで、

おしゃぶりと同化した。そして、私は他のどのアルコバレーノより

もおしゃぶり

との共鳴率が半端なく高いんだ。だから、超人的な身体能力と、回復能力がある。

ま、いつもは封じてるけども♪」

「ま、まさに、悪魔、で、ですわね。それに、ど、同化・・・？」

「同化については黙秘。または聞かなかった、ってことで。それに、何とでも

言えばいいさ。私は化け物だってことぐらいもう自覚してるからね」

そう言って浅葱は足に力を入れる。

そして馬羅も銃を構える。

ドンッ。

ズガガガガガッ！

浅葱が全力で踏み切って、馬羅に近づく。

踏み切った地面は軽くクレーターができていた。

馬らは銃の最大連射数まで撃つ。

浅葱は銃が1メートル先に来ると思い切りジャンプして馬羅のすぐ後ろに着地する。

「終わり」

と言って浅葱は馬羅の背後から爪を奮う。

「む、無駄ですわ。も、もう、あなたのデータは解析、し、しました」

「？」

浅葱は馬羅の言葉に疑問を感じつつも攻撃をやめない。

ガキイイン！

「なんだ、これは」

浅葱は思わず言葉を漏らす。

それもそうだ。

だって馬羅の背中を爪で切り裂こうとし、攻撃を当てた瞬間に金属がぶつかり合うような音が鳴ったのだから。

「ふふふ。ワ、ワタクシは我がファミリーが開発した攻撃無効化鎧を、き、着ていますの。これは元からあなたように作り、あとは一度攻撃を受ければ次からは完璧に無効化できるもの、だ、だったのですわですから、もうあなたが、

か、勝つことは、できませんわ」

「何でかな？」

浅葱は聞く。

攻撃が無効化されることなど何でもない、とでもいうように。

「だ、だって、攻撃が無効化、さ、されるのです、わ、わよ」

それを聞いた浅葱はクスリ、と嗤って、一度馬羅から距離をとる。

「攻撃が無効化？んなもん知らないよ。無効化されるなら、無効化できないほど

強烈な一撃を叩き込めばいい♪」

「そ、そんなこと」

「さて、次こそ本当に決めるよ。早く帰ってチョコ食べたいしね♪」

そう言って浅葱は右手を握って、漆黒と藍色の混ざった炎を灯す。

それを見たツナが反応する。

「んなー！あれって死ぬ気の炎ーーー！？」

「そうだよ。これは私がエストラーネオの人体実験で手に入れた力だけどね♪」

そしてどんどん炎の純度を上げていく。

純度が上がるとともに漆黒がより闇の色に、藍色が綺麗に透き通っていく。

「さあ、終わりだ」

浅葱は言うと同時に馬羅に駆け出す。

標的６４　創無のリング争奪戦？～創無の決着～、来る！

馬羅は浅葱の駆け出したスピードについていけずに立ち尽くす。

その間に浅葱は右手に力を圧縮させながら馬羅に近づく。

圧縮させた力に大気が震える。

そして、その強大な力をそのまま右手に纏い、浅葱は馬羅をぶん殴った。

ドゴアアンンッ！！！

馬羅はこれ以上ないほどに吹っ飛ぶ。

そして浅葱殴った時にとっておいた馬羅のリングを、無と創にわけ、

無と創のリングを完成させる。

無のリングをチェルベッロに見せて浅葱は言う。

「チェルベッロ、これでいいのでしょう？」

「はい。無のリングが無の守護者、六道浅葱の物となりましたので、創無戦の勝者は六道浅葱となります」

その言葉に一部の者が沸き立つ。

「おめでとう・・・。浅葱様」

「やったれす！浅葱さん！」

「・・・おめでと」

「ししし♪やったな、姫♪」

「ありがとう♪」

そこで浅葱の頭に言葉が響く。

［［おめでとうございます。浅葱］］

骸である。

［［ありがとう、ムク兄♪］］

「ま、まだですわ！」

と言ってまだ砂煙の上がっていたところから馬羅がいきなり現れ、浅葱から

創のリングを奪う。

「創と無の、リ、リングには、適正があると、き、聞いたことがありますわ。

適正の無い者はリングをはめることがで、できないと」」

「あり？しぶといね。つかもう決着ついてるけど？」

「しかし、はめることが、で、できなければ、守護者には、な、なれませんわ！」

「まーね。でもさ、貴方がつけられる確証もないですよ？」

「そ、それはあなたも同じ、で、ですわ」

「私は大丈夫なんだよ。第一、私は無のアルコバレーノだからね。無のボンゴレリングに

異常に共鳴することはあっても、拒まれることはありえない」

そう言って浅葱は無のリングをはめる。

しかし何も起きない。

「ほら、私は無には拒まれない。無のリングに拒まれた場合は精神が壊れる。

あ、でも無のリングの場合は拒まれる、ってより堪えられない、かな。無の

リングをつけると、つけた人は何をしても満たされない凄まじい虚無感が

付き纏う。それに堪えられなかったら、精神が崩壊する。創のリングに

拒まれた場合は創造の反対で、体の一部が消失する。拒絶率が多いほど、

消失する部位は多くなる。そして、それぞれの拒まれない条件は「ワ、ワタクシは、

絶対守護者に、な、なりますの！」」

馬羅は浅葱のセリフを遮って言う。

そして創のリングを馬羅はつける。

「！ほ、ほら！ワタクシ、だ、だって、だいじょ、キャアアアアアーーー！」

馬羅は突然悲鳴を上げる。

そりゃそうだ。

何てったって、馬羅のリングをしていた右手と右足が根元から、それに

左足の膝から下がいきなりどす黒く染まり、もやの用にフッ、と消えたのだ。

「途中でセリフ遮るからそうなるんだよ。

無のリングに拒まれない条件は『魂が漆黒の闇であり、無であること』、

創のリングは『魂に溢れきれない暖かさを持つ者』。

自分の利益しか考えない人間が暖かさなんて持つ訳ないじゃん」

そう言って浅葱は右手右足、左足の半分を失って倒れ、血を流し続け、気絶している馬羅は

無視して創のリングを拾い、戦いが終わって赤外線という壁が消えたクロームの

方に投げる。

「クローム、創のリングしてみてよ。クロームなら絶対大丈夫だよ♪私が保証する♪」

そう浅葱は言う。

「浅葱様・・・。わかりました」

と言ってクロームは創のリングをはめる。

しかし何も起きない。

「ほらに♪クロームはやっぱ創の守護者にぴったしだね♪ま、霧にもぴったり

だけども、クロームは私にしたら眩しすぎるくらいに優しくて暖かいからね♪」

「浅葱様・・・／／／。ありがとう」

「んーん。ま、そっちが勝っちゃったりした場合とかは創のリング
はクロームの
物でいいんじゃね？創の守護者（仮だった人）はもう足手まといで
何も
役立たないし、何より創のリングに拒否られてんだし♪」

そこでチェルベッロが口をはさむ。

「ひとまず創のリングはこちらで預からせてもらいます。ただし、
佐川馬羅の

創の守護者としての刺客はリングに拒まれた時点で剥奪させてもらいました。

そして明晩の対戦は、雲の守護者の対決です」

と言ってチェルベッロは消えた。

「さて、私は久しぶりにＶＡＲＩＡの皆といようかな♪ベルにボス達、

ちゃっちゃと帰ろうぜ♪ムッツリは来なくていいけど♪」

「なぬ！」

「なぬじゃねーよタコ」

等といいながら浅葱を含んだＶＡＲＩＡはホテルへと帰っていくのだった。

こうして、創無のリング戦は浅葱の勝ち、それに馬羅はツナ達が勝ったとしても

創の守護者にはなる資格がなくなる、という結末で終わったのだった。

標的６５　雲のリング争奪戦？～雲戦開始～、来る！

浅葱は午後7時ぐらいに起きた。

「ふあーあ。んー、もう夜じゃないか・・・。とりあえず着替えよう♪」

と、ホテルの一室で呟くと浅葱は着替え始める。

今日は藍色に薄水色で霧柄の模様がついている着流しである。

その上から、風紀の腕章がついたＶＡＲＩＡコートを羽織る。

「今日で戦いが終わり、か・こっちが勝ったらこっちの勝ちで、ツナ側が
勝ったら引き分けじゃん・・・」

といいながら浅葱は部屋をでる。

そしてロビーに着く。

「ベルー、黒曜センター行ってくるに。んで、今日も多分クローム達と観戦するから」

ロビーに入るとほぼ同時に中にいたベルに言う。

「ん、オッケー」

「んじゃあに、ベル♪」

「ししっ、じゃーな♪」

と言葉を交わすと浅葱は黒曜センターへと行く為、外へでる。

黒曜センター。

「うーす♪起きてるー？」

浅葱はいつもクローム達がいる部屋に入って言う。

「こんな時間に起きてない人っていますかびょん？もう夜の7時だびょん」

ブチッ。

「くふふふ♪起きてなかったら悪いのかな？私はほんの数十分前に起きたけど？」

「！　すんませんびょ！ってキャギョーン！」

浅葱は犬にそこらへんに落ちていた大石を投げた。

「けっ、当然の報いだぜ♪」

「浅葱様・・・。今日は、どうしたの？」

「ああ、クローム。今日はさ、雲戦一緒に行こうと思ってね♪」

「ヴァリアーの人達と一緒、じゃなくてもいいの・・・？」

「いーのいーの、んじゃ、時間までご飯食べたりして、暇つぶしてから、行こーぜ♪」

「はい・・・♪」

それから3時間ほど浅葱やクロームは雑談したり、食事をとったりと、

時間を潰してから、並盛中へと行くのだった。

並中。

全員が揃ったところで、チェルベッロがルール説明を始めた。

要は地雷とガトリングに気をつけて戦え、ということである。

そして雲戦が始まる。

「それでは始めます。雲のリング、ゴーラモスカVS（バーサス）雲雀恭弥、バトル開始！」

標的６６　雲のリング争奪戦？～ゴーラモスカの秘密～、来る！

結論から言おう。

雲戦は圧倒的に雲雀が勝利した。

本当に１０秒とたたずに終わったのではないか、というぐらい圧倒的だった。

これでリング争奪戦はひきわけとなったのだ。

しかしそんなもので雲雀が止まるはずは無く。

やはりというか何というか雲雀はＸＡＮＸＵＳを挑発して、戦いを挑んだ。

けれどもそれはＸＡＮＸＵＳの策略であり・・・。

「つーか恭弥ももう少し頭使えばいーのに。罠だって気づけるかもなのに」

浅葱は呟く。

あたりは雲雀がゴーラモスカの暴走で戦場と化している。

「浅葱様・・・？早く逃げないと・・・」

「んー？大丈夫だよ。クローム達も守ったげるから動かないでね」

「でも浅葱さん！」

犬は焦る。

そりゃあそうである。

何てったって上からミサイルが降ってきているのだ。

「だーから♪大丈夫だっていってるじゃないか♪」

というと浅葱は指パッチンを一度鳴らす。

すると浅葱の体から漆黒と藍の混ざった炎が飛び出し、ミサイルを全て空中で

飲み込み、燃やし尽くす。

「くふふふ♪私はミサイルなんかじゃ殺せないのさ♪」

「浅葱様・・・。ありがと」

「全然、構わないさ♪にしてもあっちでは何かごたごたやってるねー」

と言って浅葱はある方向を指差す。

浅葱が指差した方向にはいつの間にかツナがおり、モスカと戦っていた。

「ボス・・・！？」

「どうやら飛んで来たみたいだね。今も飛んでるし」

「飛ぶ・・・。ボスって、凄いんだ」

「私だってやろうと思えばできるよ♪半端なく疲れるけど」

「浅葱さんも凄いびょん・・・」

「ん？やっと九代目出てきたね。大怪我付きで。」

「浅葱様、知ってたの・・・？」

「まーね。つか私は結構重要な幹部の位置に居るんだぜだぜ？」

「へー・・・」

「だからわかるけどもさ。ツナはこれ以上ないほどにボスの策略に引っかかってるね」

「そんなこと、私に言っちゃってよかったの・・・？」

「ま、普通はダメだけど、まあクロームや犬ならいいかな、っと」

「・・・浅葱様。そんなんでよく幹部でいられますね・・・」

「うおう！いつからそんな毒舌になったんだ、柿ピー」

「・・・柿ピーじゃない」

その声は誰にも相手されること無くスルーされるのだった。

「ん？何かごちゃごちゃまたやってるね。行ってみる？」

その言葉にクロームはこくり、と頷く。

「じゃ、行こう」

そう言うと浅葱、クローム、犬、千種は走っていく。

「ボンゴレの歴史に刻んでやる。ＸＡＮＸＵＳにたてついた、愚かなチビが１人いたとな」

「１人じゃないぜ！１０代目の意思は」

獄寺がボムを構えて言う。

「オレ達の意思だ！」

山本が刀を構えて言う。

笹川了平やクロームも構える。

「個人的に」

雲雀も構える。

「来るか、ガキ共！」

「ししっ、いいねえ♪」

レヴィとベルも構える。

「くふふ♪ゴメンネクローム。今回ばかりはクロームの敵だね♪」

浅葱も短刀二本を出して構える。

ちなみに言っておくがおしゃぶりはもう昨日の創無戦が終わった時に鎖を巻いて封印している。

しかしそこでチェルベッロが口をはさむ。

「お待ちください。九代目の弔い戦は、我々が仕切ります。リングの移動は、

我々の認証なくしては、認められません」

そこであちらこちらから反論が聞こえるが全てをほぼスルーされる。

「我々は、勝利者が次期ボンゴレボスとなるこの戦いを大空のリング戦と
位置づけます。すなわち、今まで行ってきた七つのリングの最終戦です」

「それでは明晩、並中に皆さん、お集まりください」

「あーらら、モドキに執行猶予与えちゃったよ」

「何い！」

「てんめえ！」

「ツナは修行で、体力を使い果たしてたんだ。グッドニュースだぞ」

「ふん。明日が喜劇の最終章だ。せいぜい足掻け」

とＸＡＮＸＵＳが言うと大空のハーフボンゴレリングをツナに投げる。

そしてＸＡＮＸＵＳは炎を強くし、周りが見えなくする。

標的６７　雲のリング争奪戦？～地雷大爆発～、来る！

光が消えた時にはもうＸＡＮＸＵＳ等ＶＡＲＩＡ、それにチェルベッロは消えていた。

「き、消えた・・・！？あの女達もだ・・・！」

「あ、きゅ、九代目！しっかりしてください！」

と言ってバジルが駆け寄る。

「遅かったか」

そこにキャバッローネファミリーの面々と、ディーノが現れる。

「跳ね馬！」

獄寺が声を上げる。

そしてその頃浅葱はといえば。

「クローム、クローム」

「！　浅葱様、ヴァリアーの人達と一緒に帰ってなかったの？」

「ん、まーね♪　あの地雷郡を爆発させたいなー、と」

「何でれすか！？」

「んー、だって、楽しそうだから。つー訳で、ちょっとさがっといてに」

と言うと浅葱はディーノの方へ歩いていく。

「ディーノー」

「！浅葱！？何でヴァリアーのお前がここにいんだよ！」

「ダメ？じゃなくて、地雷周辺の人達非難させてよ」

「何するつもりだ？」

ディーノは若干引き気味で言う。

「くふふ♪全部一気に爆発させるのさ♪楽しそうだろ？」

「ハア、ったく。浅葱の性格がなんとなくわかってきたよ」

ディーノがため息を吐きながら言う。

「んじゃいーの？それに地雷回収の手間も省けるよ♪」

「しゃーねーな。おい！テメエ等、一回そこどけ！」

と、ディーノが言うとキャバッローネファミリーが撤退する。

「んじゃいきまーす♪3、2、1」

そして浅葱は指パッチンする。

すると浅葱の体から漆黒と藍の炎が飛び出し、一つの球体になる。

「はい、どーん♪」

と浅葱が言うとその炎の球体が地雷郡に高速で向かっていき、派手に当たった。

ドガガガアアアンッッッ！！！

それはもう凄まじい轟音が鳴って、爆発した。

大体の者は呆気に取られていた。

その中で浅葱だけハイテンションである。

「くふふふふ♪愉しいね♪」

しかしそこに1人近づく。

大きくトンファーを振りかぶって。

バコオッ！

浅葱にトンファーが直撃する。

「いって！何するんだ恭弥！」

「それはこっちのセリフだよ。君仮にも風紀委員だよね？」

「？　そうだけど？」

「ならなんで並中破壊してるの」

「ハッ！　ゴメンちゃい？みたいな？」

雲雀は無言でトンファーを構えて浅葱に殴りかかる。

「咬み殺す」

「うえぇ！ま、いーや。折角だし戦ってやんよ♪」

と、浅葱と雲雀は戦い始めるのだった。

「浅葱とヒバリ・・・。一応敵同士っスよね」

獄寺の独り言が響くのだった。

その後はもうそろそろ日が昇る、という時間まで戦い続け、そのまま浅葱は

風紀委員の書類仕事をさせられるのだった。

標的６８　大空のリング争奪戦？～大空戦開始～、来る！

大空戦当日午後１０時５０分。

浅葱は精神世界に居た。

「うー、あー・・・」

浅葱は大の字で寝転がっていた。

その近くに骸が座る。

「全く、どうしたのですか?もうそろそろ大空戦ですよ?行かなくていいのですか?」

「うー・・・。恭弥のせいだ」

「雲雀恭弥?ああ、書類仕事をやらされたのですか」

「やっとわかったか・・・。書類仕事どんだけ溜めてるんだよ。しかも書類やる前に
戦ってたから余計疲れるし・・・。大空戦でもし戦いあったらどうするんだよ」

「じゃあ僕の槍を使えばいいでしょう?昔した契約、互いに生命力を分け与えられるもの、その契約の証の槍は持っているでしょう」

「ああ、なるほど。それなら戦いあったとしてもオッケーだね♪ありがと、ムク兄」

浅葱は起き上がって、笑って言う。

それに骸も笑いを返す。

「ところでさ、その生命力分ける契約名前つけようよ。凄い言いづらい」

「そうですね・・・。どんなのがいいでしょうか」

浅葱と骸は暫しの間沈黙する。

「「生命同化の契約(せいめいどうかのけいやく)！」」

「ん。決まりだね♪」

「ええ。というかもうそろそろ現実に戻らなくていいのですか？」

「あ、やばいかも。大空戦始まってしまう。つー訳で、またに♪」

「それでは、また」

と言葉を交わすと浅葱の姿は霧のように消えた。

その後に骸も霧のように消えた。

浅葱はぱちり、と眼を覚ます。

「恭弥？」

浅葱は雲雀におんぶをされて、いつの間にか大空戦の関係者が集まっている所に居た。

「やっと起きたの」

と言う声が聞こえると浅葱はどさっ、と落とされる。

「いで！ま、いっか。恭弥が運んでくれたんでしょ？さんきゅー♪」

浅葱はついた土をはらう。

ちなみに浅葱の格好は昨日から書類仕事をしたり、と寝てる時間なんて

数十分だったので、昨日の服装のまま、着流しである。

そしてチェルベッロの声が響く。

どうやらルール説明をするらしい。

浅葱は一応自分も参加するっぽいのでちゃんと聞いた。

そして、大空戦が始まる。

浅葱は馬羅とともにグラウンドの端らへんに居た。

毒により、行動不能で。

まあもとより馬等は行動不能で、布団にくくりつけられているが。

標的６９　大空のリング争奪戦？～デスヒーター解毒～、来る！

「さて、ここからどうしようか・・・」

浅葱は１人呟く。

まあ正確には１人ではないのだが。

だが馬羅は浅葱が存在ごと無視しているので無視する方向で。

それに馬等は意識を失っているのだ。

「とりあえず、解毒して他の皆とかクロームとか助けなきゃだね。クロームは

敵側だろ、とかいうツッコミは無し、ってことで。てか私は一体誰に向けて

しゃべっているんだ?ああ、独り言か。そうだった。私はムク兄と別れてから

独り言が多くなったんだった・・・。独り言が多い人って何か寂しい人に

見えるよね・・・。って、また独り言・・・」

浅葱は少し落ち込む。

しかしすぐに復活する。

「ま、いっか♪とりあえず、このですひーたーとかいう毒はそこまで効かないな。

まあそりゃそうか。化け物だし」

と言いながら浅葱はポールの足を短刀を使い斬る。

ズドオオオン。

そして落ちてきた創のリングは無視して、無のリングを拾い、解毒する。

「んじゃ、まずはクロームの所に行こうかな。まあ、創のリングは無視しよう。

だって、仮だとしても今は馬鹿羅のリング、ってことになってるし。

とりあえず

クロームに所有権渡させてからじゃないと何か触んのも冷静に考えたら嫌だな・・・」

と呟いてから浅葱は馬羅と創のリングを放置して体育館の方へと歩いていく。

ギイイイ。

浅葱は体育館のドアを開けて、入る。

すると天井に大きな穴が開いていた。

「あり？何があったの？あ、もしかしてボスの銃弾当たったとか」

自己完結すると今度は正面を見る。

そこには毒によって苦しむマーモンとクロームが居た。

「おおう、ちゃっちゃと助けちゃおう」

と言って、一跳びでポールの上の霧のリングを取る。

ちなみに先ほど跳んだらすぐ取れるのに斬ったのか、その理由は至

って簡単。

気分である。

そして浅葱は手早くクロームの解毒をし、次にマーモンの解毒をする。

「マーモンマーモン」

「ん、なん、だい？あと、解毒、礼を、言う、よ」

まだ毒が抜けきっていないのか切れ切れに話す。

「多分最後に獄寺とかがたくさんリング持ってここ来ると思うからさ。

罠仕掛けようぜ。ちなみにクロームには少しの間おとなしくしててもらうからに。反論は認めません！」

「浅葱様・・・。解毒、ありがと・・・。反論しても、無駄だ、っ

てのは、わかってるよ」

それを聞くと浅葱はニッ、と悪戯をしかける前の子供のように笑った。

標的７０　大空のリング争奪戦？～守護者の戦い～、来る！

ガラガラッ！

勢いをつけて体育館の扉が開かれる。

「ボールが！どうなってやがる！」

「髑髏はどこいきやがった！？」

入ってきた獄寺と山本が叫ぶ。

コンコン。

「こっちこっち」

ベルがクロームの三叉槍で地面を叩きながら言う。

「ししっ♪」

「待ってたよ」

「くふふ♪」

そこには縄で手を縛られ、上から吊るされ、ベルが三叉槍で、浅葱が三叉鎌を

クロームの首に突きつけている光景があった。

「なっ、何で浅葱まで！」

「馬鹿ですかー？私はＶＡＲＩＡの一員さ。その上では親友何てくだらない物だよ」

「さ、お前達の持つリングを渡してもらおうか。さもないと、ししっ♪」

それから少々の時間が経過する。

「ししししっ♪どうすんのさ」

「しょうがねえ。リングを渡すしかないみてえだな」

「な、何言ってんだよ！」

「オレが持ってるリングが雨、雲、それに創。獄寺が嵐と晴と雷。つまりお前たちの
持ってる無、霧のリングと合わせれば、守護者のリングが全て揃う」

「ムム」

「ラッキー、集める手間が省けたじゃん♪」

「お、おいこの野球馬鹿！わざわざそんなことを教えるなんて、何考えてる「ただし！」！」

「山本は獄寺の言葉を遮って言う。

「いっぺんにはやらねえぜ。まずその子の解毒と、この雨、雲、創のリングとの

交換だ」

「なっ」

「それができたら信用して、残りのリングとその子の交換に応じる」

「へー、武って結構頭使えるんだね♪ま、いいよ。ベルもマーモンもいいよね？」

浅葱は有無を言わさぬように言う。

「ししっ、姫が言うならいーぜ♪」

「わかったよ」

「んじゃ、武がまずリングを転がしてよ。刀のリーチには入らないからね。

それに私も一緒にクロームを解毒するからさ♪」

「わかった」

そう言って武は2つのリングを転がす。

しかしそこで落ちていた足に躓く。

「何やってんの？」

（時雨蒼燕流、攻式三の型　遣らずの雨）

山本は足で刀の柄を蹴って、ベルに向かって飛ばす。

「いだあ！」

ベルが吹っ飛ぶ。

「足で、刀を！」

「！」

マーモンも山本に右手で刀を突きつけられ、浅葱はベルが持ってい

た三叉槍を

左手で持った山本に首に突きつけられている。

「動くな」

「形勢逆転だな♪」

「やるじゃねえか山本！」

「やはり只者じゃない連中だよ。警戒しておいてよかったよ」

と、マーモンが言うとマーモン、ベル、浅葱にクロームの姿が消える。

「武達はこの体育館に入った時から私の有幻覚と、マーモンの幻覚に騙されていたんだよ」

「ししっ♪形勢再逆転♪」

あたりにはマーモンの幻覚だが、大量の分身が居る。

それぞれが笑って、不気味な様子となっている。

標的７１　大空のリング争奪戦？～逆境を砕く拳～、来る！

それから獄寺達はマーモンの幻覚で行動不能にされ、さらには、全てのリングを

浅葱達に取られ、かなり危機的状況に陥っていた。

しかし、そんな時だった。

体育館が一思いに吹き飛んだのは。

ドゴオオオンンッ！！！

「なっ！」

浅葱はいきなりのことに少し驚く。

しかし驚いても時間は止まらず、体育館は崩壊した。

たった一人の男の拳で。

しかしその直後、瓦礫が全て漆黒と藍の混ざった炎に包まれた。

その炎は瓦礫が飛んでくるのを全て受け止めていたらしく、炎は空中2メートル
ぐらいから出ていた。

その炎の中心には1人の少女が立っていた。

その頃、観客席。

「なっ、モニターが！」

「どうやら体育館のカメラが破壊されたようです。今周りに残っていたカメラに変更します」

そうチェルベッロが言うとカメラに体育館の様子が映った。

そこには漆黒と藍の炎が全てを包んでいる映像があった。

「なんだありゃあ！」

シャマルが言う。

それにスクアーロが呟く。

「あれは、浅葱かあ゛」

しかしそれにバジルが反応する。

「ちょ、ちょっと待ってください！浅葱殿があんなに大きな死ぬ気の炎を出していると

いうのですか!?死ぬ気になっている、とでも・・・」

それにコロネロも同意して言う。

「浅葱があんなに大きな炎を出せたとでも言うのか？コラ！創無戦の時の比じゃないぜ！」

そう。

創無戦の時にはせいぜい拳に灯らせる程度だったのだ。

しかし今は体育館全てを包むほどの大きさで、篭っている力も桁違いである。

なぜなら包んでいる瓦礫を焦がすまもなく、灰にもせず、全てが燃えつくされ、

消されている。

それほどまでに物質が燃えつくされるには想像も出来ないほどに高温でなければ

出来ないのだ。

「おい、スクアーロ。あれが浅葱の力なのか？それに、死ぬ気になっているのか？」

ディーノがスクアーロに聞く。

「浅葱は死ぬ気になんかならねえぞお。あれは今の浅葱の姿では最大の力だろうなあ゛」

「今の浅葱の姿・・・？」

「これ以上は何がなんでも教えられねえぞお　ぢ！！！」

スクアーロは絶対に教えないというように目に力をこめる。

それにディーノは渋々承諾する。

「・・・。わかった」

その後は何も言わず、皆モニターを注視していた。

標的７２　大空のリング争奪戦？～矛盾した言葉～、来る！

浅葱は体育館が吹き飛ぶとわかった途端、大鎌を消し、有幻覚でできた偽の

クロームを消し、両手を上に上げて、漆黒と藍の炎を頭上全てを覆うほどの

規模で出した。

なぜそのような規模で出したか、といえば、幻覚で見えないようにしている

本物のクロームや、ベル達も瓦礫から守る為である。

咄嗟だったため、獄寺達のところも守ってしまった、という訳である。

そして今は全てを蒸発させてしまう業火で全ての瓦礫を蒸発させ、しかし炎の下に

いる者には被害が出ないように微細なコントロールをしているのだ。

そして思わず目をつぶってしまっていた皆が目を開ける。

「な、なんだこの炎は！」

獄寺が叫ぶ。

「ムム、これは、浅葱か」

「姫！」

ベルは浅葱にかけよる。

「こんな規模で・・・。大丈夫か？」

「んー、ベルか、大丈夫だよ♪」

浅葱はそう言いつつも汗が滴っていた。

「そっか」

「もう少しで全部の瓦礫が蒸発するね」

「全部蒸発させる必要なんてあるのか？」

「もうどうってことない量なんだけど、めっちゃ高温になってて危険だから

全部蒸発させなきゃなんだよ。３、２、１、０」

浅葱が０と言った途端に全ての炎が消えうせ、浅葱が座り込む。

しかし全ての瓦礫もきれいさっぱり消えうせていた。

「姫！大丈夫か？」

「んー、大丈夫大丈夫。それよりも、リングは全て集まったようだし、

ボスの所に行こうか」

そう言って浅葱達が去ろうとするのを獄寺が止める。

「ちょっと待てよ！髑髏はどうしたんだよ！」

「くふふ♪後ろを見てみなよ」

獄寺が後ろを向くと無傷で元気そうなクロームがいた。

獄寺達を脅す為につけられた傷や、解毒されて間もない時のふらふらさもないようだ。

「なん、で？」

「隼人達を脅す時見たクロームは私が創った有幻覚だよ。つまりは、偽者♪

その間クロームは幻覚で姿を見えないようにして、私が頼み込んで……

動かないでもらっていたんだよ♪」

「なっ！オレ達がピンチでも黙ってみてたってのか！？」

「だから違うって。クロームは私が脅していたんだ。だから、クロームは悪くない。

だからクロームを責めちゃダメだからね♪」

浅葱の言葉は先ほどと矛盾していた。

先ほどは親友なんてどうでもいい発言をしていたのに、今は完全にクロームを

庇っていたのだ。

「さあ、ベル、マーモン、行こう？」

「ししっ♪そーだな♪」

「ああ、ボスを待たせるなんてできないからね」

そう言うと3人は走り去って行った。

獄寺や山本が行こうとしたが、怪我が酷く、無理であった。

了平はそこまで傷ついてはいなかったが、状況がわかっていなかったため、

ただ突っ立っているだけであった。

標的７３　大空のリング争奪戦？～リングの秘密～、来る！

ＸＡＮＸＵＳとツナが戦っていたグラウンドは今はところどころにクレーターが出来、

激しい戦いがあったと一目でわかる光景だった。

当の本人達といえば、ＸＡＮＸＵＳは氷漬けになっており、ツナはそのＸＡＮＸＵＳを見ていた。

そしてツナが言った。

「もう、この氷が溶けることはない」

「ざーんねーん。それがあるんだな♪」

とこの場に似合わない陽気な声で浅葱は言って、現れた。

隣にはマーモンが居た。

そしてマーモンの手には大空以外の全てのボンゴレリングが乗せられている。

「この氷は死ぬ気の炎をも閉じ込める。けれど、弱点もまた死ぬ気の炎でね」

浅葱は言って右手に漆黒と藍の死ぬ気の炎を宿して氷に触る。

すると、炎が触れた所からどんどん溶けていく。

「実際に、閉じ込められていたボスを救出したのも私なのさ♪」

「それに、なぜリングを半分ずつ保管するのか。そしてなぜ、ボンゴレの
正統後継者にしか授与されないのかわかるかい？」

「？」

ツナは疑問そうにする。

「これはエストラーネオというマフィアでマーモンが手に入れた情報なんだけどね。

そのファミリーでは死ぬ気の炎も研究していた。その証拠が死ぬ気の炎を生身で、

何も介さず使える私ね。そこでは、ある興味深いレポートがあったんだよ」

そして浅葱はマーモンが持ち帰ったレポートの内容を思い出し、言う。

『死ぬ気の炎を持つ生体兵器』

マフィアで知らぬ者はいないボンゴレファミリーには死ぬ気の炎という物が伝わっている。

今回我々はそれを我らエストラーネオの武器とできないかと研究した。

それにあたり、まずはどうやって死ぬ気の炎を発生できるかを調べた。

一番初めにわかった情報では、これもボンゴレに伝わる特殊弾、死ぬ気弾により死ぬ気になれば発生できそうだとわかったが、その死ぬ気弾が入手困難な為、断念。

次に手に入った情報では、どうやら力宿るリングという物に死ぬ気の炎を灯せるらしい。

古来より、呪いのリングと呼ばれる物があるが、それと同系統の物なのではないかと推測する。

そのリングは人の精神力が関係して、炎を灯すようだ。

そして、その精神力、リング、等の点から研究を進め、ついに生物で死ぬ気の炎を発生させ、操れる理論が完成した。

それは第１支部である。

しかしその理論はよほどそれと相性のいい者でなければならず、更には化け物ぐらいの身体耐久力が無ければ成功しない、とのことだった。

そこで、開発中のＤＮＡと組み合わせ、それと共鳴する者を待つことにした。

ついにその共鳴者が第１支部で現れた。

第１支部ではその共鳴者、１２０６にもう一種類の人体実験とともに、合計二種類の実験を施した。

結果、どちらも成功。
しかし実験後、目を覚ましてから１２０６と他一名が暴走し、第１支部を破壊。
それによりこの計画は凍結となった。

「というものだよ」

浅葱はそれを一字一句間違えずに言い切った。

絶対記憶能力のせいで全てを記憶しているのである。

しかしそのレポートを言っていた浅葱の表情は辛そうであった。

その先をマーモンが続ける。

「これで今重要なのは『どうやら力宿るリングという物に死ぬ気の炎を灯せる
らしい』という部分さ。そしてボンゴレリングは力宿るリングなんだよ」

そうマーモンが言うと、リングが光輝き、炎を放った。

ツナが持っている大空のリングもである。

大空がオレンジ。

晴れが黄。

雨が青。

嵐が赤。

雷が緑。

霧が藍。

雲が紫。

無が漆黒。

創が純白。

そしてマーモンはその炎を氷に触れされ、どんどん溶かしていった。

標的７４　大空のリング争奪戦？～リングの拒絶～、来る！（前書き）

標的７４　大空のリング争奪戦？～リングの拒絶～、来る！

そしてＸＡＮＸＵＳの氷が全て溶ける。

するとベルがツナの持っていた大空のリングを奪った。

そして、マーモンが守護者のリングをはめていく。

全てをはめると、ベルが大空のリングをＸＡＮＸＵＳの指にはめる。

それを浅葱は精神力限界で、立つのも精一杯ながら見つめていた。

さっきレポートを読んだ時、感情を酷く揺らした為、烙印の痛みが酷くなっているのだ。

動くだけでも痛みは増すし、動けば動くほどに増大はするが、感情を揺らすと

今までの比じゃなく痛みが倍増するのだ。

それに浅葱は体育館の瓦礫を燃やすのでかなりの力を使ってしまっているので

体力的にはかなり限界だったりするのだ。

だから、浅葱はもう半分意識を飛ばしたような状態で、周りを見るだけで話を

聞いていない状態である。

（んー。でもまあ、この痛みが、苦痛がムク兄には伝わらない、ってだけで

いいことだよね。普通の傷とかの痛みとか感情は全部互いにダダ漏れでも、

これは私個人だけにたいするクソ神様とやらからのぷれぜんと、らしいからなー。

いくらムク兄でもこれは共有できない♪）

こんな時であっても浅葱は骸のことを第一に考えた。

（あ、そいえば大空、無、創のリングは適合しなかったら拒絶するんだよね。

大空の拒絶条件はボンゴレの血か、否か。拒絶されたらどうなるんだろうね。

おそらく拒絶されなかった場合は何も起こらないとは思うけど・・・。さて、

ボスに何が起こるんだろうね♪）

ふと浅葱が顔を上げると、ＸＡＮＸＵＳがリングに拒まれ、周りが疑問を抱いている所だった。

「あー、やっぱり拒まれた」

浅葱の呟きにマーモンが反応する。

「ムム、浅葱、これがどういうことか知っているのかい？」

「そりゃあね。何様浅葱様だもんね♪知らないことはないぜ♪」

「姫、どういうことなんだ？」

「んー、単純明快な話だよ。スクアーロ、話してもいいかな？」

いつの間にか観覧席との通信ができるようになっていたらしい。

「ああ」

「んじゃあ私から話そうか？母親に振り回された哀れな男の子のお話を♪」

そう言って浅葱は嗤った。

標的７５　大空のリング争奪戦？～哀れな男の子～、来る！

昔イタリアの下町に生まれた時から炎を宿した男の子が生まれました。

しかしその家庭は裕福ではなく、むしろ貧しい部類でした。

そんな、貧困が巻き起こした悲劇だったのです。

炎を宿した男の子の母親はその炎が死ぬ気の炎だと思いました。

死ぬ気の炎といえばボンゴレファミリー。

ボンゴレといえば、知らぬ者はいないほどに有名で巨大なファミリーです。

貧困とボンゴレの死ぬ気の炎と、男の子の炎、その三つから母親は勘違いしたのです。

＞この子は九代目と私の子だわ＜

と。

そして母親は九代目に九代目と私の子、と言って会いに行きました。

当然ながら九代目は何のことかわかりもしませんでした。

しかし、九代目は見てしまったのです。

母親の言うことを疑いもせずに、信じ、九代目を父親だと信じて疑わない、その瞳を。

それを見た九代目はその子を息子、ということにしてしまったのです。

その子はマフィアのボスとしてすばらしく育ちました。

しかし、ボンゴレのボスには一般人はなれないのです。

他のマフィアもそうですが、ボンゴレはその中でも特別です。

ボンゴレリング、それが有る限り、ブラッドオブボンゴレがないと
ボスには
なれないのです。

そして男の子はある時知ってしまったのです。

自分が本当の九代目の子供じゃないのだと。

しかしその男の子はボスになることを諦めることなどしませんでした。

だから、自分がボスとなるためにはどんな手段でも使うようになったのです。

そして、ある考えにいたりました。

＞九代目を殺して今すぐに自分が十代目をなろう＜

そしてその考えを実行すべく、計画を立て、実行したのです。

それは後に［揺りかご］と呼ばれました。

しかし、その計画は失敗してしまうのです。

そして、九代目に氷に閉じ込められ、八年眠り続けました。

そして八年ぶりに氷から開放されました。

その男の子は憎悪と執念を増幅させていました。

そしてまた、十代目となるために計画をして、行動するのです。

標的７６　大空のリング争奪戦？～大空戦の結末～、来る！

浅葱は話し終えて、一息ついて、また声を発する。

「さあ、これが揺りかごとボス、ＸＡＮＸＵＳの真実、というものだよ♪そうでしょう？

スクアーロ？」

それに観覧席のスクアーロが答える。

「ああ。しかし、なんで浅葱が知ってたんだあ゛？」

「んー？私の情報収集能力は結構高いんだよ？契約した人間の脳を除いたり、

無理くり指令を聞かせたりして調査させたり、それにムク兄が得た情報も全て

私に得るからね。ま、その逆も然り、だけど♪」

そして浅葱は笑って言った。

「あの揺りかごの後とかにさ、気になって調べといたんだよ♪」

そう言って浅葱はもう一度笑った。

そこでＸＡＮＸＵＳが口を開く。

「くだらねえ、くだらねえぜ」

「九代目が、九代目が裏切られても、お前を殺さなかったのは、最後まで、

お前を受け入れようとしていたからじゃないのか？九代目は、誰より、

お前を認めていたはずだよ」

ツナが言う。

そしてＸＡＮＸＵＳは思い出す。

九代目の言葉を。

『私はお前のことを、本当の子供のように思っていたよ』

そしてツナが言う。

「九代目は、お前のことを本当の子供のように「うっせえ！」！」

ＸＡＮＸＵＳが口をはさんで言う。

「気色の悪い無償の愛などクソの役にも立つか！オレが欲しいのはボスの座だけだ！

カスはオレを崇めてりゃいい！オレを称えてりゃいいんだ！」

「なんて奴だ・・・」

「ししし♪かっきー♪」

「愛なんて金にならないものね」

「さっすがボスだね♪」

そしてＸＡＮＸＵＳの指から指輪が落ちる。

「ＸＡＮＸＵＳ様。貴方にリングが適正か、協議する必要がありま
す」

チェルベッロが言う。

「だ、黙れ！叶わねえなら叶えるまで！邪魔する奴は消し去ってやる！」

「ＸＡＮＸＵＳ様！？」

「大賛成だぜ、ボス♪殺ろうぜ♪」

「当初の予定通りだよ」

ベルが構えて、マーモンはそのままで言う。

「だね♪」

浅葱は言うと同時に有幻覚の大鎌を創りだし、構える。

しかしそこにダイナマイトが飛んできて、爆発する。

「どこまで腐ってやがる！」

「ししっ♪どいつも死に損ないじゃん♪こりゃ間違いなく、お前等あの世行きだなあ」

そして雲雀も現れる。

「やっと、決着がつけられる」

その時、浅葱がある気配を察知する。

気配と言っても普通に感じられる物ではなく、契約したことにより、わかるような物だ。

（あ、もしかしなくてもランチア・・・？あー、ムク兄がずっと話しかけてたのって、

こういうことか。全く、ムク兄に上手く引っかかったのかな？）

そう浅葱が考えている間にも話は進んでおり、ＶＡＲＩＡ隊員が来て、報告をしていた。

「ベルー」

「ん？どした、姫」

「これダメだね。勝てないと思うよ？まあ、私なら負けない自信あるけど、

ベル達は無理かも」

「どういう「暴蛇烈覇！」！？」

ベルの声を遮って声が響いた。

標的77　大空のリング争奪戦?～北イタリア最強～、来る!

「北イタリア最強の用心棒、ただしムク兄に操られてファミリー惨殺♪そしてやっと

この前ムク兄から一応開放されて、今は殺したファミリーの家を回っている。

つまりは、まあ操られたまんまでも結構強かったけど、今はおそらく自分の意思で

来て、自分の意思で戦ってるから強い♪」

「姫でも勝てないのか?」

「まっさかー♪私はムク兄が契約した相手にも憑依できるからね。
まあその逆も

然り、だけど。憑依でもしてしまえば簡単さ。けど、今の精神が強くなっているで

あろうランチアには多分憑依できない。マインドコントロールもね。
まあ真面目に

戦っても勝てる、けど、相手に恭弥とかもいるから、それでベルとマーモンは

そっちにかかりっきり。んでボスは行動不能。だから庇いながら戦うことになる、

としたら、無理かも?それにこの姿じゃないのだとしても、おしゃぶりの封印

解いたとしても、相手はあのリボーンだ。私達が戦っている時間でどうにかして

赤外線を解いてくるだろう。そうしたら、守りきれない。私達の目的はボスを

ボンゴレのボスにすること。だからボスが殺されたら元も子もない。という訳で、

もう負けだね」

そう言って浅葱は大鎌を消して手を上げ、降伏のポーズをとる。

それにベル達も習って降伏する。

負けず嫌いでもあり、勝つためにはわりとなんでもする浅葱が負けと言ったら、

負けなのだと判断したのだろう。

「ゴメン、ボス。もう負けだ。とうとう私は恩返しできなかったね」

浅葱は申し訳ないという声音で言う。

浅葱のいう恩、とは殺しの任務を与えてくれたことや、随分と楽しませてくれて、

愉しませてくれたこと、それに、普通に食べたり雑談したりという普通の幸せと

いう自分では絶対に手に入らない物を教えてくれたこと。

それにＸＡＮＸＵＳは驚いた表情を一瞬する。

浅葱がそんなことを言うとは思っていなかったのだろう。

しかしすぐにもとの表情に戻って言う。

「役立たずの、カス共が。クソ、チキショウ。テメエ等全員、地獄へ叩き落してやる！！！」

その後、浅葱にしか見えないように口を動かす。

「！」

浅葱はそれを見て驚く。

そしてその後に微かに微笑む。

（全く、私が心を完全に許すのはムク兄だけだけどもさ。でも、こんなに心を

許す人ができるとは思わなかったね）

その後は、ＸＡＮＸＵＳが失格とされ、ボンゴレリングを没収され、ツナ側の勝利

ということで終わったのだった。

『テメエは、もうとっくの昔に、十分に恩とやらを返してる』

標的７８　リング争奪戦後、来る！

私はあの時確かに聞いた。

ボスの言葉を。

でもあれは聞いた、ってより見た、って方が正しいのかな？

ま、どっちでもいいんだけどね。

んで、私はあの後、ベル達とともにイタリアに帰ったわけですよ。

まー、そこで普通は罰で死刑とかなりそうかな?とか思ってたけど、
またしても

九代目が庇ってくれちゃって、ただの一週間の謹慎処分になった。

まあ私がそれを聞くはずもなく、5日目で抜け出し、またしても日
本に

遊びに来ている。

ばれたらやばいかもだけど、ベル達が上手くやるっしょ♪

ちなみに今の私の格好は着流しじゃない普通の隊服から隊服コートを取って、

普通の市販のでっかい帽子付きコートを着ている状態だ。

もちろん風紀委員の腕章はつけているけども。

なぜ隊服コートじゃないかといえば、お忍びで着ているのにばれたら面倒だから、である。

あ、そうそう。

なんでこんなに頭の中の独り言が多いか？

くふふふふふ♪

なんと！無のボンゴレリングをもらったのだ！

なんでも理由は私しか無か創に適合するものがいないから、だそうで。

まあクロームは拒絶されなかったけど、すでに霧の守護者となっているから、

重複するのはあまり好ましくない、だとか。

それで創のボンゴレリングはボンゴレアジトの地下深くにまた封じ込めておくそうで。

それで、私に無のボンゴレリングが来た、と。

それでツナの無の守護者に任命されましたよー、っと。

なんでツナの守護者なんてやんないといけないのか・・・。

ま、ムク兄も一応霧の守護者だし、いっか。

けどまあ私はＶＡＲＩＡ幹部なんだけどね♪

さて、と。

ちなみに私は今並盛山でさまよっている。

決して迷っているわけではない。

元はと言えば暇で仕方なかった為、山でも登ろう、とか思ってしま

ったのだ。

そうしたら放浪していたアサットを見つけ、追いかけっこしていたら奥まで

入ってしまった、という訳だ。

そしてそれは突然起こった。

いきなり後方からミサイルが飛んできたのだ。

更には何らかの光が浅葱にふりそそいだ。

それに当たった浅葱はなぜか全く動くことができなくなった。

そして、動くことができないから避けることもできずに私とアサットは

正体不明のミサイルをなすすべも無く食らった。

標的７９　十年後、来る！

浅葱がミサイルを食らい、起きた時そこは今までいた場所ではなかった。

そこは深い森の中のようだった。

そして、浅葱は意識が戻った途端に鋭い頭痛に襲われた。

更には、ロケットが当たった時直前の症状が悪化したような状態である。

「ぅっ、なんだ、これは・・・。まるで、強力な毒をもろに食らった、みたいな・・・」

「きゅう！」

浅葱が手をついているとアサットが鳴いた。

どうやらアサットも一緒に来てしまったようである。

「きゅうきゅい！」

［あさぎ！だいじょうぶか・・・！？・・・！あ、このしたにくうどうがある。

そこにはいれればだいじょうぶか？」

「アサット・・・。サンキュー、大丈夫かはわかんないけど、

とりあえず入ろう・・・。スイッチ的なのはある・・・？」

その言葉にアサットは耳をぴくり、と動かす。

「きゅー」

［そこにはえてる、でっかいきのくうどうのなかにしもんにんしょー？とかいうのはある］

「ありがと。とりあえず指紋認証やって、ダメだったら強行突破だ」

そう浅葱が言うと、無理矢理立ち上がって、木の空洞に手を入れて、

指紋認証センサーに手をかざす。

【ピー。指紋認証しました。ロック解除します】

電子音が鳴った後に、指紋認証があった木の根元あたりにマンホールぐらいの

大きさの、中から明かりが漏れている穴が開いた。

穴の深さはあって5メートルぐらいだろう。

「まあ、この程度なら大丈夫だろうし、入ってみるか・・・。アサット、

ちゃんとつかまっててね」

「きゅ！」

アサットは鳴くと、浅葱の首筋により一層強くしがみついて、巻きつく。

「せー、の！」

浅葱は掛け声とともにふらふらの体を無理して、穴に飛び込む。

ガシャン！

穴は浅葱が飛び込むとしまった。

「っ！？」

穴を落ちている途中、なにか空間がいきなり変わったような、変な感じがして、

浅葱は気絶してしまった。

標的８０　驚愕の事実、来る！（前書き）

追伸［改ってついてるのは誤字修正しただけです。多分。内容は変わってないです。すんません］

標的８０　驚愕の事実、来る！

「・・・ゅっ！きゅー！」

ぱちり、と浅葱はアサットの声で目を覚ます。

「ん？ここは、穴の中？なんで、気絶なんか・・・！あの、毒に浴びたような

感じが消えてる・・・」

そして浅葱は周りを見回してみた。

そこは普通の大きさの部屋だった。

ベッドがあって、冷蔵庫に簡単なキッチンもあった。

他には机と、多分服が入っているだろうタンス。

そして浅葱はベッドに落ちてきたらしい。

おかげで傷一つ無かった。

それにドアも一つある。

窓は無いが。

そして浅葱は机に置いてあるいくつかの小さな箱と一つのリング、
それに手紙を見つける。

「？」

浅葱は近寄って、まず小さな箱を見てみるが何もわからず、手紙を見てみることにした。

『六道浅葱（１０年前）へ

あ、でも１０年前の私からしたら私が１０年後なんだね。

うん、こんがらがってるね、多分。

とりあえず簡潔に言うと、ここは１０年後の世界だよ♪

そして、この手紙を書いた私は１０年後の六道浅葱さ。

ま、残念なことに１０年たっても呪いは解けてないから１０年前の姿と全く

同じなんだけどね。

だから１０年後の人物と会っても、１０年後と間違われるかもだから。

それではここから本題。

この１０年後では、ボンゴレファミリーはミルフィオーレファミリーに

壊滅に近い状況に陥られている。

ボンゴレ狩りとかってのもやってるから危険だね。

ミルフィオーレファミリー、ってのはボンゴレと同等の歴史を持つ

ジッリョネリョファミリーと新進気鋭のジェッソファミリーとが合併したものだ。

元がジェッソファミリーがホワイトスペルって言われて、白い服を着ている。

主に作戦とか立てる派かな。

元がジッリョネリョファミリーはブラックスペル、って言われて、黒い服を着ている。

武力に任せる派、かな。

んで、ジェッソのボスだったのが百蘭で、ホワイトスペルのボス。

ジッリョネリョのボスだったのがユニで、ブラックスペルのボス。

ミルフィオーレ全体のボスは白蘭。

そして、10年前の時代のアルコバレーノのボスはアリアだろうけど、

もうこの時代では死んでるからね、アリアの娘、ユニがボスだ。

そんで、ボンゴレリング9つにマーレリング9つにアルコバレーノの

おしゃぶり9つは7?(トゥリニセッテ)と呼ばれてる。

わかってるだろうけど、それの原石が世界を創った礎と言われてる。

それを白蘭は集めて、新世界の神（笑）になろうとしてるんだよ。

しかしボンゴレリングは、ツナが抗争の火種になるなら、と壊してしまった。

だから10年前の、ボンゴレリングがある君達を10年バズーカで

連れてきているんだ。

それで、ここからがアルコバレーノにとって重要な話だ。

この時代には7?と同化したアルコバレーノにとって有毒で、ずっと

当たっていたら死んでしまう、というレベルのものが放射されている。

それを非7?線（ノン・トゥリニセッテ）という。

しかしおしゃぶりを封印、というか特殊な鎖をつければ非7?線（ノン・トゥリニセッテ）も

平気になる。

ま、その鎖、ってのはマモンチェーンって言って、10年前の私が

持っていた、おしゃぶりの力を封印する鎖の改良版の改良版、ってとこだね。

机の上においてあるから巻きつけておいて。

んで、他に机の上にある物について説明するよ。

まず小さな箱みたいな物。

これは匣（ボックス）、って言うものだ。

これはリングの炎を注入すれば、中から何かがでてくる。

リングは使用者の波動が通過するとそれを高密度エネルギーに変換して

死ぬ気の炎を生成するんだよ。

私が出せる死ぬ気の炎でも開けれるには開けれるけど、調整が効かない

とかで暴走したことあるから、やめたほうがいい。

というかやめて。

んで、次に机に置いてあるリング。

ひし形の上に大鎌が乗っているようなリングだね。

これは首無し（センザコーロ）のヘルリング。

ヘルリングとは地獄との契約で強大な力を授ける物。

首無し（センザコーロ）のヘルリングには昔首を狩られた者の呪いがかかっていると

言われる。

私にぴったりでしょ♪

これらは全て１０年前の私に必要な物だからね。

今からこれ等は１０年前の私の物だよ。

そんなこんなで凄い長くなりました。

まだ教えなきゃなんないことたくさんあるけど、もうめんどくさいからさ、

ムク兄に精神世界で記憶の交流してもらって。

あ、最後に、匣は全部で５個。

霧属性が２個に無属性が３個。

デザインは基本は全部霧が、藍色に、無が漆黒に、だけど四隅の角に

丸い赤色の石がついていて、辺部分には赤色の骨がついてるやつだから。

変えてもいいけど、これで失敗したら悲しくなるからオススメはしないな。

でも柄によって中身が判断できるよう、柄は入ってるからね。

これもムク兄との記憶の交流でよろしく。

私が貴方と入れ替わる前に、交流しといたからさ。

んで、霧属性で、柄が同心円状の円の模様が蒼色で入っている匣にアサットを

触れさせてほしいんだよ。

数年前にわかったけど、アサットってその聴覚の能力と引き換えに、寿命が

縮んでる、っぽくてね。

でも匣にしちゃえば壊れない限りは関係なくなるから、アサット匣化作戦を私は

実行したわけだ。

でもそれを完了する前に、死んでしまったんだよ。

でも、折角完成はしたから、１０年前のアサットは生きさせてあげたくてね。

だからアサットが触れるだけで匣化する、という機能をつけといた。

アサットが嫌がらなかったら、触れさせておいてほしいんだよ。

あ、本当に最後に。

百蘭には、無のボンゴレリングも無のおしゃぶりも持ってて、しかも珍しいの無属性、

ってことでも狙われると思うから。

無属性はいるにはいるけど、波動が小さい人がほとんどなのに、私は無属性の

波動が異常なほど強いからね。

そいでもって最後の最後に。

ＶＡＲＩＡは生き残ってる、ってのとおしゃぶりとか白蘭は狙ってくるけども、

友達だから♪

つかまってはおしゃぶりとか奪われる前に上手く逃げてを繰り返してたら

おもしろかったのさ♪

おしゃぶりを奪う為に、いろんな作戦をがんばって考えてる白蘭を見るのが

愉しいんだよ♪

それにマシュマロくれるしね♪

そいじゃあ。

浅葱』

by10年後の六道

それを読み終えて、浅葱は2つ思った。

「やっぱ、10年後でもめんどくさがりなんだね。まあ、自分で言った敵の

総大将と仲良くなれるのは、自分だから理解できるけども」

理解できるのかよ！

というツッコミはもちろんない。

だってここにはアサットと浅葱しかいないのだから。

標的８１　未来での基本装備、来る！

とりあえず浅葱はアサットを匣化、というのをさせることにした。

「アサット、この匣に触って」

と言うとアサットは浅葱に言われた匣に触れる。

カァァァァァア。

するとアサットと匣が光り、アサットが藍色の炎となり匣の中に入っていった。

「うん。これでいいんだよね」

と言うと、浅葱は匣五個をコートのポケットに中身を確認もせずに入れる。

後で、骸に会った時に聞こうと思っているのだ。

そして次に今までおしゃぶりに巻きつけていた鎖を外して、ついでに捨てて、

机の上にあった鎖を巻きつける。

するとこの部屋の中でも少し感じていた不快感のような、具合の悪さのようなものが

無くなった。

「次は、と。リングがこの時代では重要なようだね」

そう言って浅葱は机の上にあったヘルリングを左手の中指に、ポッケに

突っ込んでいた無のボンゴレリングを右手の中指につけた。

そして浅葱はとりあえず精神世界へと言ってムク兄に会うべく、ベッドに横に

なって目をつぶった。

ぱちり、と浅葱が目を開けると目の前には懐かしい藍色の南国果実があった。

しかし１０年前よりも髪が伸びたからか後ろに垂れ下がっていた。

「んー、髪伸びたんだね」

浅葱が言うと骸は振り返って微笑んだ。

「お久しぶり、いや、始めまして、というべきですか？」

「ああ、１０年後だもんね。ま、とりあえず始めまして、だね♪」

そう言って浅葱も微笑む。

そして本題を言う。

「この時代の知識がほしいからさ、記憶の交流させてよ」

「わかりました。この時代の浅葱にも言われていますしね」

と言うと浅葱と骸は右手を繋いで目を瞑る。

標的８２　記憶の交流、来る！

そして少しの時間が経つと浅葱と骸は同時に目を開けた。

「んー、ありがと♪これで大体のことはわかったよ♪んで、わかったところで

この時代の戦いとやらを身につけたいからさ、戦おうぜ♪ま、精神世界でだけど」

「クフフ、そう言うと思っていましたよ」

その言葉で、骸は三叉槍を、浅葱は三叉の大鎌を構えた。

1時間後、精神世界。

浅葱と骸は背中合わせに座っていた。

まあ背の高さが違いすぎるが。

「んー、この時代の戦いはすごいね。１０年前じゃありえないことがありすぎだよ」

「まあ１０年もたてば変わりますからね」

「だね。ま、より戦いが楽しくなった、って思えばいっか♪」

「相変わらずですね。でもやっぱり、1時間で匣もリングも使いこなすとはすごいです」

「そーなの？」

「ええ」

「くふふ♪ありがとさん。ところでムク兄はこれからどうするの？」

「僕はこれからこの時代にいる凪と同じような得意な体質な者を使って
百蘭のもとへ潜入するつもりです」

「へー、そんなの凪以外にいたんだね。手伝う？」

「いえ、大丈夫です。まあ百蘭本人と戦ったときは大変かも知れませんが」

「んー、じゃあその時にムク兄やばそうだったら手伝ってあげるよ♪」

「クフフ、頼りにしてます。それよりも浅葱はこれからどうするのですか？」

「くふふふ、決まってるでしょ？とりあえずはミルフィオーレってのを殲滅してみる♪」

「理由はおもしろそう、だからですか？」

「正解♪やることもないしねー、でもなんかやってほしいことあったら言ってね？

すぐ手伝うよ♪」

「ありがとうございます。それでは、気をつけてくださいね？」

「大丈夫だよ。ムク兄も気をつけてね♪」

と言葉を交わすと2人は精神世界から消え去った。

標的８３　激レア本、来る！（前書き）

お久しぶりです。
書いたとおりお知らせを編集して次話投稿としました。
じゃなくて、と。
更新してない間もなんとアクセス数が０になっていなかったり、お気に入り登録が増えていたりと、本当ありがとうです。
これからも、以前と同様、一日一話更新します。
そいでは、今後とも無の守護者をよろしくお願いします。

標的８３　激レア本、来る！

私は精神世界から戻ってから、とりあえずこの部屋についてあるドアの奥の部屋へ

行ってみることにした。

ムク兄から得た情報だと、この部屋は、元はここをアジトにしていた超弱小

ファミリーを１０年後浅葱がつぶした時についでに奪い取ったところらしい。

使っていなかったらしいが１０年前から浅葱がきた時にちょうどい

いと思ってそこを

非7?線対策（ノントリニセッテ）の改造を少ししたらしい。

まあ対策といっても完璧じゃないらしいが。

その証拠がこの部屋にいても鎖を巻くまでは感じていた不快感である。

そしてこの空間は今浅葱がいるところともう1つ部屋があるらしいのだ。

なので浅葱はその部屋へと行ってみる。

がちゃ。

「!?　何これ」

入った瞬間に浅葱は驚愕する。

そこは書庫だったらしくおびただしい数の本棚があり、本があった。

でもまあそのほとんどはあまり重要じゃないっぽいので浅葱は奥に進んでみる。

「・・・。金庫？」

大量の本棚でもはや迷宮のようにもなっている部屋の最奥にあったのは一つの

大して大きくもない金庫であった。

「よし、とりあえずぶっ壊す♪」

と言うと同時に思い切り浅葱は金庫を蹴り飛ばす。

ドガアン！

するとあっけなく金庫は開いた。

開いた、というか砕けた。

中には一冊の分厚いが古ぼけた本が入っていた。

「んー？これって本？しかもめっちゃ古い。てかこれって暗号じゃないか」

そう言うとぱらぱらとページをめくる。

「！　これはヘルリングとか7？（トゥリニセッテ）について書いてある本みたいだね♪

しかも結構詳しいし・・・。くふふ、こんなレア度最高ランクの物をこの時代の私は

どうやって手に入れたんだろうねえ♪」

楽しそうに笑った浅葱はその本をコートのポケットに無理矢理入れて、外へと出て行った。

標的８４　白との出会い、来る！

浅葱は激レアな本を発見してからすぐに地上へと出てきた。

「んー、鎖巻いててもやっぱ辛い・・・」

浅葱は心なしか顔色が悪くなっていた。

おしゃぶりはでも服の外に出して丸見えである。

その理由はアルコバレーノってわかったら強い奴戦いに来てくれるんじゃないか、

ということである。

「ま、いーや。それよりもまずはイタリアにでも行ってみようか。こういうのって

やっぱ敵側の一番強い奴と戦いたいしね♪」

と言うと浅葱はとりあえず森を降りていこうと歩いていった。

「おおー、やばいこれめっちゃついてる♪この山ってイタリアの近くだったんだね♪」

そう。

浅葱が言うとおり先ほどまで浅葱がいた山はイタリアのすぐ近くの山だったのである。

そして浅葱は山を降りて近くの気配がたくさんあるところ、町へと向かっていると

自然とイタリアへついたのだ。

そして今はイタリアはイタリアでも人気のあまり無い、むしろ不良のたまり場っぽい

路地裏を迷う、ならぬ彷徨っていた。

「しかしこうも入り組んでるのって嫌がらせにしか見えないんだよねー。誰か
いないかね、いたら脅して町まで案内させるというのに」

そう呟きながら歩いていると浅葱は一つの人影を見つけた。

それを見て浅葱はにやり、と笑うと隠し持っていた自身の狐姿のときの漆黒の羽を
数枚取り出す。

そしてそれを人影に向けて投げた。

ビュッ！

ドスドスドス！

「当たりー♪」

羽は人影には実際に当たらないで、服だけに突き刺さり近くの壁に縫いとめていた。

浅葱は暗い路地裏でもはっきりと顔がわかるぐらい近くまで歩いていった。

（んー、白!?）

浅葱は見た瞬間に心の中で驚いた。

しかしその人影の青年の容姿はまさに白だった。

白いＹシャツに白いズボン、それに白い髪なのだ。

そして浅葱は言う。

一応見た目だけなら１０才は少なくとも上であろう人物に。

「君ってあだ名、シロ？　犬みたいだね♪」

これがボンゴレ狩りの黒幕であるミルフィオーレファミリーボス白蘭と、

追われる側であるはずの１０年前の浅葱との初対面であった。

標的８５　初対面即友達化、来る！

浅葱は初対面にして、失礼なことを平然と言った。

しかしそれに白蘭は平然と答える。

「あれ、君ってもしかして浅葱チャンじゃん♪でも僕がわからないってことは

１０年前の浅葱チャンかな？」

「ん？１０年前、ってわかるってことはマフィア関係者？」

「まーね♪」

「へー、シロがマフィアなのか・・・」

「あれ、僕のあだ名ってシロで決定？」

「くふふ♪当たり前じゃないか！だってこんなに白い格好なのにあ

だ名がシロ

じゃないなんてもったいないぜ！」

「アハハハ！　浅葱チャンは姿も変わらないけど性格も全然変わらないんだねえ」

「ん、そーなの？」

「うん。ところでこの羽の拘束をとってもらえないかな？指先でマシマロの袋を

持つのは結構大変なんだよ♪」

「あー、ゴメンゴメン」

と言って浅葱は羽を抜く。

「アリガト♪マシマロ食べる？」

「ん、食べる。ところでマシマロじゃなくてマシュマロじゃないの

？」

「あれ、そうなの？まあどっちでもいいじゃない♪ところで浅葱チャンはどうして

いきなり僕を羽で拘束したのかな？」

「んにー、マシュマロ美味い・・・。ああ、道を教えてもらおうと思ってたんだよ。

イタリアの街中への」

「へー、僕もこれから行くんだよ。一緒に行くかい？」

笑って白蘭は言う。

「行く行く♪」

浅葱も笑って答える。

「それじゃあ行こうか」

そう言うと白蘭が歩いていき、その後ろを浅葱もついていった。

白蘭と浅葱は楽しく雑談しながらイタリアの街中へとついた。

「今日は楽しかったよ♪ありがとう、シロ♪」

「僕も楽しかったよ♪浅葱チャン♪」

浅葱と白蘭は笑って言う。

「くふふ♪また会えるといいねえ。次は是非とも戦ってみたいね」

「そう？じゃあ今から戦うかい♪」

「いや、やめとくよ♪だって、実戦訓練もまだ現実世界ではやってないしね。それに何より」

浅葱はそこで噛って言う。

「どうせなら戦いに邪魔はいれたくないし、本気の敵と戦いたいからね。武器を

持ってきてない敵なんて持ってる敵に比べたら月とすっぽんの差だよ」

そして浅葱は白蘭に背を向けて、首だけを向けて言う。

「んじゃ、またいつか会おうね。シロ」

そう言うと浅葱は霧のように消えた。

幻覚でも使ったのだろう。

その場に残った百蘭は少し驚いた表情をしていた。

「アハハハッ！まさか気配消して、待機させてた者達に気づくとはね。

結構腕の立つ者だったのに。それに一度も隙が無かったじゃない♪フフッ。

次こそは捕まえてみせるよ。浅葱チャン」

そう言うと白蘭もその場から消えたのだった。

標的８６　久しぶりのアジト、来る！

白蘭と別れてから浅葱はとりあえず放浪していた。

「んー、マシュマロくれるいい人だったねえ♪白蘭。名乗ってなかったけど

あんなに白いってことは多分白蘭だよね。ま、でも手紙の通り白蘭はからかうのは

楽しいみたいだね♪」

浅葱は歩きながら独り言を呟く。

「イタリアに来たかったのはボスをぶっ殺してやるぜ♪って理由からだったけど

白蘭はまた会ったらマシュマロくれそうだしなあ。それに楽しいし・・・。

まあボス殺しは後にして、とりあえず、ＶＡＲＩＡのアジトにでも行こうかな♪」

と言うと浅葱はＶＡＲＩＡのアジトに向かって歩き始めた。

「おー、全然変わってないい・・・。まあ変わってないとは思ったけども、

少しはどんなのになってるかな、と楽しみにしていたわけで・・・。

あ、

でも戦闘方法は変化してるよね。死ぬ気の炎が皆は使えるようになって

いるだろうしねえ」

浅葱はＶＡＲＩＡのアジトをぎりぎり見えるところになったところで呟いて、

楽しそうに笑った。

「まあボスはボスだもんね。変わんないか・・・。ま、いっか♪とりあえずやっぱ

アジトといえばこれだよね♪」

と浅葱が言う頃にはもう門を飛び越えて扉の前だった。

そして浅葱は走って跳んできた勢いのまま扉にキックをぶつけた。

ドゴアン！

すさまじい音を立てて扉は砕け散った。

次の瞬間、警報がけたたましく鳴り響き、ＶＡＲＩＡの下っ端が大量に出てきた。

その瞬間に浅葱は思考した。

（ハッ！　そいえばこの時代もこのままの姿とか言っていたじゃないか・・・。

だったとしたらこのままだと、戦いができなくなるじゃないか！）

と考え、瞬時にコートについていたフードを深く被って正体を隠す。

咄嗟に隠した為に下っ端どもは正体にきづかなかったようだ。

（んー、じゃあ私が六道浅葱とわかってしまうような武器はダメだよね。

だとすると匣も使えないか・・・）

と、そこまで考えて、下っ端がもう目の前に迫っていた。

（んじゃ、まあ別に殺さなくてもいいし徒手空拳・・・？だっけ？
まあ殴る蹴るとか

だけでいっかな♪相手は下っ端だし、ハンデとしてもちょうどいいよね♪）

と自分の中で結論を出し、とりあえず向かってきた一人目に回し蹴

りを当て、

後ろの数人を巻き込んで吹っ飛んでもらったのだった。

標的87　10年後の下っ端の実力、来る！

浅葱は正直に言えば落胆していた。

「なんで、10年後なのにいくら下っ端といえども手ごたえが全然ないんだ！」

そして浅葱は八つ当たりで地面を殴る。

すると浅葱が殴ったところを中心に半径5メートルぐらいのひび割れができた。

ちなみに周りには浅葱が倒した下っ端が百人は余裕で倒れていた。

「あー、これはあれか。やっぱ下っ端はどこまでいっても下っ端なのか。

それに未来きてからも一応精神世界で修行したおかげかにゃ・・・？」

そう呟いたところで大きな声が響く。

「う〝お〝お〝おいい〝！！！なんだこれはあ〝！」

「ん？　あ、スクアーロじゃん♪」

浅葱は戦った後にもうフードはとっていた。

疲れてもいないが今は休憩と称して気絶して倒れている下っ端の上に座っていた。

「！　浅葱・・・！？　白蘭のヤローに捕まってたんじゃねえのか

？」

「ん？　白蘭に捕まる？　それにそれはこの時代の私のことかな？

私は君達から言えば１０年前の六道浅葱だよ♪それに私が１０年前から

飛ばされて出たところは森だったから、この時代の私は遊びでつかまって、

それで逃げたんだと思うよ？」

そう言えばスクアーロは驚いたような表情を一瞬見せたがすぐに元通りになる。

情報でも得ていたのだろう。

それに浅葱の性格から予想もしていたのだろう。

するとスクアーロの後ろからぞろぞろと他の幹部勢が出てくる。

「おっ♪　姫じゃん♪」

「あら～、生きてたのね～。良かったわ～♪」

「ムッ。生きていたのか・・・」

レヴィが現れた時の浅葱の反応は凄かった。

一瞬でそこらに転がっている瓦礫を蹴って、レヴィの顔面にブチ当てる。

しかしレヴィはすぐに起き上がったのでそこからは言葉で精神を突き刺す。

「あっれー？　どこぞやのムッツリスケベ親父じゃん。ねえムッツリスケベ、前に言わなかったっけ？　私の前に姿を現して言葉を発すなよ、って。言ったような気もするんだけど♪　まあ言ってなくっても今言ったしね。今後一切私の前に姿さらすなよ。気持ち悪い」

呼吸一切無しのマシンガントークである。

それに精神を突き刺されたレヴィはおとなしく浅葱の視界外に行ったのだった。

ただし体育座りで落ち込んでいたとかいないとか。

そこで今までいなかったものが姿を現して言った。

「あれー？　師匠じゃないですかー」

「ししょー？」

浅葱はとりあえずそう返した。

標的８８　ＶＡＲＩＡでの浅葱、来る！

「ししょー？」

浅葱が首をかしげるとかえるを被った者ははいー、と頷いて前に出てきた。

「ミーはこの時代では六道骸と六道浅葱との弟子なんですー。それで、この時代では

アルコバレーノが師匠以外皆死んじゃってるんでミーはマーモンって人の後釜なんですー」

「ふーん。なーる。そいえば記憶にあったね。んで名前は、フラン？」

「フランですー」

「うに。オッケー、疑問はとりあえず解消された。まあ不満は残るけど♪」

その言葉にスクアーロ達は首をかしげる。

フランだけは周りの状況などから予想がつくからか、それとも弟子というだけ
慣れているのか、ただ無表情なだけか変化していない。

「不満？」

「くふふふふ・・・。なんで、なんで１０年後だというのに、いくら、
下っ端っつっても、あんなに弱いんだろうね♪」

浅葱は顔が笑っていても目が笑っていなかった。

それにはさすがのＶＡＲＩＡもビクッ、としてしまう。

平然としているのはフランだけである。

「それって、師匠が強いってだけなんじゃないんですかー？」

相も変わらず無表情棒読みで問うフラン。

「だって私はまだこの時代に来て数日だよー♪」

相も変わらずニコニコ笑顔に不機嫌瞳な浅葱。

その様子にやっと起きた下っ端が見た途端また気絶してしまっていた。

「でも浅葱師匠はもう骸師匠に記憶もらったんでしょー？ならこの時代と
変わらないじゃないですかー」

「それが違うんだなー。だって記憶だけあっても、所詮それはただの記憶さ」

「相変わらず意味不ですー、ナッポー師匠ズは」

ぷち。

と聞こえると同時にフランの頭のかえるの部分に漆黒の羽が突き刺さる。

「痛いですー・・・」

しかしそれには無視して浅葱は言う。

「んー、簡単に言うならその知識分の経験はないってことさ。要するに、例えば

記憶の中では毒を何回も受けて、耐性がついていたとしても実際はついていない、

だから毒なんて平気だぜ、って余裕ぶっこいちゃって毒を受けて死亡みたいな事態が

起こりうるかもしれない、ってことさ」

それにフランは手をポンッ、として納得のポーズをとる。

「なーる。そういうことだそうですよー？皆さん」

フランはスクアーロ達の方を向いて言う。

「う〝お〝お〝い！わかってなかったのはテメーだろうがあ〝！」

「じゃあ先輩達はわかってたんですかー？」

その言葉にスクアーロ達は声がでない。

そこで浅葱が言う。

「ああ、そうだ。そいえばボスはどこにいるの？ここにはベル達に会いに来た、

っていう理由からだったけど、まだボス見てないしね。」

そう言って浅葱は笑った。

標的８９　１０年後ＸＡＮＸＵＳ、来る！

浅葱はベル達にＸＡＮＸＵＳのいる場所、つまりはＸＡＮＸＵＳの自室の場所を聞いて、

今はそこに向かっていた。

しかし、アジトはたびたび作り変えられたようだが、大まかな位置は変わっていなかった。

そして歩いているうちに着いた。

がちゃ。

ノックも何も無しにドアを開ける。

ガシャアアン！

開けた途端にガラスが飛んでくる。

しかしそれは浅葱のはるか頭上である。

そう、しいて言うならスクアーロの頭が丁度あるぐらいの位置である。

「・・・。スクアーロいつかこれに当たって死んじゃわないのかな？ていうか他の人でも

当たっちゃうよね」

その小さな呟きにＸＡＮＸＵＳは顔を上げて浅葱の目を見据える。

「ノックぐらいしろと何度言ってる。それに他の奴等はノックする」

その声は１０年前とは比べ物にならぬほどに威圧感が増していた。

「んー？ボスこそ諦めなって♪私が今までノックなんていう常識的なことしたこと

あるのかな♪」

「チッ」

そう言ってＸＡＮＸＵＳはコップに入っていた酒を飲む。

浅葱はそれを見てドアをしめてから部屋に入り、ソファーをＸＡＮＸＳＵの正面に有幻覚でイスを作り出して座る。

ちなみにＸＡＮＸＵＳが座っている物に負けぬぐらいふっかふっかの物を創造している。

そこでＸＡＮＸＵＳは声を漏らした。

「しかし、テメエは変わらねえな。この時代の浅葱のようだ」

「ん？それは姿が呪いのせいで寸分たりとも変わってないからじゃないの？」

「それでも性格は少なからずも変わるものだろう」

「くふふ♪私は１０年前と変わってないのかな？」

「ああ、全然変わってねえ。まるで、何十年も生きて、性格が定まった奴等みてえにな」

それに浅葱は一瞬目を開いて驚いたようにし、しかしすぐに微笑を浮かべて言う。

「うん。流石はボスだ。凄い観察眼？推理力っていうのかな？本当なんでそれで

ブラッドオブボンゴレを持っていないのか不思議だね」

その言葉にＸＡＮＸＵＳの片眉がぴくりと動き、不機嫌度が少し増す。

しかしそれはすぐに驚きの表情へと変わった。

１０年たって、経験も積み、風格も全てが成長しているＸＡＮＸＵＳの表情がである。

その理由は浅葱の表情だった。

浅葱は１５才とは思えない妖しいような、しかし闇を含んでいる、
見ていれば

呑み込まれるような笑みを浮かべてから言った。

「まあ種明かししようじゃないか♪私に六つの冥界を回った記憶が
あるのは

知っているよね？それはつまり、人生六回分の記憶、ともとれる。
まあ

生きていたころの記憶じゃなく冥界だけど。そして普通に考えれば
わかるよね。

例え一つの記憶で生きている時間が少なくとも、あわせれば数十年にはなるんだ。

それに私には忌まわしき絶対記憶能力がある。だから私は理論的に言っても

ほとんど性格は変わらないんだよ」

そこで浅葱は闇しかない目で嗤った。

それを見たＸＡＮＸＵＳは一瞬ビクッとする。

しかしすぐに浅葱は無邪気に笑った為に空気がもとに戻る。

「くふふ♪でも私の精神がババアって訳じゃないからね。記憶なんて精神を構成する

ひとかけらにしかすぎないんだしね♪それに精神は肉体に引っ張られるとかっても

いうじゃん？」

標的９０　浅葱の次の行動目標、来る！

浅葱はあの後、ＸＡＮＸＵＳから今のボンゴレの状況などを聞いていた。

「んー、じゃあ今は防戦一方、反撃する暇も無し、ってことかな？」

「ああ」

「なるほどねー。まあこれで情報も得たことだし、私はそろそろ行こうかな♪」

「どこへだ？」

「くふふふ♪そりゃあ勿論強い敵がたくさんいるところへさ♪」

「・・・。好きにしやがれ」

そう言うとＸＡＮＸＵＳは近くにあった小さな箱を浅葱に投げる。

パシッ、と音をたてて浅葱は受け取る。

「開けていい？」

「ああ」

その返事を聞いて浅葱は開けてみる。

「！　これはリング、だね」

そう。

箱の中に入っていたのはＶＡＲＩＡの紋章が刻まれたリングだった。

「ああ、リングだ。この時代の浅葱もこのリングの製作にはたずさわっていてな。

他のはかなり前にできていたんだが、このリングだけできていなくてな。

つい先日やっとできたんだ」

「なんでこの時代の私に渡してなかったの？先日ならまだいたんじゃないの？」

「それより前に浅葱は失踪していやがった」

「ああ、なるほど。んじゃあ、このリングだけできてなかったの？」

「それは2属性の炎を出せるんだ。浅葱はヘルリングと、ボンゴレ

リングで霧と無は

すでに最高ランクあるからいらないといって、どうせなら2属性にしようだか

なんだかっつっていた」

「ん。オッケー。理解した」

そう言って、浅葱は右手の中指に無のボンゴレリングを、人差し指にヘルリングを、

左手の中指にＶＡＲＩＡリングを装備しなおした。

「んじゃあそろそろ行くね。いろいろありがとうボス♪」

「ああ」

そう言葉を交わすと浅葱は立って有幻覚のイスを消し、部屋から出て行った。

浅葱は部屋から出るととりあえずロビーに顔を出してからどこかへ行こうと決めた。

（でも何でこの時代の私は記憶に制限をつけて交流させたのかねぇ。まあムク兄も

制限をつけてたけど・・・。つけてなかったら状況とか聞かないで全部わかってたから

便利なのにー。ま、理由の想像はできるけど）

「わからないことが多いほうが楽しいから、だね♪」

標的９１　行き先決定、来る！

そこでロビーについたので扉を開けて入る。

「はろー、ベル達♪私はもうどっか行くね♪」

「って、おい。どっかってどこだよ♪ししししっ」

「相変わらずですねー、師匠は。だから道に迷うんですよー」

ドスッ。

フランの頭のカエルに漆黒の羽が突き刺さる。

「くふふ。まあ強い奴がいるところだよ、ベル。どこに強い奴いるかわかんない？」

フランは無視することにしたらしい。

「あ、無視ですー？それって自覚してるってことですかー」

スパッ！

フランの方へ有幻覚の三叉鎌が投げられ、右腕にかすった。

「ぐす。マジで痛いですよー」

「でもさあ、いきなり本部潰すの大変だし、あとからでてくるの指揮系統とか

ばらばらになって弱くなっちゃうんだよね。それにいきなり本部潰すのは
楽しくないしね」

「んー、じゃあ日本とかはどうだ？結構六弔花集まってるって聞くぜ」

「ほぅほぅ。じゃあ日本に行くことにするよ♪ありがとうベル♪」

「ししっ♪姫なら大丈夫だろうけど死ぬなよ」

「勿論だね。死んだら楽しめないし♪んじゃ、行ってくるね♪」

「ししっ♪いってらっさい♪」

そう言葉を交わすと浅葱はロビーから出て行った。

そしてそのまま厳寒も出て行こうとする、がある者に止められた。

「待って～浅ちゃん！」

ルッスーリアである。

「ルッス？どしたのかな？」

「はい、ＶＡＲＩＡコートよ～。時間がなくてコートしか作れなかったけどね」

そう言って１０年後のデザインのコートが渡される。

「おお、ありがとさん♪でもなんで新しく作ったの？この時代の私のは無かったの？」

「あるんだけどね。どうせだから新しく作ろうと思って♪」

「んー、とりあえず無駄な苦労ご苦労さん、ルッス♪」

「うっ、相変わらずの毒舌ねぇ・・・」

「まあねえ♪」

そういいながらも浅葱は今まで着ていたコートを脱いで新しくルッスに

もらったコートを着る。

「あ、このコート捨てといて」

そう言って今まで着ていたコートをルッスに渡す。

「了解よぅ」

「ありがと♪んじゃ今度こそ日本に行くよ。じゃあね♪」

「気をつけてねぇ～」

そんなやり取りをして浅葱は今度こそ玄関を出て行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5354w/

家庭教師ヒットマンREBORN!　無の守護者、来る!

2012年1月13日12時56分発行